

嘉穂地区遺跡群 IV

福岡県嘉穂郡嘉穂町所在、宮ノ脇、原田、森分遺跡の発掘調査

嘉穂町文化財調査報告書

第 7 集

1987

嘉穂町教育委員会

嘉穂地区遺跡群 IV

福岡県嘉穂郡嘉穂町所在、宮ノ脇、原田、森分遺跡の発掘調査

序

本書は昭和61年度県営嘉穂地区圃場整備事業に伴う、嘉穂地区遺跡群発掘調査の記録です。

今回の調査では、多数の遺構や遺物が発見されましたが、特に小銅鐸や後漢鏡の出土は、嘉穂地方の古代史研究をさらに前進させるものとなりました。

発掘調査にあたりましては、福岡県教育庁指導第2部文化課記念物係長兼参次補佐栗原和彦氏、福岡県教育庁筑豊教育事務所技術主査新原正典氏、嘉穂土地改良区理事長原田孝行氏、貞月土地改良理事長森田浩之氏並びに地元各関係者の方々のご協力をもって、数々の成果と共に無事完了致しましたことを心から感謝申し上げます。

本報告書が郷土文化の研究はもとより、文化財愛護思想の普及、教育、研究等の資料としてご活用いただければ、幸甚に存じます。

昭和62年3月31日

嘉穂町教育委員会
教育長 矢野良朔



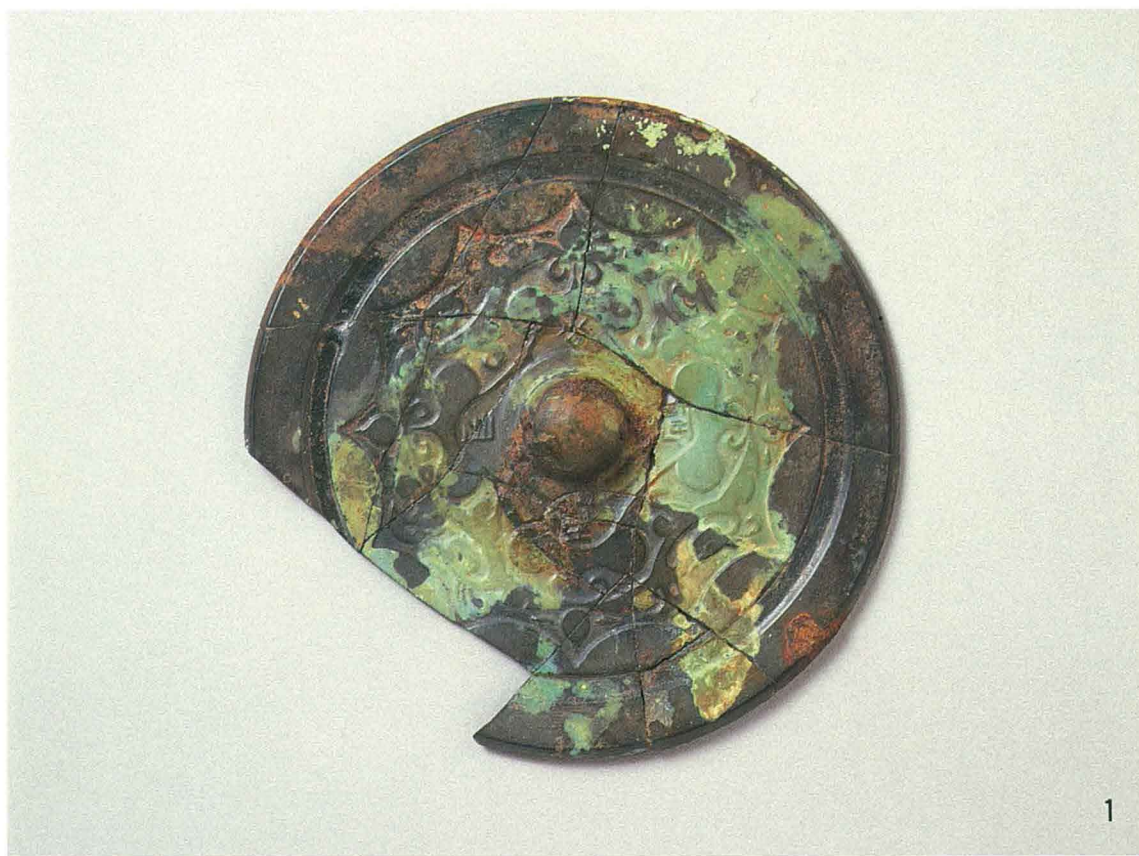


1. 舌

2. 管玉



1. 内行花文鏡 2. 内行花文鏡出土状況 (石蓋土壙墓)



1



2

1. 単夔文鏡 2. 単夔文鏡出土状況（箱式石棺墓）

例 言

1. 本書は、県営嘉穂地区圃場整備事業及び団体貞月地区圃場整備事業に伴う事前調査として実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、嘉穂町教育委員会が昭和61年度に「嘉穂地区遺跡群（屏・馬見・貞月地区）発掘調査」として国・県の補助を受け、福岡県教育委員会の援助を得て実施した。
3. 遺構及び遺物の実測は、伊藤寿子・伊藤久枝・山本敦子・梅木道代の諸氏の協力を得て福島が行った。製図は芳井哲博・伊藤久枝両氏の協力を得た。遺構及び遺物写真は福島が行った。なお、遺物写真の一部は、九州歴史資料館の石丸洋氏撮影による。
4. 題字は嘉穂町教育委員会大里富美雄氏による。
5. 本書の執筆と編集は福島があたった。

本 文 目 次

I はじめに	1	b 遺物	65
II 位置と環境	3	c 小結	76
III 各遺跡の調査	3	(3) 第2地点の調査	78
1 宮ノ脇遺跡	3	A 竪穴住居跡群と遺物	78
(1) 遺跡の概要	3	B 墓群と遺物	86
(2) 遺構	4	C 小結	104
(3) 遺物	8	(4) 第3地点の調査	104
(4) 小結	10	A 遺構	104
2 原田遺跡	10	B 遺物	104
(1) 遺跡の概要	10	C 小結	113
(2) 第1地点の調査	11	3 森分遺跡	114
A 墓群A	11	(1) 遺跡の概要	114
a 弥生時代の遺構と遺物	11	(2) 遺構	114
b 古墳時代の遺構と遺物	49	(3) 遺物	116
B 墓群B	57	(4) 小結	126
a 遺構	57	IV おわりに	127
b 遺物	58	1 原田遺跡出土の小銅鐸について	127
C 墓群C	65	2 原田遺跡出土の銅鏡について	129
a 遺構	65	3 立岩期前後の嘉穂とその動向	130

I はじめに

本調査は、県営及び団体圃場整備事業に伴う事前の緊急調査として、町が国及び県の補助を受け実施したもので、昭和58年度からの継続事業である。遺跡は福岡県嘉穂郡嘉穂町大字屏字宮ノ脇、大字馬見字原田、大字貞月字森分の各所に所在する。

昭和56年3月、嘉穂町経済課より県教育委員会文化課あてに、嘉穂地区圃場整備事業予定地内の埋蔵文化財の有無について文書による協議がなされた。県文化課による現地での分布調査では、多数の遺跡群の分布が明らかとなった。

昭和57年11月には、貞月地区内での団体圃場整備事業実施計画に伴い、県文化課による現地での分布調査が行なわれ、遺跡群の存在が確認された。

昭和60年10月、文化財の所在等を確認するための試掘調査が行われた。その結果をもとに県文化課、県農地整備課、町農林整備課、町教委、嘉穂土地改良区並びに貞月土地改良区の六者で切り盛り計画の変更も含めた上で、文化財の保護を前提とした協議が行われた。その結果、やむなく削平が遺構面に及ぶ16,000㎡の地区について発掘調査を実施することとなった。

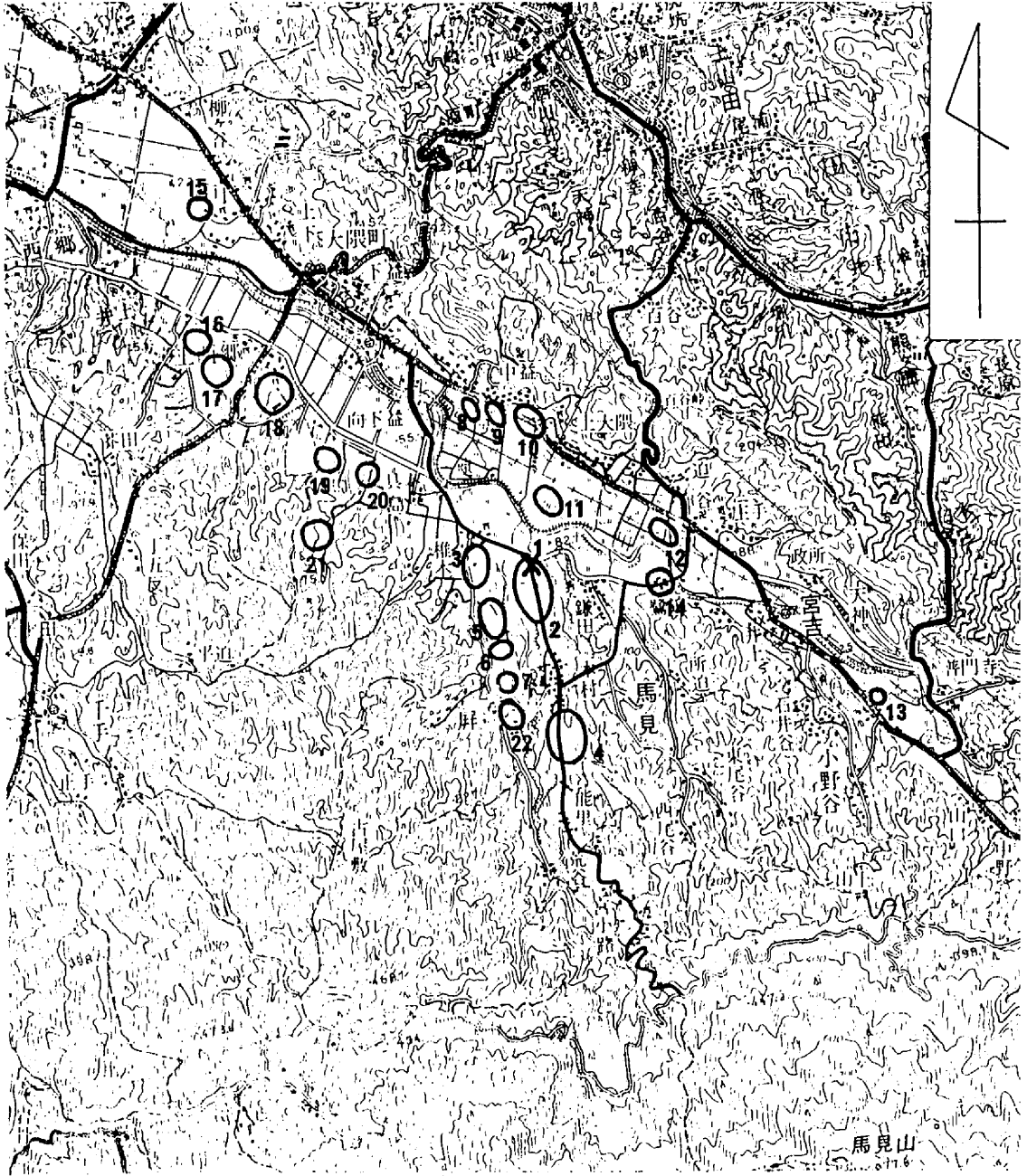
発掘調査は、町が調査主体となり昭和61年4月1日から昭和62年3月31日の間で実施した。調査関係者は下記のとおりである。

総括	嘉穂町教育委員会	教育長	矢野 良朔
庶務担当	同	社会教育課長	大谷 清人
	同	同係長	松岡伊三次
	同	同主事	大塚 正則
	同	同社会教育係	西田樹美子
	同	同指導員	大里富美雄
調査担当	同	同社会教育係	福島日出海

特に県文化課、県農地整備課、町農林整備課、工事関係者はじめ、嘉穂土地改良区ならびに貞月土地改良区の方々、また発掘作業に従事していただいた地元の方々、整理作業にあたられた方々に対し、記して謝意を表します。

発掘作業員名（順不同）

浜藤千郷・大塚ミユキ・中島タツエ・広瀬淑子・田中初子・森田保枝・松岡ハル子
井上文子・円入勝子・榎井ミドリ・浅田美由貴・森田正美・森田スミエ・島田チヨ子
榎井フクエ・縄田京・榎井昭子・江藤ミドリ・井手アキエ・縄田富士子・井上キヨ子
松岡タミ・滝下ハルエ・大河内ツネ子・松岡マキ子・泉ハツエ・伊藤寿子・伊藤久枝
山本敦子・梅木道代



1. 原田遺跡 2. 足白遺跡群 3. 本村遺跡A 4. 本村遺跡B 5. 上椎遺跡 6. タタラ遺跡 7. 宮の脇遺跡 8. 井手遺跡 9. 柿木遺跡 10. 穴江、塚田遺跡 11. 榎町遺跡 12. 勘高遺跡 13. 巻原遺跡 14. 鷺迫遺跡 15. 森分遺跡 16. 17. 古墳群 18. 久吉古墳群 19. 西ヶサコ古墳群 20. 杉坂古墳群 A 21. 杉坂古墳群B 22. 浄土寺遺跡

第1図 周辺遺跡布図 (1/50,000)

Ⅱ 位置と環境

嘉穂町は遠賀川の最上流域に在って、福岡県のほぼ中央に位置する嘉穂盆地の南端を占める。町の中央部を流れる嘉麻川（遠賀川）は、その両岸に河岸段丘や自然堤防、それに肥沃な沖積地を作り出しており、人々の生活基盤を、集落及び生産の場として、歴史的に支えて来た。町の三方は山々が連なり、筑後、豊前とは峠をもって接し、唯一開ける北側は、平野部と低丘陵が発達する。

宮ノ脇、原田の各遺跡は、馬見山麓に発達した台地上に立置し、森分遺跡は、嘉麻川の右岸に形成された河岸段丘上に存在する。宮ノ脇は屏遺跡群、原田は足白遺跡群の中に各々が属しており、森分も広く牛隈の平野部に広がる遺跡群の一部として把握されよう。

周辺の遺跡としては、宮ノ脇、原田の両遺跡の場合、縄文～歴史時代に至る複合遺跡が点在しており、本村、上椎、タタラの各遺跡は屏川の左岸に連なり、穴江、塚田、榎町、勘高、巻原の各遺跡は、嘉麻川の右岸に形成された自然堤防や河岸段丘の上に存在する。森分遺跡の場合は、特に南側に連なる丘陵上に多くの古墳が分布しており、高塚式としては新行坊や堂の前等があり、丘陵の斜面には横穴墓も多い。

Ⅲ 各遺跡の調査

1 宮ノ脇遺跡

(1) 遺跡の概要

遺跡は、屏川の左岸に位置する小規模な台地上に立地し、屏の老松神社の西側に接する。標高約92mを測る。

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡5軒、歴史時代の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1軒、溝状遺構が検出された。また、包含層内からは、縄文時代前期と晩期の土器片等が出土している。

発掘区は700㎡と狭く、遺構の集中は、その南側に広がる台地上が中心となろう。遺跡名は小字名の宮ノ脇をもって遺跡名とする。地形的には、屏川によって崖状に削られた台地上の東端にあって、眺望の開けた高位に位置する。



第2図 調査地点地形実測図（1/2,000）

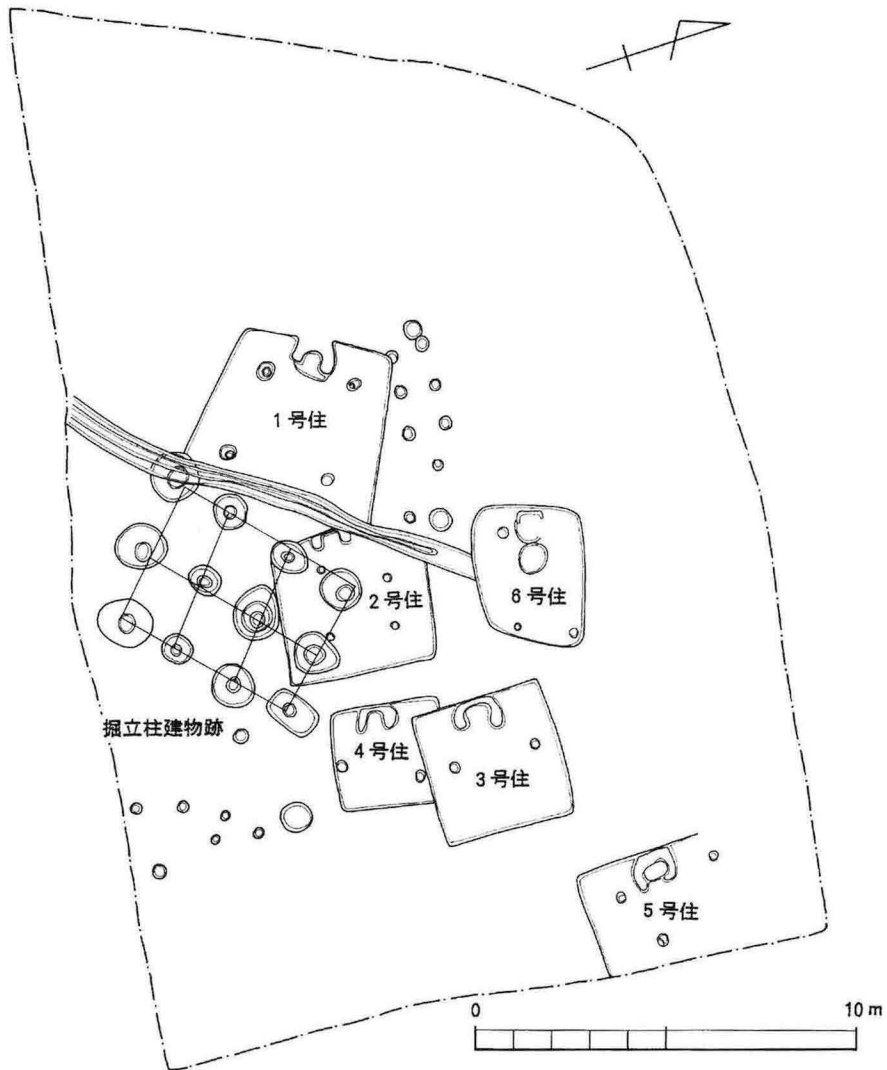
(2) 遺 構

竪穴住居跡

1号住居跡（図版1. 第4図） 平面プランは東西現存長4.6m、南北5.1mの方形プランを呈すが、南壁は開き気味となる。壁高は深さ34cmを測り北壁面は全体に低くなっている。柱穴はP₁～P₄であり、4本柱となる。カマドは西壁に設けられ袖部等が残るのみである。住居東壁部分は堀立柱と溝状遺構に切られる。

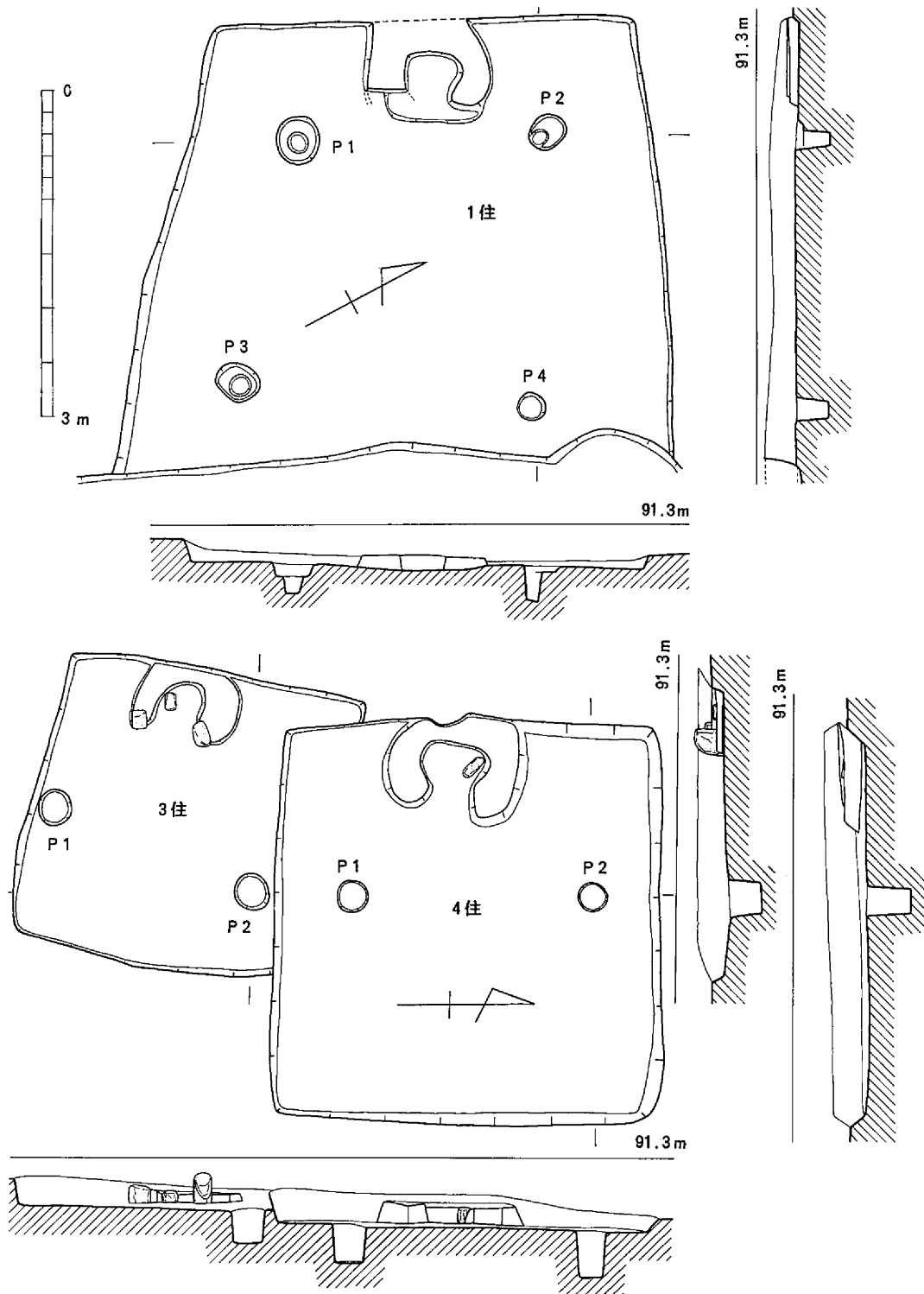
2号住居跡 平面プランは東西3.5m、南北4.2mの方形プランを呈す。壁高は30cmを測り北壁面は全体に低くなっている。柱穴はP₁～P₄であり、4本柱となる。カマドは西壁に設けられ右袖石が残る。住居内を堀立柱と溝状遺構によって切られている。

3号住居跡（図版1. 第4図） 平面プランは東西2.72m、南北2.34mの方形を呈し、壁高は27cmを測る。柱穴はP₁とP₂であり2本柱の小規模なものである。カマドは西壁に設けられ、両袖石と石製の支脚を残す。住居の北壁を4号住居によって切られている。



第3図 宮ノ脇遺跡遺構配置図 (1/200)

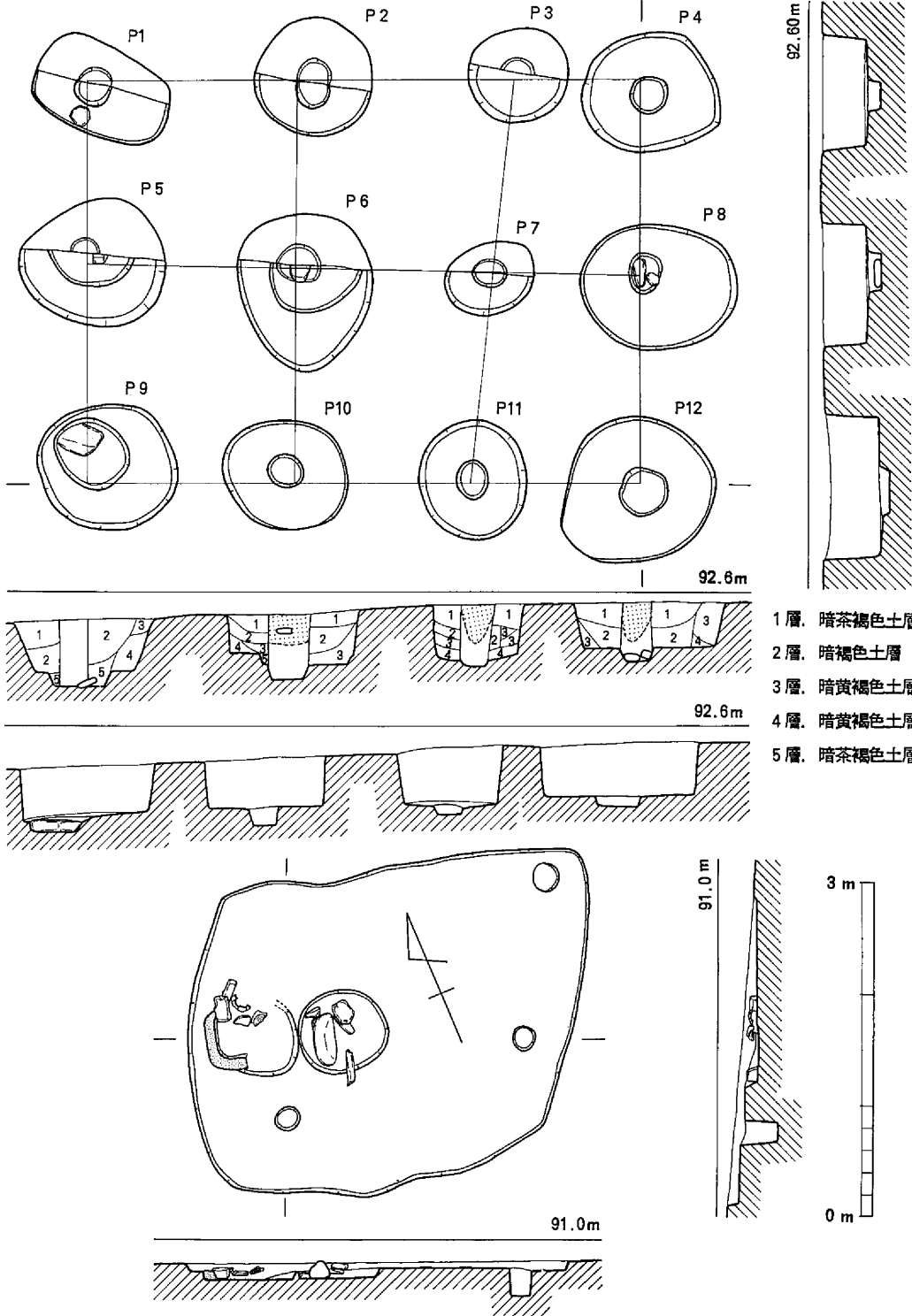
4号住居跡(図版1. 第4図) 平面プランは東西3.68m、南北3.54mの方形を呈し、壁高は41cmを測る。柱穴はP₁とP₂であり2本柱の構造を示す。カマドは西壁に設けられ、石製支脚が残る。3号住と同様の構造であり、新旧関係にあるところから興味深い例である。



第4图 1, 3, 4号住居跡実測图 (1/60)

(單位 cm)

桁行柱間寸法				梁間柱間寸法				P 深さ					
P1~P2 200	P2~P3 180	P3~P4 124	P1~P4 504	P1~P5 140	P2~P6 168	P3~P7 180	P4~P8 174	1	52	5	61	9	61
P5~P6 186	P6~P7 174	P7~P8 134	P5~P8 494	P5~P9 172	P6~P10 184	P7~P11 188	P8~P12 190	2	49	6	60	10	63
P9~P10 186	P10~P11 158	P11~P12 154	P9~P12 498	梁間寸法				3	48	7	56	11	63
				P1~P9 322	P2~P10 352	P3~P11 378	P4~P12 364	4	53	8	52	12	60



第5図 掘立柱建物跡，6号住居跡実測図(1/60)

5号住居跡 平面プランは東西現長3.08m、南北現長3.4mの方形を呈すと思われる。全体の1/2近くが削平されているが、壁高は13cmを測る部分が残る。柱穴はP₁とP₂のみ確認され、その位置から4本柱の構造を示すと考えられる。カマドは西壁に設けられ、下部を残すのみである。

6号住居跡（第5図） 平面プランは東西3.64m、南北2.92mの隅丸方形を呈すが、不整形に近い。壁高は10cmと低いもので、削平をかなり受けているらしい。柱穴と思われるピットは3ヶ所に存在するが、不規則に並ぶため断定は出来ない。カマドは粘土と石材が散乱するのみであり、西壁に設けた痕跡が確認された。

堀立柱建物跡（図版2. 第5図）

調査区内では、柱穴らしきピット群が存在するものの、建物としてまとまるものは1棟のみである。建物は3間×4間の規模で、梁間間平均4.99m、桁行間平均3.54mを測る。柱穴の掘り方は全体に大きく径が1.2～1.4mほどもあり、柱痕は柱の径が30cm前後の太いものであったことを示す。建物としては総柱建物の倉庫と考えたい。また、柱痕に焼土が多く混入することから、焼失した建物であったと思われる。

(3) 遺 物

縄文土器（第6図1～4）

1は浅鉢の口縁部で、全体に外反し、外面は研磨される。2は鉢の口縁部で口唇に刻目を施す。3と4は、荒い胎土で焼も良くない。表面は太い隆線が幾条も横走している。いずれも包含層中より出土したものである。

土製品（第6図5）

堀立柱の埋土中より出土したもので、土製紡錘車である。径は7cm、厚さ3cmあって、中央部に径3mmの穴が穿たれている。

須恵器（第6図6）

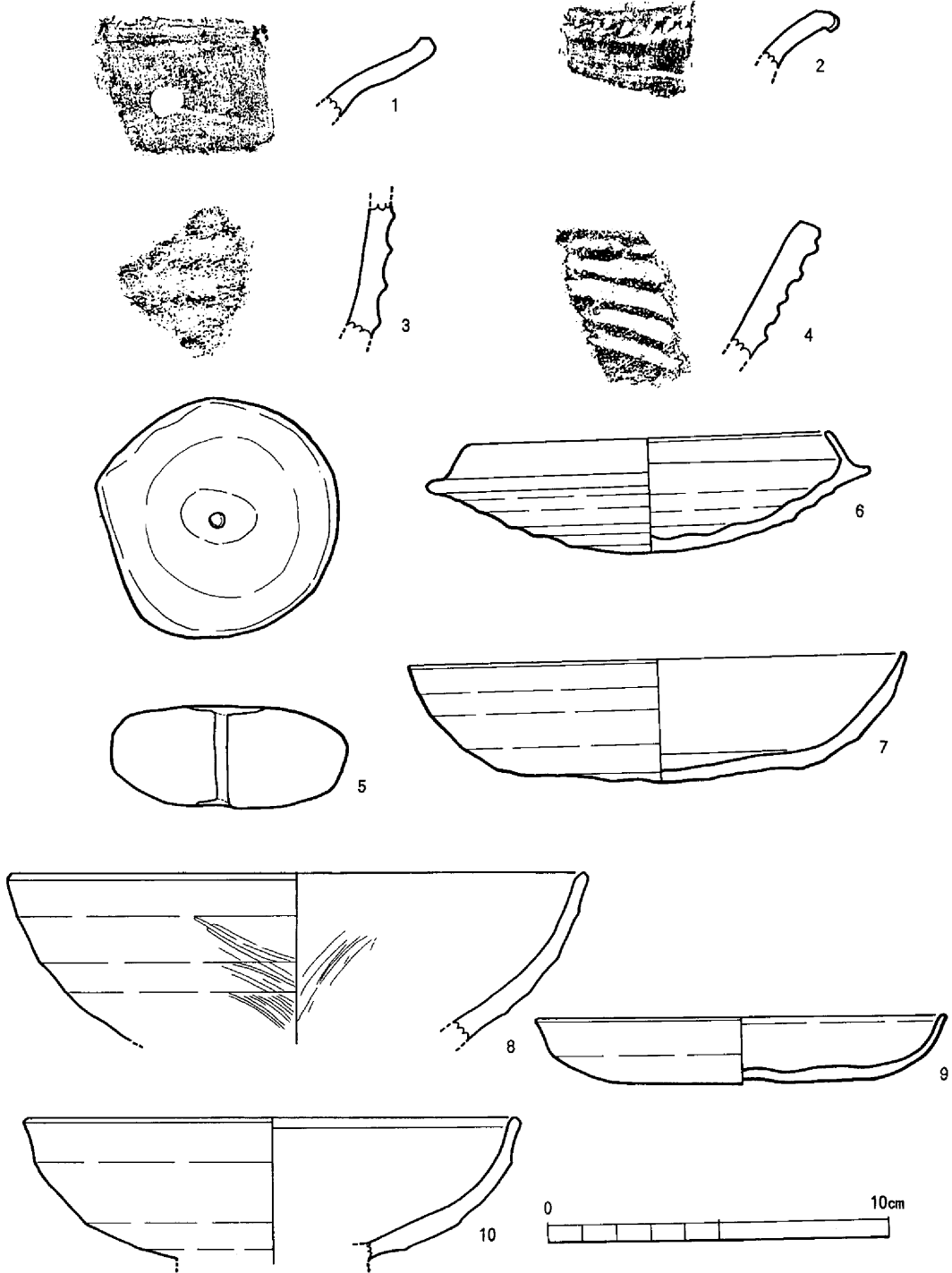
蓋杯の身であり、口径10.5cm、器高3.4cmを測る。青灰色で焼成や胎土は良いが、底部は低く全体に偏平である。

土師器（第6図7. 9. 10）

7と9はヘラ切底で胎土に砂粒を含むが焼成はやや良好である。7は口径14.6cm、器高3.6cmで、9は口径12cm、器高2cmを測る。10は高台付椀で胎土、焼成とも良好である。口径14.6cm、現高4cmを測る。

黒色土器（第6図8）

口縁部は緩に弯曲し、表裏とも研磨によって美しく仕上げられる。口径は17cm、現高は5cmを測り、色調は暗茶褐色で光沢を持つ。



第6図 包含層，遺構内出土遺物実測図（1/2）

(4) 小 結

宮の脇遺跡は台地端部の狭小な範囲に立地しており、その内容は集落の一部を構成するものである。

包含層出土の縄文土器は、第6図の1と2が縄文時代晩期後半の突帯文系土器に、3と4は前期の外面に隆線を施す轟B式に対応出来よう。また、土製品は大形で厚手である点で晩期の突帯文系土器に伴うものであろう。

須恵器は口縁部がしっかりしているのに対し、全体に扁平で小形化しており、編年上のIVに対応出来よう。^(註1)

土師器と黒色土器は伴出しており、両者の時期関係から11世紀代頃に比定されよう。

以上により遺構の時期を考えるならば、^(註2) 竪穴住居群の場合1号～5号は、主軸やカマドの方向が一致しているため、ほぼ同時期を示すと思われる。IV期の須恵器を伴うことから、その年代を7世紀前半頃に比定出来よう。^(註3)

6号住居は、黒色土器をへら切底の土師器が伴出する段階であり、11世紀代の竪穴住居の最終末の姿を示すものである。

堀立柱建物跡の場合、伴出遺物を欠くため時期決定は困難であるが、少なくとも7世紀の竪穴住居群より新しく、平安時代後半頃の住居や溝よりも古いものである。またその規模から見て奈良時代頃の建物である可能性が高い。同時期頃の例で、穴江・塚田遺跡で検出された大型の堀立柱建物跡との関係も考えられよう。^(註4)

2 原 田 遺 跡

(1) 遺 跡 概 要

遺跡は、馬見山麓の北に長く伸びた馬見台地上の北端に位置しており、馬見の集落より北側に広がる水田地帯に相当する。標高は約75m～85mを測り、沖積地との比高差は10m以上である。

今回の調査では、弥生時代中期の木棺墓16基、土壙墓47基、甕棺墓12基と同時代後期から古墳時代初頭にかけての石棺墓18基、木棺墓20基、土壙墓28基、石蓋土壙墓1基、甕蓋状土壙墓1基が検出された。また、竪穴住居は25軒あって、弥生時代後期から古墳時代初頭のもものが22軒、古墳時代後期は3軒となっている。他には古墳時代後期の横穴式石室部と3基の土壙墓、古墳時代から歴史時代にかけての土壙14基、近世の柱穴群等が検出された。

発掘区は3地点あって、第1地点は台地最先端部、第2地点は台地西側縁辺部、第3地点は台地中央部の県道中益～宮小路側西側となっている。第1地点は弥生時代中期と後期の墓地であり、墓群が3ヶ所に分散して検出された。従って、東より順にA、B、Cとして調査の進行を計った。第2

地点は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落と墓地を中心として、古墳時代後期から歴史時代まで住居を営む。第3地点は、弥生時代後期の住居跡と古墳時代後期の土壙群が検出されている。ここでは小字名の原田をもって遺跡名とする。

なお、第2地点の次に足白大塚（図版17）と称する墳丘状の高まりを、トレンチ調査した結果自然丘であることが判明した。

(2) 第1地点の調査

A 墓群A

a 弥生時代の遺構と遺物

木棺墓

木棺墓は総数16基で、およそ20m四方の範囲に集中する。主軸方向は大半が南北を示し、直交するものは、13号墓のみである。

木棺墓の構造を以下に示すと、

- A. 長方形の墓壙内に10cm前後の浅い掘り込みを行なう二段掘込のもので、裏込めをして棺を固定するもの。
- B. 長方形の一段掘込のもので、棺を直接組むもの。
- C. 長方形の墓壙を二段掘込にし、さらに壙を掘り込んで三段構造をするもの。
- D. 通常の2倍ほどの墓壙内の片側に、さらにA式の二段掘込を行なう。

以上のように分類されよう。特にDの場合は棺外に広い空間が存在し、特殊な遺物を伴うものであった。

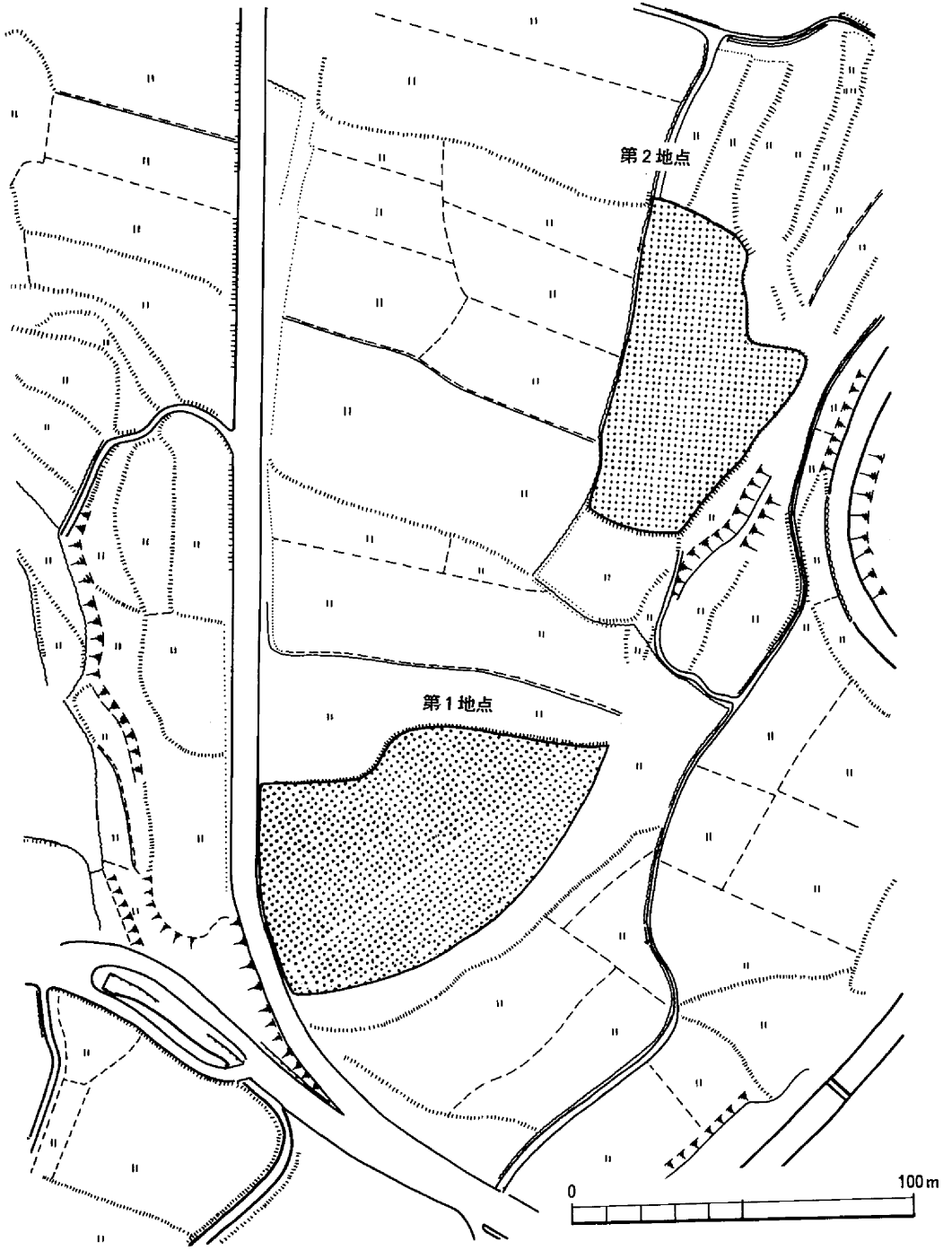
次に棺の組合せ方を示すと、

- a. 木口板を両側板で挟みこむもの。
- b. 木口板で両側板を挟みこむもの。
- c. 木口板・両側板によって箱形に組むもの。

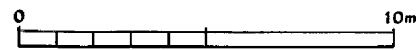
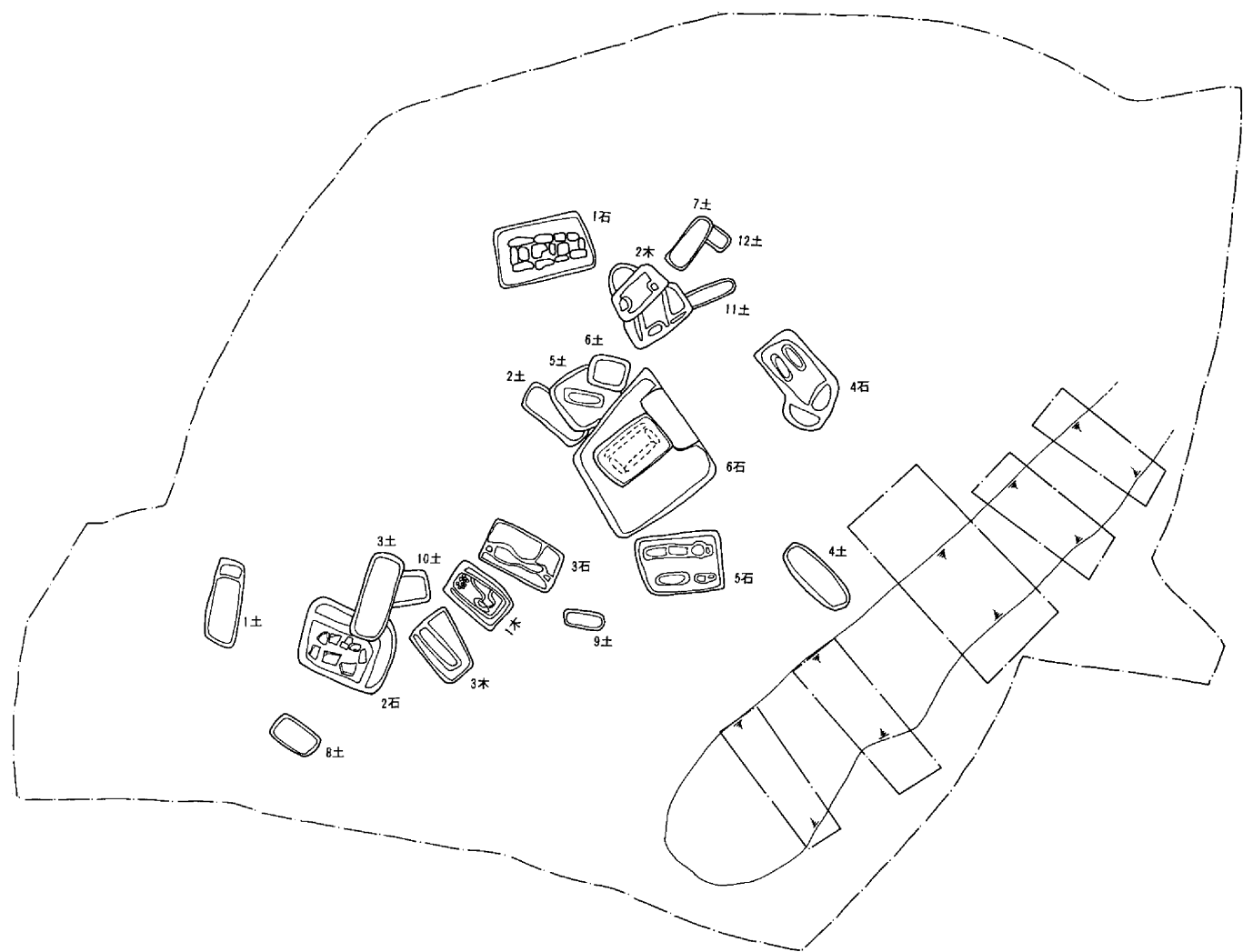
以上のように分類されよう。また、a、bは特に一方しか見えないものがあるし、cの場合の多くは、土質の関係から検出されにくい点で、注意が必要である。

土壙墓及び甕棺墓との切り合関係は、主軸方向の異なる13号墓のみが12号甕棺を切る。土壙墓とは切ったり切られたりが一部に目立っている。

1号墓（第9図）三段掘込のC構造で、棺は木口板で両側板を挟みこむb式を取る。頭位は底幅が広く、高さも若干高くなる南側と思われる。



第7图 調査地点地形実測图 (1/2,000)



第8図 原田遺跡第1地点遺構配置図 (1/200)

2号墓（図版4、第9図）二段堀込のA構造で、棺は木口板で両側板を挟みこむb式である。頭位は底位が若干高くなる北側と思われる。

3号墓（図版6、第10図）一段堀込の壙内に直接棺を組むものでB構造である。棺は木口板で両側板を挟みこむb式で、頭位は幅広の木口板を使用する北側と思われる。

4号墓（第10図）二段堀込のA構造で、棺は木口板で両側板を挟みこむb式である。頭位は南側と思われる。

5号墓（第11図）二段堀込のA構造で、棺は木口板で両側板を挟みこむb式である。小銅鐸を出土した15号木棺墓によって東側を切られている。

6号墓（第11図）二段堀込のA構造で、棺は木口板で両側板を挟みこむb式と思われる。

7号墓（図版4、第12図）本来は二段堀込のA構造であったと思われるが、墓壙は削平のため失われている。棺は木口板で両側板を挟みこむb式である。

8号墓（第12図）二段堀込のA構造であり、棺は木口板で両側板を挟みこむb式と思われるものの、北側での木口部分の痕は検出されなかった。

9号墓（第13図）南側に段が残るものの、基本的には一段堀込のB構造で、棺は木口板を両側板で挟みこむa式のものと思われる。

10号墓（第13図）幅の広い墓壙内に直接棺を組む一段堀込のB構造で、棺の痕跡は一部のみであるが箱形に組むc式と思われる。

11号墓（第14図）二段堀込のA構造で、棺は木口の堀り込みが見受けられないところから、箱形に組むc式の可能性が高い。

12号墓（図版4、第14図）二段堀込のA構造で、棺はc式と思われる。頭位は壙の幅が広がる北側と思われる。

13号墓（第15図）二段堀込のA構造で、棺はc式と思われる。主軸は他の木棺墓に直交するもので、15号木棺墓と12号甕棺墓を切って存在する。

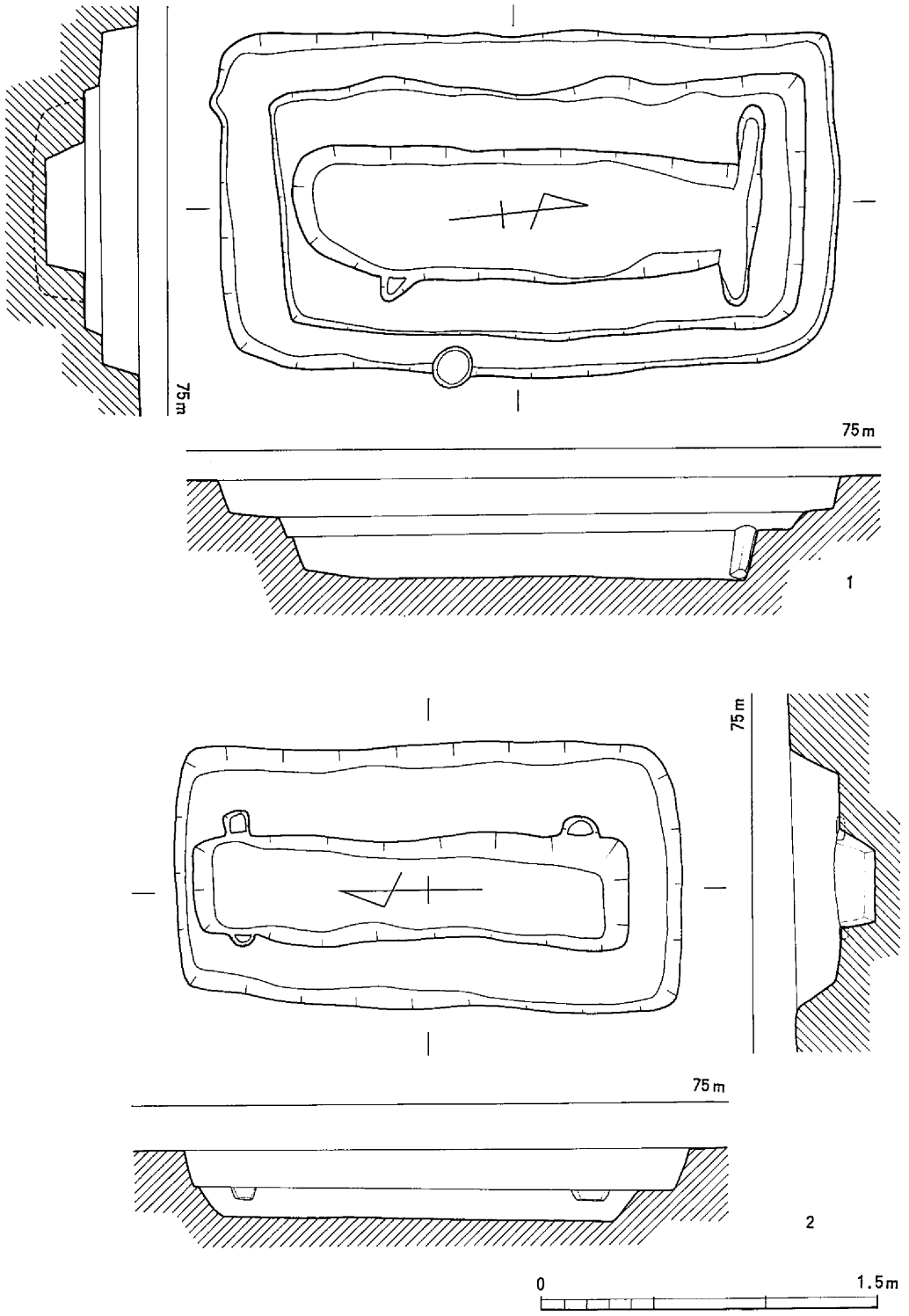
14号墓（第15図）三段堀込のC構造で、棺は木口の堀り込みが見られないことから、c式の箱形に組むものと思われる。

15号墓（図版5図、第16図）小銅鐸の出土した遺構である。東西の長さ2.34m、南北の長さ2.63m以上の墓壙を一段設け、その内部東端に東西の長さ80cm、南北の長さ2.4m以上の壙を堀り込み、さらに長さ1.72m、幅46cmの棺を組むための壙を設ける。棺を組む壙は10cm前後の浅いもので、土層（第16図）の観察では、1～3層は棺蓋部の崩壊後の落土であり、4層は裏込と考えられる。さらに5層は裏込の部分を外から支える状態となっている。

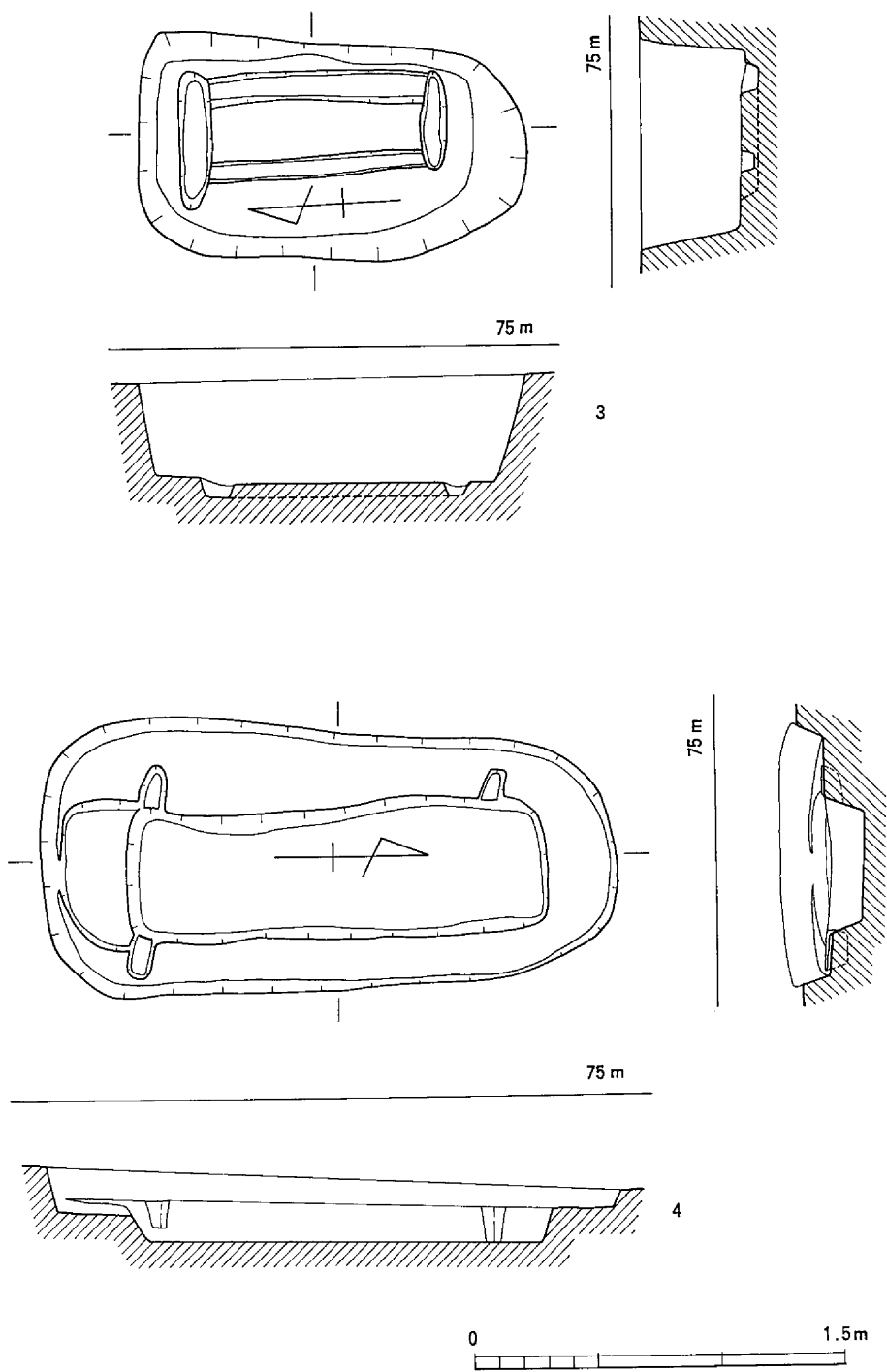
小銅鐸は、一段目の広い墓壙内にあって、その中央付近から出土している。レベル的には床面より7～8cmほど浮いており、身は墓壙の主軸に一致する。鈕は南を裾は北を向き、床面にほぼ水平状態で埋置されていた。舌は、鈕の直下に接するように存在しており、鐸身の長軸方向とは直交して置かれていた。管玉は総数20個で、小銅鐸の西北側に集中して出土した。レベル的には、床面から小銅鐸出土レベルまでの間に散出しており、鐸との共伴を示す。

この場合構造的にはD式であり、棺は木口板と両側板とを箱形に組むcのタイプが考えられよう。遺物は棺外からの出土であり、棺外副葬品として把握されよう。

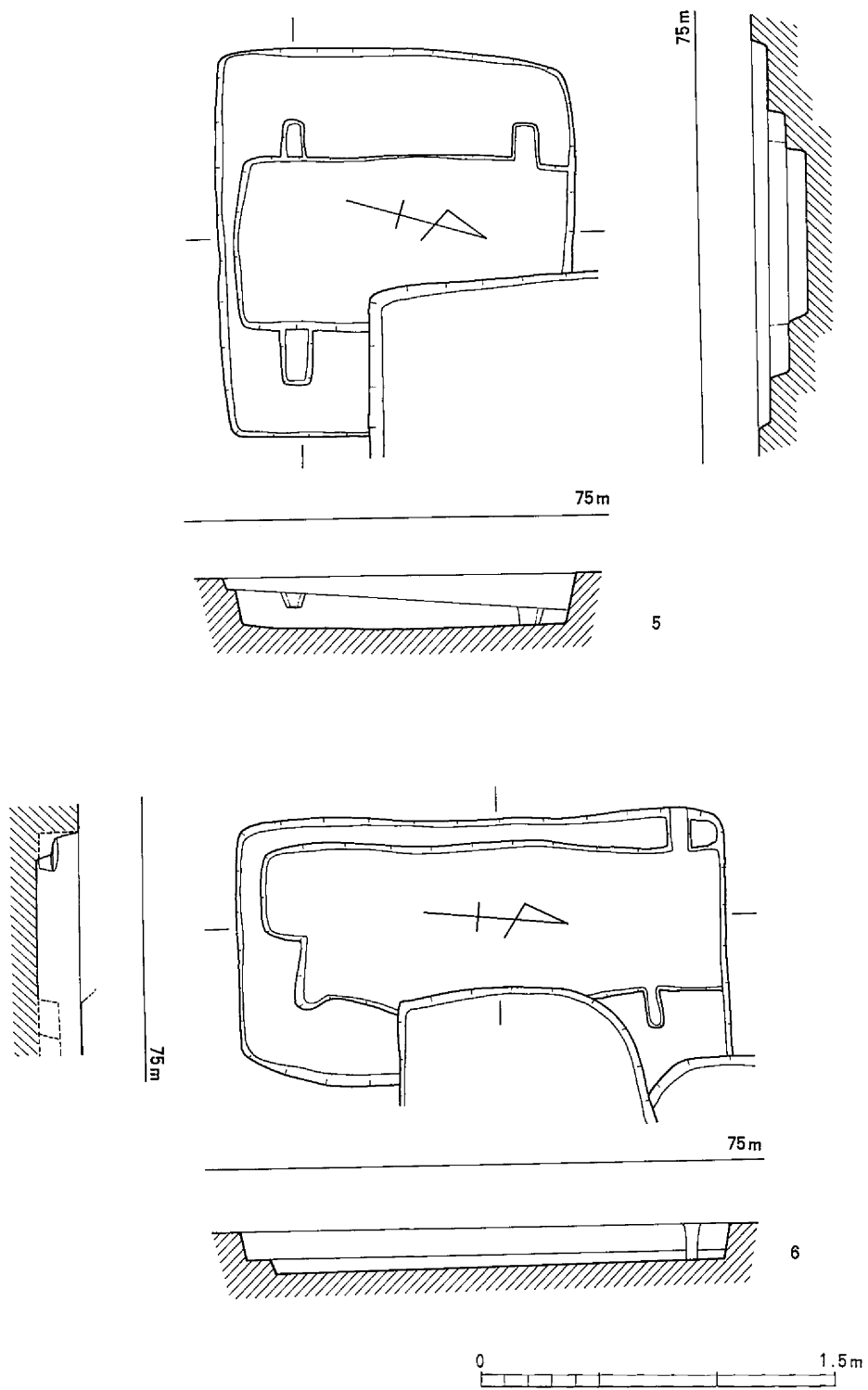
16号墓 一段堀込のB構造で、棺は木口板を両側板によって挟みこむa式のものである。



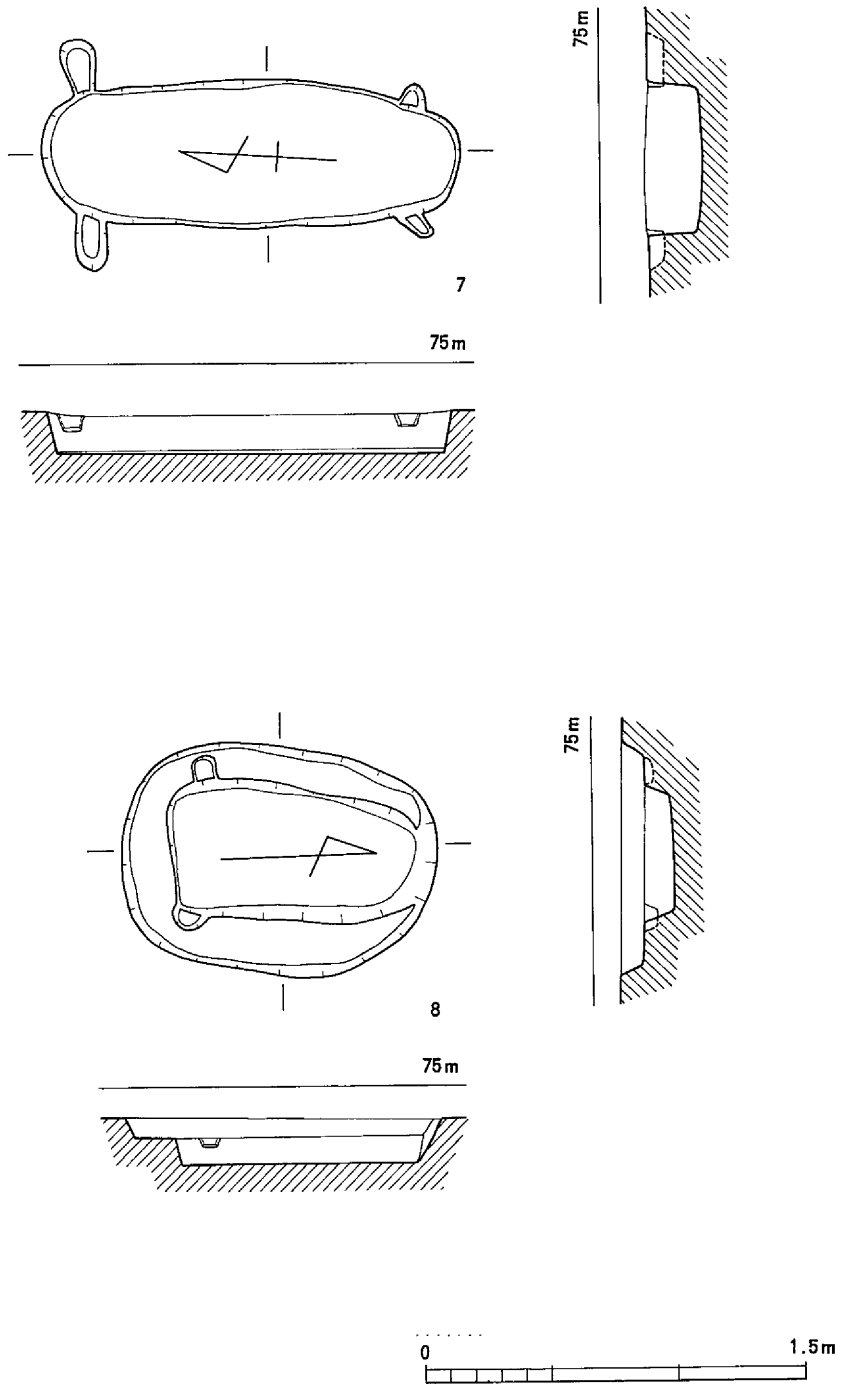
第9图 1, 2号木棺墓实测图 (1/30)



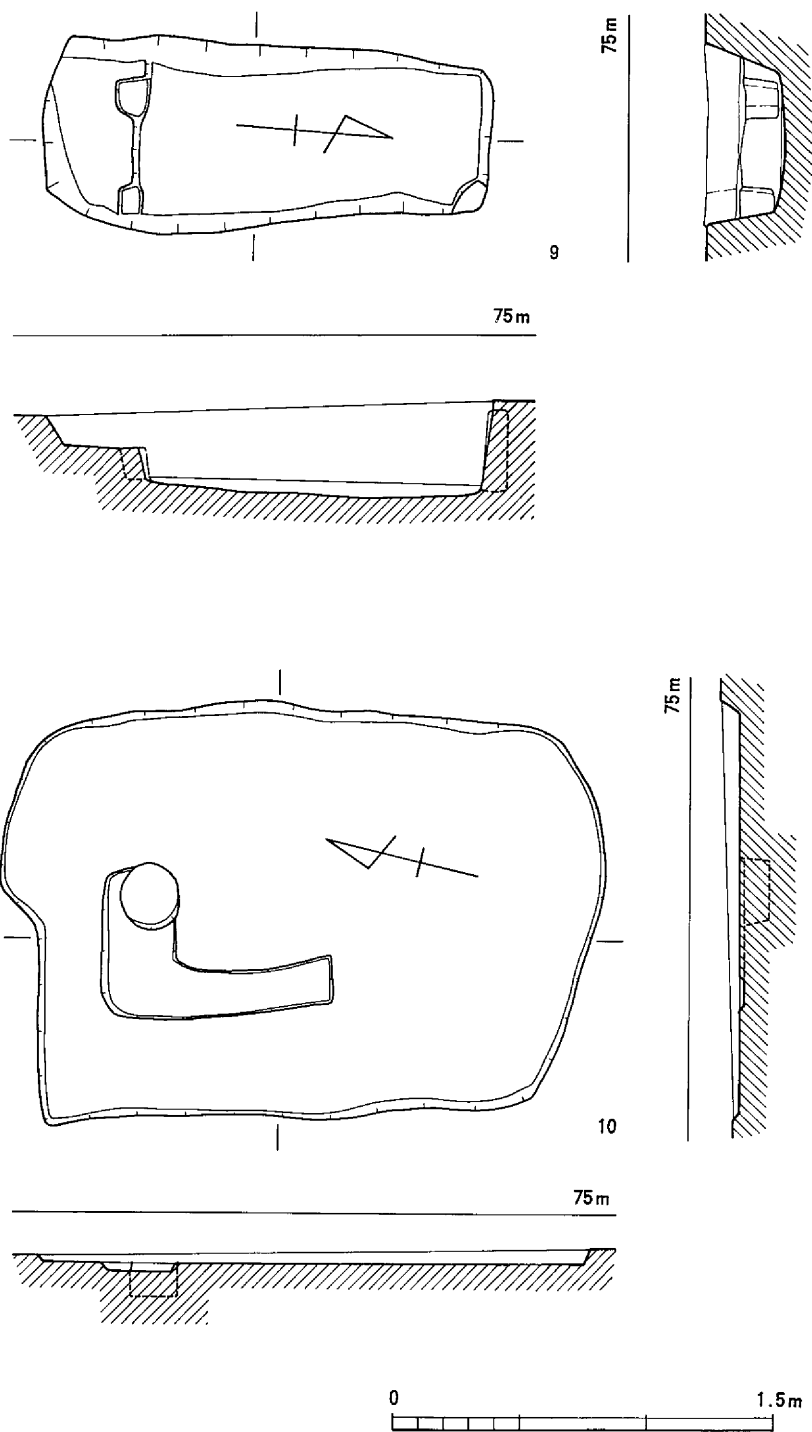
第10图 3, 4号木棺墓实测图(1/30)



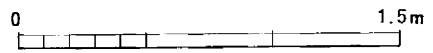
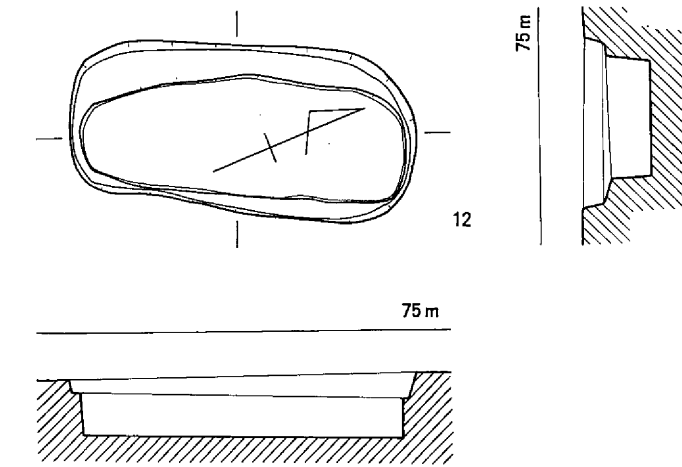
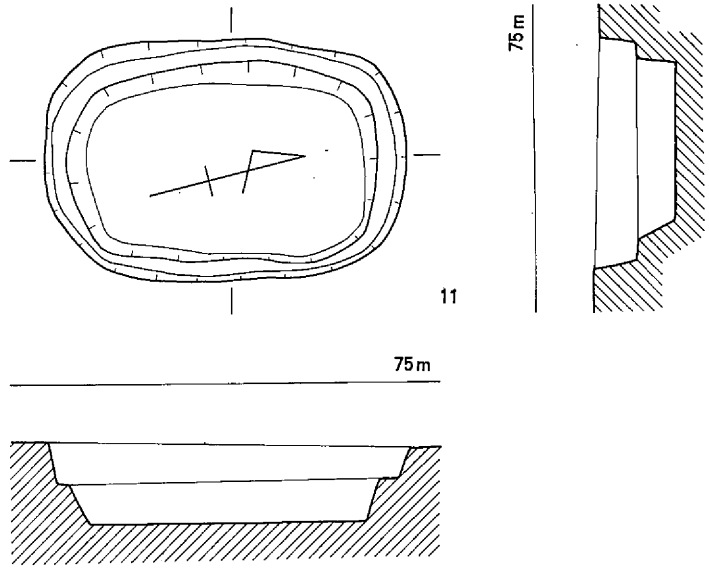
第11图 5, 6号木棺墓实测图(1/30)



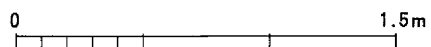
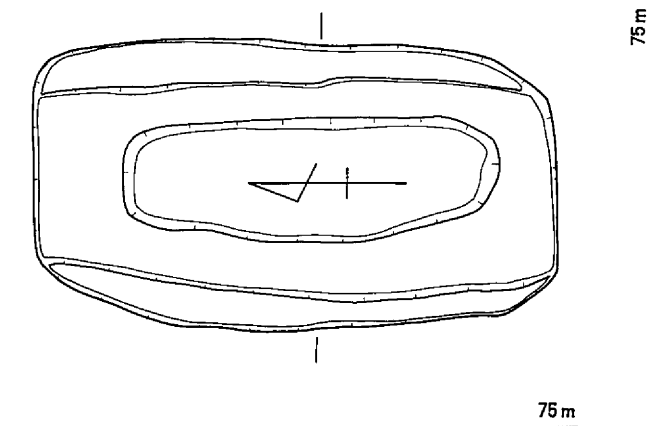
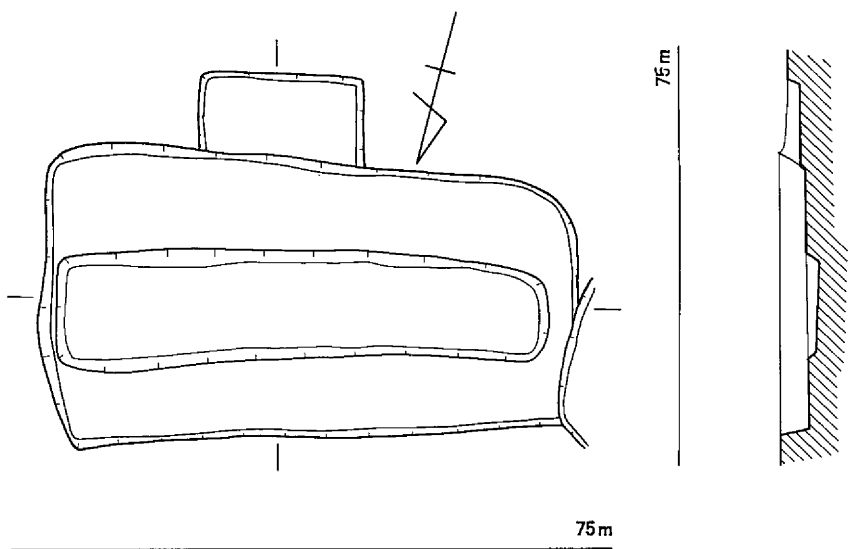
第12图 7, 8号木棺墓实测图(1/30)



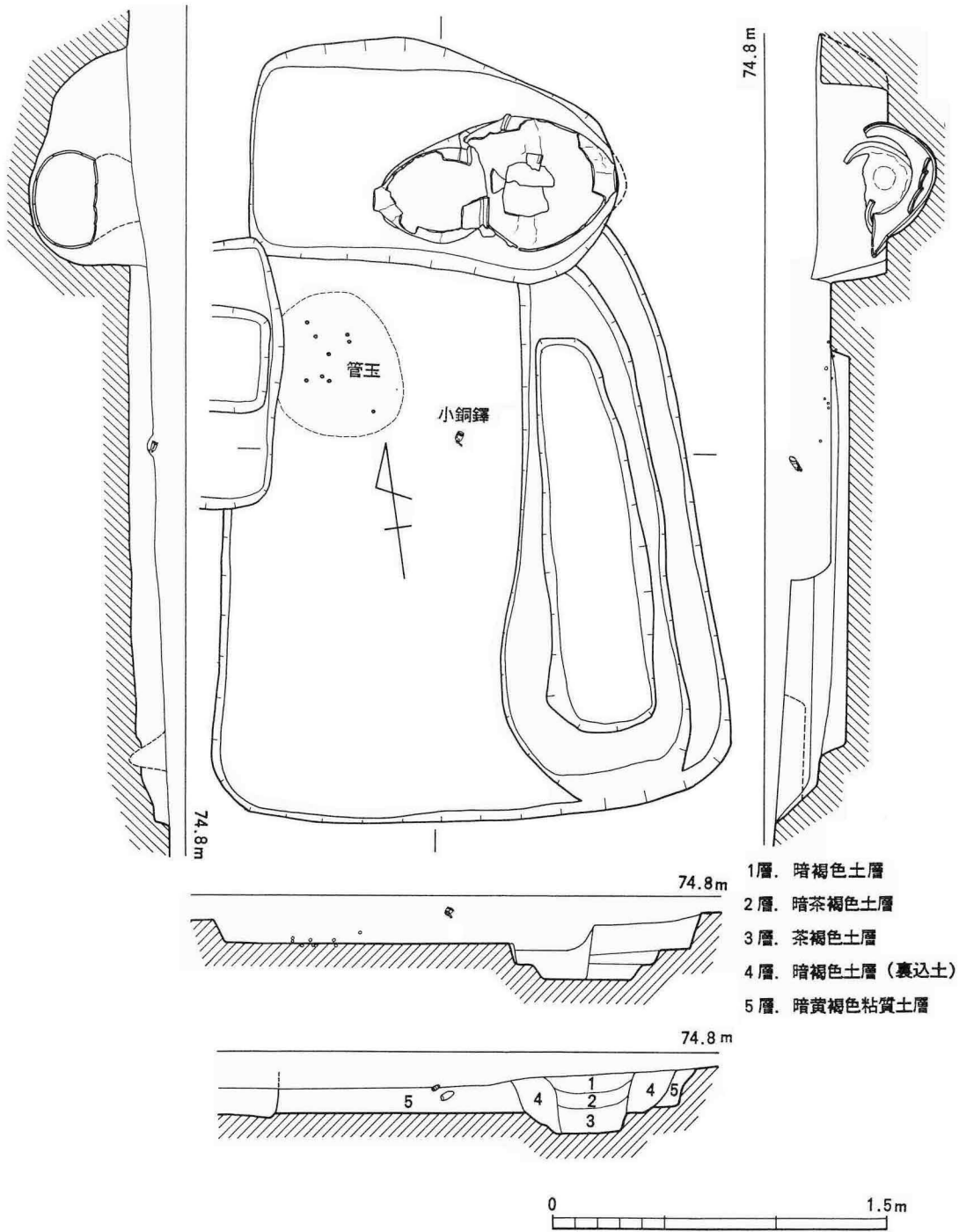
第13图 9, 10号木棺墓实测图(1/30)



第14图 11, 12号木棺墓实测图 (1/30)



第15图 13, 14号木棺墓穴测图 (1/30)



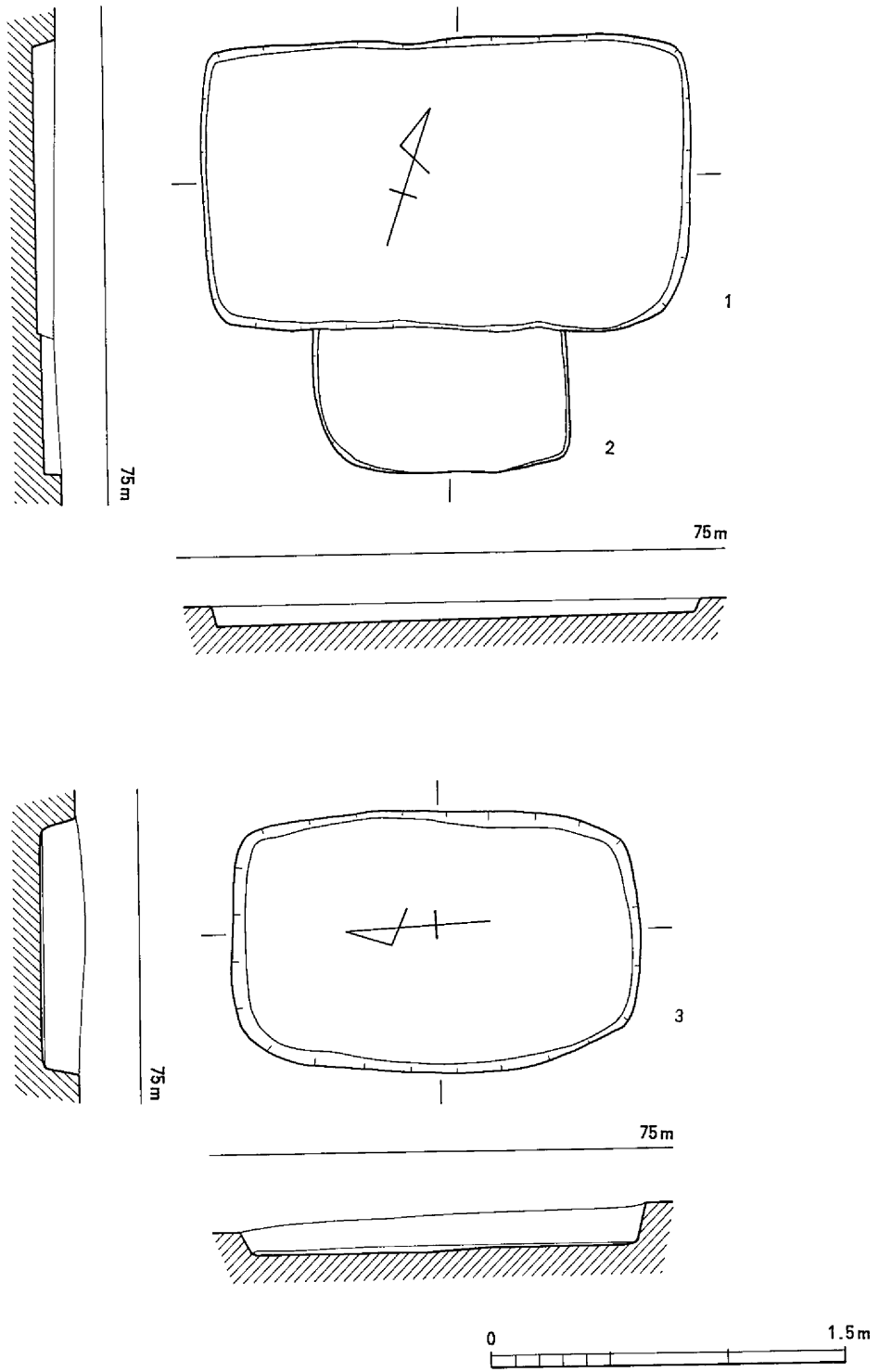
第16図 15号木棺墓実測図 (1/30)

第1表 木棺墓一覧表

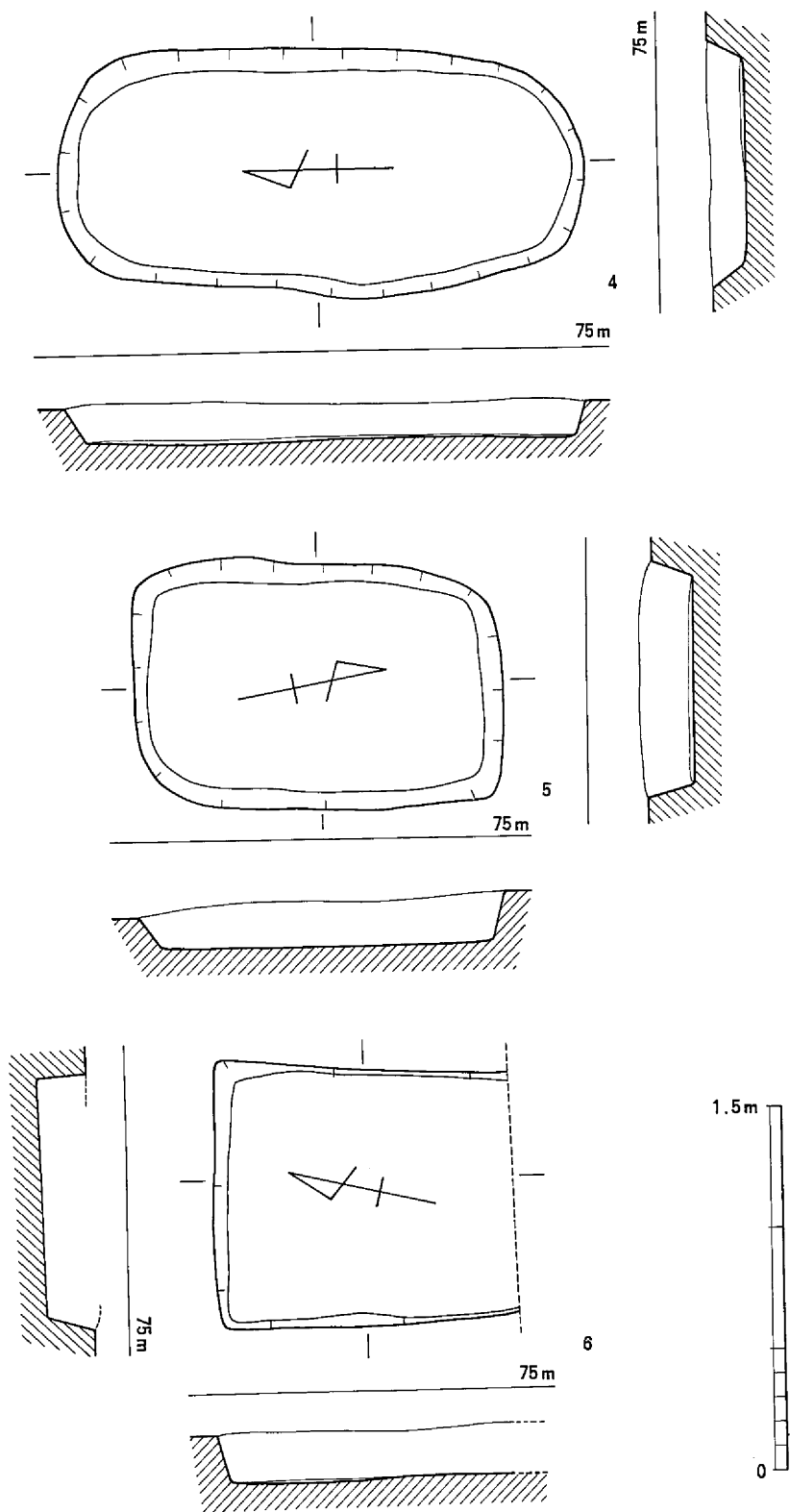
No.	種別	主軸方位	墓壇の規模		棺の内法			木棺の場合				備考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	木	N-6°-E	277	155	210	90	23.0	○				
2	木	N-1°-E	226	119	195	46	13.5	○				
3	木	N-2°-E	156	88	108	44	8.0	○	○			
4	木	N-0°	233	106	171	54	16.0	○				
5	木	N-14°-W	150	167	144	114	15.0	○				
6	木	N-8°-W	206	114	195	74	15.0	○				
7	木	N-2°-W			165	59	15.0	○				
8	木	N-2°-E	124	90	105	54	11.0	○				
9	木	N-4°-W			176	72	13.0	○		○		
10	木	N-12°-W	232	164	90以上	60以上	3.0	○	○			
11	木	N-10°-W	142	95	122	77	16.0					
12	木	N-24°-W	136	66	127	47	16.0					
13	木	N-78°-E	215	112	193	44	7.0					
14	木	N-2°-W	206	112	148	49	8.0					
15	木	N-10°-W	263以上	234	172	46	1.0				○	小銅鐸、舌、管玉出土
16	木	N-23°-W	100以上	90	70以上	40	24.0	○		○		

土 壇 墓

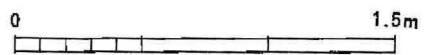
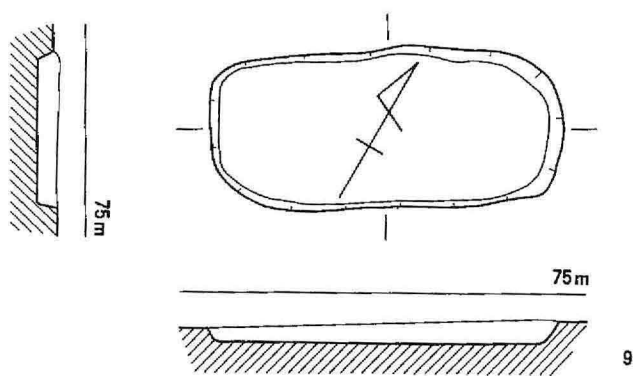
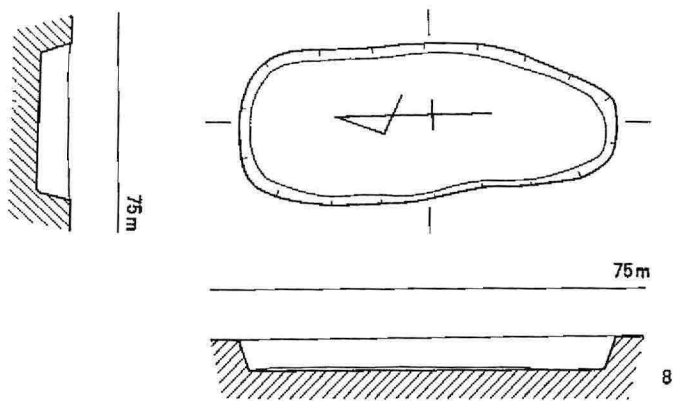
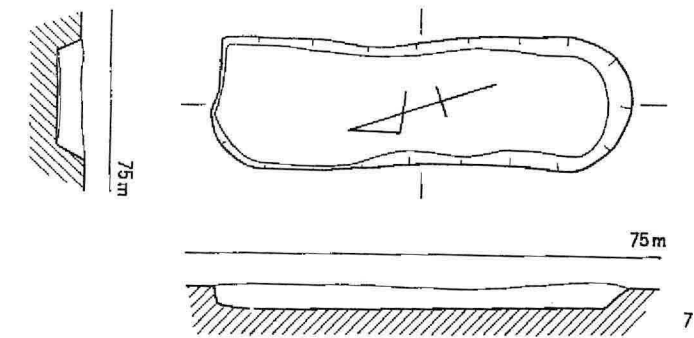
土壇墓は総数47基である。土壇の場合木棺墓と同様の分布を示すが、一部は発掘区の南側に広がっている。主軸は多くが南北を示しており木棺墓や甕棺墓との切り合関係が見受けられる。特に甕棺墓と土壇墓の関係は、前者が後者を切って存在しており、相対的に甕棺墓の形成が新しくなることを示す。小児用の小型の例もあって、小児用甕棺利用以前の小児埋葬方法は土壇墓形式で、木棺墓には見受けられない。



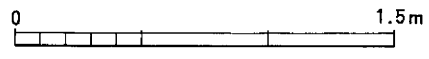
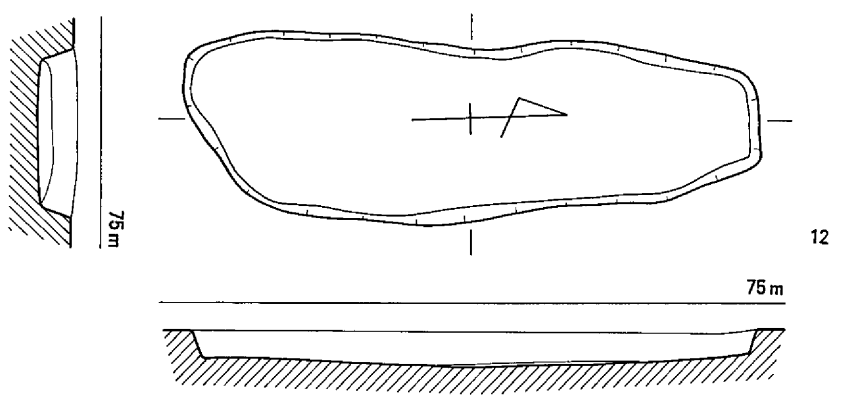
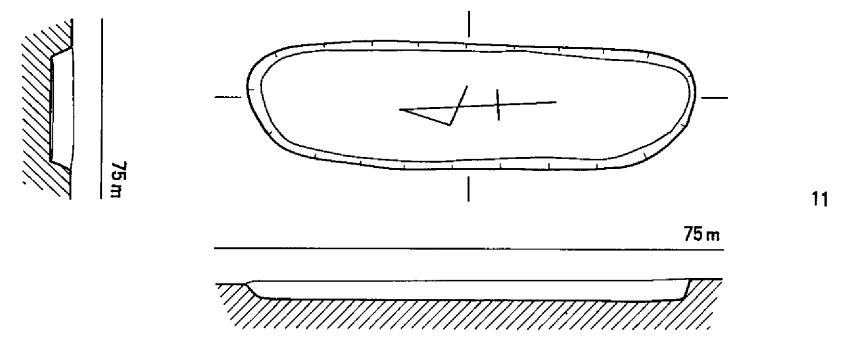
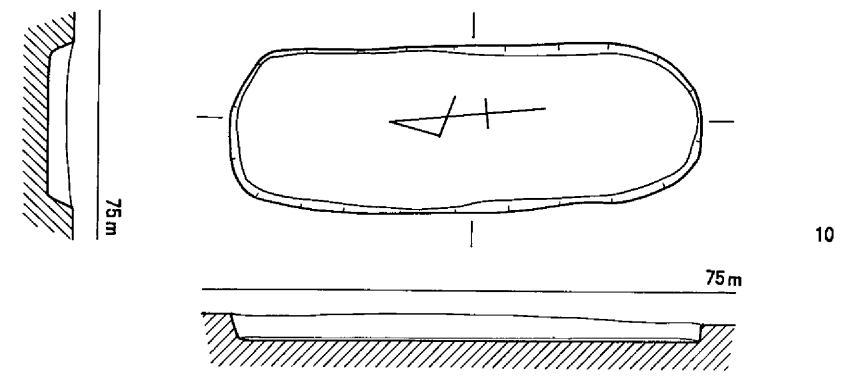
第17图 1~3号土坑墓实测图(1/30)



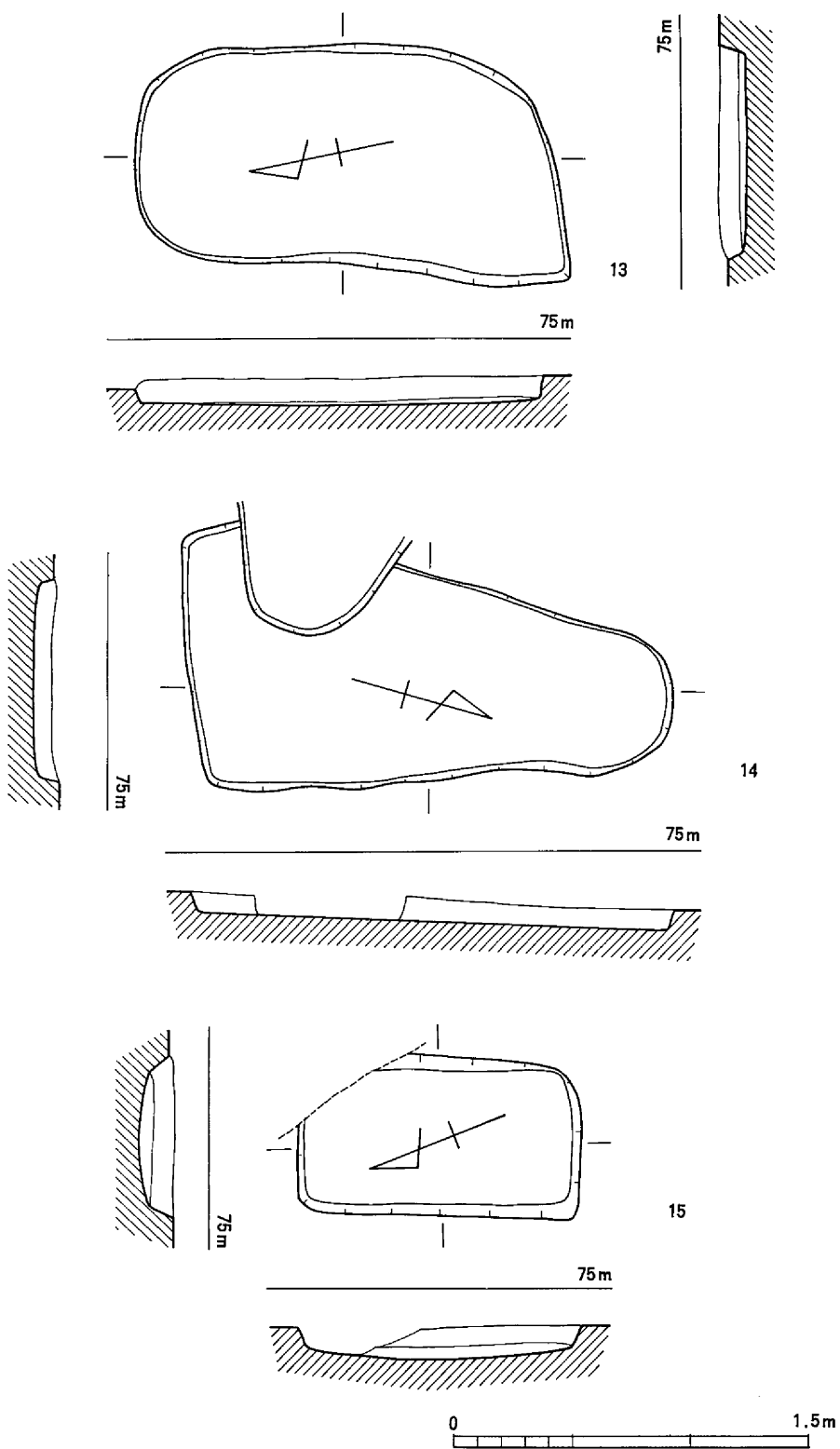
第18图 4~6号土壕墓实测图(1/30)



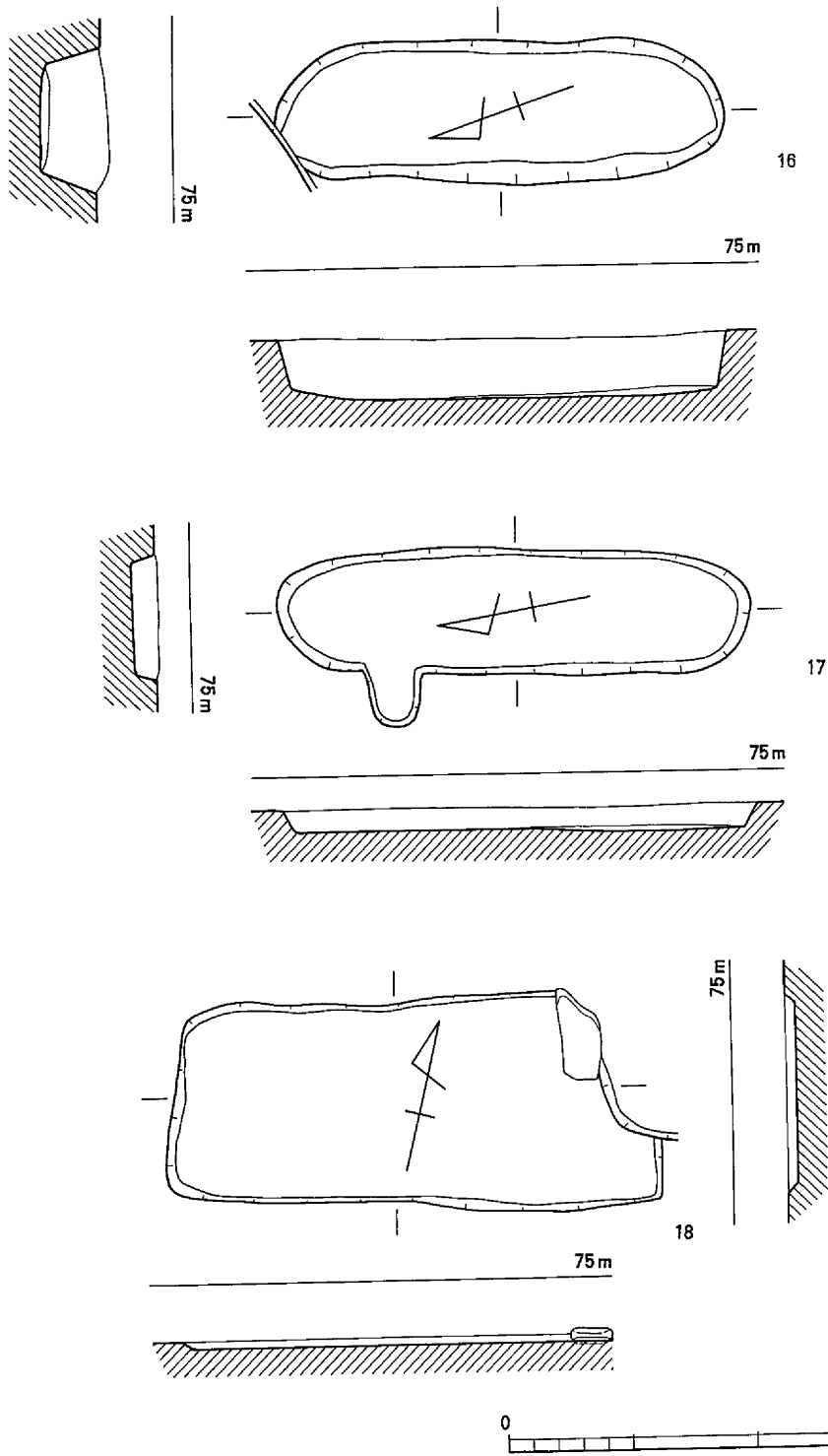
第19图 7~9号土坑墓实测图(1/30)



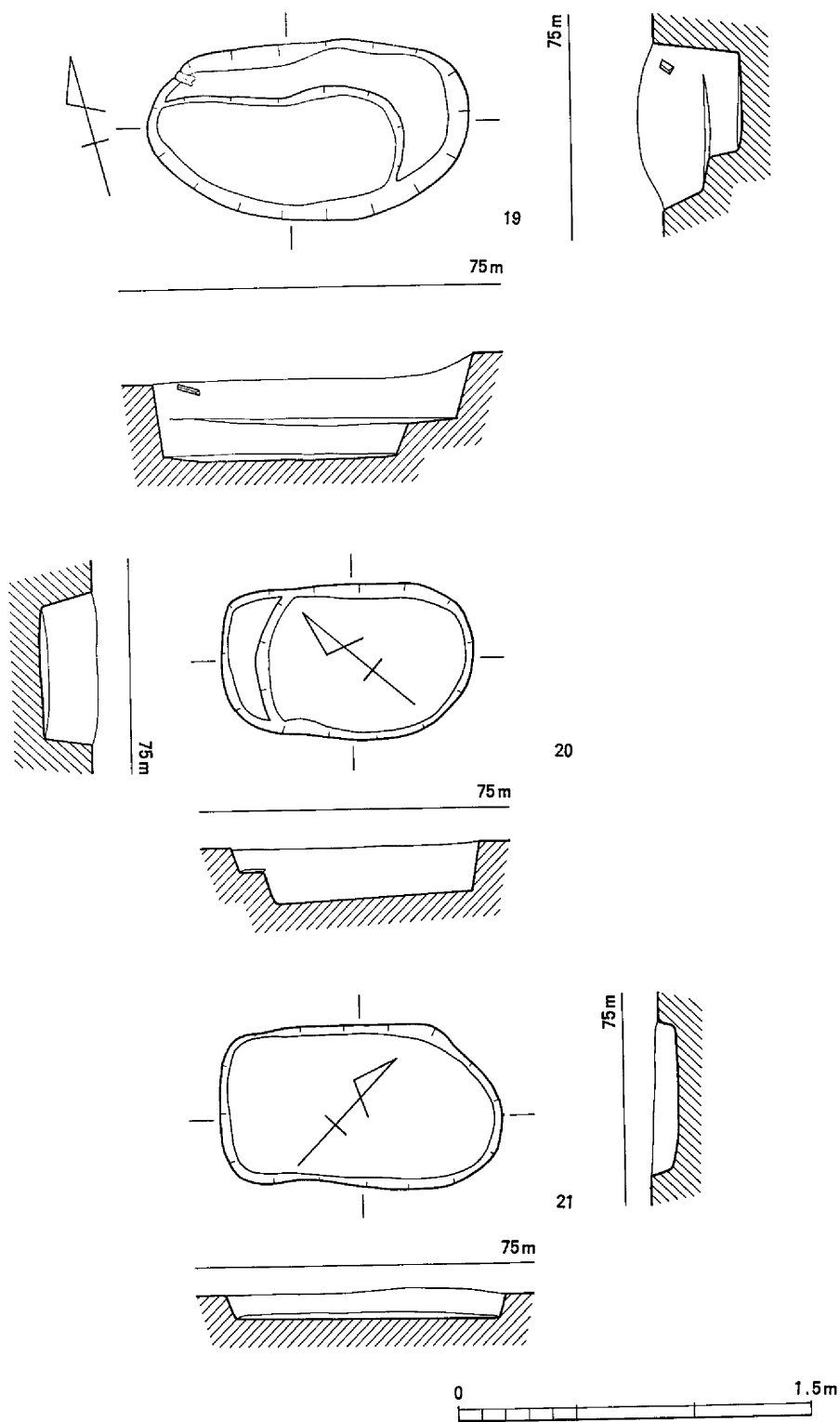
第20図 10~12号土墳墓実測図 (1/30)



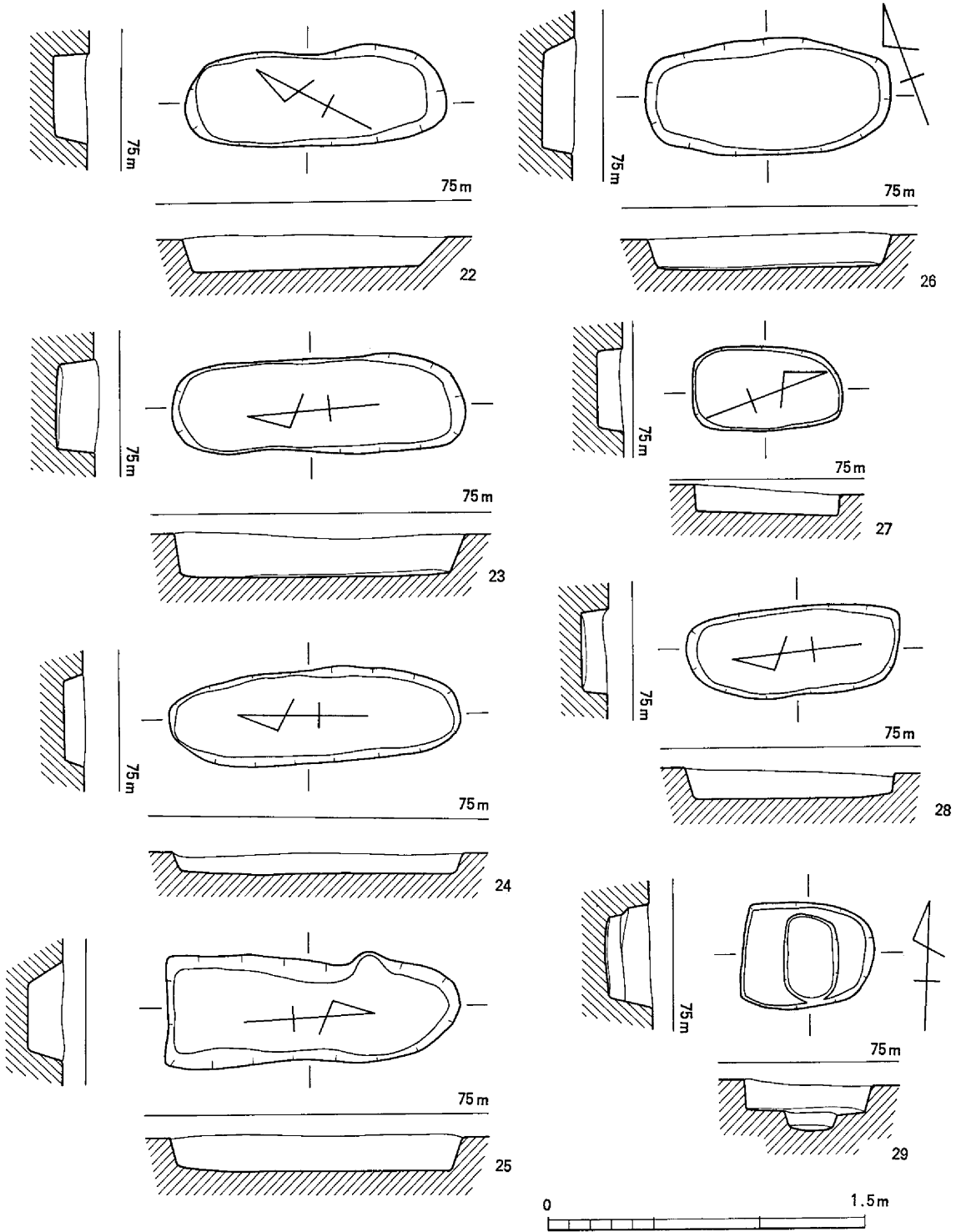
第21图 13~15号土坑墓实测图 (1/30)



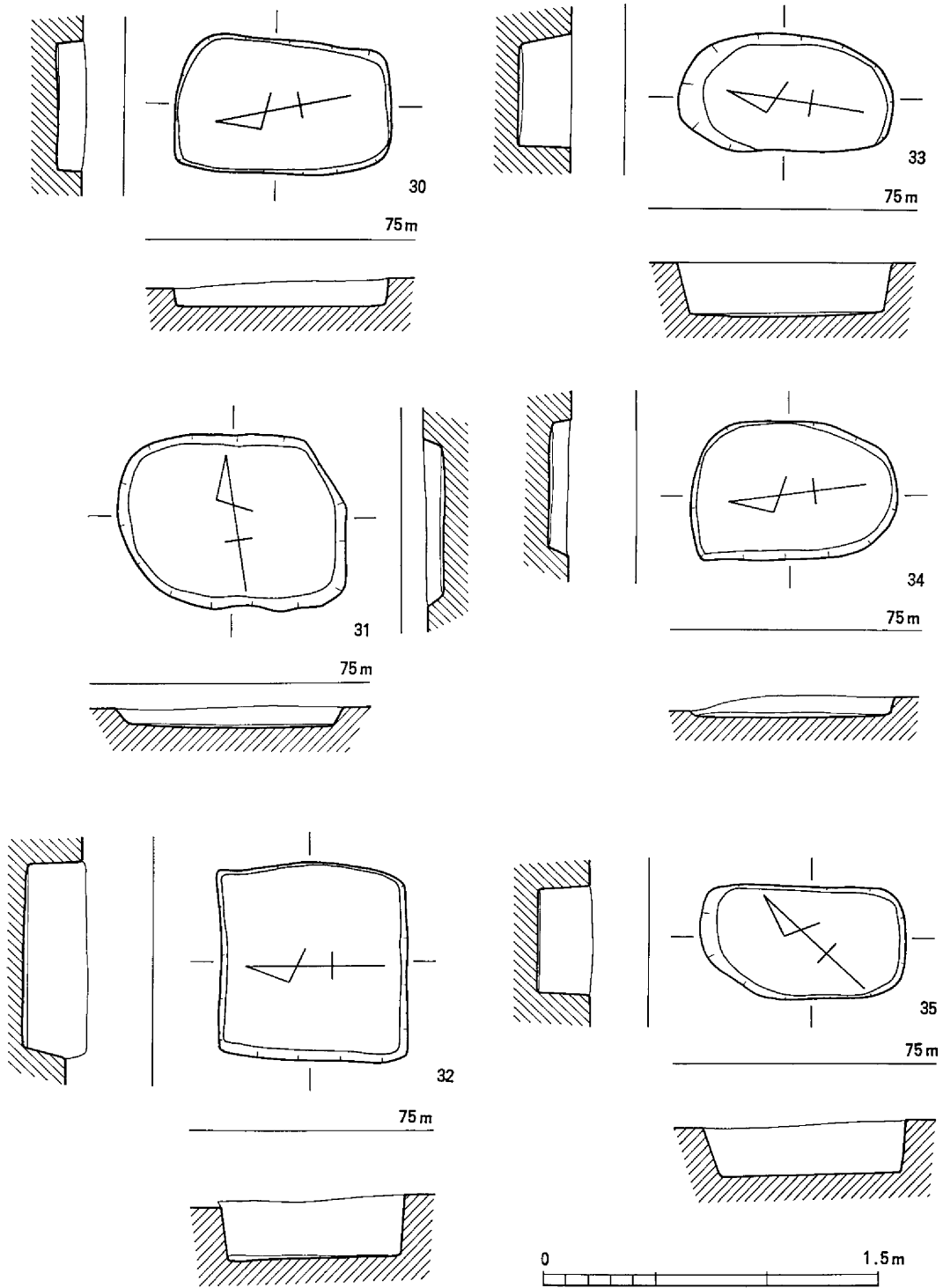
第22图 16~18号土墳墓実測図(1/30)



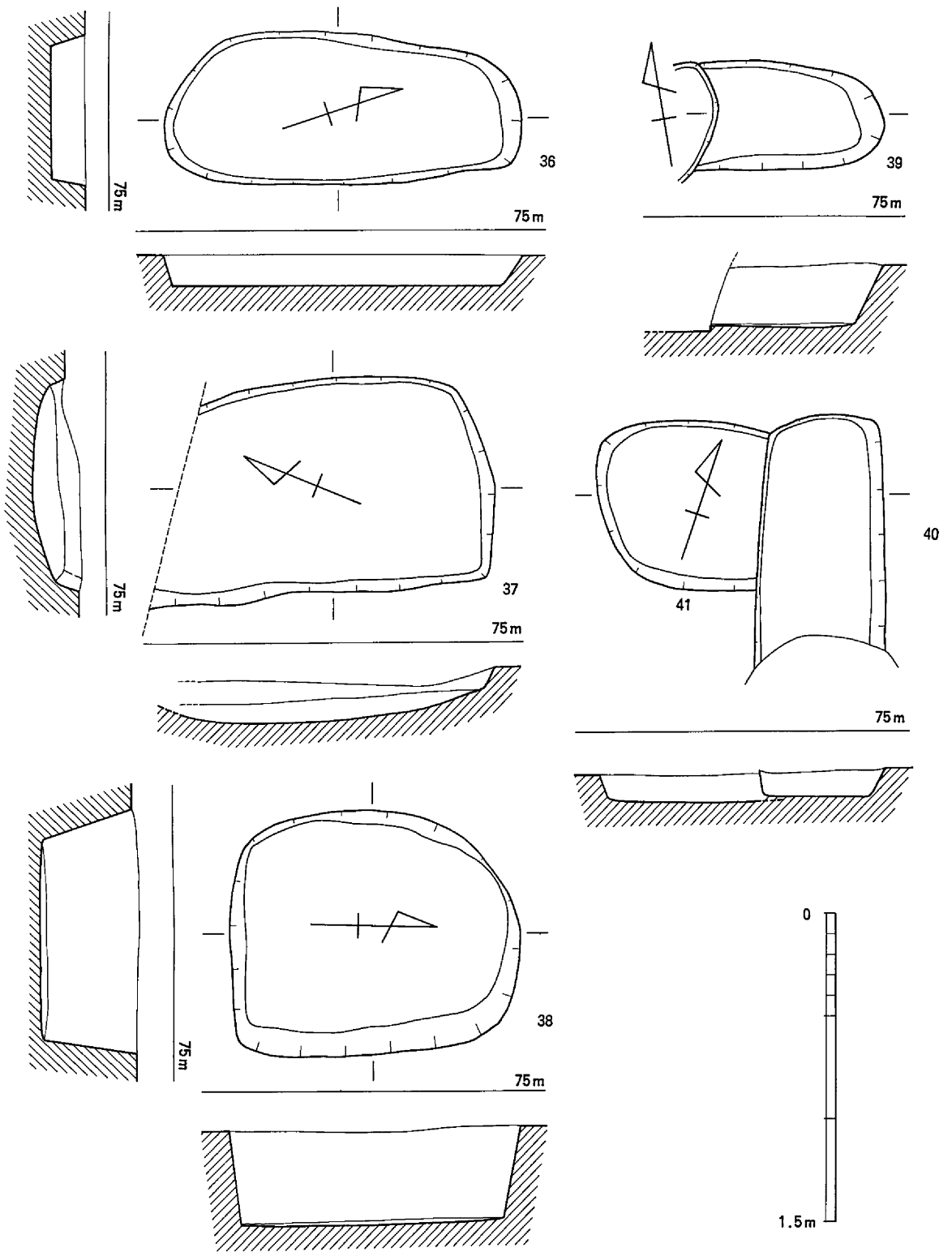
第23图 19~21号土墳墓実測図 (1/30)



第24图 22~29号土壤墓实测图 (1/30)



第25图 30~35号土坑墓实测图 (1/30)



第26图 36~41号土墳墓实测图 (1/30)

第2表 土 墳 墓 一 覧

No.	種 別	主軸 方位	墓 墳 の 規 模		棺 の 内 法			木 棺 の 場 合				備 考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の 堀込み	側板の 堀込み	側板の 切込み	裏込	
1	土	N-68°E			202	123	8.0					
2	土	N-16°W			105	52	10.0					
3	土	N- 4°E			163	105	16.0					
4	土	N- 1°W			202	86	18.0					
5	土	N-10°E			137	85	19.0					
6	土	N-10°W			117以上	100	20.0					
7	土	N-16°E			155	46	10.0					
8	土	N- 2°E			141	56	12.0					
9	土	N-60°E			130	53	9.0					
10	土	N- 3°E			182	59	11.0					
11	土	N- 2°E			168	42	8.0					
12	土	N- 2°E			220	67	14.0					
13	土	N-10°E			173	88	11.0					
14	土	N-14°W			198	60~109	10.0					
15	土	N-20°E			114	57	13.0					
16	土	N-18°E			172	46	24.0					
17	土	N-12°E			180	45	10.0					
18	土	N-80°E			192	83	3.0					
19	土	N-82°W	136	74	99	43	18.0					石戈の切先出土
20	土	N-40°W	100	65	84	57	22.0					
21	土	N-38°E			112	61	13.0					
22	土	N-30°W			109	40	17.0					
23	土	N- 8°E			127	40	21.0					
24	土	N- 1°E			131	36	10.0					
25	土	N- 5°E			129	40	17.0					
26	土	N-75°W			106	46	16.0					
27	土	N-18°E			68	37	12.0					
28	土	N-10°E			93	36	14.0					
29	土	N-88°E			22	38	8.0					
30	土	N-12°E			93	58	12.0					
31	土	N-14°E			92	69	9.0					
32	土	N- 1°E			77	83	27.0					
33	土	N- 8°E			82	47	24.0					
34	土	N- 6°E			88	57	10.0					

土 墳 墓 一 覧

No.	種 別	主軸 方位	墓壇の規模		棺 の 内 法			木 棺 の 場 合				備 考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の 掘込み	側板の 掘込み	側板の 切込み	裏込	
35	土	N-40°-E			81	46	23.0					
36	土	N-18°-E			160	69	15.0					
37	土	N-25°-E			147以上	95	20.0					
38	土	N- 1°-E			127	103	46.0					
39	土	N-98°-E			67以上	43	29.0					
40	土	N-70°-E			75以上	73	12.0					
41	土	N-16°-E			106以上	54	13.0					
42	土	N-32°-E			105以上	53	18.0					
43	土	N- 6°-E			60	60						
44	土	N-54°-E			70	30						
45	土	N-18°-W			140以上	55以上						
46	土	N-92°-W			60以上	40						
47	土	N-24°-W			55以上	30						

甕 棺 墓

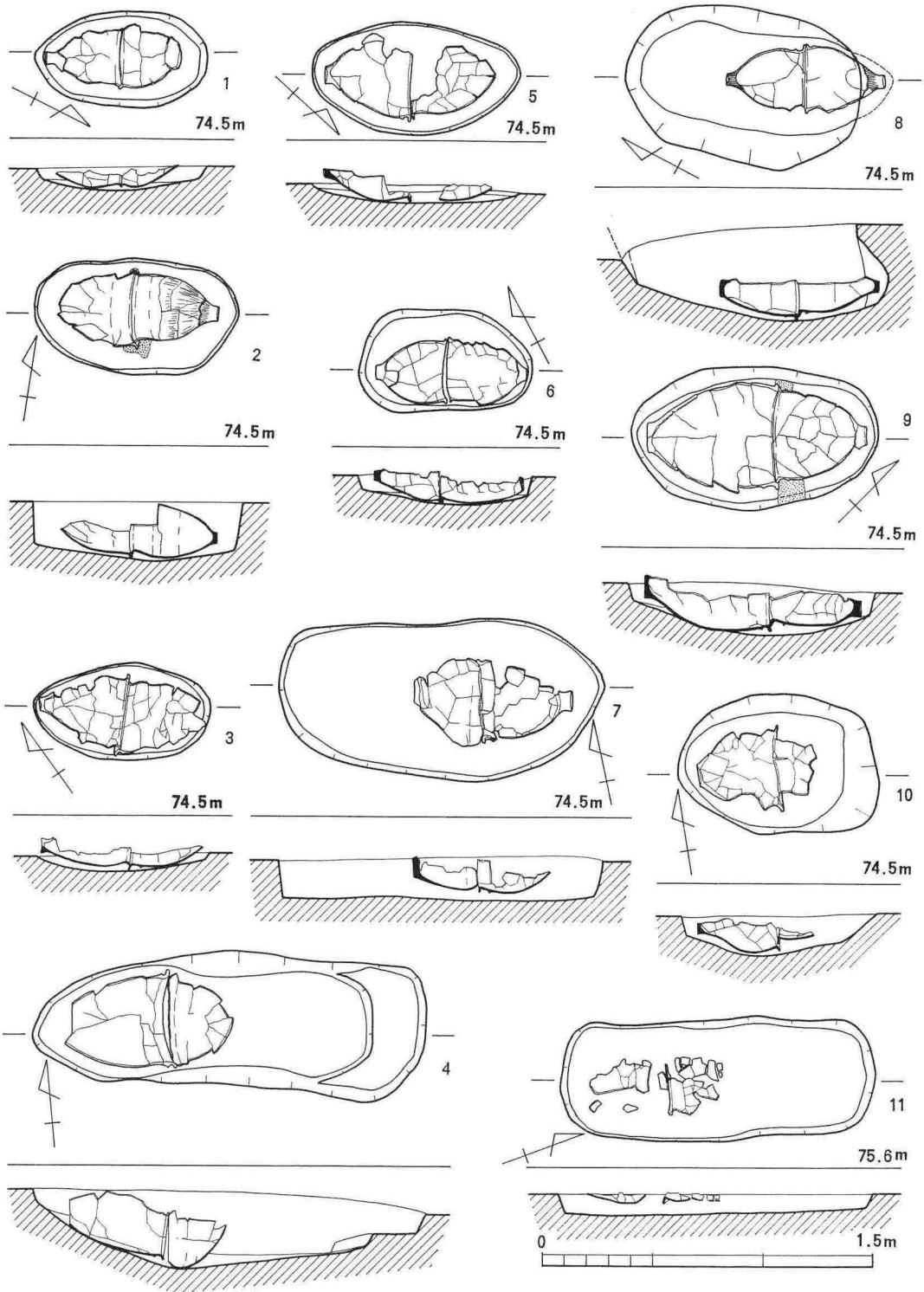
甕棺墓の総数は12基である。分布は木棺墓と同様で、20m四方の範囲に集中するが、その中央にはなく周辺に散布する状況である。他の墓との関係では、土墳墓や木棺墓を切っており、全体に新しい存在である。多くは小児用の小型棺であるが、4、9、12号墓（第27図）の場合中型棺となり成人を埋葬した可能性は高い。4号と7号墓（第27図）は上甕に壺形土器の胴部を使用し、12号墓（第28図）は下甕に壺形土器を使用しており、挿入式を示す。他は甕を接口式にしたものである。

墓壇は甕棺よりやや大きな例とさらに大きく設ける例があり、3、12号棺（第27、28図）は墓壇の一方に挿入する方式を示し、他は水平に埋置するものである。

12号墓（図版5、第28図）は小銅鐸出土の15号木棺墓の北側を切って設けられており、小銅鐸の時期決定に参考となる。

甕蓋状土墳墓（図版8、第29図）

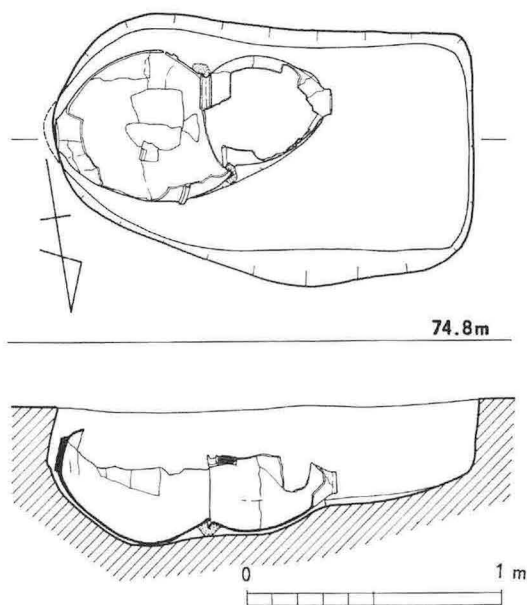
1基のみが検出されている。東西の長さ2m、南北の長さ1.17mの墓壇内に長さ1.63m、幅65cm、深さ15cmの壇を設ける。主軸方位はN-88°-Wを示している。通常石蓋や木蓋を有する土墳墓は存在するが、この場合大形甕を割った上で木蓋の上に並べたようであった。二段目の壇は、墓壇の西壁に掘り込んでおり、床面にはベンガラが施されていた。



第27图 1~11号甕棺墓実測图 (1/30)

石蓋土墳墓（巻頭3、第30図）

1基のみが検出されている。墓壇は東西の長さ1.7m、南北の長さ1.56m以上を示し、主軸方位はN-37°-Wを向く。内側の壇は二段掘込になっており、墓壇の対角線上に設けられ、長さ1.3m、幅51cm、深度49cmの壇を設ける。蓋石は現状で2枚検出され、やや厚手の石材の周辺を加工して使用する。内部からは副葬品として内行花文鏡が出土している。鏡は背面を下に向け壇の中央付近に埋置してあった。壇内はベンガラが満されており、鏡直下には少量の水銀朱が検出された。



第28図 12号甕棺実測図（1/30）

遺物

1号甕棺（図版21、第31図）上甕は口径が24cm、器高32.6cmで胴部最大径は上半部にある。口縁は如意形を呈し、胴部はやや張っている。低部は長く高い上げ底を示す。外面は縦方向のハケ目で仕上げ、内面はナデで仕上げる。下甕は口径12.85cm、器高32.5cmで胴部最大径は上半部にある。口縁は如意形を呈し、底部は長く高い上げ底を示す。両者とも色調は淡黄褐色で胎土に荒い砂粒を含み、焼はややあまく軟質を呈す。

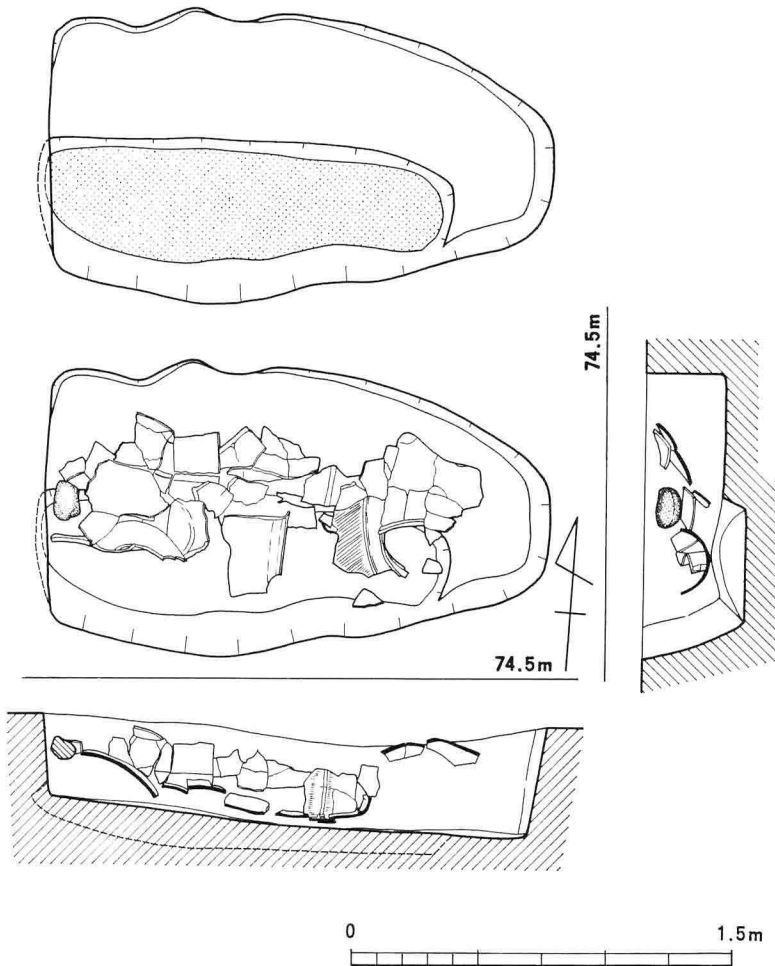
2号甕棺（図版21、第31図）上甕は口径30.8cm、器高39.6cmで胴部最大径は上半部にある。口縁はくの字状を呈し、胴上半が張っていて、低部はやや高く上げ底をなし、全体にしまっている。外面は縦方向のハケ目で内面はナデで仕上げる。下甕は口径32cm、器高39cmで胴部最大径は上半部にある。口縁はくの字状を呈し、やや張った胴部と、上げ底でやや高くしまりのある低部を有する。調整は上甕と同様である。両者とも色調は黄褐色で胎土に細い砂粒を多く含み、焼はややあまく軟質で剥落ヶ所が多い。

3号甕棺（図版23、第35図）口径30.9cm、器高36.9cmで胴部上半に最大径を有する。口縁はくの字状を呈し、底部は上げ底でやや高く、しまりがある。外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げる。色調は暗褐色で胎土に砂粒を含み、全体に軟質で焼成はややあまい。

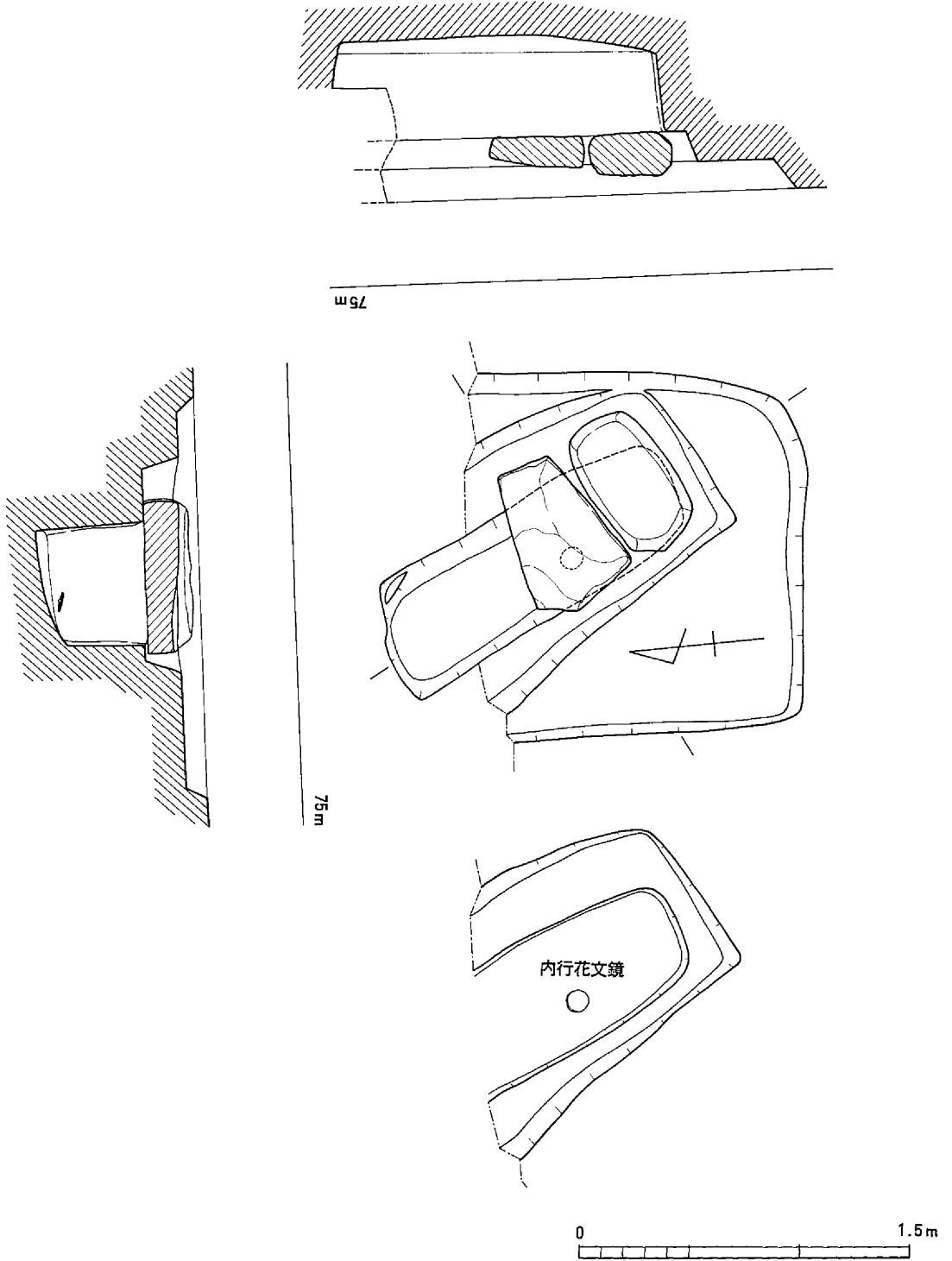
4号甕棺（図版21、第31図）上甕は壺形土器の肩部以下を使用しており、現高29.8cmで最大径は41.3cmを測る。肩部は強く張り底部はしまっていてやや上げ底を呈し、肩部には1本の三角突帯が巡り、外面は磨き、内面は強いナデによって仕上げられている。下甕は口径42.6cm、現高45.5cmで

胴の張りは弱い。口縁部は緩に外反する如意形を呈し、口縁下に三角突帯を一条施す。外面は荒いハケ目、内面はナデによって仕上げる。壺は暗灰褐色で荒い砂粒を含み、甕は暗赤黄色で荒い石英粒を含む。焼は両者ともやや良好である。

5号甕棺（図版23、第35図）口径は33cm、器高33.5cmで胴部最大径は上半部にあつて、口縁はくの字状を呈し、その直下に三角突帯を巡らしている。外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げている。底部はやや高くなっていて、上げ底を呈す。色調は赤褐色で胎土に砂粒を含み、焼はややあまい。



第29図 甕蓋状土墳墓（1/30）



第30図 石蓋土墳墓実測図 (1/30)

6号甕棺（図版22、第32図）上甕は口径27.3cmで胴上半に最大径を有す。口縁は逆L字状を呈し、底部は高くしてしまっており、上げ底を呈す。外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げている。下甕は口径28cm、器高は35.2cmで胴の張りは弱い。口縁は逆L字状を呈しており、内側に強く張り出して稜線を作り、底部は細くして高くなり上げ底を呈す。両者とも色調は赤黄褐色で胎土にやや荒い砂粒を含み、外表は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げる。焼はややあまく軟質気味である。

7号甕棺（図版23、第35図）上甕は壺形土器の胴部を利用するが、残存状況が悪く詳細は不明である。下甕は口径32cm、器高36.7cmで胴の張りは弱い。口縁はくの字状で、厚みがあって内側に張り出す。口縁下には三角突帯を配しており外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げられている。底部は細くしてしまっており上げ底で高くなっている。色調は淡灰褐色で胎土に荒い石英粒を含み、焼成は良くやや硬い。

8号甕棺（図版22、第32図）上甕の口径は31cm、器高は36.4cm、下甕は口径31.4cm、器高は38.2cmである。両者とも類似する特徴を有し、口縁は、逆L字状で内側に稜線がある。口縁下には三角突帯を配し外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げている。底部は細くして上げ底を呈す。色調は淡赤褐色で胎土及び焼成は良好である。

9号甕棺（図版22、第33図）上甕は口径35.8cm、器高は42.1cmで胴部最大径は上半にあって口縁下に三角突帯を配す。口縁は丸味をもって外反し、胴部はそれほど張らずに細くしまりのある底部へと続く。底部はやや上げ底で高くなっている。下甕は口径46cm、器高58.8cmのもので、胴部はやや張っている。口縁は逆L字状を呈し、内側が張り出して稜線を作り出す。口縁下には三角突帯を配している。底部は若干の上げ底をなすが他に比べて低くなる。色調は上甕が灰褐色で下甕が黄褐色を示すが、ハケ目による調整や胎土に荒い砂粒を含み焼成はややあまい点等、共通する特徴を有する。

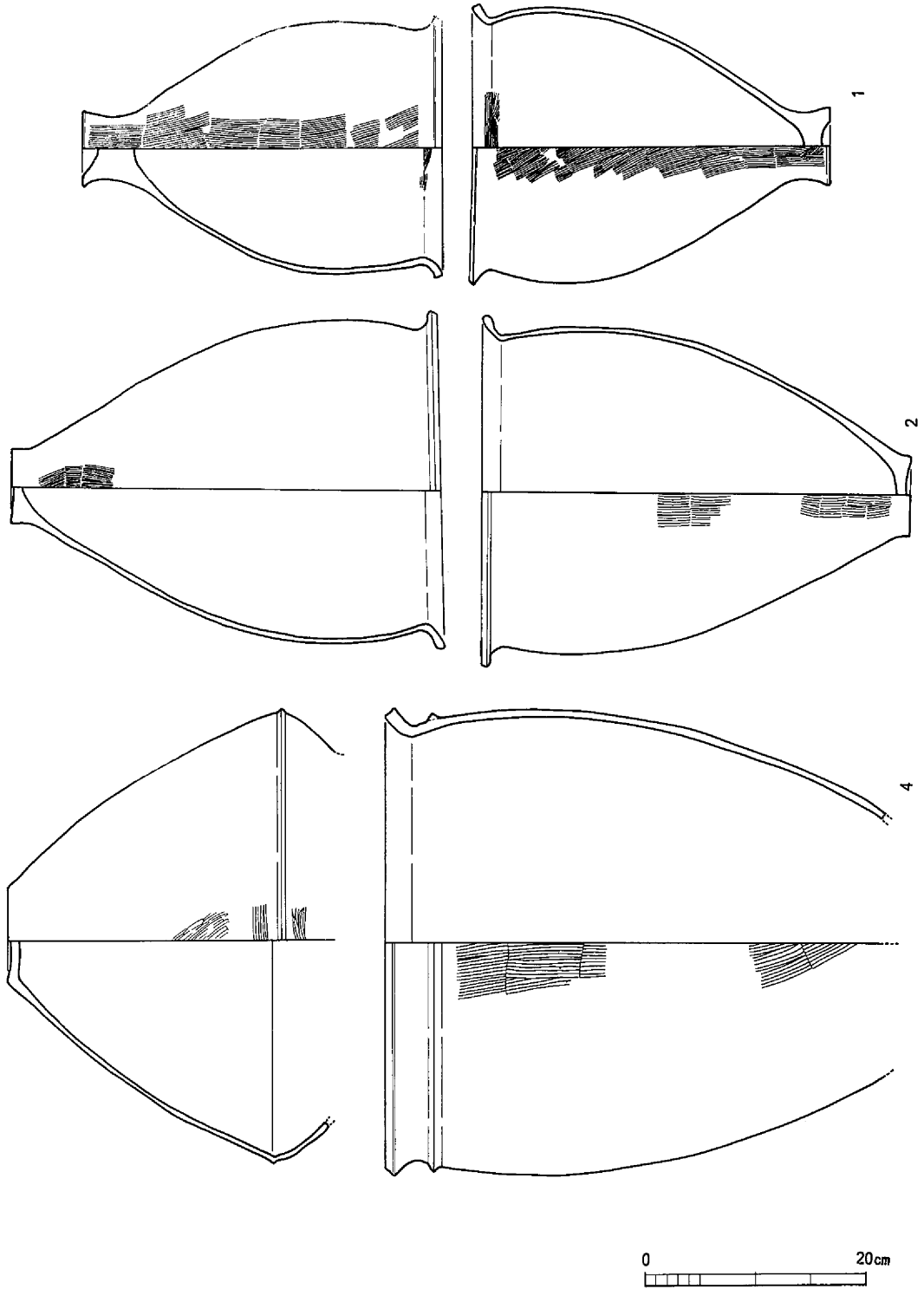
10号甕棺（図版23、第32図）上甕は口径32.1cm、器高35.9cmで胴上半の張りが強い。口縁はくの字状で、その下に三角突帯を配している。底部は他に比べて低いが上げ底で細くしまりがある。外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げる。下甕は底部を欠くものの、口径32cm、現高は32.4cmを測る。口縁はくの字状で下部に三角突帯を配し、外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって仕上げる。両者とも色調は茶褐色で胎土に荒い砂粒を含み、焼成はややあまく軟質に近い。

11号甕棺（第35図）削平のため口縁のみが残っている。口径45.9cm、現高8.9cmを測るもので、口縁は逆L字状を呈しており、口縁下に三角突帯を配す。調整は外面を縦方向のハケ目で、内面をナデで仕上げる。色調は暗褐色で胎土と焼成は良好であり硬く薄手になっている。

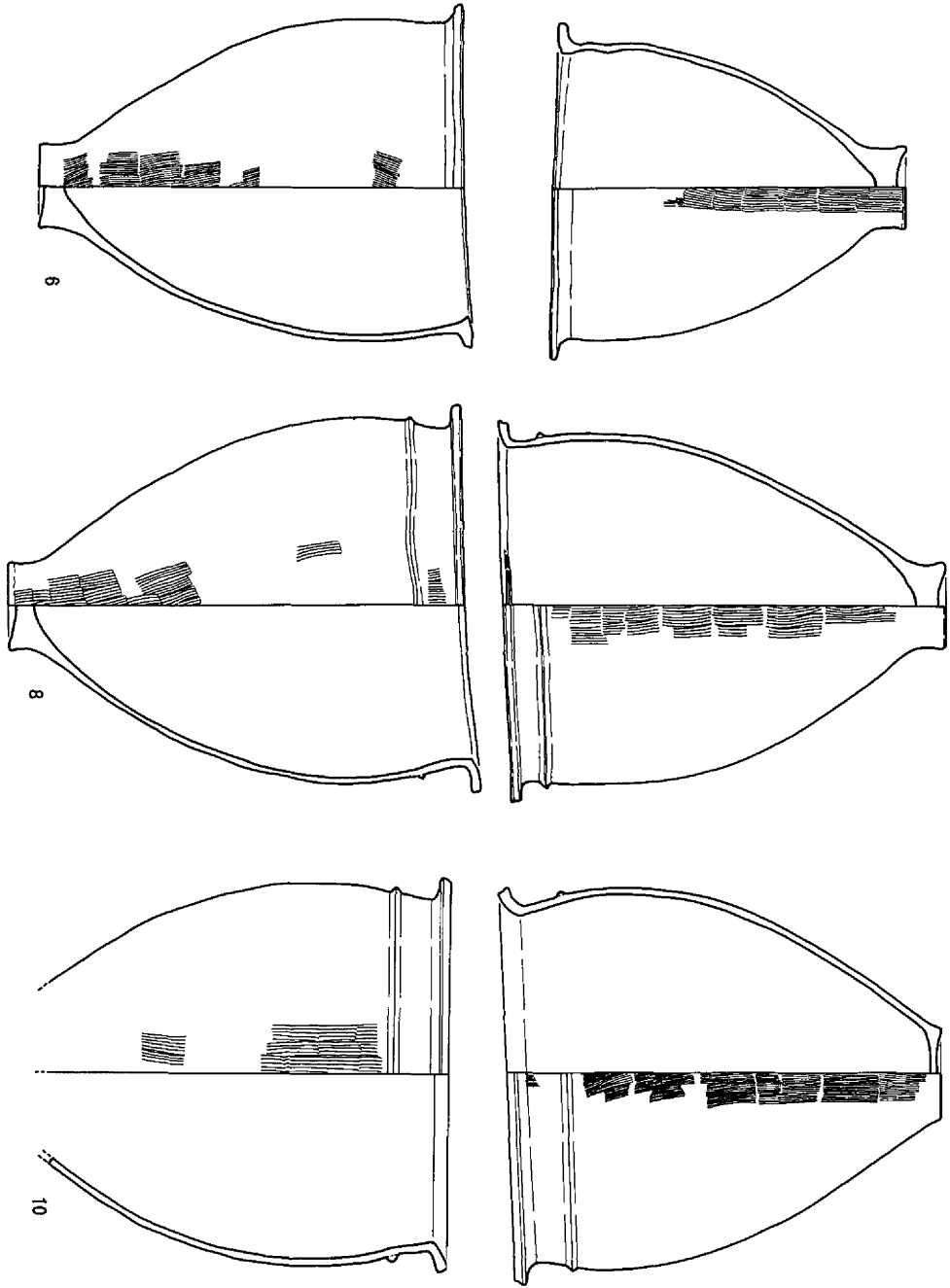
12号甕棺（図版23、第34図）上甕は口径40cm、器高48.7cmを測る。口縁はやや内側に低く傾斜するくの字状を呈し、内面に張り出す。口唇は丸くおさめている。口縁下には三角突帯を1条配し、胴は上半に最大径を有しつつ底に向かって細くしまる。底部は、やや上げ底気味で高くなる。色調は暗茶褐色で外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。下甕は、現高66.1cmで頸部以上を打ち欠いたもので、朝顔形に開く口縁を有す壺形土器と思われる。突帯は頸部に三角状のものが1条と胴部にはM字状のもの1条が巡らされる。胴部は強く張っており、最大径は突帯の下にあって中央部付近となる。底部は平底で、しまっている。色調は赤褐色で、胎土にやや荒い砂粒を含み、焼はややあまい。調整は外面を研磨により、また内面は強いナデによって仕上げられている。

第3表 甕 棺 一 覧

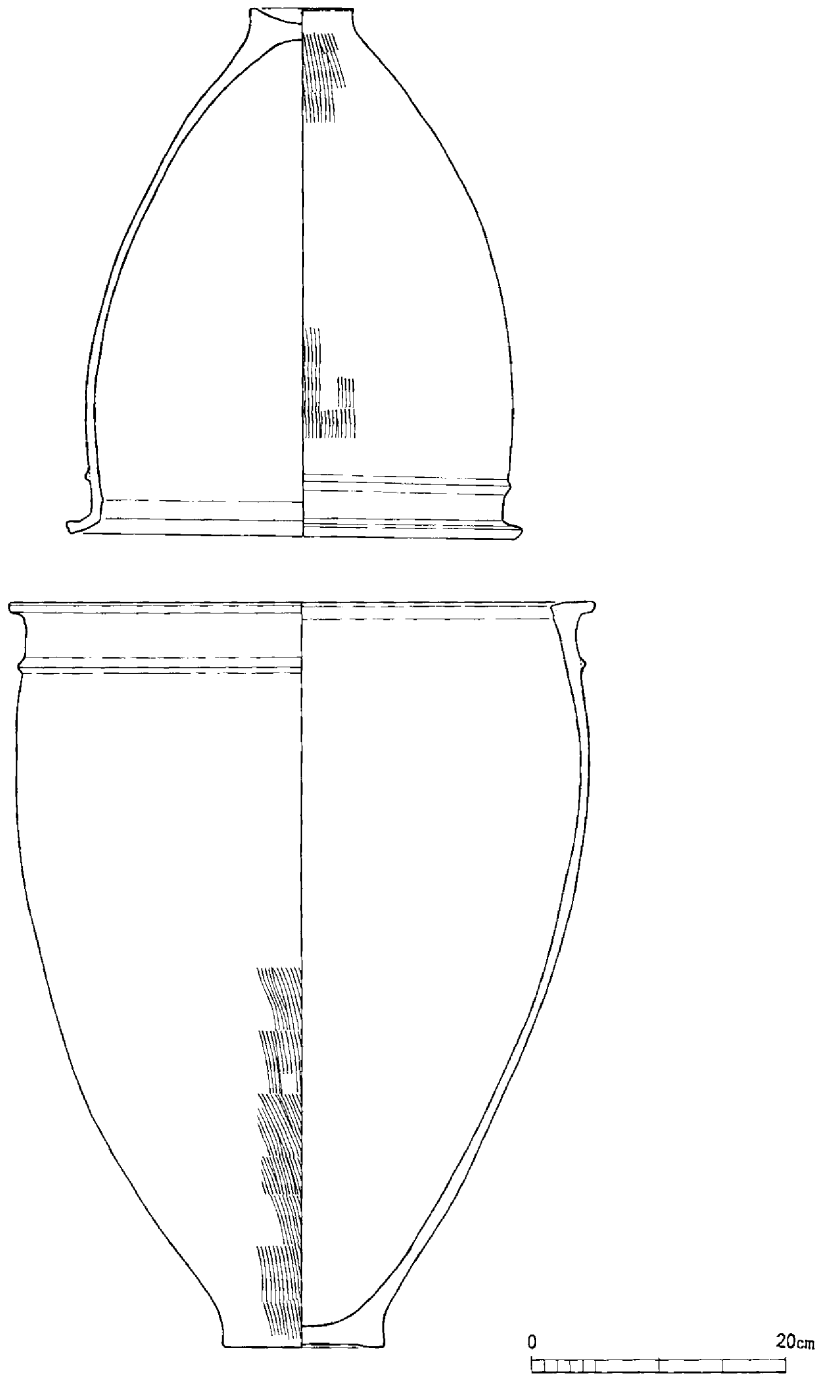
番号	主軸方位	合口形式	大型棺か 小型棺か	甕棺の大きさ		備 考
				長さcm	口径cm	
1	N-24°-E	接口	小	65.1	24	
2	N-79°-W	〃	〃	78.6	32	
3	N-54°-E	〃	〃	74以上	30.4	
4	N-82°-E	覆口	〃	75.3以上	42.6	
5	N-41°-E	接口	〃	77以上	33	
6	N-46°-E	〃	〃	64.1	28	
7	N-68°-E	覆口	〃	63以上	32	
8	N-26°-E	接口	〃	74.6	31.4	
9	N-44°-W	接口	〃	100.9	46	
10	N-79°-E	〃	〃	67.9以上	32.1	
11	N-24°-W	〃	〃		45.8	
12	N-76°-E	〃	〃	109.2以上	38	



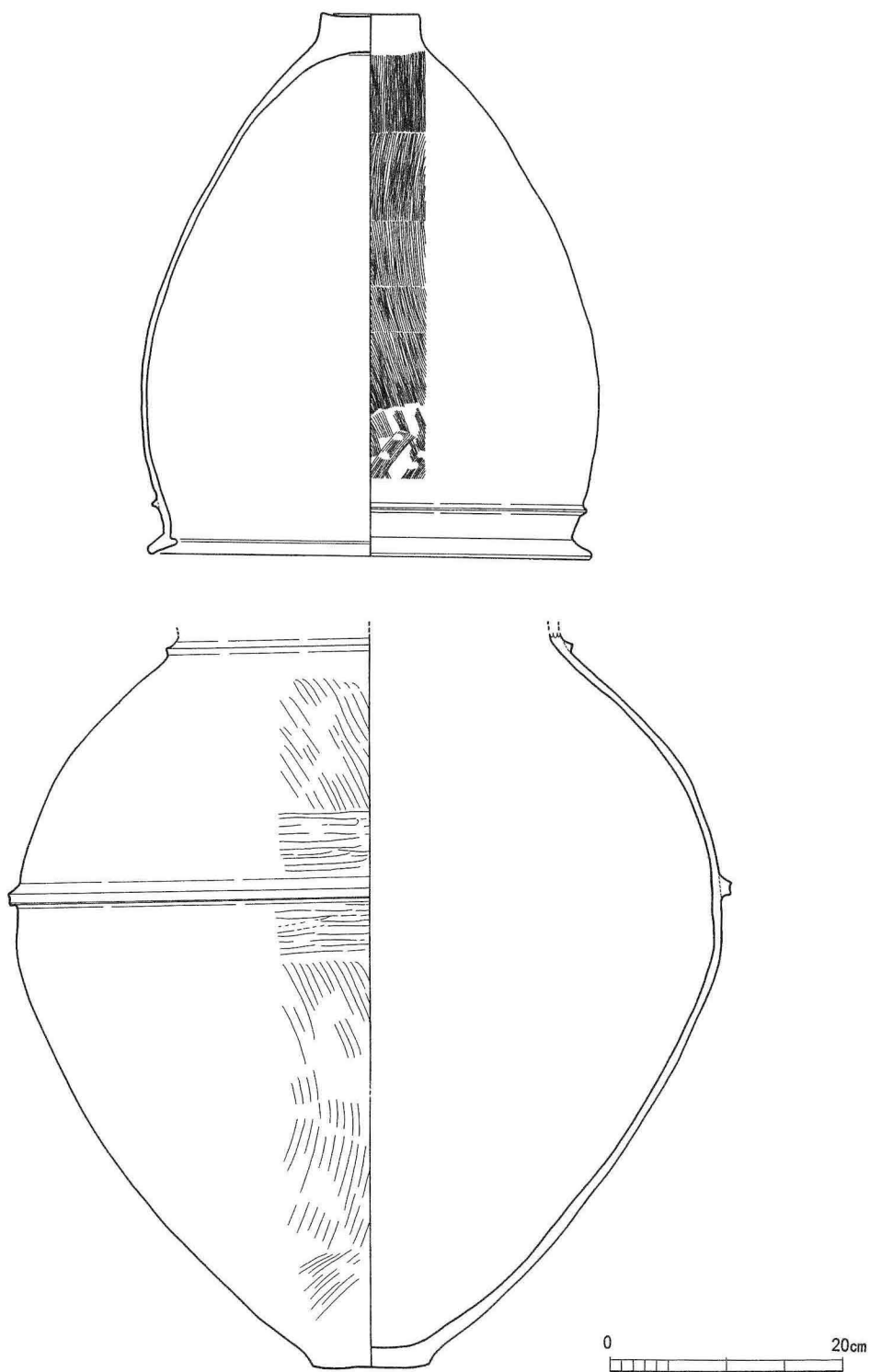
第31图 1, 2, 4号甕棺实测图(1/6)



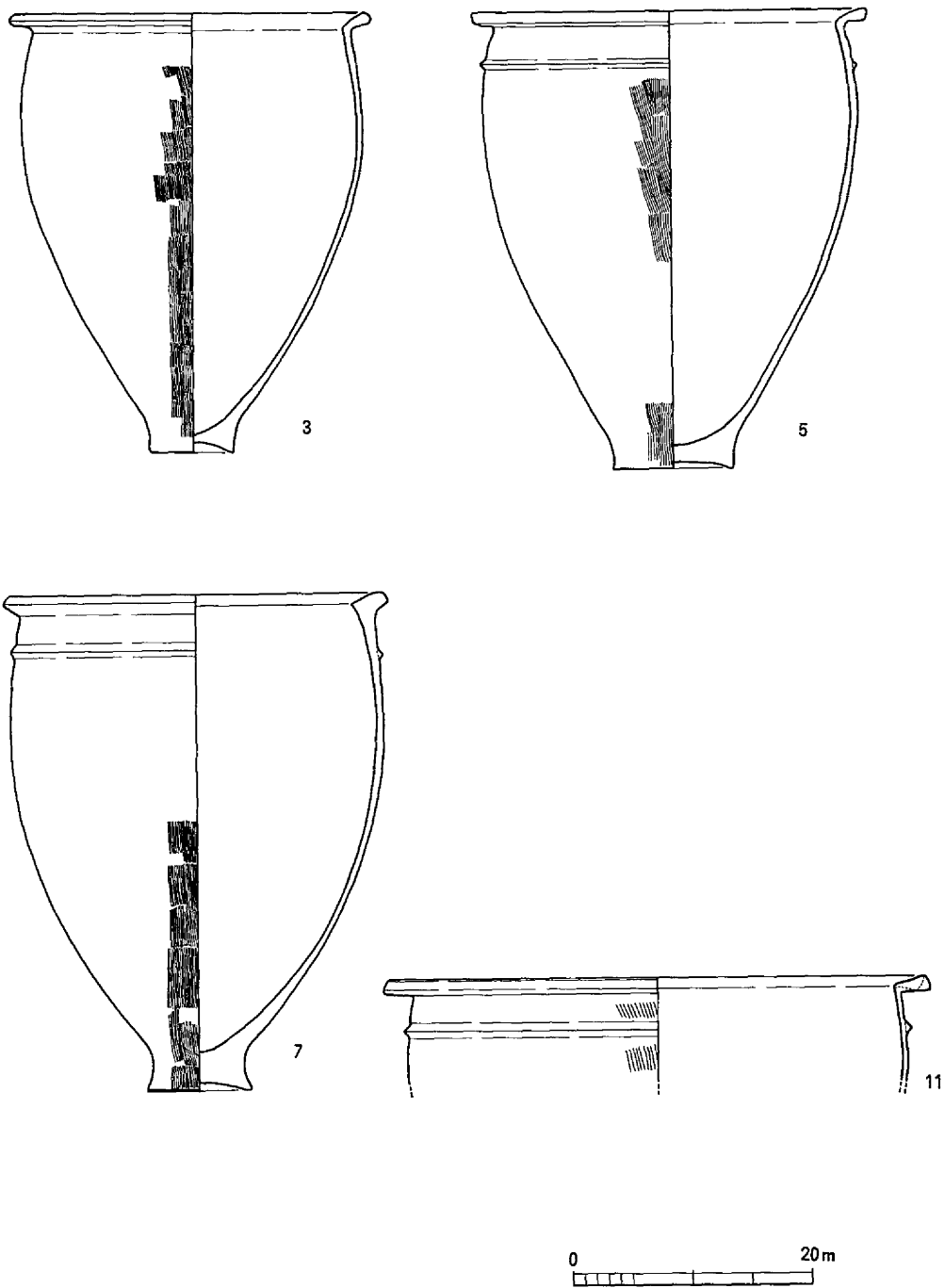
第32图 6, 8, 10号甕棺实测图 (1/6)



第33图 9号甕棺实测图(1/6)



第34图 12号甕棺实测图(1/6)



第35图 3, 5, 7, 11号墓棺实测图(1/6)

小銅鐸（巻頭図1、第36図）

総高5.5cm、身高4.3cm、鈕高1.2cm、底径3.2cm×2.7cm、舞径1.8cm×1.7cm、身厚2mm～3mm、鈕中央厚5mm、鈕基部厚7mm～8mm。

身は、全体に円筒状をなすが、その中央部付近では、左右のラインにわずかな脹みを持ち、裾に向っては開き気味となるが弱い。鐸身横断面形は円形に近い。

鱗は無く、甲ばりの部分が稜線状に残る。甲ばり部分は左右より盛り上がっており、稜線上は光沢を持つ。鈕の甲ばりは削られており痕跡のみが残るが、両側は一部削り出されているようで興味深い。

鈕は断面の長、短軸が、ほぼ1対1の分厚い菱形を呈し、基部は中央よりやや幅がある。甲ばり部分は磨滅し、特に中央部の光沢が強い。

舞は水平に近く、鈕の大きさと比較するなら径が小さくなっている。

文様は裾部に斜格子文帯が横走している。文様帯は1条であるが、A面とC面とではかなり様子が異なり、B面においては左右文様帯の接点が3mm程の段差を生じているため、異なる手によった施文かとも思われる。A面の場合、上下に幅広の横線2本を配した中に、左下がりの斜線を施し、その後右下がりの斜線を充填するような状況である。従って、左下がりの線は一直線となるが、右下がりの線は不連続なものとなる。以上の作業をくり返しつつ文様帯を完成したようで、通常の斜格子文とは異っている。

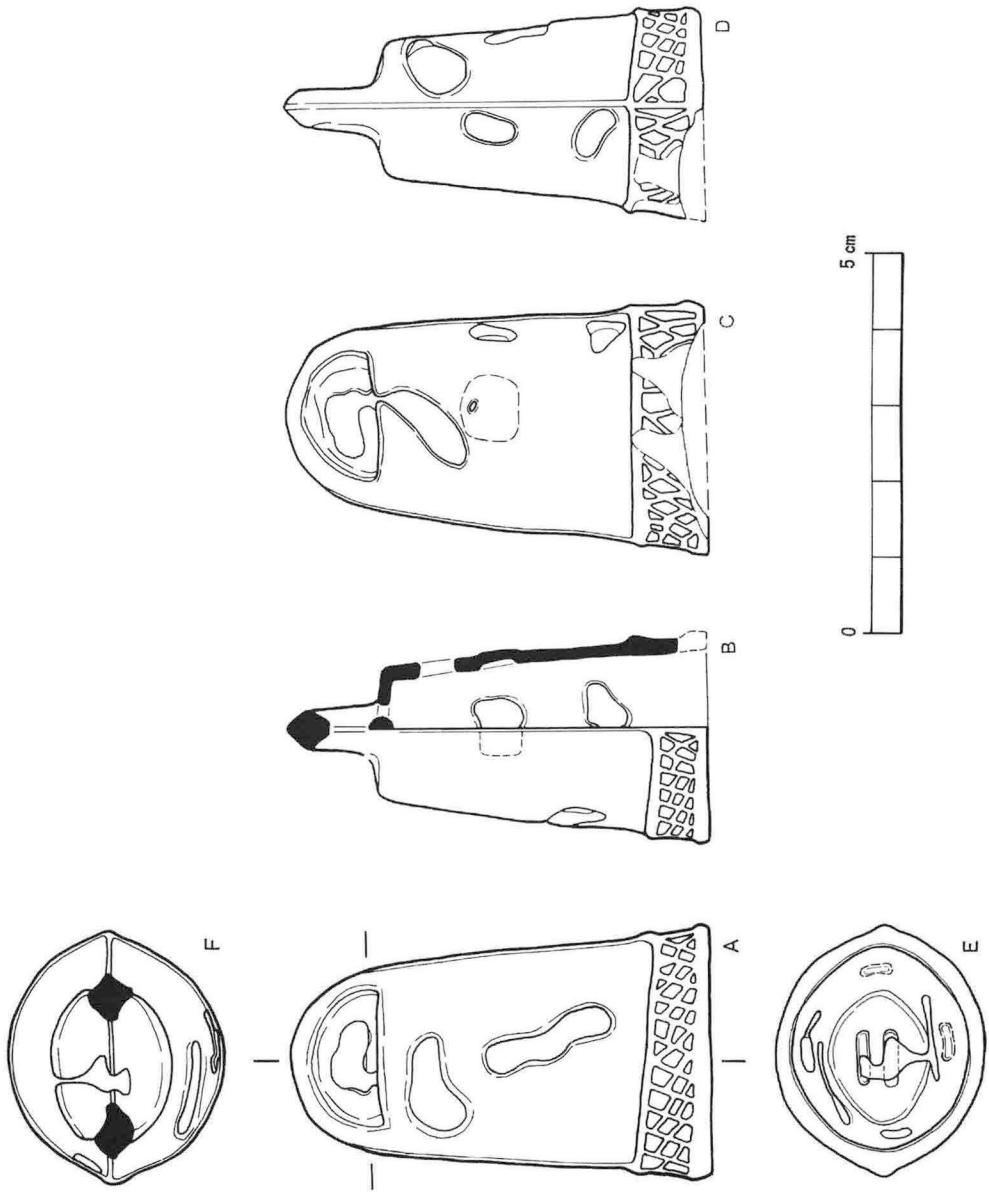
B面は欠損のため観察が不十分であるが、縦長の菱形が連続しているようである。

型持孔は、A面の下段の孔、C面の破線部分、B面1段目の破線部分とその右の孔、D面の左側1段目の孔が身の部分となり、隅丸の正方形を呈している。舞では、細長い長方形の2孔が平行している。つまり、身の中央と側面に各2孔ずつ、舞に2孔が存在することになる。なお、身の破線部は、湯が回ったために内面の窪みとして観察される。底部は同一方向の傷が多く残っており、甲ばりを削り落した痕跡とも考えられる。

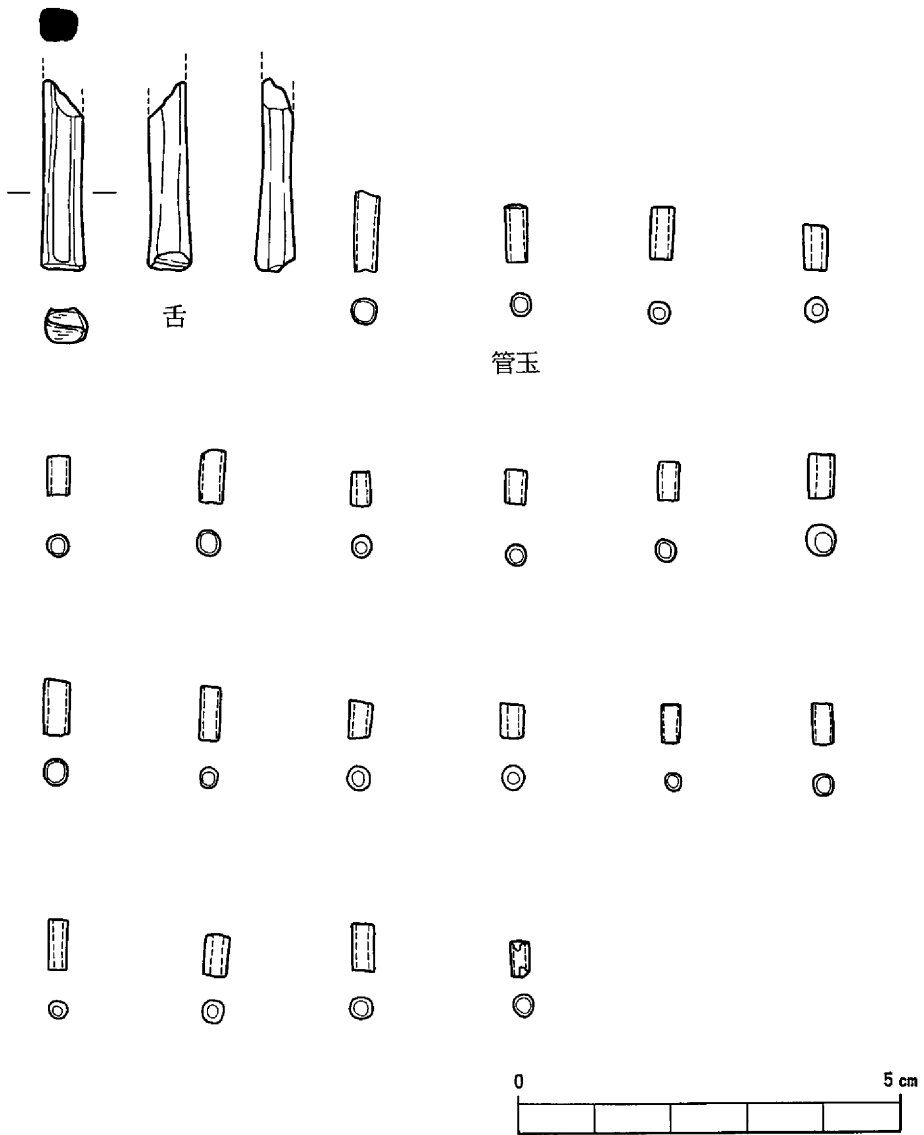
身の上部の表裏及びD面下部の孔は、鑄造時に生じたものでガス等が原因と思われる。また、全体に使用のためか、磨滅している点を記して置く。

舌（巻頭図2、第37図）

舌は欠損が著しく基部のみが検出された。土中での痕跡によれば、全長3.1cm以上であり、幅は基部で6mmを測る。材質は鐸と同様と思われる。形態的には多角形を呈しており、基底に段差を生じることから二面の型をもって鑄造されたようである。その際、甲ばりは完全に削り落されており、表面は美しく仕上げられている。また、基部が最も太くなっていて、上部に向ってはかすかに細くなり、全体に若干の弯曲を示す。



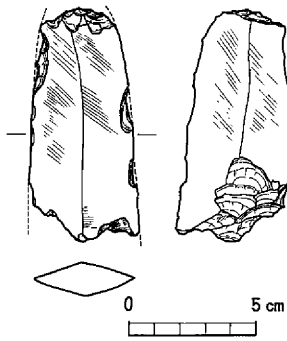
第36図 15号木棺墓内出土小銅鐸実測図(1/1)



第37図 15号木棺墓内出土，舌，管玉実測図（1／1）

管玉（巻頭図2、第37図）

碧玉製品で、5 mm～1 cmの大きさであり、径は2.5mm～4 mmで孔が大きく器壁は薄く仕上げられるものが多い。出土数は20個であり、集中的な出土ではあったが、各々は個々に散在していた。



第38図 石戈実測図（1／3）

石戈（第38図）

19号土壙墓内出土のもので、先端と基部を欠いている。現長9.2cm幅4.4cmを測る。材質は青灰色の凝灰岩系で、刃部の破損が目立つ。

以上は弥生時代中期の墓群に伴う各種の遺物である。

甕（図版24、第39図）

土壙墓（第29図）の蓋部として使用された。口径は48cm、器高90cmの大型製品である。口縁は外反しており、内側に突帯を施して段を作り出す。頸部と胴部に1条づつ方形の突帯を配しているが、頸部は細く胴部に至ってはダレた感じを示す。外面は荒いタタキを行った後に全体をナデによって仕上げる。低部はレンズ状を呈し、タタキ目を残す。内面は荒いハケ目で仕上げる。色調は淡茶褐色で胎土に荒い石英粒を含み、焼成はややあまい。

銅鏡（巻頭3図、第40図）

「君直高官」銘内行花文鏡である。石蓋土壙墓（第30図）内の副葬品で、背面を下にして完形で出土している。鏡径は10.2cm、鈕径1.4cm、鈕高8mm、縁厚3mmを測る。背文は鈕を巡ってやや変形しつつある四葉文座があり、その四葉間に「君直高官」の四字を入れているが、高と直の文字が使用のためか不鮮明となっている。それを8つの連弧文からなる内行花文帯がとりまいており、外区は平縁素文で終る。铸上りはやや不良であり、縁の部分に気泡状の細孔が見受けられ、さらに角の部分も鈍くなる。特に注意する点として、鏡面の部分に鋭い傷跡が何本も横方向についており、さらに背面四葉座の上には円形に細い傷跡がつくことである。全体に磨滅が見られ、鈕の孔部分は大きく開いた状況となっていることから使用による手ずれとも思えるが、鏡面の傷に関しては別の理由とも考えられる。また、時期的なこととして、平縁素文で四葉座は先端が鋭く突出している点を考慮する必要があるだろう。

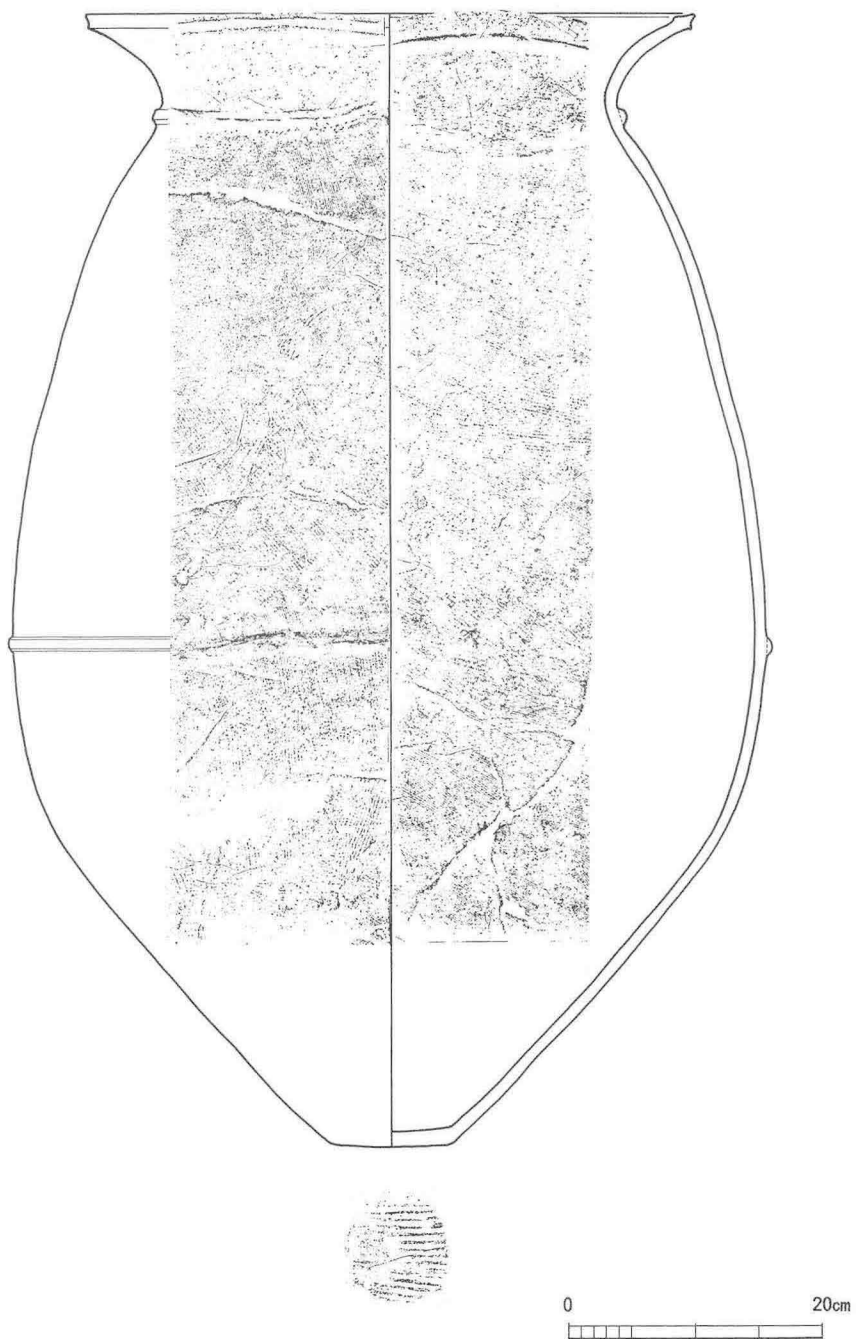
以上は弥生時代後期の墓群に伴う遺物である。

b. 古墳時代の遺構と遺物

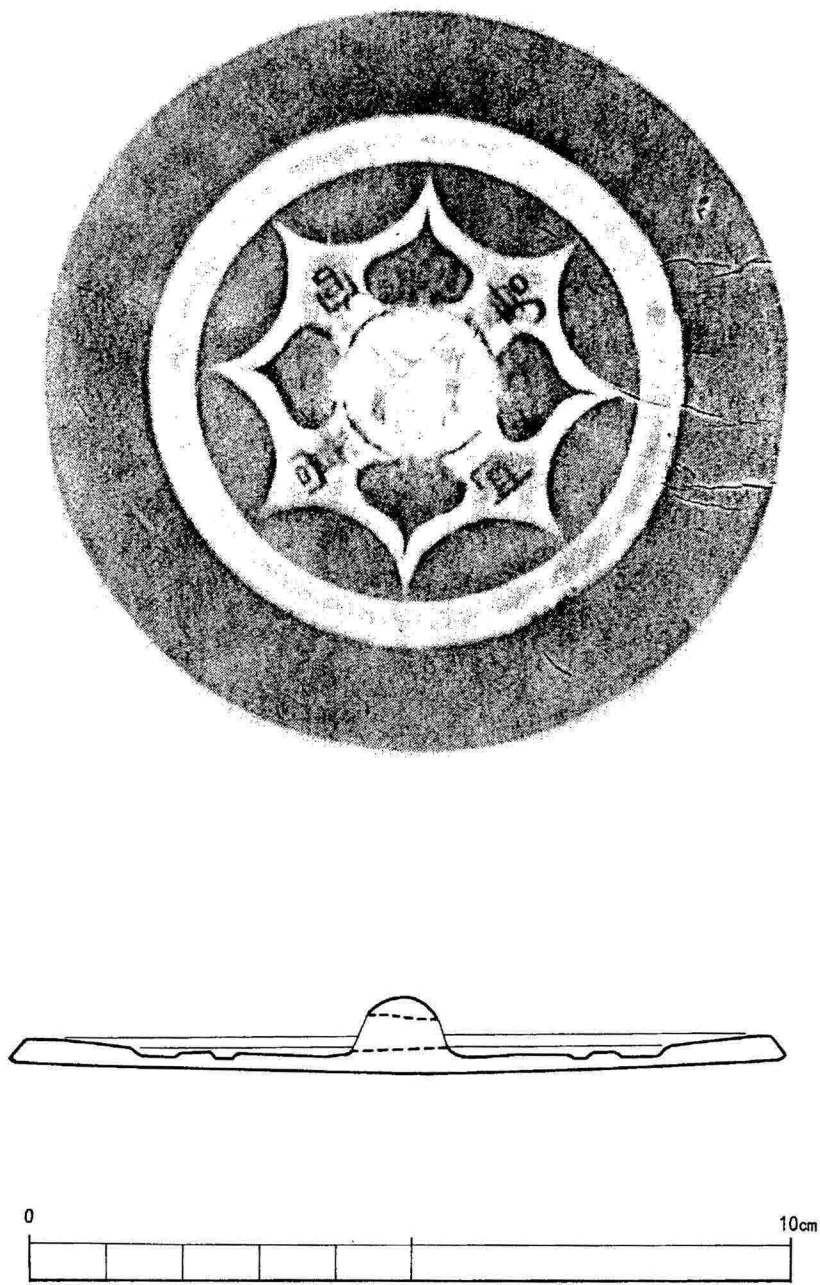
古墳主体部（図版8、第41図）

古墳は削平により主体部床面より上部を失い、さらに羨道や玄室の奥壁も崩壊している。

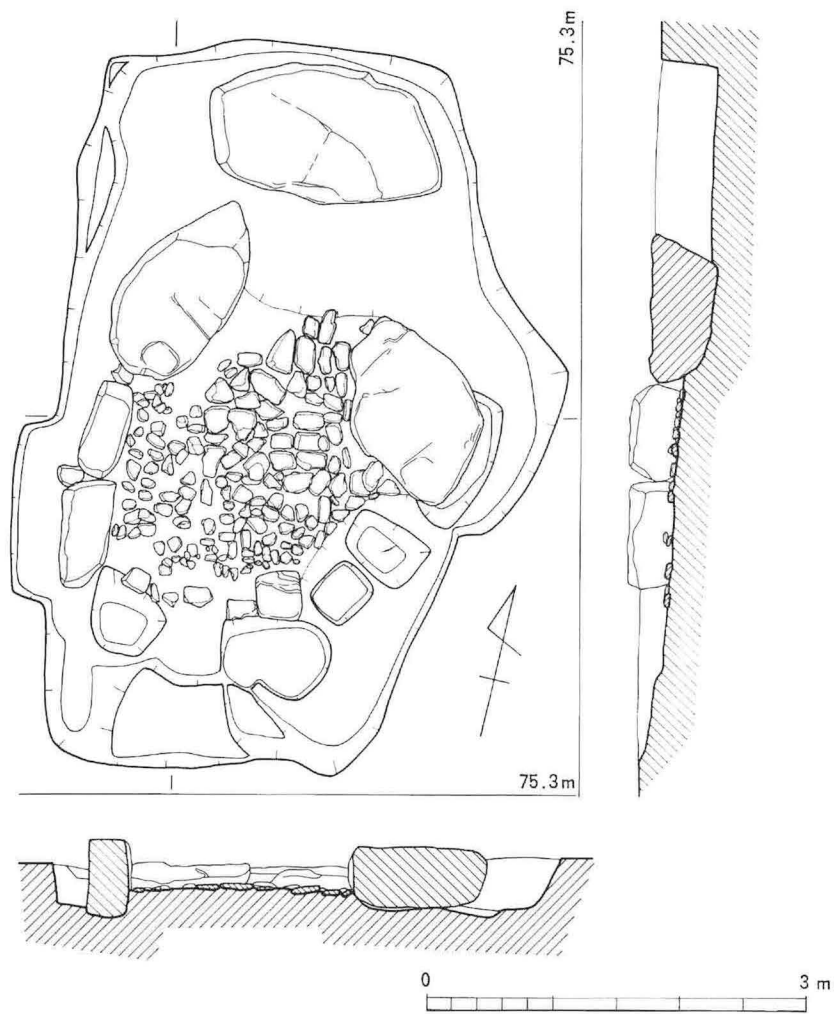
主軸の長さ5.8m、幅は3.36mを測る。玄室に比べ羨道は短いものとなっており、現存部分では長さ60cm、幅は1mを測る。石材の抜取り痕跡からは、玄間部から直線的に玄室奥壁に向かうようである。床面は削平が及ばぬ部分に敷石が存在しており、玄室中央より北側には20cm前後の大きな礫を敷き、南側は10cm前後の小さな礫を敷いている。この場合前者は棺床の部分であろうと思われる。遺物は側壁部分に集中して存在していた。



第39図 甕蓋状土墳墓内出土土器実測図（1／6）



第40圖 石蓋土壤墓内出土銅鏡實測圖(1/1)

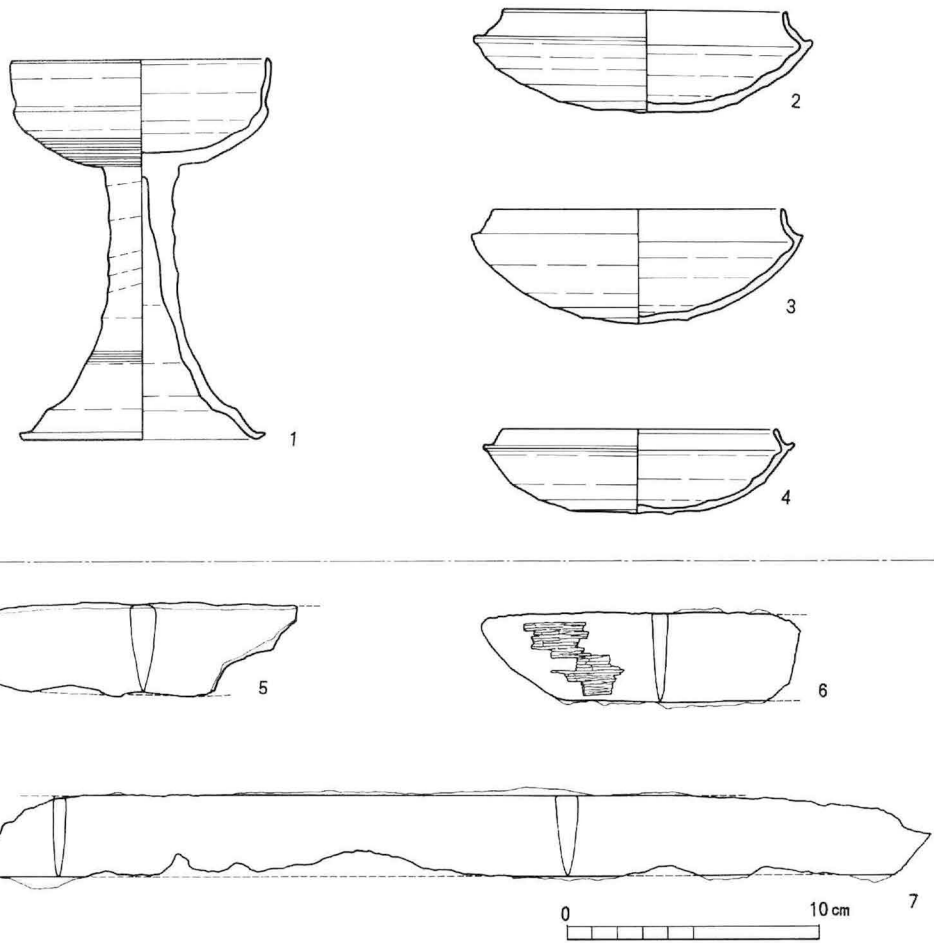


第41図 横穴式石室実測図 (1/60)

遺物

須恵器 (図版25、第42図)

1は高杯で口径10.1cm、器高15cm、底径9.6cmを測るもので、色調は暗灰色を呈し胎土に砂粒を含む。2～3は蓋杯の身部であり、2は口径11cm、器高4cmで色調は暗青灰色を示す。3は口径11.6cm、器高4.5cmで青灰色を示す。4は口径10.8cm、器高3.3cmで青灰色を示す。2と3は立ち上りの部分が大きく、全体に丸味をもって仕上げられている。4は立ち上りが低く、底部も平坦になっている。



第42図 古墳石室内出土遺物実測図（1／3）

鉄刀（図版31、第42図）

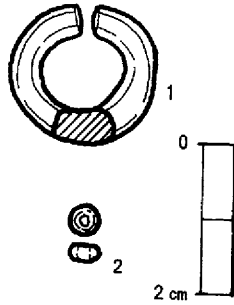
5は直刀の切先部分であり、現長14.1cm、刀幅3.7cm、刃厚は1cmを測る。6は直刀の切先部分であり、現長12.6cm、刃幅3.5cm、刃厚6mmを測る。木質部分が残っている。7は直刀で、切先と柄の両部分を欠いている。現長38.5cm、刃幅3.2cm、刃厚5～8mmを測る。

耳環（第43図）

径1.9cm、厚さ8mmの銀環であり、断面形は隅丸の長方形を呈し、やや厚味がある。

小玉（第43図）

ガラス製で色調は淡青色を呈し、径は4mm、厚さ2mm測る。



第43図 古墳石室内出土遺物実測図
(1/1)

遺 構

土壇墓(図版8、第44図)弥生の墓群内に存在しており、3基が確認出来た。それらは弥生の墓とは直接的に埋土の異いをもって確認したが、構造的にも異なるものであった。1は東西長85cm、南北長2.01m、深度は35cmを測る。主軸はほぼ南北を示して、副葬品として鉄製馬具が出土した。2と3は、段状に深くなる構造で他とは異なる。2は東西長2.07m、南北長60cm、深度30cmを測り、3は東西長1.41m、南北長65cm、深度75cmを示す。副葬品等は検出されなかったが、黒褐色のフカフカ

した埋土で3基とも埋まっており同時期に形成されたものと思われる。

遺 物

馬具(図版31、第45図)鐙の吊手金具部分であり、3連式のものと思われる。全長は25.5cmであり、新行坊古墳出土のものに類似する。

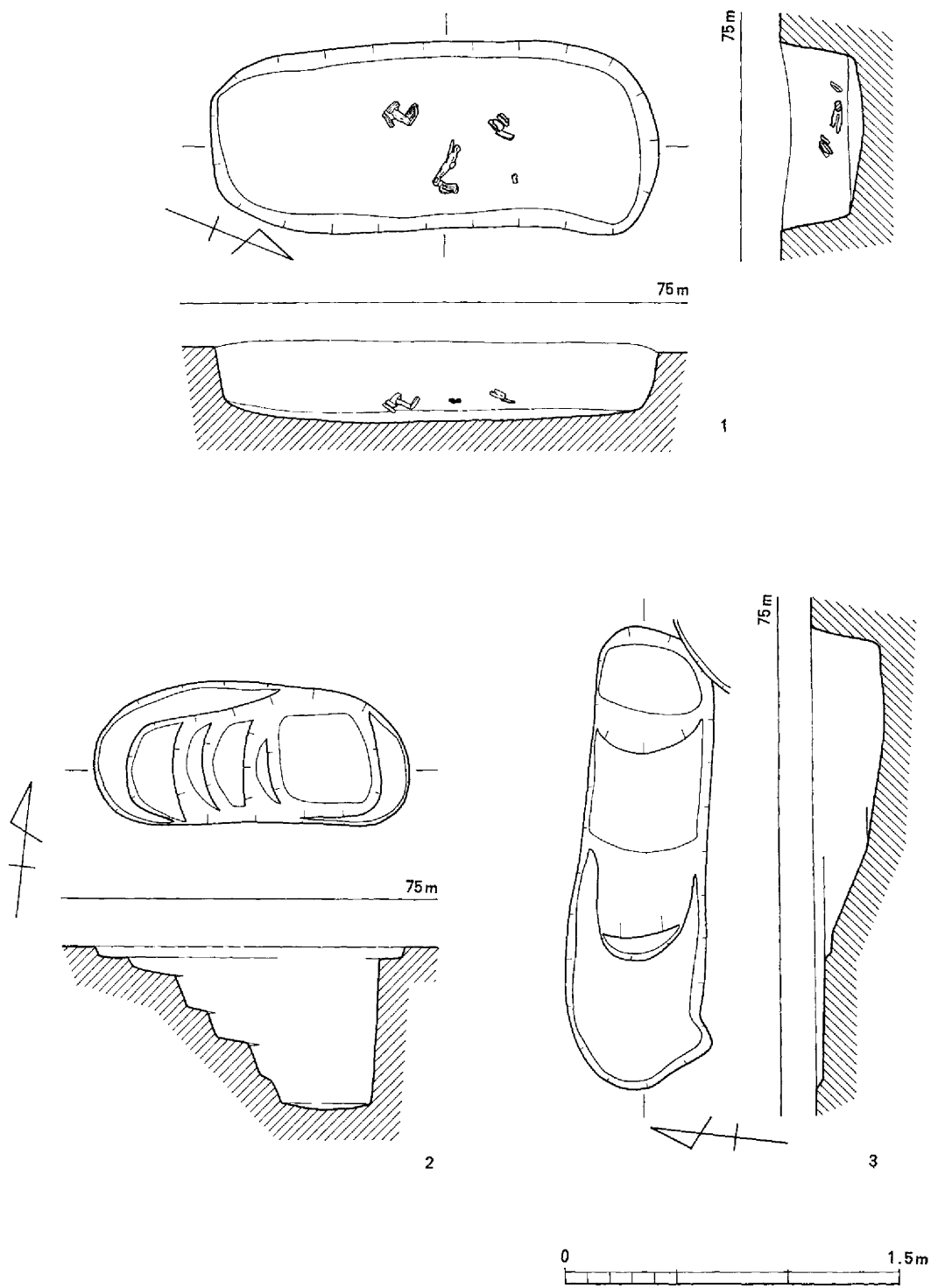
土師器(第45図)高杯の脚部で、裾のかなり開くものであり、現高3cmを測る。色調は茶褐色で胎土に砂粒を含み、焼成はあまく軟質である。

第4表 箱式石棺墓一覧(墓群B)

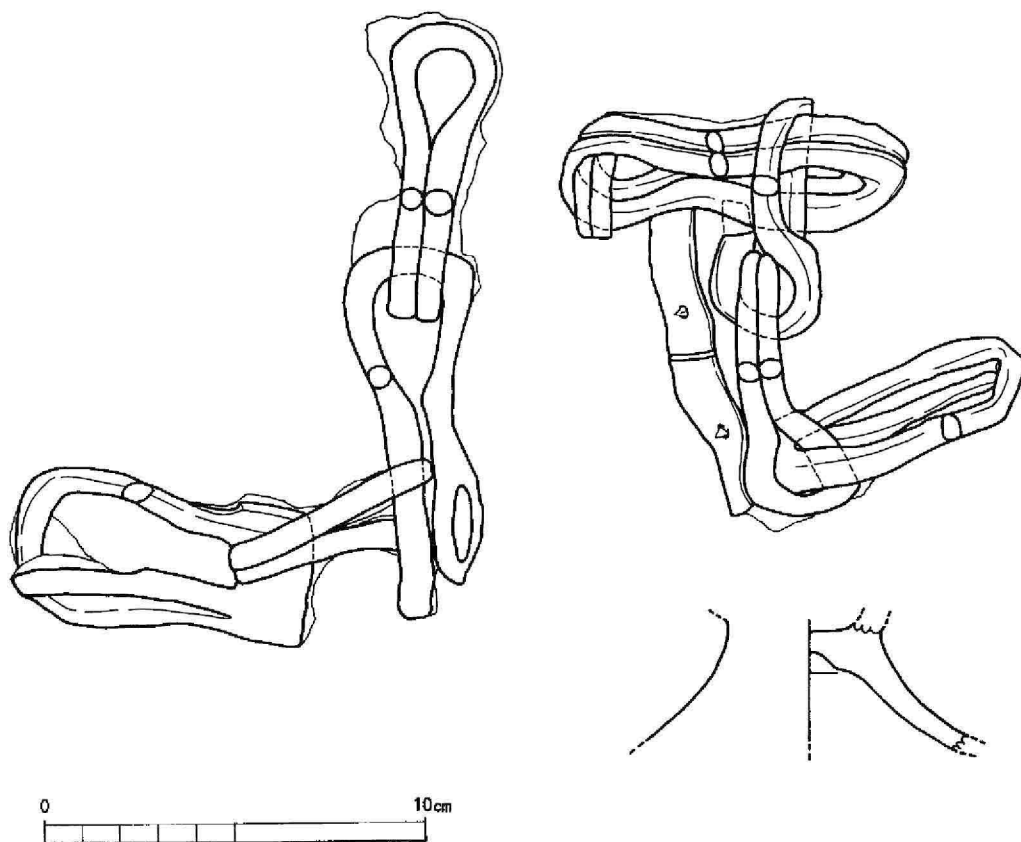
No.	主軸方位	頭位	丹彩	蓋石数	右壁数	左壁数	主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	N-92°W	西	○	3+1	2	4	167	50	50	55	
2	N-112°W	西	○		2	2	178	55	50	46	底石2
3	N-96°W	西	○				152	46	38	38	
4	N-61°W	西	○		3	4	137	27	33	48	

第5表 木棺墓一覧(墓群B)

No.	種別	主軸方位	墓壇の規模		棺の内法			木棺の場合				備 考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の堀込み	側板の堀込み	側板の切込み	裏込	
1	木	N-20°W	177	75	118	36	8					
2	木	N-46°W	218	97	177	49	10		○	○		ベンガラを検出
3	木	N-3°E	257	178	118	43	11		○	○		ベンガラを検出
4	木	N-38°W	223	115	178	64	17					



第44图 1 ~ 3号土坑墓实测图 (1/30)



第45図 1号土塚墓内出土遺物実測図(1/2)

第6表 土塚墓一覽(墓群B)

No.	種別	主軸方位	墓塚の規模		棺の内法			木棺の場合				備考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	土	N-90°W	287	145	167	32	21					標石を有する
2	土	N-77°W			76	33	23					枕状の段を有する
3	土	N-10°W			187	95	55					
4	土	N-100°W			163	60	24					
5	土	N-82°W			200	55	34					
6	土	N-90°W			313以上	155	16					
7	土	N-94°W			80以上	70						

B 墓群B

a 遺構

墓群Aの西側であって、15基の墓によって構成される一群である。特記すべきこととして、墓群の南側にL字状の溝が配されていて、墓域を溝で区画されている点、さらに、墓群中には明確に主となる墓が存在しており、箱式石棺墓を中心として一群がまとまっている点を上げて置く。

箱式石棺墓

1号墓(図版10、第47図) 長さ1.5m、幅70cm、厚さ20cmほどの巨大な石材(花崗岩)を組合わせている。頭位方向に巨石を使用し、さらに枕状の段を設けている。内部床面には多量のベンガラが検出されていて、石材の内側や蓋石との接合部分、あるいは掘り方の上面にも塗られていた。頭位は西をしめす。

2号墓(図版10、第46図) 長さ1.05m、幅65cm、厚さ28cmの巨石を使用しており、底石も存在する。頭位は西を示すと思われる。1号墓と同様な状況で多量のベンガラが検出されたが、内部を掘り出されていて、副葬品等は検出されなかった。

3号墓(第48図) 石材をすべて抜かれており詳細は不明であるが、抜き取り痕より構造的には1号墓に近いものと思われる。

4号墓(図版10、第49図) 10枚の石材を使用しており、他の石棺とは異なる。頭位は西側であり、鉄製の鎗が出土している。

木棺墓

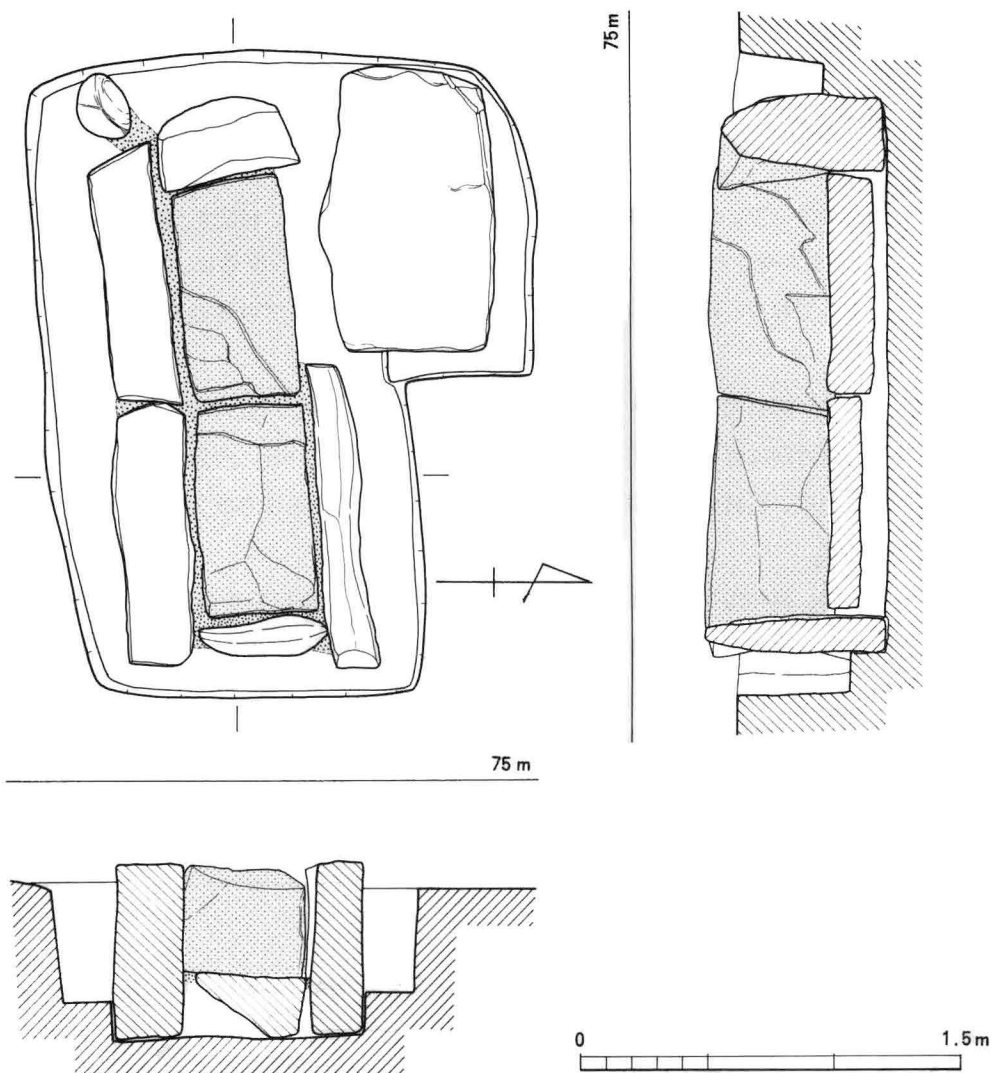
総数は4基である。墓壇を掘る二段掘込の構造と一段掘込の構造があり、棺の組み方は、木口板と両側板で箱形を作るもののみである。

1号墓(第49図)は二段掘込の構造で4号墓(第51図)と同様に浅い掘込みであることから、裏込を使用するものと思われる。2号墓(第50図)は一段掘込であり内部より鉄剣が出土している。3号墓(図版9、第50図)は二段掘込で、しかも内部の構は深くしっかりとしたものである。墓壇の底部面ほどの所より供献された壺形土器1点が出土している。

土壇墓

総数は7基である。1号墓(第48図)は標石と思われる長方形でベンガラが塗られた石が頭位の上に存在する。2号墓(第49図)は小型で小児用の可能性が高い。

以上の墓群を区画する溝(第53図)は幅2.3mで深さ20cmである。内部からは大型の甕等が破片でかなり出土している。この溝の形態から方形周溝墓として把握される可能性はある。しかし、全体が削平を著しく受けており、その可能性のみである。

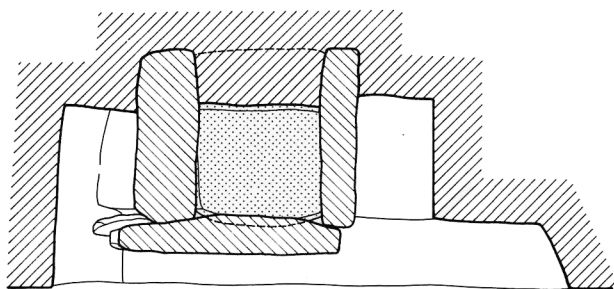


第46図 2号石棺墓実測図(1/30)

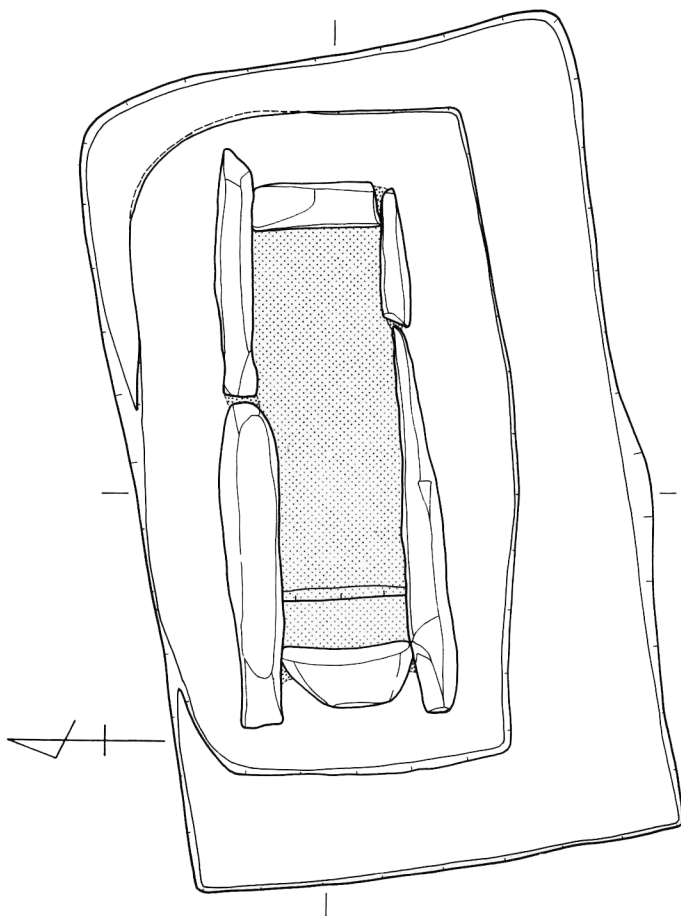
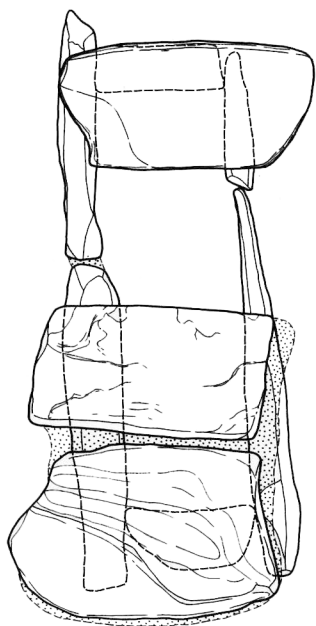
遺物

壺(図版24、第54図)

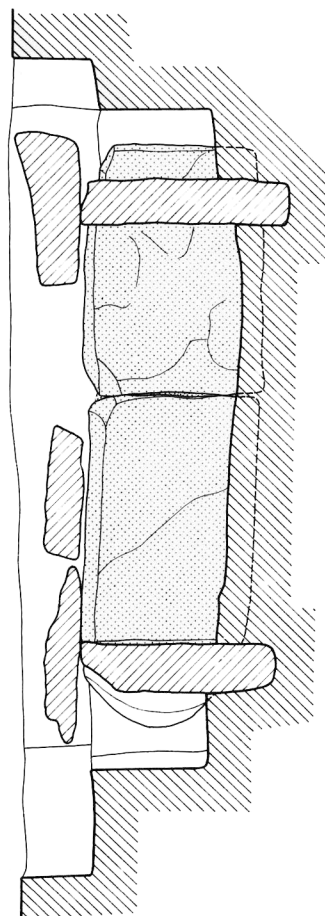
二重口縁のもので、口縁外面に櫛描波状文が巡っている。頸部から口縁に移る部分には刻目が施されている。胴部は中央が最も膨らみ、底部は平坦になるものと思われる。口径は16.8cm、器高は現高で29cmを測る。外面はハケ目、内面はナデと一部をハケ目によって仕上げる。色調は黄灰褐色で胎土は良好であるが、焼成はあまり軟質を示す。4号木棺墓より出土している。



75m

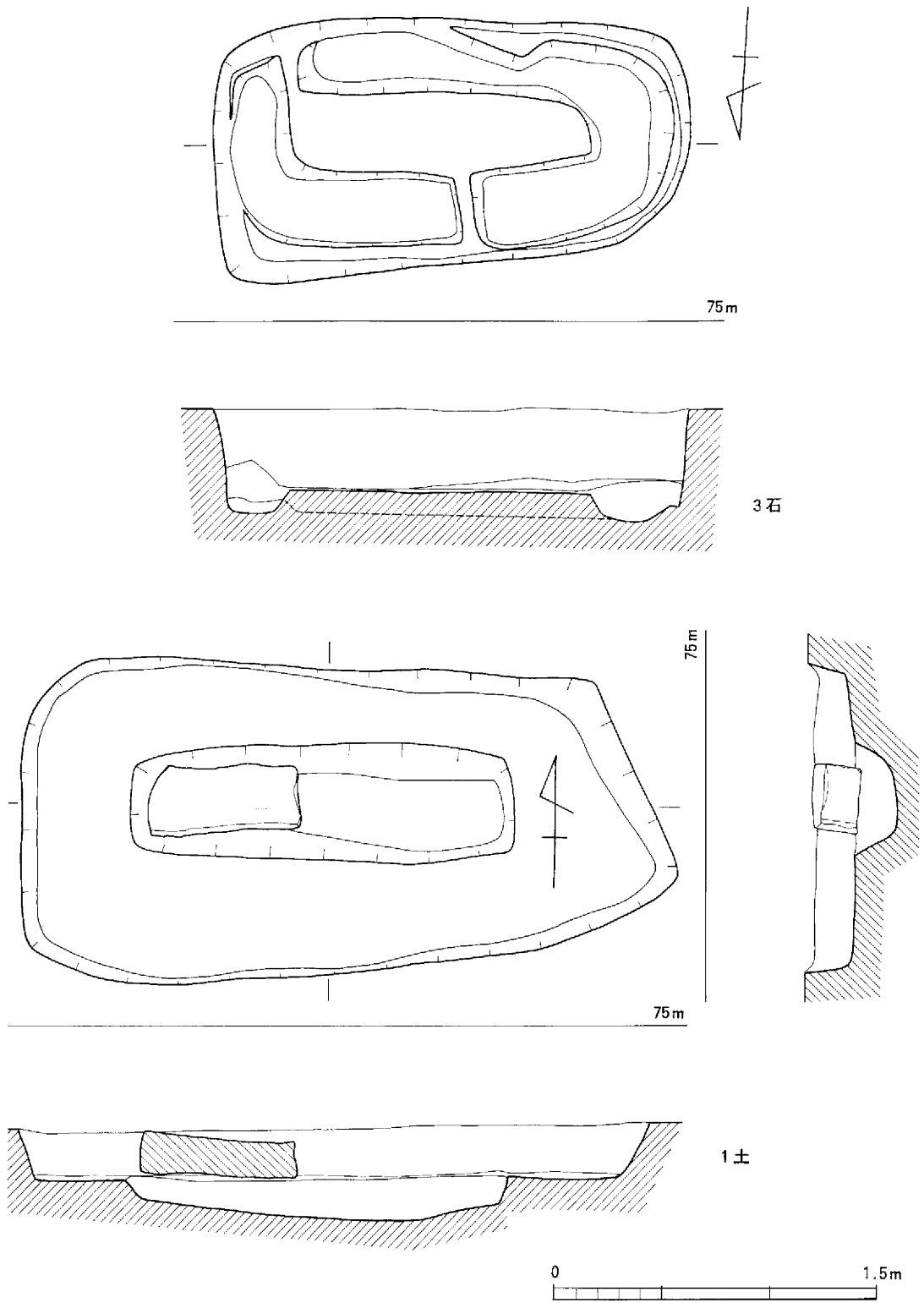


75m

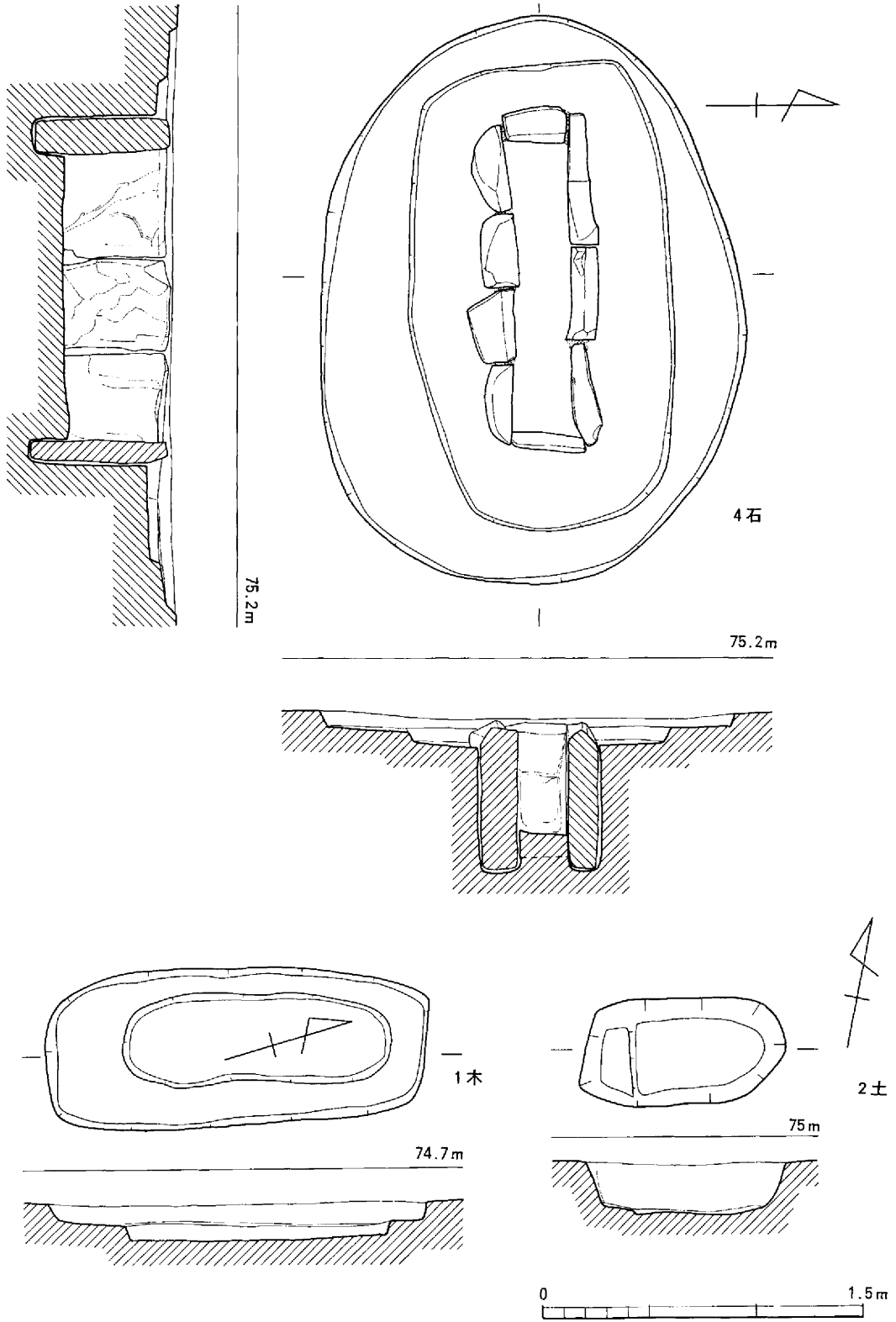


第47图 1号石棺墓实测图(1/30)

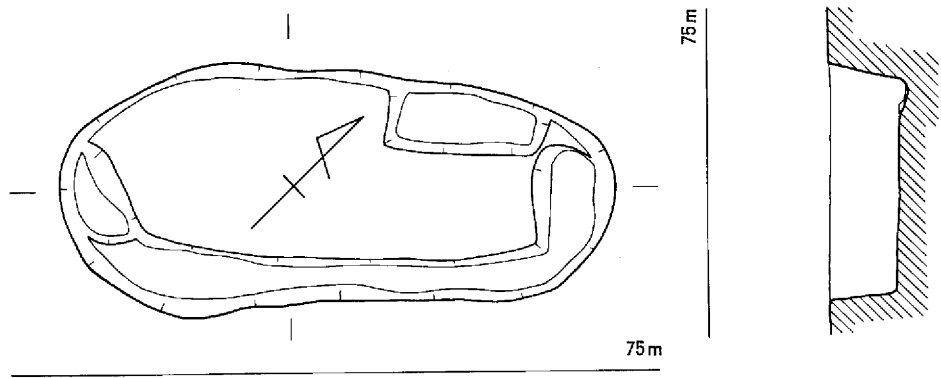
0 1.5m



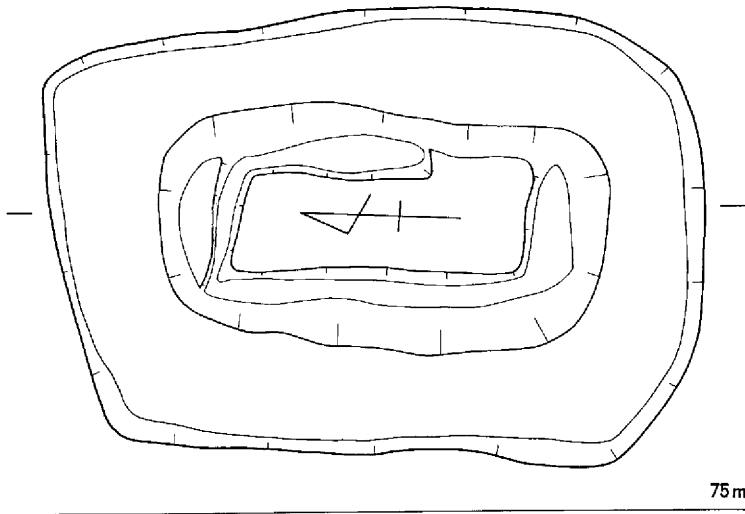
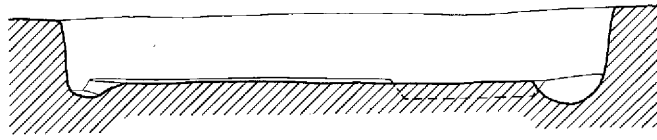
第48图 3号石棺 1号土壤墓室测图 (1/30)



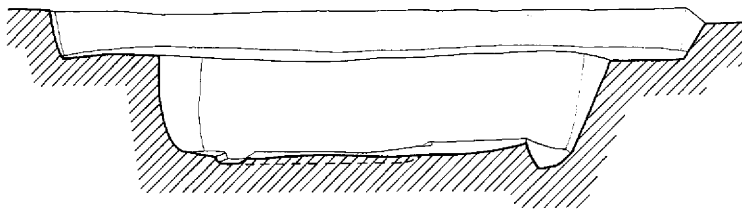
第49图 4号石棺墓・1号木棺墓・2号土坑墓实测图(1/30)



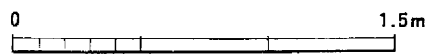
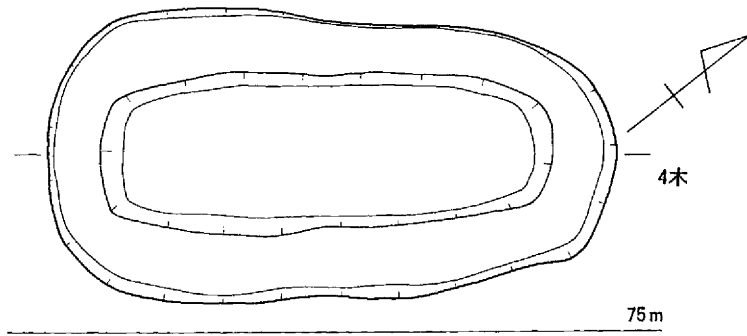
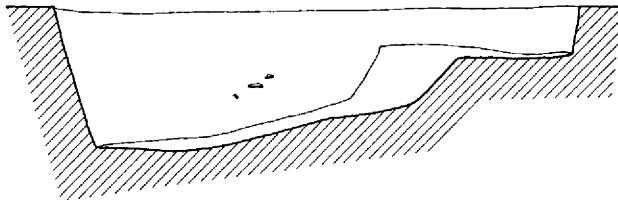
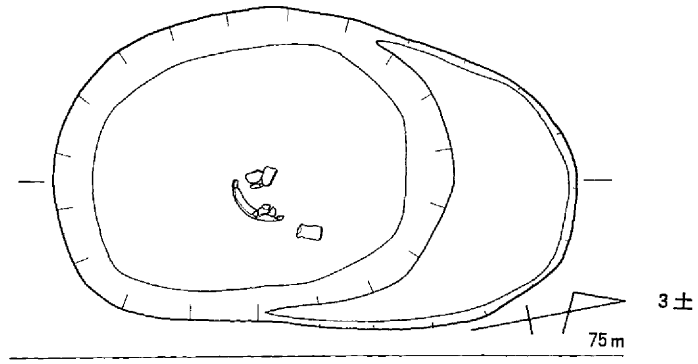
2木



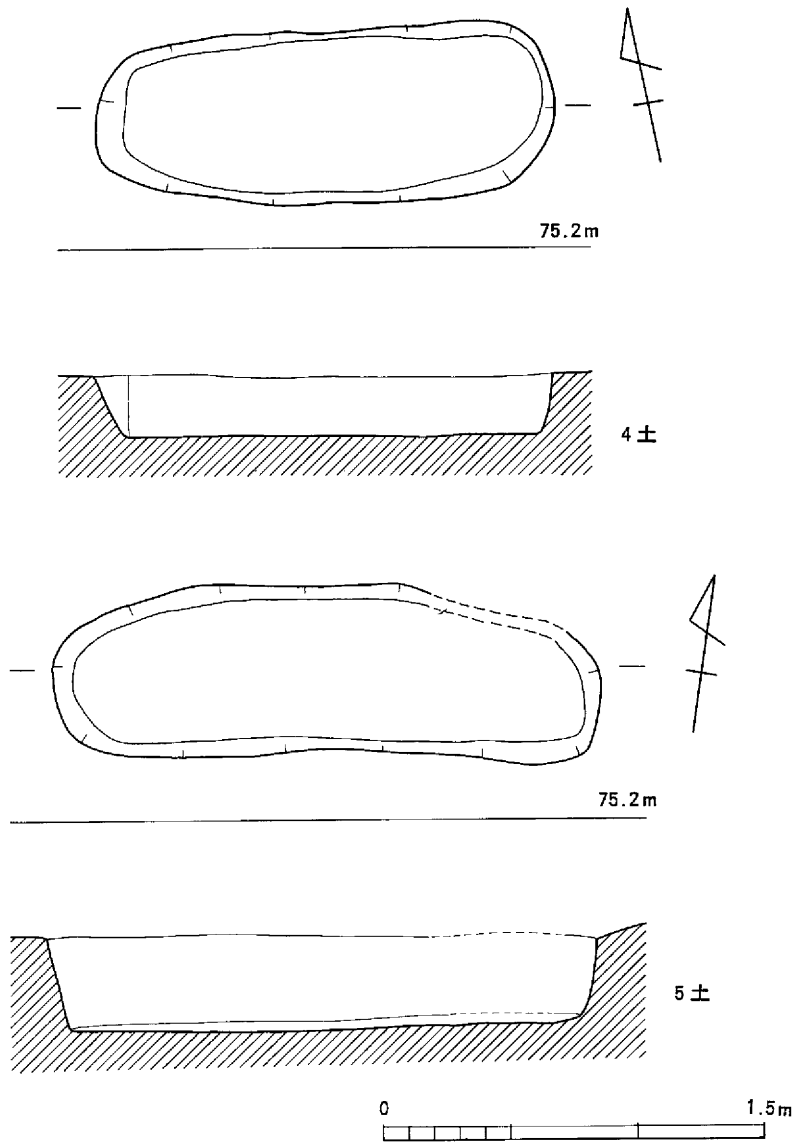
3木



第50图 2・3号木棺墓实测图(1/30)



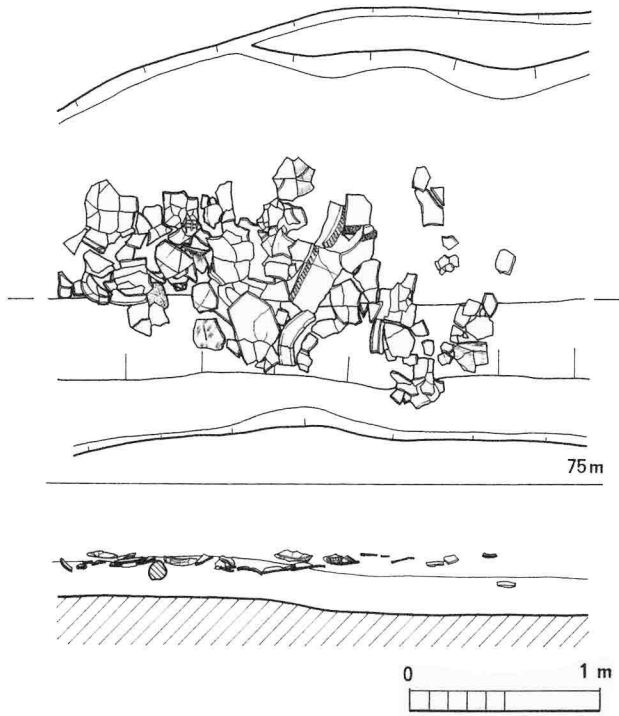
第51图 3号土墳墓・4号土墳墓実測图(1/30)



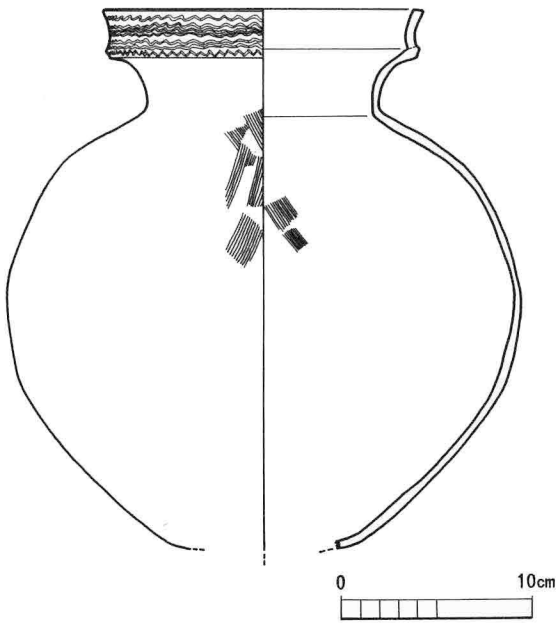
第52図 4・5号土壙墓 (1/30)

鉄器 (図版31、第55図)

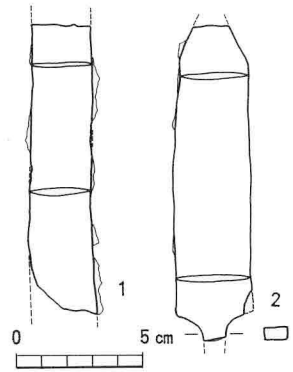
1は鉄剣で切先と茎部を欠くもので、現長11.5cm、刃幅2.5cm、刃厚2.1mmの薄手の作りである。2は鉄鎧で切先と中茎を欠くもので現長12.5cm、刃幅3cm、厚さ2mmを測る。1は2号木棺墓、2は3号石棺墓より出土している。



第53图 周構内土器出土状況実測図 (1/40)



第54图 3号木棺墓出土土器実測図 (1/4)



第55图 2号木棺墓, 4号石棺墓出土
鉄器実測図 (1/3)

C 墓群C

a 遺構

最も西側に位置する墓群で、総数23基より構成される。ここは特に削平されており箱式石棺は1基を残して全て掘られていた。ここは墓群Bと同様に溝によって墓域を区画されており、意識的な独立した墓群として存在する。

箱式石棺墓

1号墓(図版12、第56図)側壁は4枚の板石を使用し、頭位にはより大きな石材を使用する。底石は基本的に6枚を使用するが、中央部の1枚を割って、副葬品を埋置する状態にしている。掘り方は東西の長さ2.63m、南北の長さ1.81m、深度は45cmと大きなもので、上面に5個体分の高杯が供献されている。石棺内にはベンガラが塗られ、その周辺にまで及んでいる。蓋石は1個が棺内に落ち込んでいただけである。

銅鏡の出土状況(図版12、第57図)は1枚の板石を4枚に分割し、3枚の板石はもう一度組み合わせて底石とする。打ち欠いた1/4の部分は、底石より一段下げて埋置し、その上に銅鏡を1面置き、さらにその上に鉄剣の中央から折ったものを2本平行させて置く。その上や周辺を粘土で目張りし、最後に三角形の板石片と思われる石を置き、副葬品が直接見えないように配慮されていて、品物の隠匿を示すようにも思える。

2号墓(図版11、第58図)棺は既に掘られてしまっており、側壁と底石の一部が残っている。掘り方の上面からは高杯のみ6個体以上が出土しており、供献されたものと思われる。底石部分からは鉄剣が出土している。石材はベンガラが塗られていたものと思われる。

3号～6号墓は、石材の一部を残すのみである。特に6号墓は大型のものであったと思われ、その墓壇は他に比べて著しく大きいものである。

木棺墓(第60図)

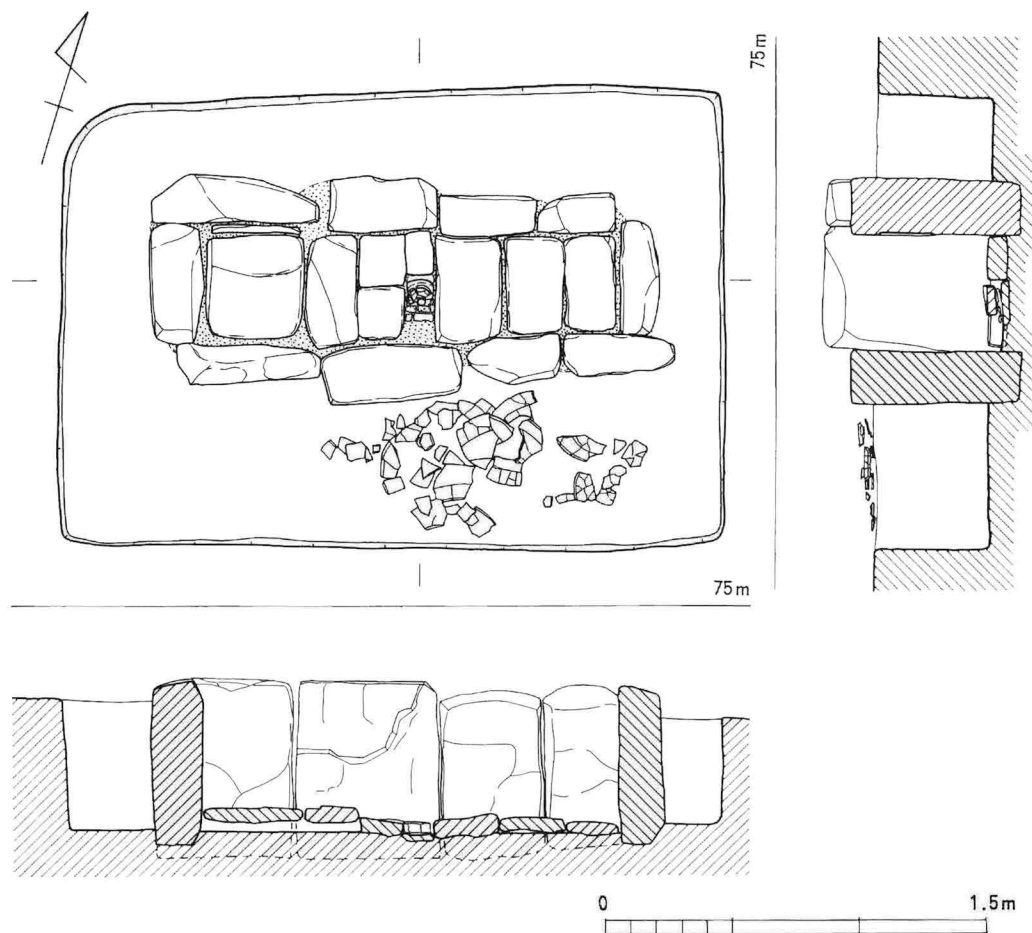
総数は3基である。1号と3号は二段掘込の構造で棺は木口板と両側板で箱形に組むものと思われる。1号は頭位と思われる部分に礫が集中しており、木蓋の上に存在したものが落ち込んだとも考えられる。2号の場合は木口部分の掘込みが検出されており、構造的には一段掘込であり、棺は木口板で両側板を挟み込むタイプである。

土壇墓(第61、62図)

総数は12基である。平面形は隅丸長方形で一段掘込のものが大半であるが、5号の場合は2段掘込で墓壇の対角線上に壇が掘り込まれている。多くは成人用と思われるが、6号と9号はその大きさから小児用と思われる。

b 遺物

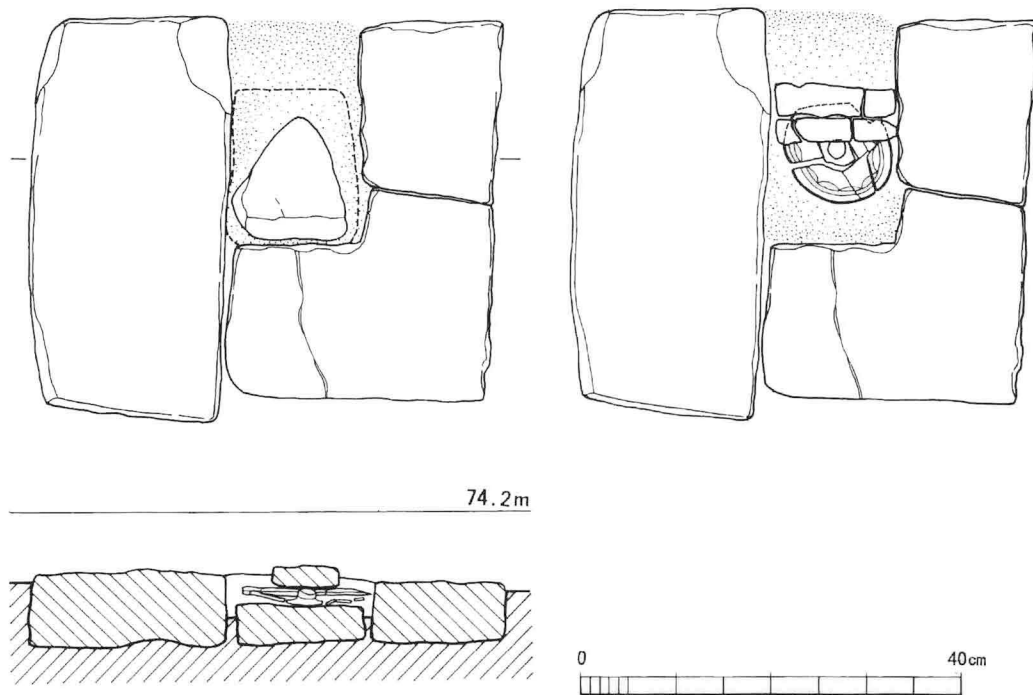
弥生土器(図版24、第63、64図)1～3は、1号石棺墓に供献された高杯である。口縁は外反し、内外両面に強い段を残すもので、脚は長脚で3孔が存在する。杯部外面はハケ目を施した後に研磨



第56図 1号石棺墓実測図(1/30)

されており、脚部は研磨で仕上げられる。色調は茶褐色で胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。4は脚付鉢で高杯群中であって、鉢部のみ出土する。屈曲する胴には稜線があり、口縁は内湾しつつ口唇は若干外反する。外面はハケ目の上から研磨され、内面はハケ目で仕上げられる。1は口径33cm、現高7.6cm、2は口径28cm、現高21.5cm、3は口径31.6cm、現高8.7cm、4は口径16.6cm、現高9.7cmを測る。

5～9は、2号石棺墓に供献されたもので、5～8は高杯で9は脚付鉢である。5～8は口縁が大きく外反し、胴は強く屈曲する。脚部は長脚で上下2段の総数6孔を配する。裾部は開くものの、端部はやや内湾気味となる。内外面の調整はハケ目の後に細かい研磨によって丹塗り土器のように美しく仕上げられている。9は鉢部中央が大きく屈曲しつつ稜線をなす。脚部は長脚である。内外面は細かい研磨によって美しく仕上げられている。以上の土器群はその特徴を同じとしており、色調は赤褐色でやや荒い砂粒を含むが焼成は良い。5は口径31.3cm、器高26.1cm、底径19.8cm、6は口

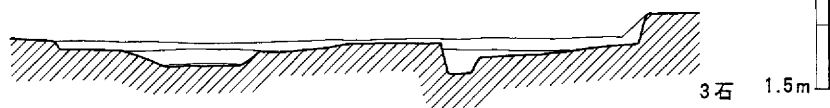
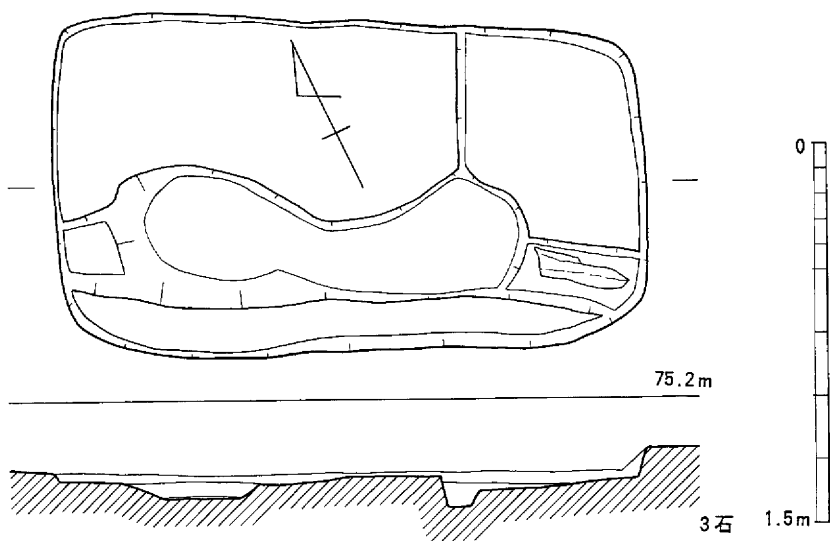
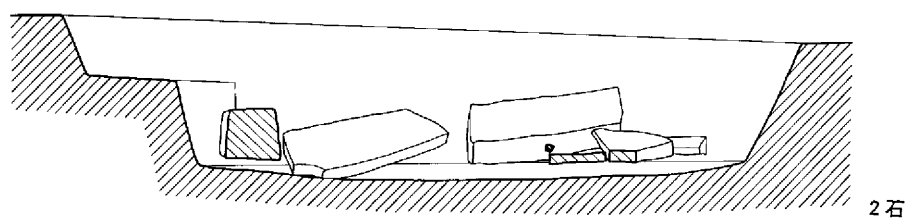
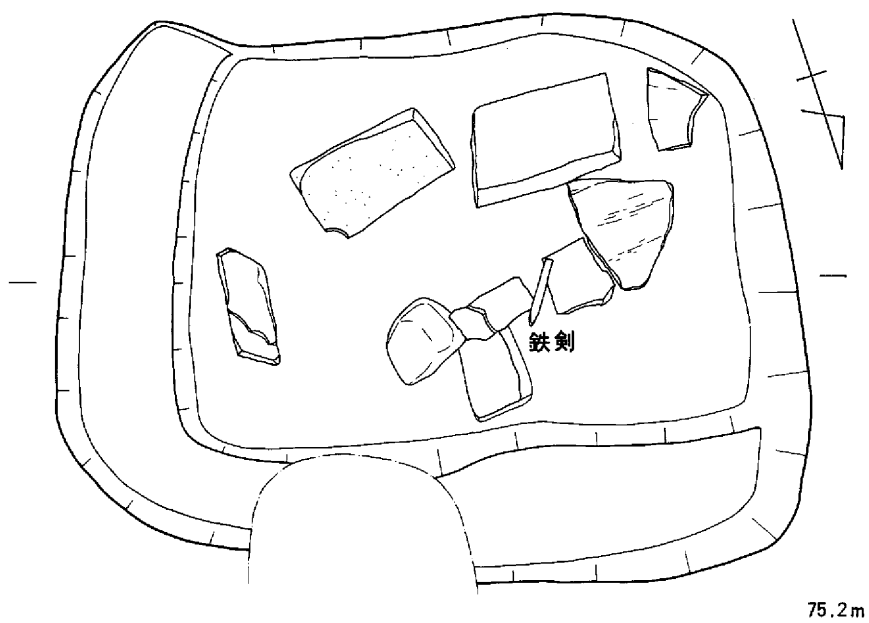


第57図 鉄器，銅鏡の出土状況（1／2）

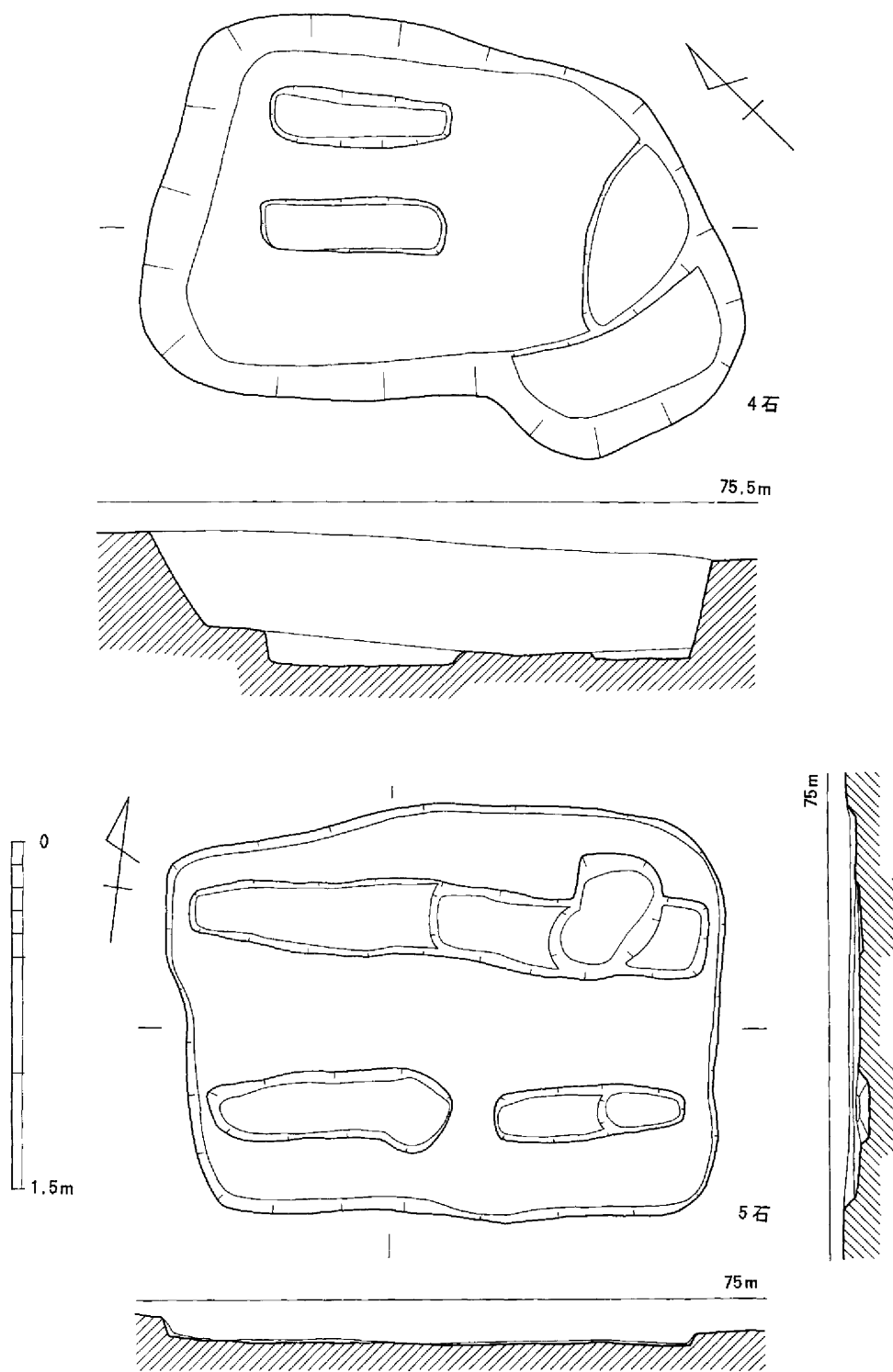
径30.6cm、器高26.7cm、底径19cm、7は口径31cm、現高19cm、8は口径30.8cm、現高21cm、9は口径18.6cm、現高15.9cm、とそれぞれに測る。

銅鏡（巻頭4図、第65図）

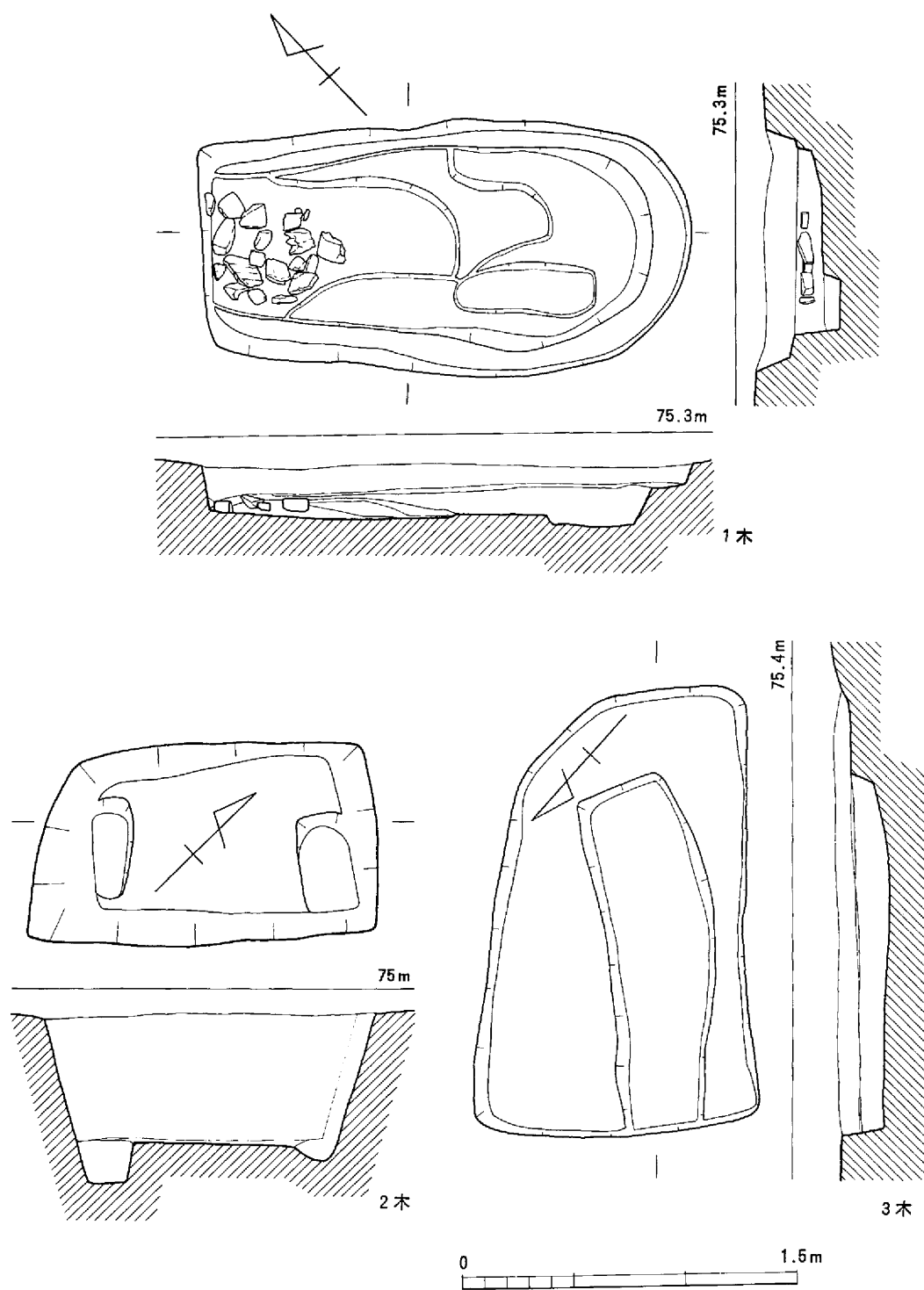
「長生宜子」銘単夔文鏡である。1号石棺墓（第57図）内底石下より鉄剣と伴出しており、背面を上にして一部を欠く状態で出土している。鏡径11cm、鈕径2.1cm、鈕高1.1cm、縁厚2.5mmを測る。背文は鈕を巡って糸巻状の四葉文座があって、4分画された主文区画内に夔文を配したもので4つの連続文様をなす。夔文には首があって、鳥首あるいは龍首と考えられる。鈕の周囲には「長生宜子」の4文字が彫られている。夔文の外側は12個の連孤文帯が配される。外区は平縁素文となり、全体は薄手で平面的な仕上げとなる。これは糸巻形の四葉文座間に相対した双鳥文を配す夔鳳鏡に近い。鏡の縁の一部が欠損しているが、割口は鋭いもので、意識的に割ったとも考えられよう。



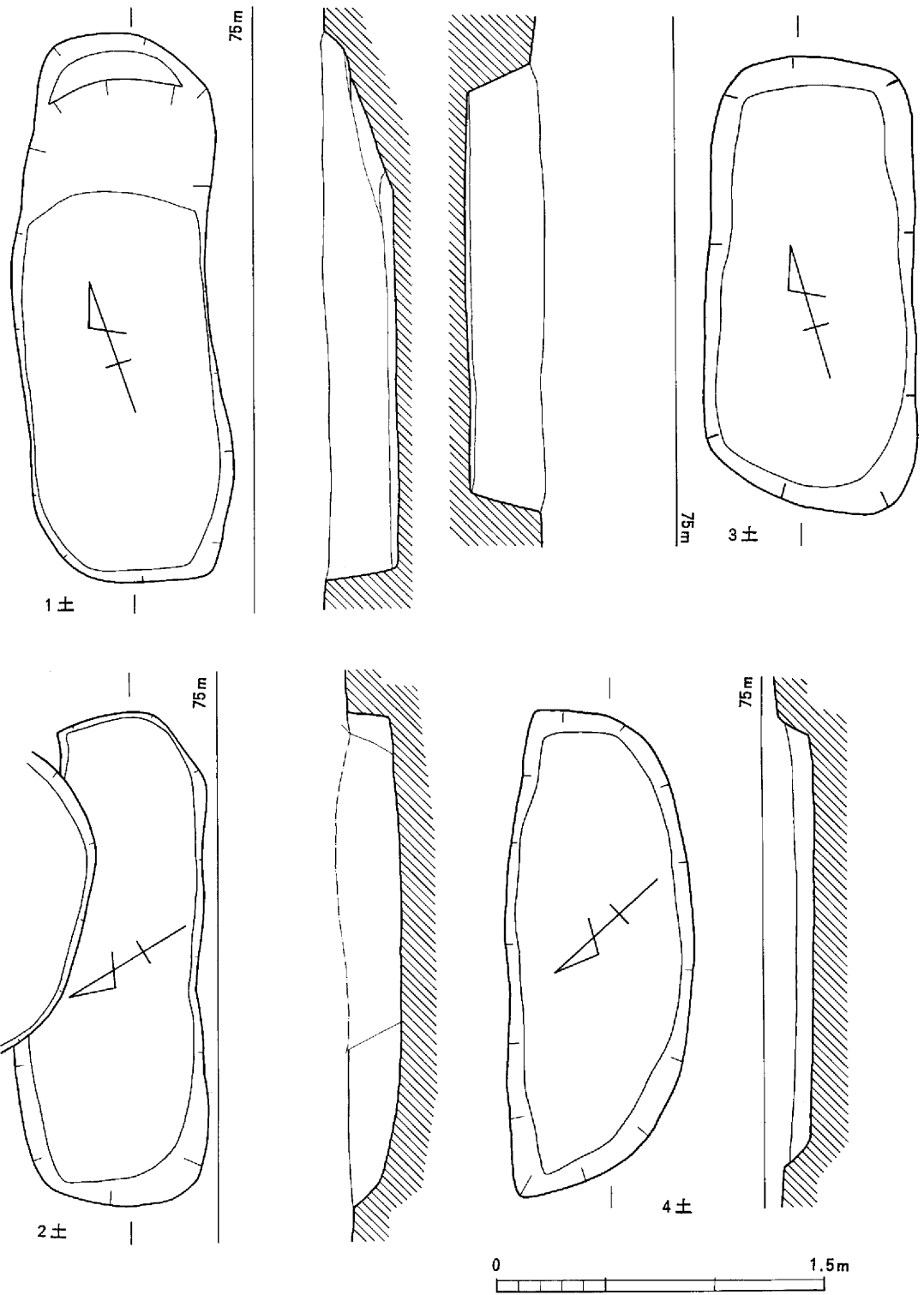
第58图 2, 3号石棺墓实测图 (1/30)



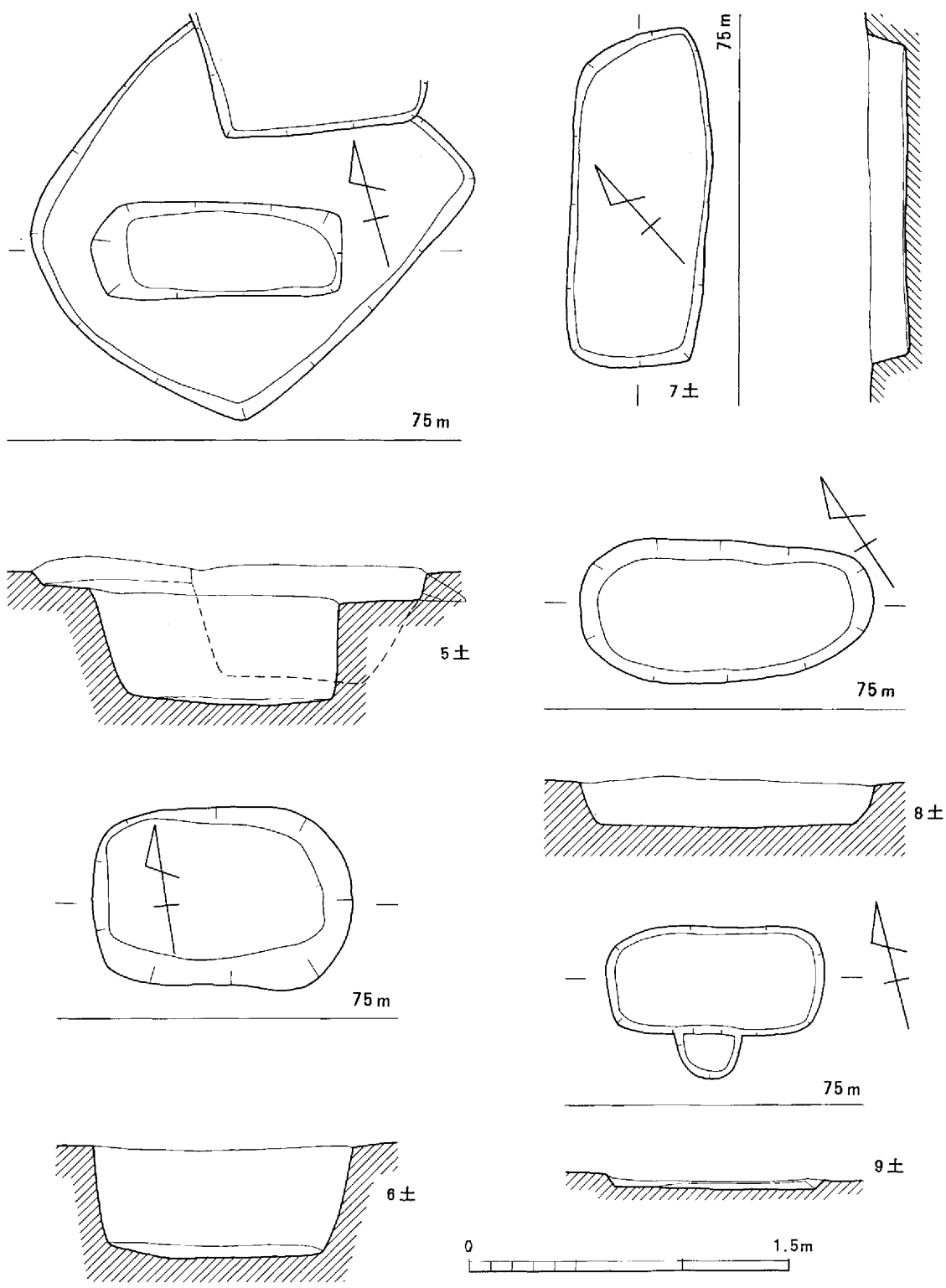
第59图 4, 5号石棺墓实测图(1/30)



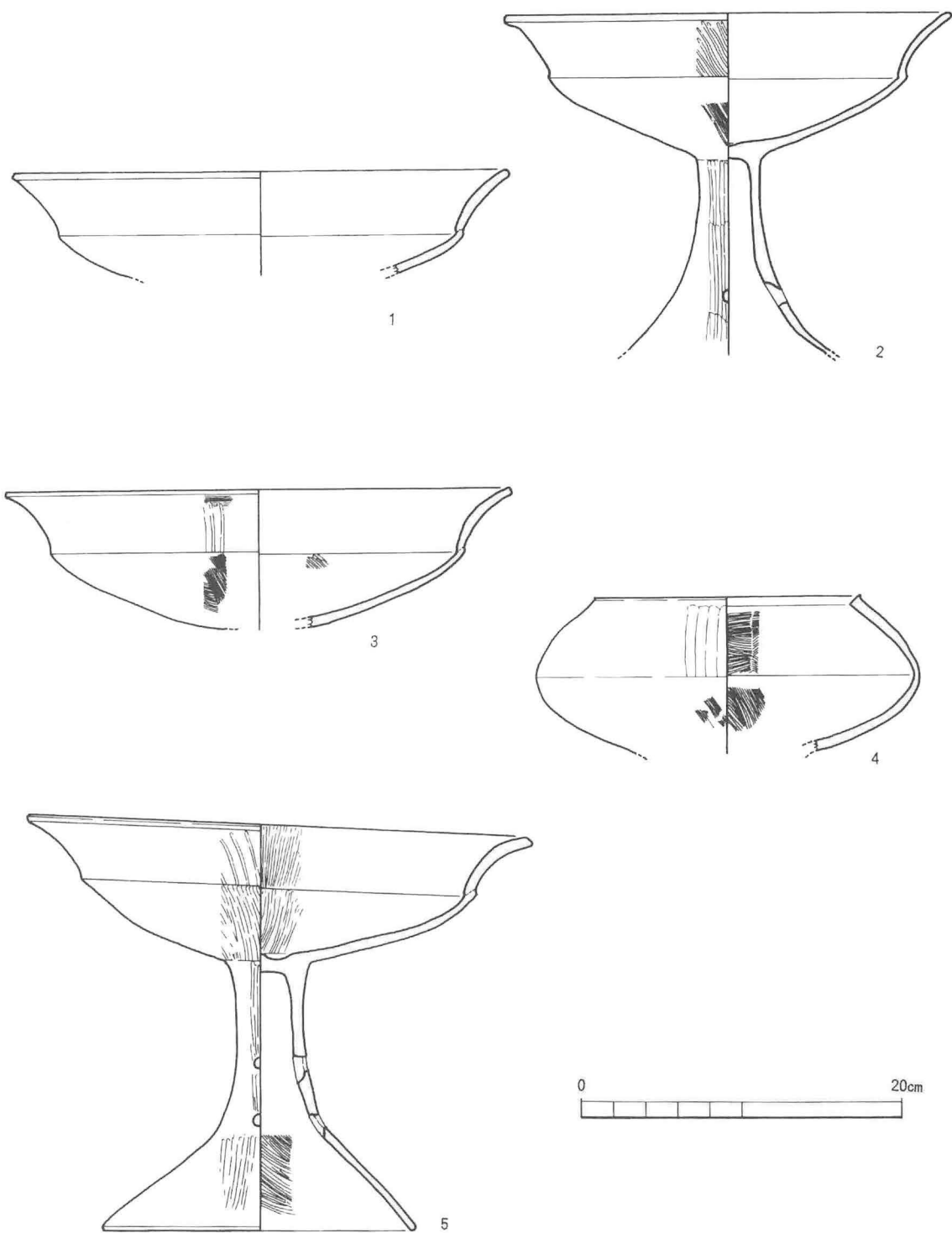
第60图 1~3号木棺墓実測図(1/30)



第61图 1 ~ 4号土坑墓 (1/30)



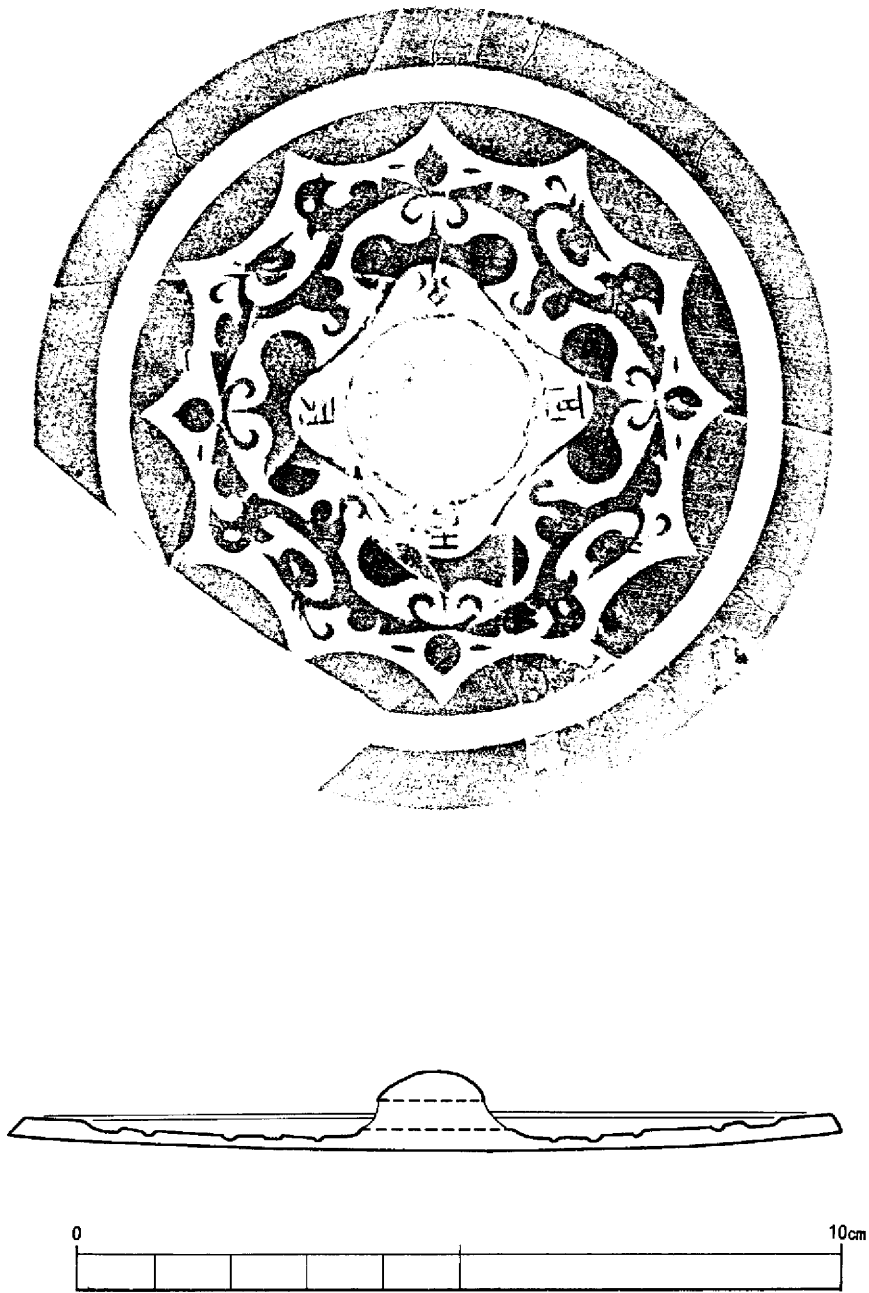
第62图 5 ~ 9号土壙墓実測图 (1/30)



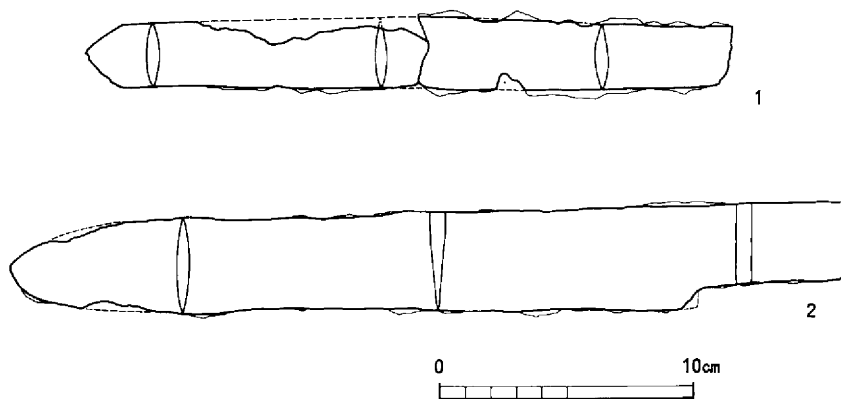
第63图 1 • 2号石棺墓出土土器实测图 (1/4)



第64图 2号石棺墓出土土器实测图(1/4)



第65图 1号石棺墓出土铜镜实测图(1/1)



第66図 1・2号石棺墓内出土鉄剣（1/3）

鉄剣（図版31、第66図）

1は1号石棺墓内出土のもので、全長25.6cm、刃幅2.9cm、刃厚5mmを測る。身は中央から折れている。2は2号石棺墓内出土のもので、全長33cm、刃幅4cm、刃厚7mmを測る。本来は刀であったものを、切先のみを両刃にして剣としての機能を与えたものである。

小 結

検出された墓群は台地先端に位置しており、3つにグルーピングが可能である。墓群Aでは弥生時代中期に形成時期の中心があって、75基の墓群が形成される。その分布は狭い範囲に集中しており、一つの墓域を示すものであろう。その後の空白時期を置いて、後期の墓が形成されるが2基のみである。おそらくは調査区北側に集中したと思われるが、削平によって失われたものであろう。

木棺墓では2段掘込が大半を占めており、その構造は2段目の墳が浅くなることから、裏込を行うタイプであろう。15号木棺墓は墓墳の片側に棺を設けており、棺外の部分から小銅鐸と管玉が出土している。この場合棺外の部分が特別の機能を有していたと思われる。土壇墓は一段掘込の様式が大半を占める。甕棺墓は2基が成人埋葬用として、他は小児用として使用されたものであろう。

墓群の時期を示すものとしては、木管墓や土壇墓からは直接的な遺物が出土せず、12基の甕棺によってその形成期を示さねばならない。この場合、まず切り合い関係から行くと、甕棺墓は木棺墓や土壇墓を切っており、相対的に新しく形成され出したと言えよう。甕棺は形態的特徴から城ノ越式併行より須玖I式併行の中で把握されよう。1号棺は如意形口縁で底部は高く上げ底を呈す点から、甕棺中で最も古く位置付けられよう。11号棺は逆L字状口縁で器壁は薄く、焼成や胎土は良好で他の例とは異なる。本例に近いものとして、森分遺跡の中期祭祀土壇内より出土した甕がある。伴出した土器から、須玖I式の範中でしかも新しい位置を示す。嘉徳での中期における土器を観察すると、中期中葉頃を境として、土器の細部に变化を示し、それが質の異いとして表出するようで

ある。従って11号棺を最も新しい位置とする。つまり、墓群は甕棺で見る限り、弥生の中期初頭から中期中葉頃までを形成期とし、中期前半頃をその頂点とする。しかし、木棺墓や土壙墓はそれ以前より作られた可能性は大いにある。また、小銅鐸出土の15号木棺墓を切る12号甕棺は、形態的や細部について、古式の様相を示しており、中期前半頃の時期と思われる。従って小銅鐸は弥生時代中期前半を下限とし、さらに古くなる可能性が強い。

後期の墓については、甕蓋の土壙墓の場合、甕は、突帯がかなり退化しており、弥生時代後期後半から終末頃とし、内行花文鏡を出土した石蓋土壙墓も同時期頃とする。

墓群Bの場合、周溝を有する集団墓であり、方形周溝墓に近いものであろう。箱式の大型石棺墓を中心とし、しかも石棺は石材の数が少くなって来ている点や出土した土器が上椎遺跡12号住居跡(註5)の例と同様である点から嘉穂編年のⅢ期とすることが出来よう。従って北部九州での庄内式土器(註6)の出現時期との併行が考えられる。

墓群Cの場合は、墓域を区画する溝より出土した土器と墓に供献された土器が示す時期は、弥生時代後期後半から終末頃で、1号石棺墓や2号石棺墓はその時期に形成されたものであろう。従って単葉文鏡も確実に弥生時代の資料であり、内行花文鏡と同時期のものである。

第7表 石 棺 墓 一 覧

No.	主軸方位	頭位	丹彩	蓋石数	右壁数	左壁数	主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1	N-116°W	南西	○	1枚以上	4	4	168	48	44	64	底石11
2	N-78°W	西	○			2以上					
3	N-63°W		○								削平のため不明
4	N-84°W	北西	○				139			46	〃
5	N-102°W	西	○					55	50	19	〃
6											削平のため不明

第8表 木 棺 墓 一 覧

No.	種別	主軸方位	墓壙の規模		棺の内法			木棺の場合				備考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	木	N-48°E	218	116	189	81	18					
2	木	N-46°W	156	89	72	69	19					
3	木	N-41°E	197	126	153	42	14					

第9表 土 墳 墓 一 覧

No.	種別	主軸方位	墓壇の規模		棺 の 内 法			木 棺 の 場 合				備 考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	土	N-20°-W	253	90	174	83	4					
2	土	N-59°-E			212	76	23					
3	土	N-15°-W			184	87	35					
4	土	N-34°-W			220	70						
5	土	N-73°-E	182	155	96	37	3					
6	土	N-80°-E			100	64	50					
7	土	N 41°-W			146	59	17					
8	土	N-37°-E			120	52	23					
9	土	N-72°-E			94	45	4					
10	土	N-76°-E			89以上	57	30					
11	土	N-93°-W			125以上	39	34					
12	土	N-62°-W			50以上	60	19					

(3) 第2地点の調査

台地縁辺部に形成されており、台地西側端部を墓地とし、その東側に住居群が連なっている。住居の総数は23軒、墓の総数は28基で、他に土墳が14基存在する。

A 竪穴住居跡と遺物

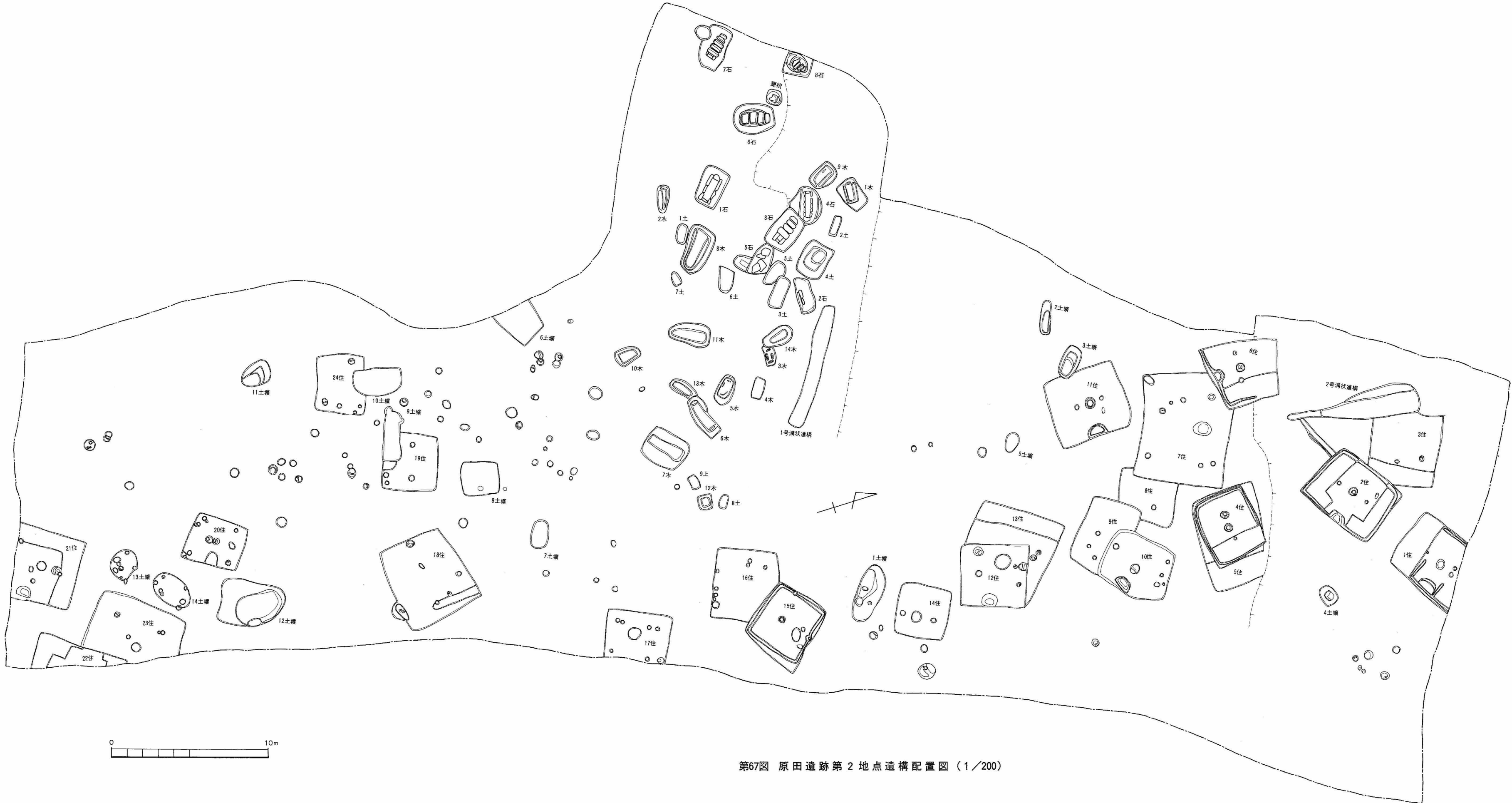
竪穴住居跡

1号住居跡（第68図）平面形は方形を呈しており、壁面にベッド状遺構を配し、周溝が伴う。柱穴はP₁とP₂で2本柱よりなるもので、中央に炉穴が存在する。壁面には屋内貯蔵穴を設け、周溝はその両側より、住居床面の中央付近にまで延びてきている。1辺が4mを示し深度は28cmを測る。

2号住居跡（図版13、第68図）平面形は方形を呈しており、両側にL字状のベッド状遺構を配す。東西4m、南北5.22m、深度20cmを測る。柱穴はP₁とP₂で2本柱よりなっており、その間に二段掘込の炉を配している。

4号住居跡（図版13、第69図）平面形が方形を呈し、東西の長さ4.38m、南北の長さ3.70m、深度26cmを測る。壁面の片側にベッド状遺構が設けられており、内部には周溝が巡っている。柱穴はP₁とP₂であり、2本柱でなっており、その間に2段に掘込まれた炉が存在する。

5号住居跡（図版13、第69図）4号住居に切られており周辺を残すのみである。平面形は方形を呈し、ベッド状遺構を配する。



第67図 原田遺跡第2地点遺構配置図 (1/200)

11号住居跡（図版13、第69図）平面形は方形を呈し、東西の長さ4.96m、南北の長さ4.38m、深度24cmを測る。柱穴はP₁とP₂であり、2本柱でなっており、その間に2段に掘込まれた炉が存在する。壁面に屋内貯蔵穴と思われる2段に掘込まれたピットも見受けられる。

12号住居跡（第70図）平面形は方形を呈し、東西の長さ3.9m、南北の長さ4.3m、深度31cmを測る。柱穴は規則的な配列が見受けられなかったが、P₁が可能性が強く、P₂部分に柱穴が存在したと思われる。東壁面に屋内貯蔵穴も見受けられる。

13号住居跡（第70図）平面形は方形を呈すが、大半は12号住居に切られている。西壁にはベッド状遺構が設けられており、西壁の長さ5.6m、北壁面の長さ5.9m、深度24cmを測る。

17号住居跡（第71図）平面形は方形を呈し、東西の長さ5.88m、南北の長さ4.7m、深度40cmを測る。柱穴はP₁とP₂で2本柱よりなり、その間に炉穴が存在する。壁面の一部が外側に振り込まれ、中に壺と高杯が存在しており、貯蔵穴としての利用が考えられる。

18号住居跡（第71図）平面形は方形を呈すと思われる。東西の長さ4.18m、南北の長さ3.1m以上、深度は25cmを測る。柱穴はP₁～P₄で4本柱よりなっていて、中央に大きな炉穴が存在する。

他の住居跡は紙面の都合により割愛させていただくが、19号と20号住居跡は炉ではなく、カマドを有しており、時期的に古墳時代後半に下るものである。

遺物

1号住居跡出土土器（図版26、第72図）

甕（1） 口縁が強く外反し頸部はくの字状を呈す。胴は強く張っており、外面肩部に横方向のハケ目が見られ、内面は頸部よりやや下方よりヘラ削りをもって仕上げる。口径16cm、現高12cmを測る。色調は黄褐色で胎土に砂粒を含む。

4号住居跡出土土器（第72図）

鉢（7・8） 7はやや広がる口縁と丸底気味の底部を有し、8は強く外反する口縁でおおよそ丸底の底部を示すと思われる。7は口径11.4cm、器高8.6cmで内外両面ともナデによって仕上げられ色調は淡赤黄色で胎土に砂粒を含む。8は口径13.4cm、器高8.3cm外面はハケ目、内面ナデによって仕上げられ色調は暗褐色で胎土に砂粒を含む。

5号住居跡出土土器（第72図）

鉢（2） 口縁が短く外反し、底部は尖底気味となる。口径は10.6cm、器高7.9cmで色調は茶褐色で胎土に細い砂粒を含み、焼は良く硬い仕上げとなっている。調整は内外面ともにナデが行われている。

椀（3・4） 3は口径12cm、器高4.9cmで外面はタタキ目、内面はナデによって仕上げられている。色調は薄黄灰色で砂粒を多く含み焼成は悪く軟質である。4は口径10.5cm、器高3.2cmで内外面をナデによって仕上げる。色調は灰褐色を呈す。

11号住居跡出土土器（図版25、第72図）

壺（9） 口縁はやや開き底部は丸底である。口径は12cm、器高15cmで外面は研磨、内面はナデによって仕上げる。色調は赤褐色で胎土や焼成は良好である。

高杯（5） 脚部はややエンタシス状を呈し、底部は開くもので、内外面ともハケ目で仕上げられる。現高7.4cm、底径13cmを測る。

小型丸底壺（6） 口縁は外反し底部は尖底気味となり、口径10.8cm、器高8.3cmを測る。外面はヘラ削り、内面はナデで仕上げられる。色調は淡褐色で胎土に荒い砂粒を含む。

椀（10・11） 内外面をナデによって仕上げられており、10は口径10.4cm、器高4.9cmを、11は口径12cm、器高3.6cmを測る。両者とも灰黄色で胎土に細い砂粒が含まれている。

甕の底部（12） 底部のみの検出であるが、やや厚手の器壁で胴部に向かって大きく開いている。底部は狭く中央が窪むもので、外面は右方向に回転するタタキ目でやや荒く施され、内面は荒いハケ目で仕上げられる。色調は黄褐色で荒い石英粒や長石、輝石等が胎土に含まれる。これは、形態的、調整法等において畿内第5様式に近く、福岡市の西新遺跡に例が見受けられる。

17号住居跡出土土器（図版25、第73図）

甕（13） 口縁がやや厚味をもって外反し、頸部はくの字をなし、胴は丸味をもって張っており小さな平底の底部がつく。調整は外面上半部はタタキ目を施した後にハケ目で消すように行い、下半部はタタキ目を施したままである。内面は頸部直下から横方向のハケ目で仕上げる。口径は14cm、器高20.1cmで底部は3cmを測る。色調は明黄褐色で胎土に細い砂粒（石英、長石、輝石、金雲母）を含む。

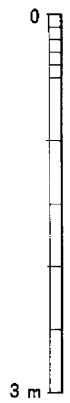
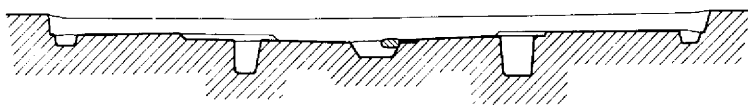
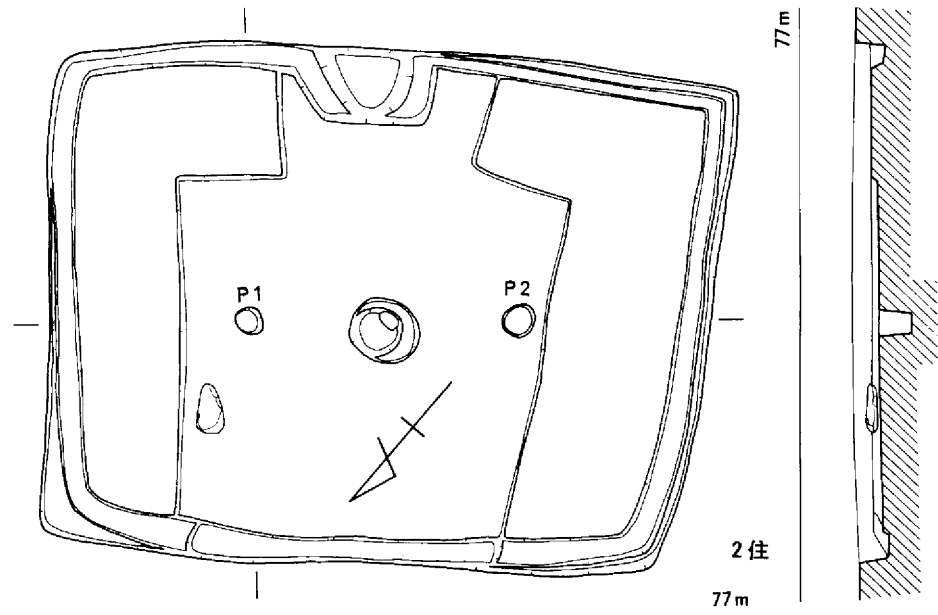
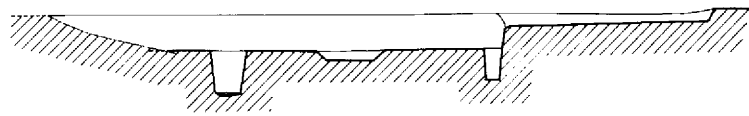
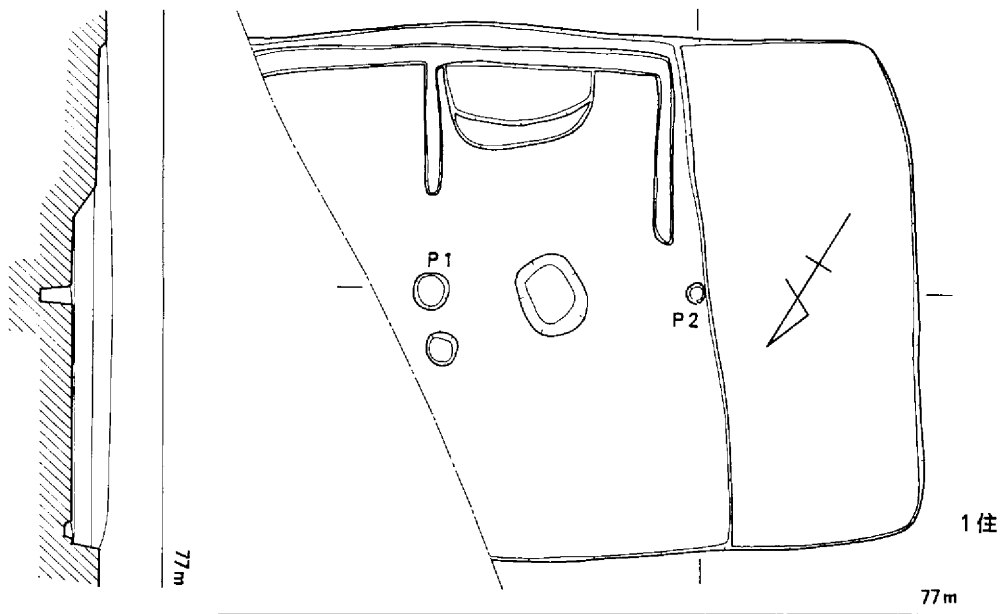
壺（16） ラップ状に開く口縁とそろ盤玉状の胴部からなっており、底部は丸底となる。外面はハケ目で下半部を研磨で仕上げ、内面はハケ目とナデで調整する。口径は10.6cm、器高16.2cmを測り、色調は淡灰赤色で胎土に細い砂粒を含み焼成は良好である。

高杯（15） 杯部のみの検出で、口縁は大きく開き、下部に強い段をなす。内外面とも細い研磨によって仕上げられる。口径20cm、現高13cmを測り、色調は茶褐色を呈し、胎土に荒い石英粒が目立つ。

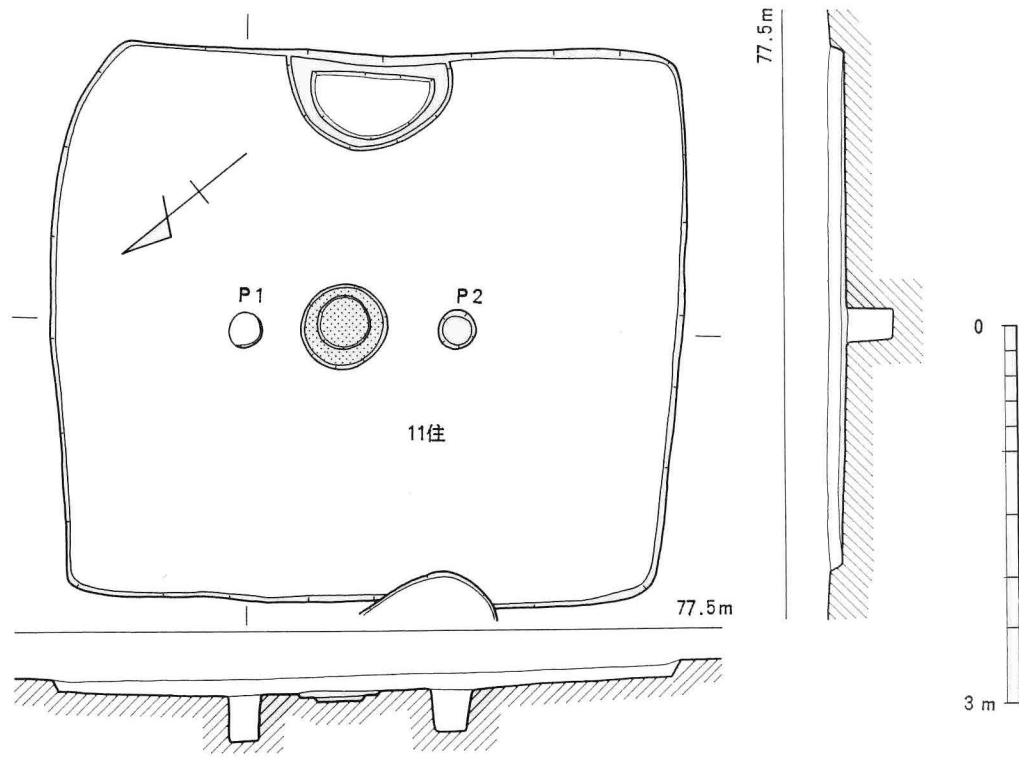
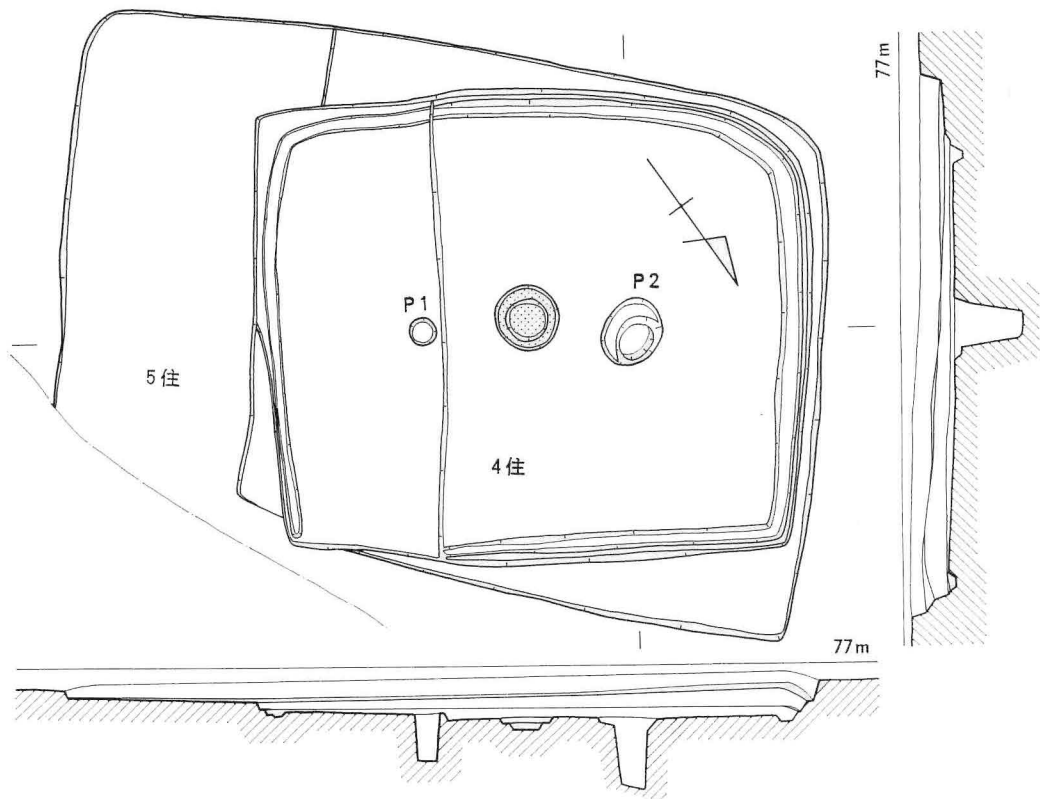
18号住居跡出土土器（図版25、第73図）

甕（14） 口縁は大きく外反し、胴部の張りは弱いもので、内外面ともハケ目で仕上げられる。口径13.6cm、現高10cmを測り、色調は赤褐色で焼成、胎土とも良好である。

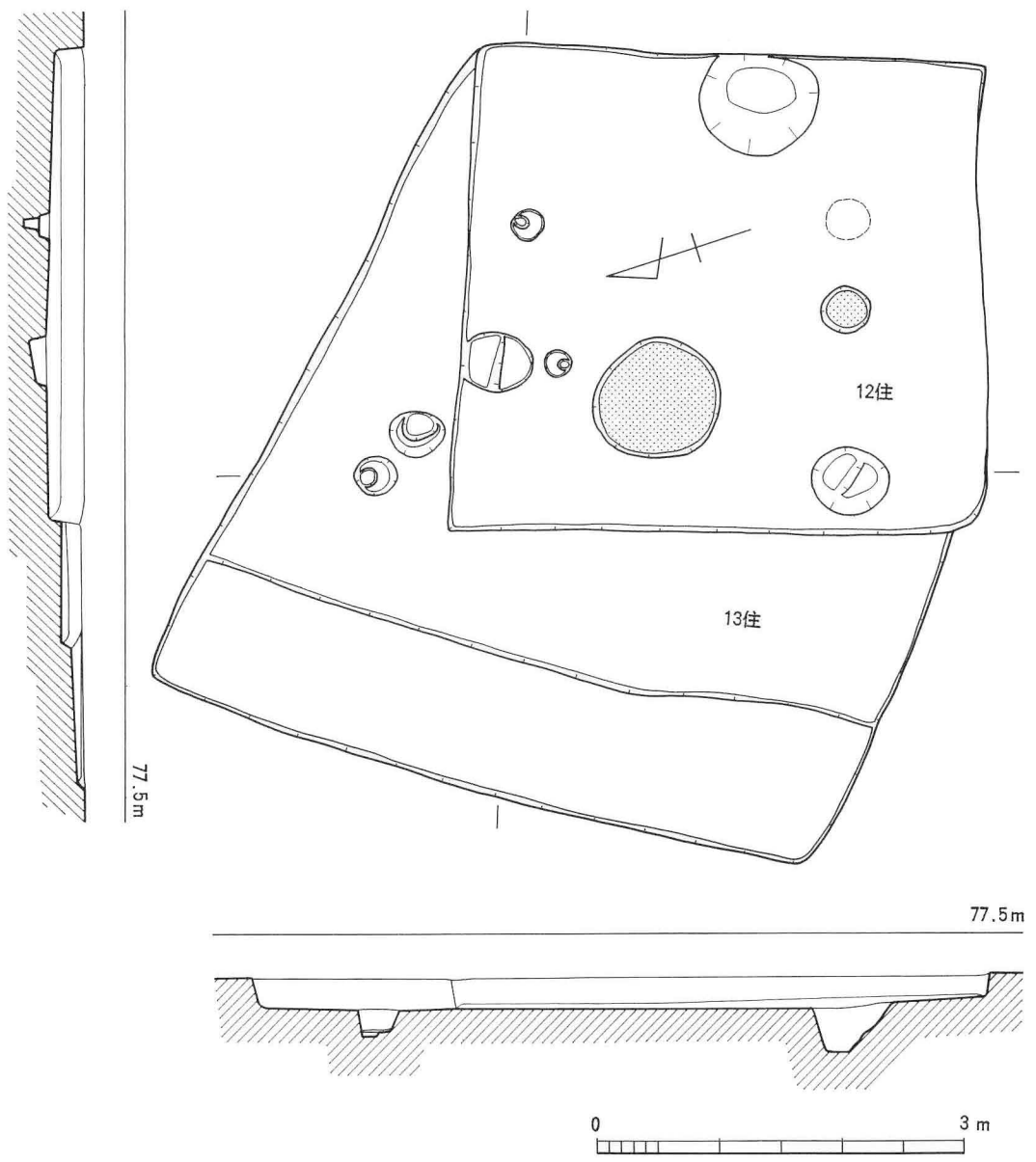
小型丸底壺（17） 口縁部が大きく開き広口の感を呈すもので、底部は丸底である。口径10.2cmを測り、色調は淡灰黄で胎土に砂粒を含み、内外面をナデによって仕上げる。



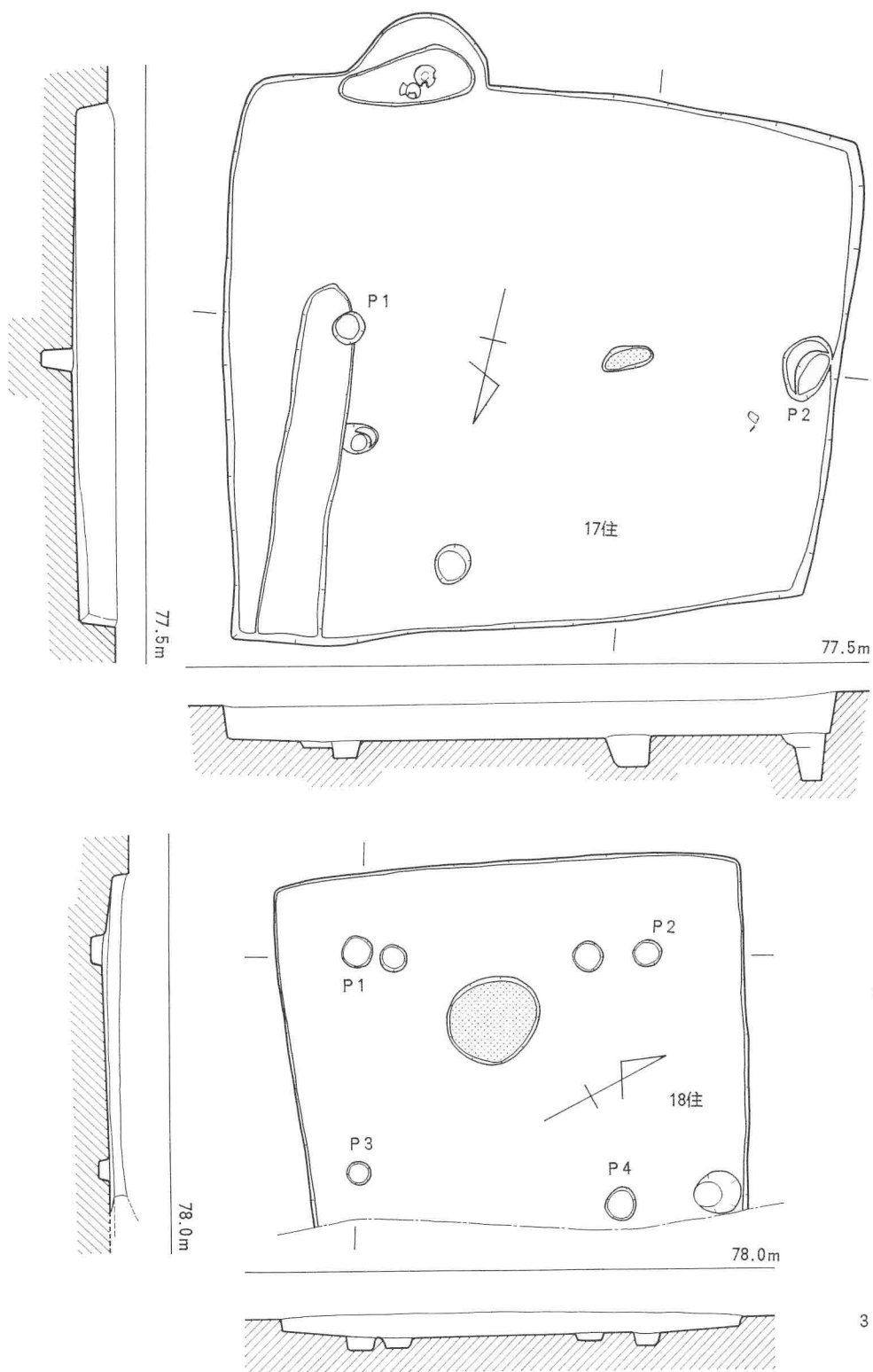
第68図 1・2住居跡実測図(1/60)



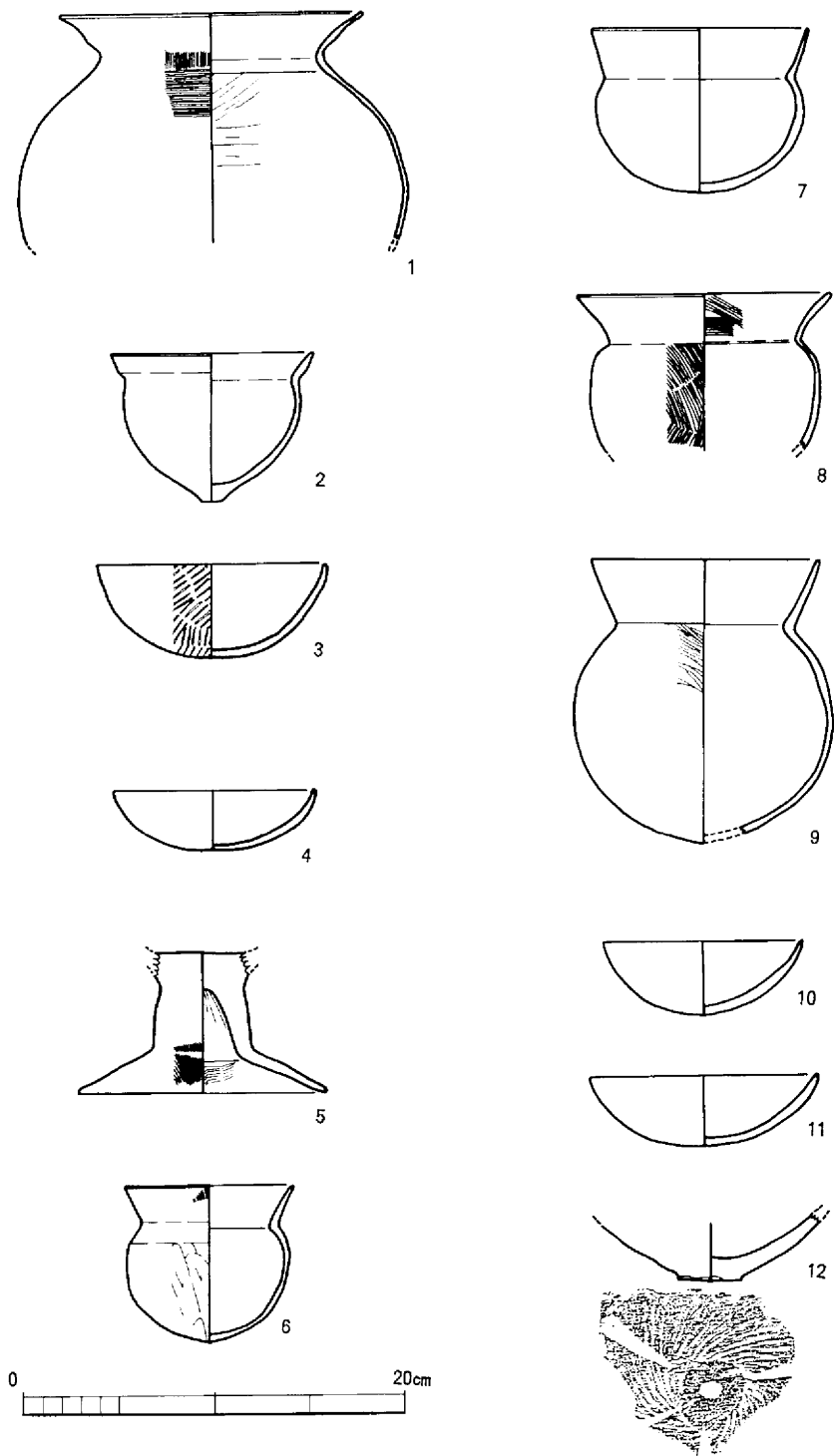
第69図 4・5・11住居跡実測図 (1/60)



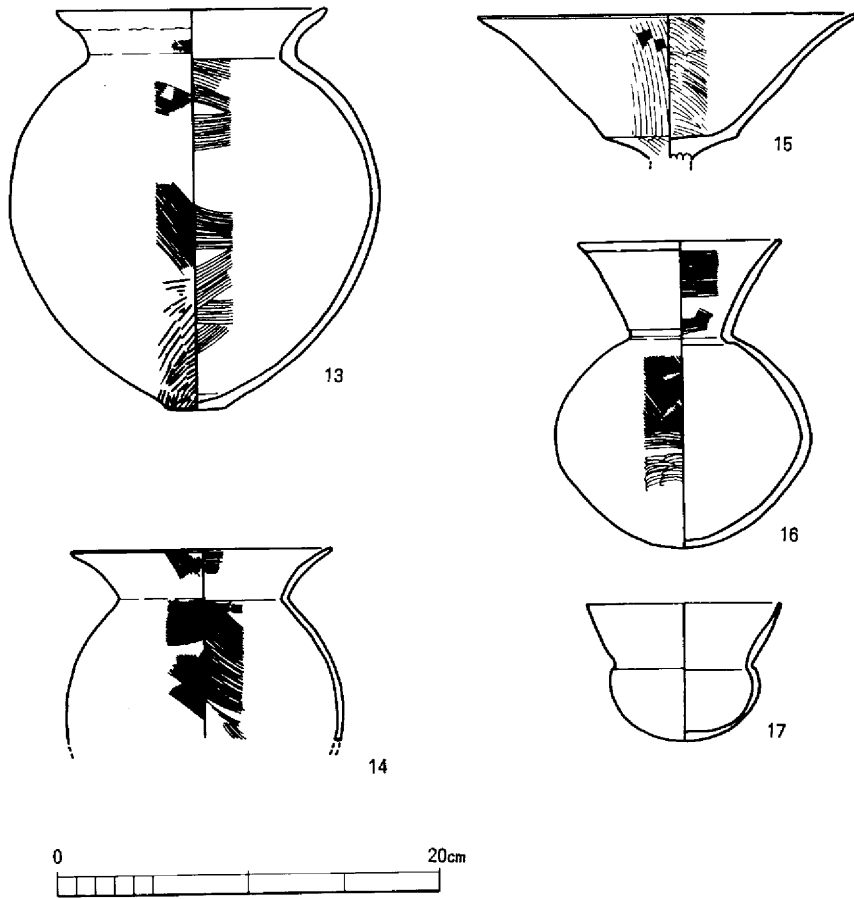
第70図 第12・13住居跡実測図（1/60）



第71図 17・18住居跡実測図(1/60)



第72图 住居跡出土土器实测图 1 (1/4)



第73図 住居跡出土土器実測図2(1/4)

B 墓群と遺物

箱式石棺墓

総数は8基であるが、2基は削平のため崩壊している。墓壙には一段掘込と二段掘込の例があり石材等でも異なる点が見受けられる。

1号墓(図版15、第74図) 一段掘込の墓壙中央に長さ96cm、幅18cmの大型の石材2面を頭位方向に配す。蓋石は削平のため失なわれている。なお側壁面より鉄剣が出土しており、床面や壁面からベンガラが検出された。

2号墓(第74図) 2枚の側壁を残すのみであるが、床面よりベンガラが検出された。

3号墓（図版15、第75図） 一段掘込の墓壇中央に花崗岩の細長い石材を縦方向に埋めて組み合わせている。頭位のみは、やや大型のものを横にして使用する。底部には自然石を混えた石材を敷いている。足位の棺外には高杯が埋設されていた。蓋石は5枚であるが、1枚を失っており総数6枚と思われる。内部よりベンガラが検出された。

4号墓（図版16、第76図） 二段掘込のもので墓壇の対角線上に壇を設けて棺を置くものである。石材は長方形のものを縦方向に使用し、棺外より土器が出土している。なお内部からベンガラが検出されている。

5号墓（第76図） かなり大形の石材を使用したと思われるが、詳細は不明である。

6号墓（図版15、第77図） 自然礫からなる標石が蓋の上部より検出された。墓壇は二段掘込で蓋石は4枚の加工した石材を使用するが、棺材は自然石を混える。

7号墓（第78図） 一段掘込の墓壇中央に棺を設ける。蓋石は細長い一部を加工した礫を、6枚使用したと思われるが、頭位の1枚は失われている。

8号墓（第79図） 二段掘込の墓壇中央の対角線上に壇を設け、中に棺を置く。大きさからして、小児用の小型棺と思われる。

木棺墓

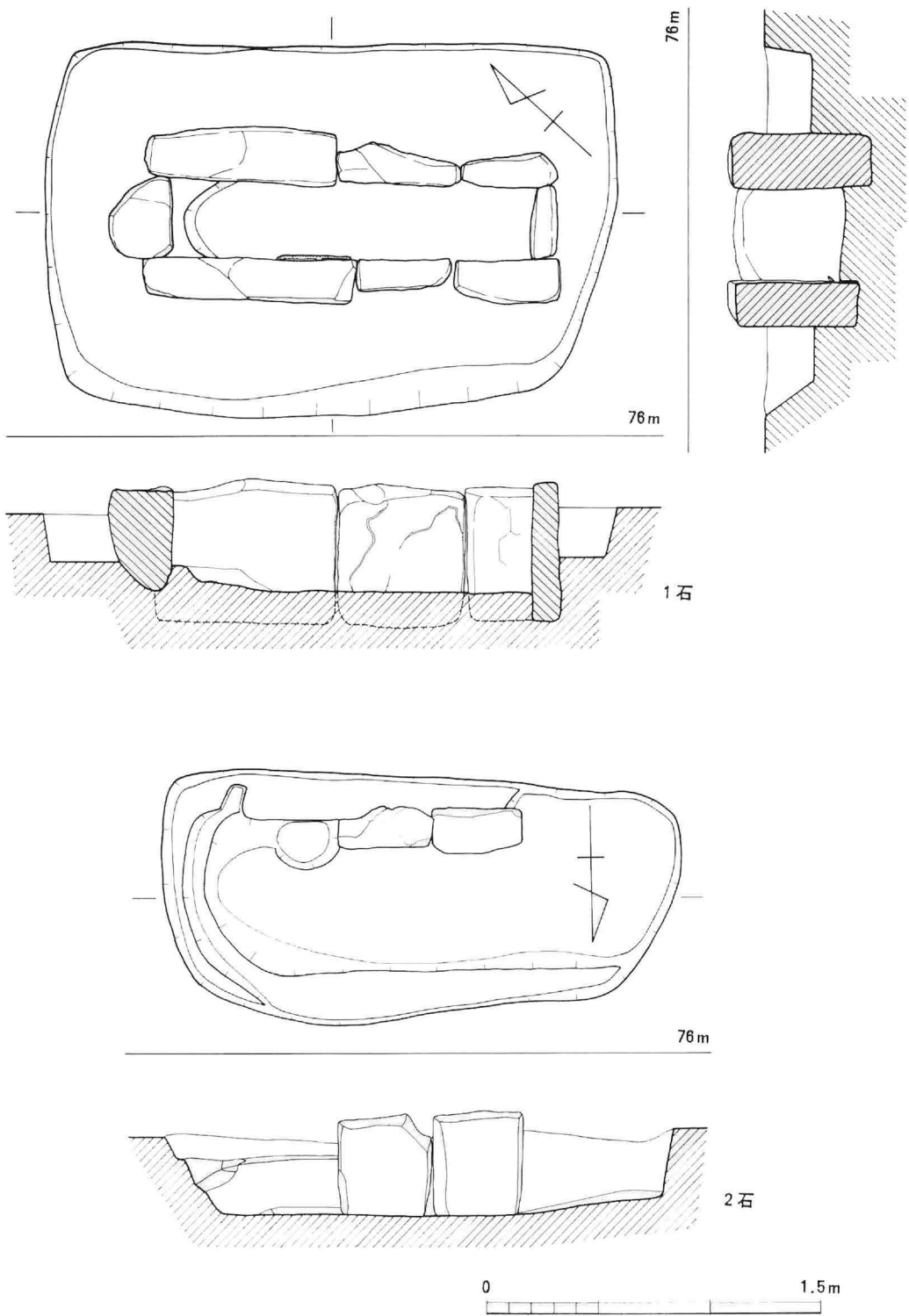
総数14基である。墓壇は一段掘込と二段掘込の例があり、2段のものは浅い点で裏込を必要とする構造であろう。棺の組合せ方法は、木口板と両側板で箱形を呈する棺を作るようである。一段掘込は、1号～3号墓（第80図）で、特に1号墓は墓壇の対角線上に棺を設ける。二段掘込の例は多いが、6号墓と7号墓（第81図）、9号墓（第82図）、11号墓（第83図）は大型で棺自体がかなりの長さを呈したと思われる。また、12号墓（第83図）は小児用の可能性が高い。大半はベンガラが検出されており、8号墓（図版14、第82図）はベンガラを入れた甕や高杯、砥石を副葬し、10号墓（第82図）はベンガラを入れた鉢を枕のように使用したようである。

土壇墓

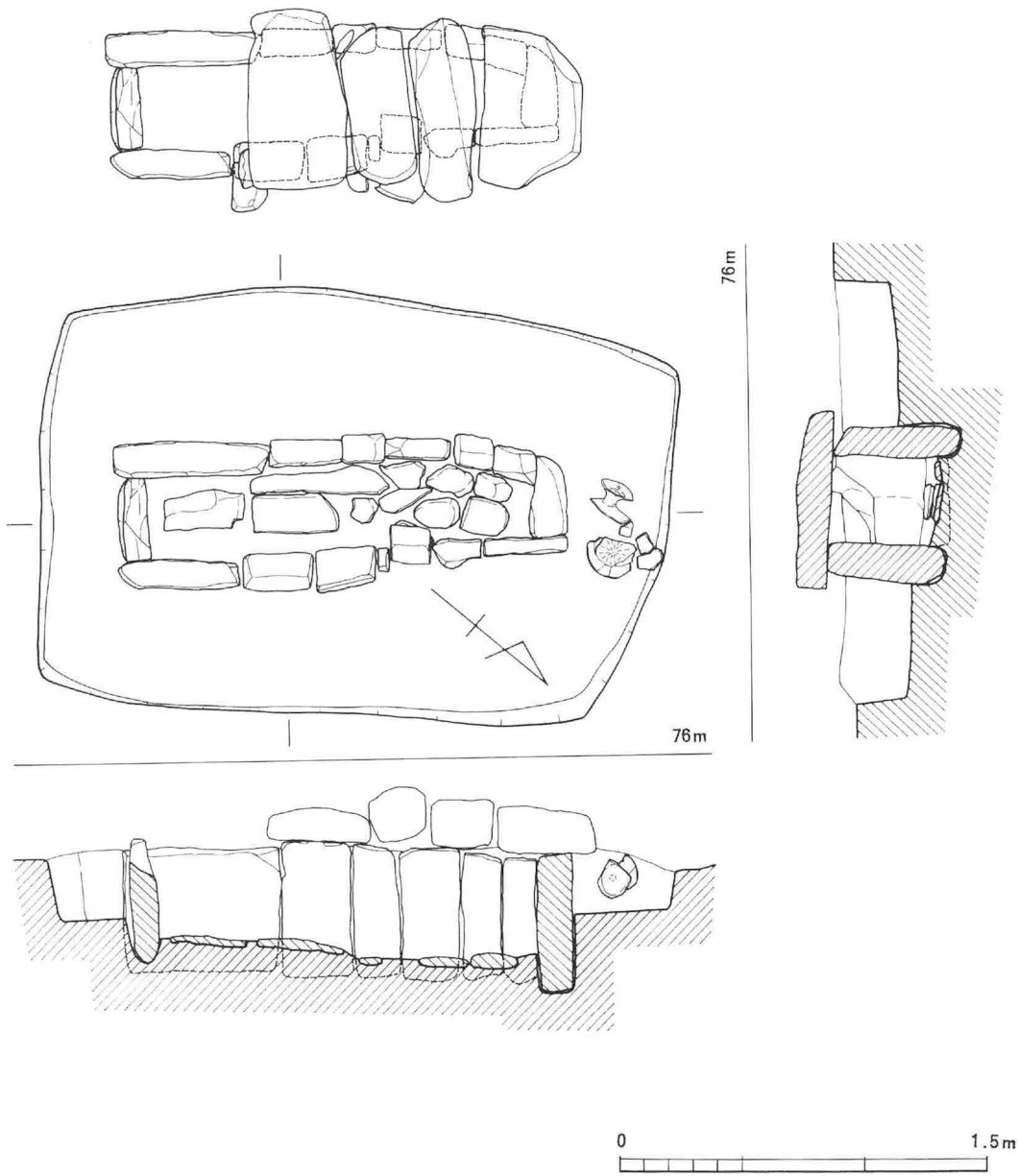
総数は9基で、一段掘込例が大半を占める。4号墓（第84図）のみは2段以上の掘込構造の可能性が高い削平のため詳細は不明である。2号墓（第84図）ではベンガラを入れた鉢を頭位方向に置いており、あたかも頭の上に置いた感を受ける。

甕棺墓（図版16、第85図）

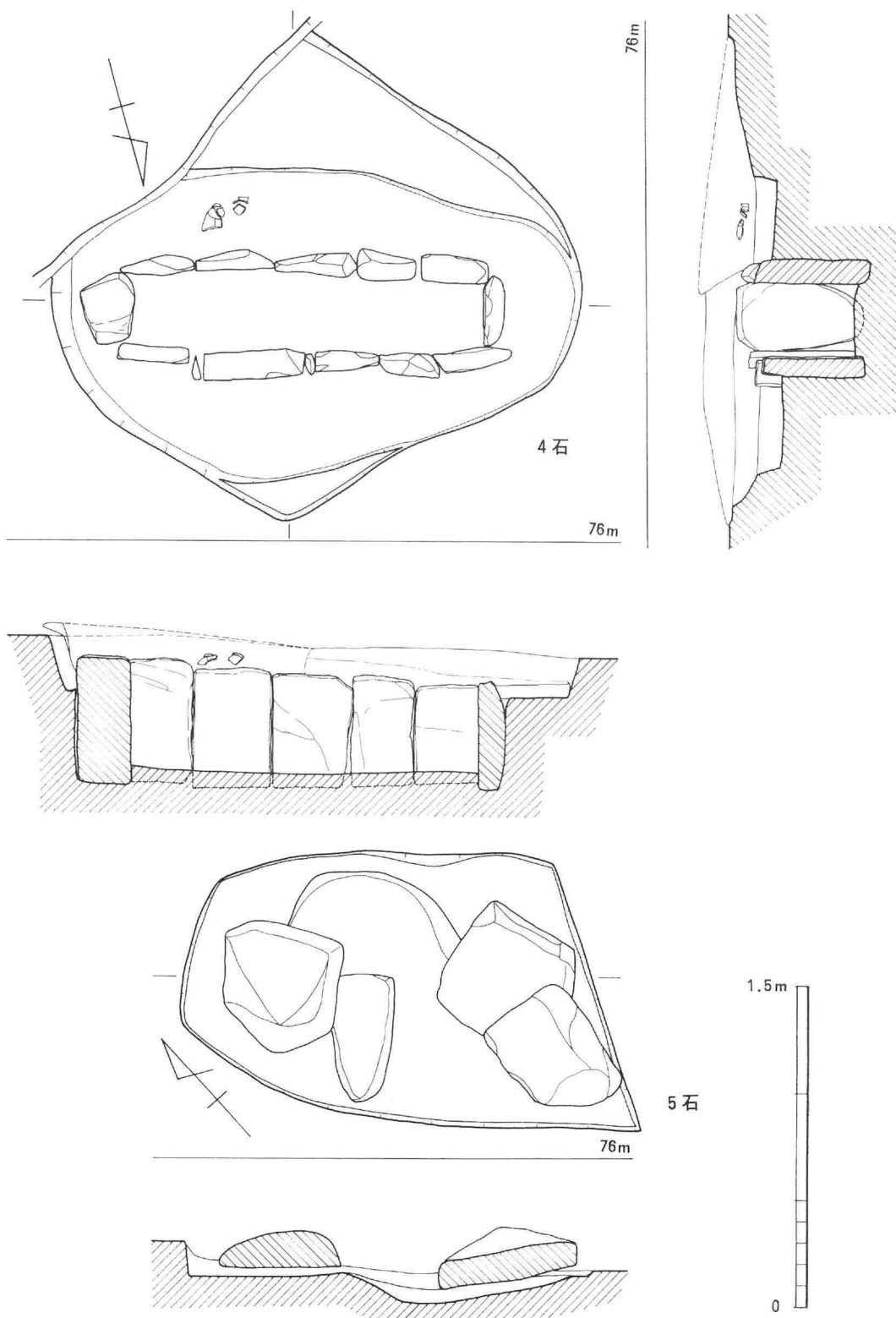
1基のみ検出された。円形の墓壇内に、突端を巡らした大型甕を2点合せ口式に埋置しているが、上甕は削平のため失われている。内面にはベンガラが塗られている。下甕の口縁付近に長方形の石があって、標石として使用されたようである。墓壇の径は1.1m、深度55cmで棺は現長72cmを測る。



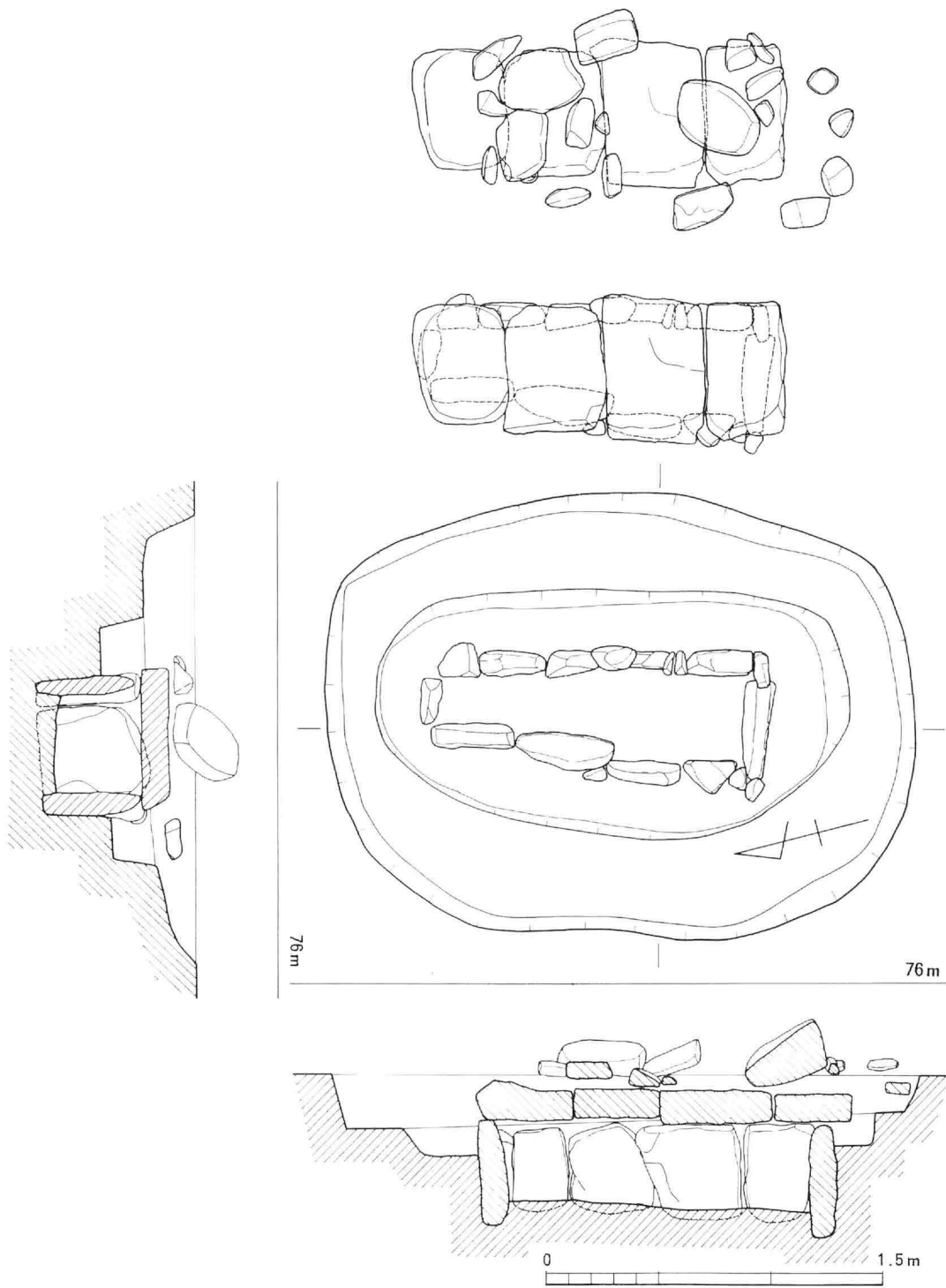
第74図 1・2号石棺墓実測図（1/30）



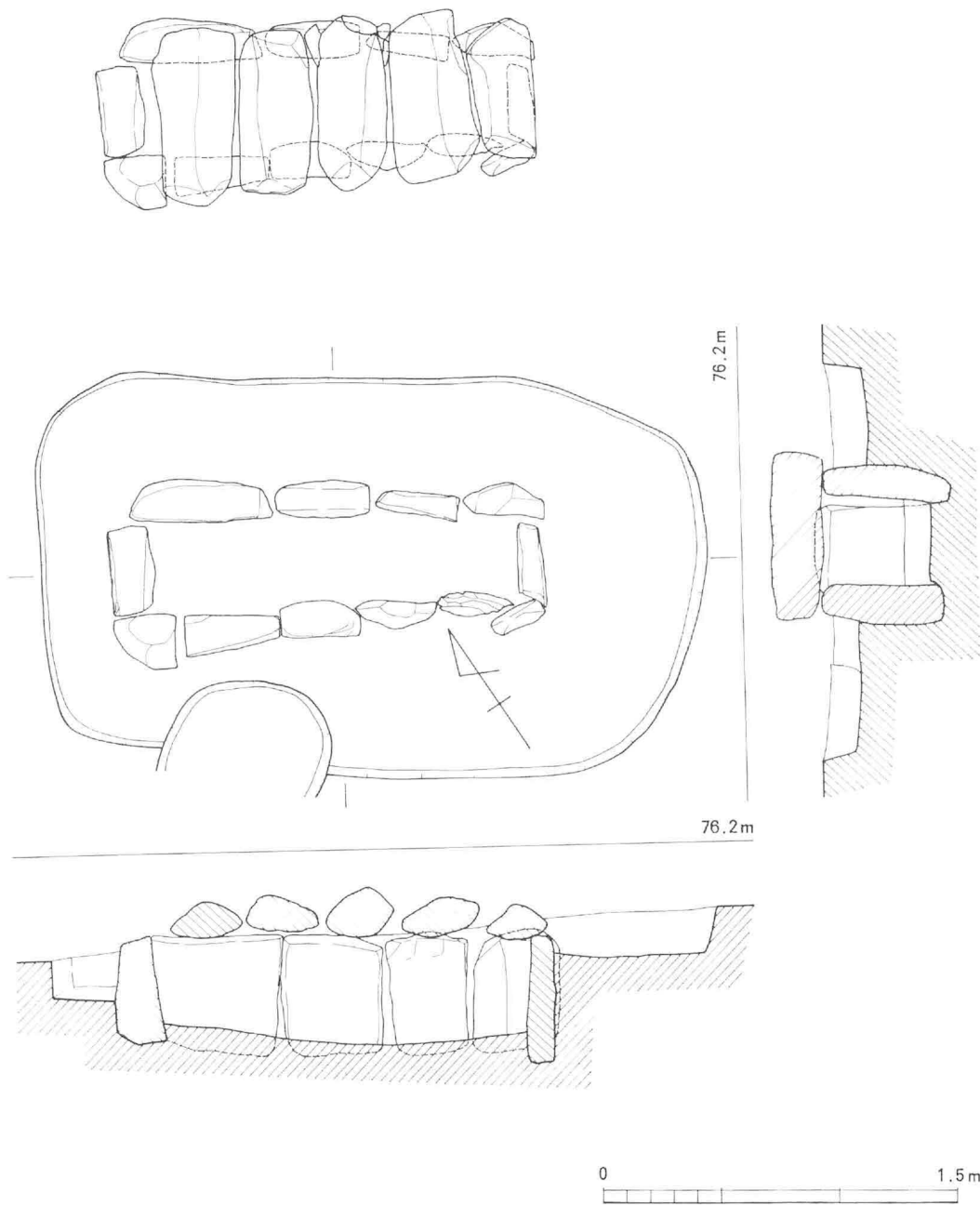
第75图 3号石棺墓实测图(1/30)



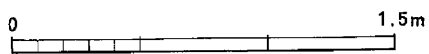
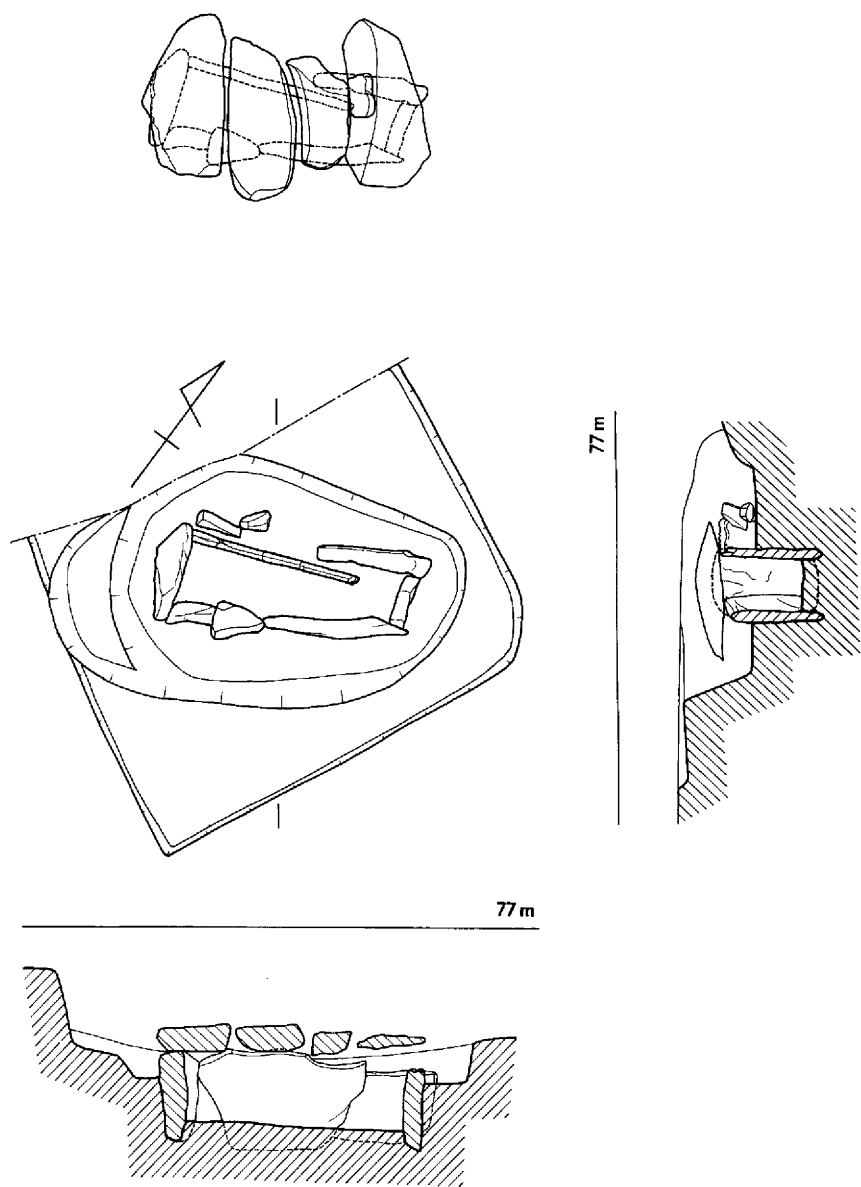
第76図 4・5号石棺墓実測図(1/30)



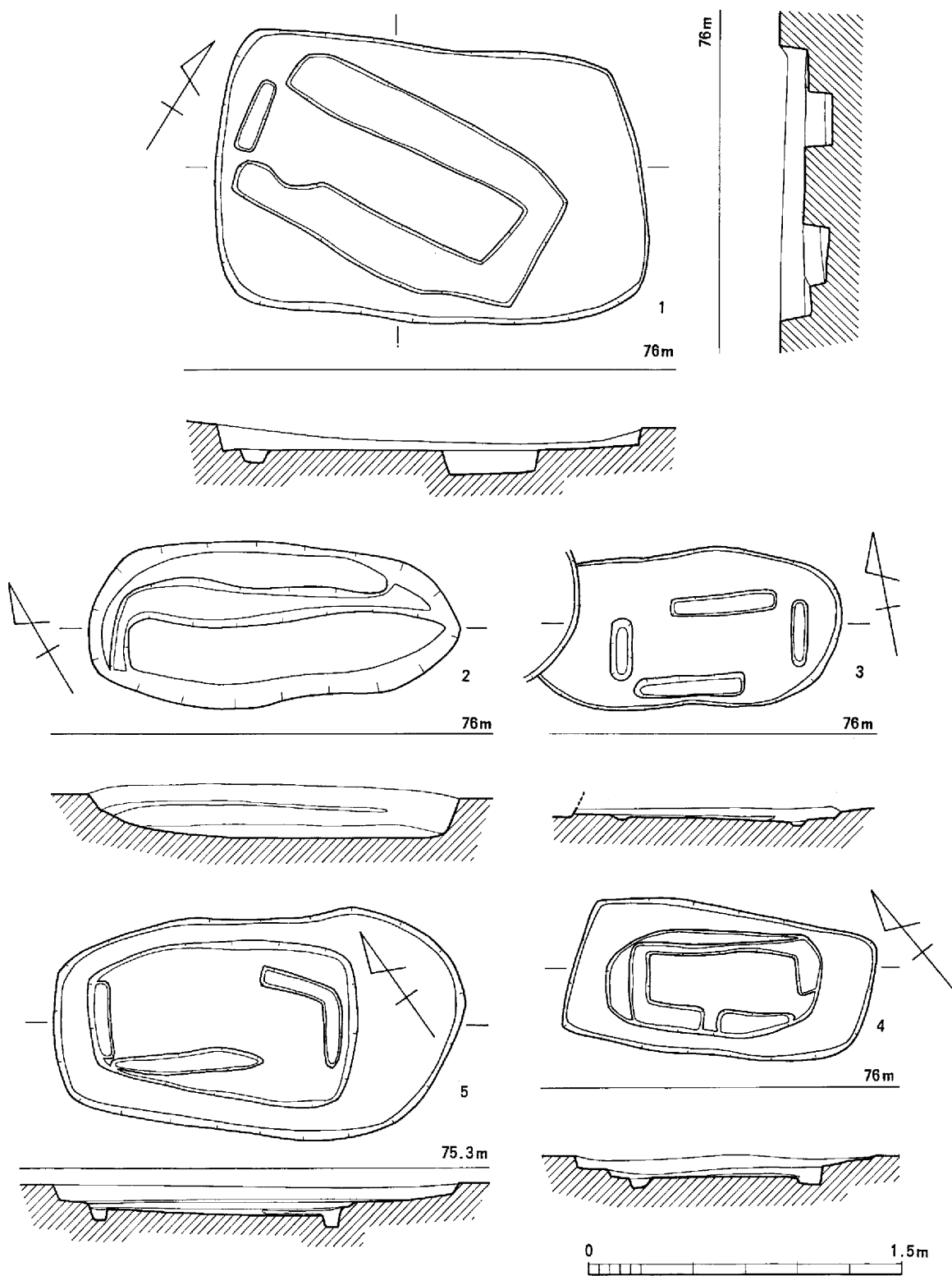
第77图 6号石棺墓实测图(1/30)



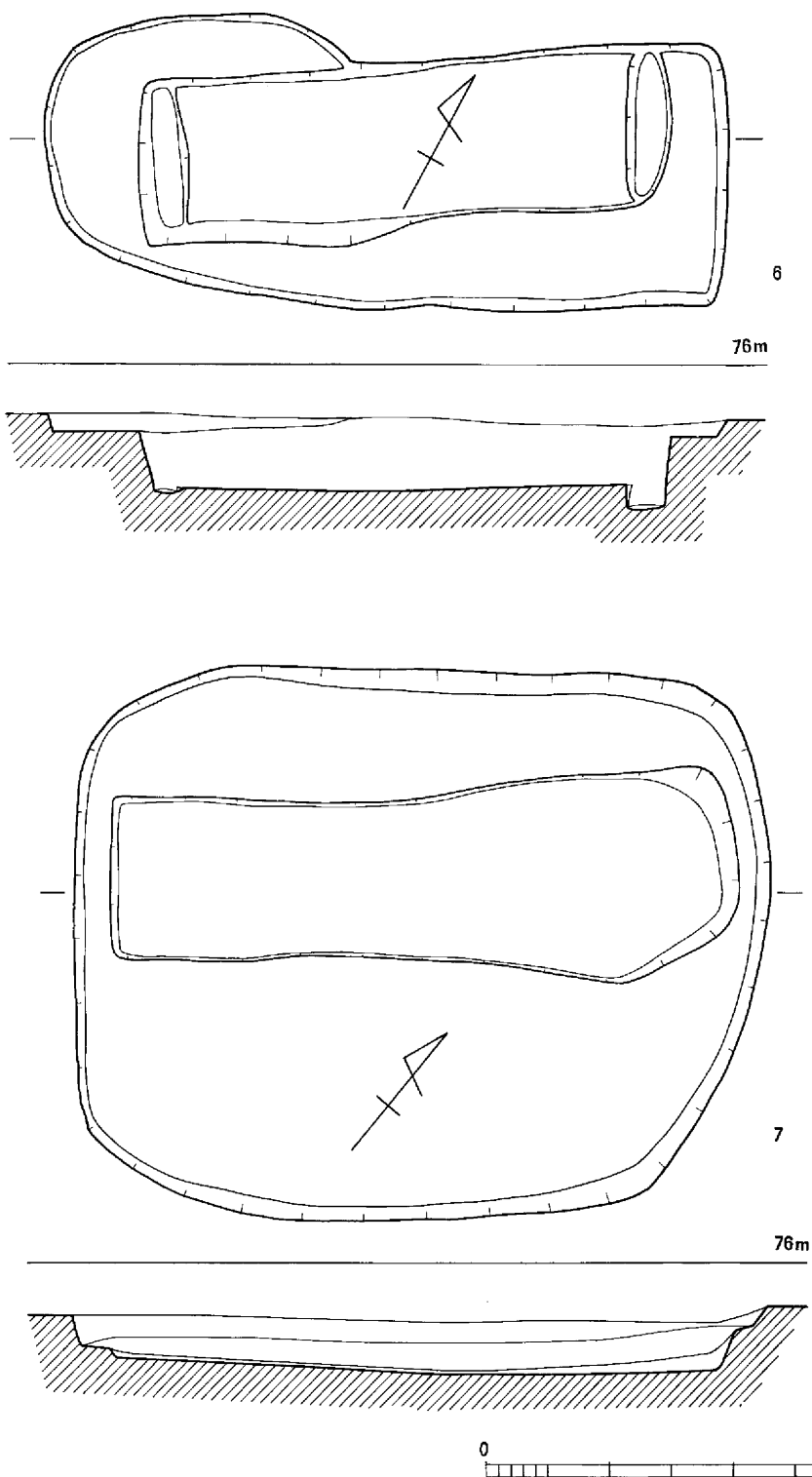
第78图 7号石棺墓実測図(1/30)



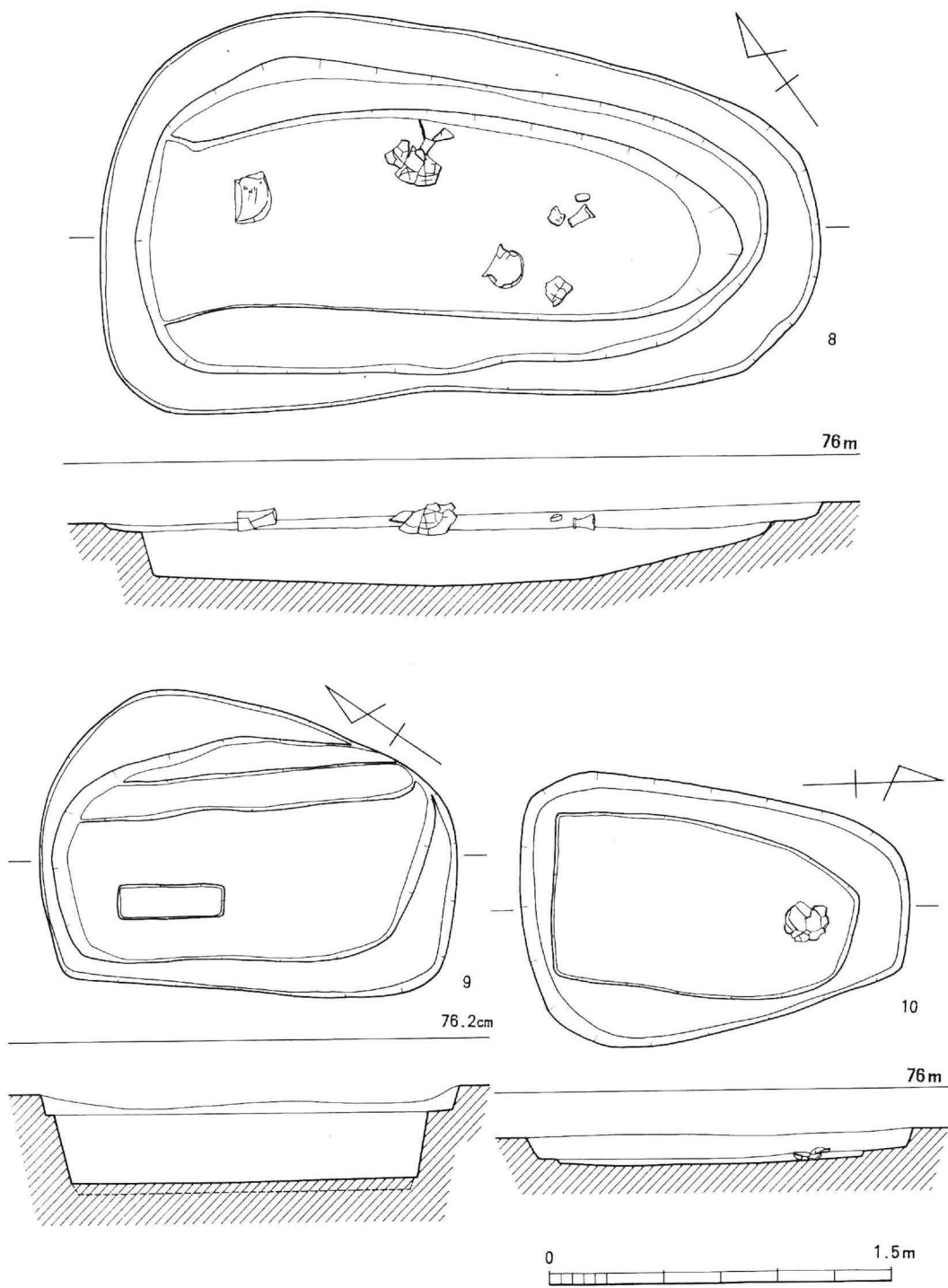
第79图 8号石基实测图(1/30)



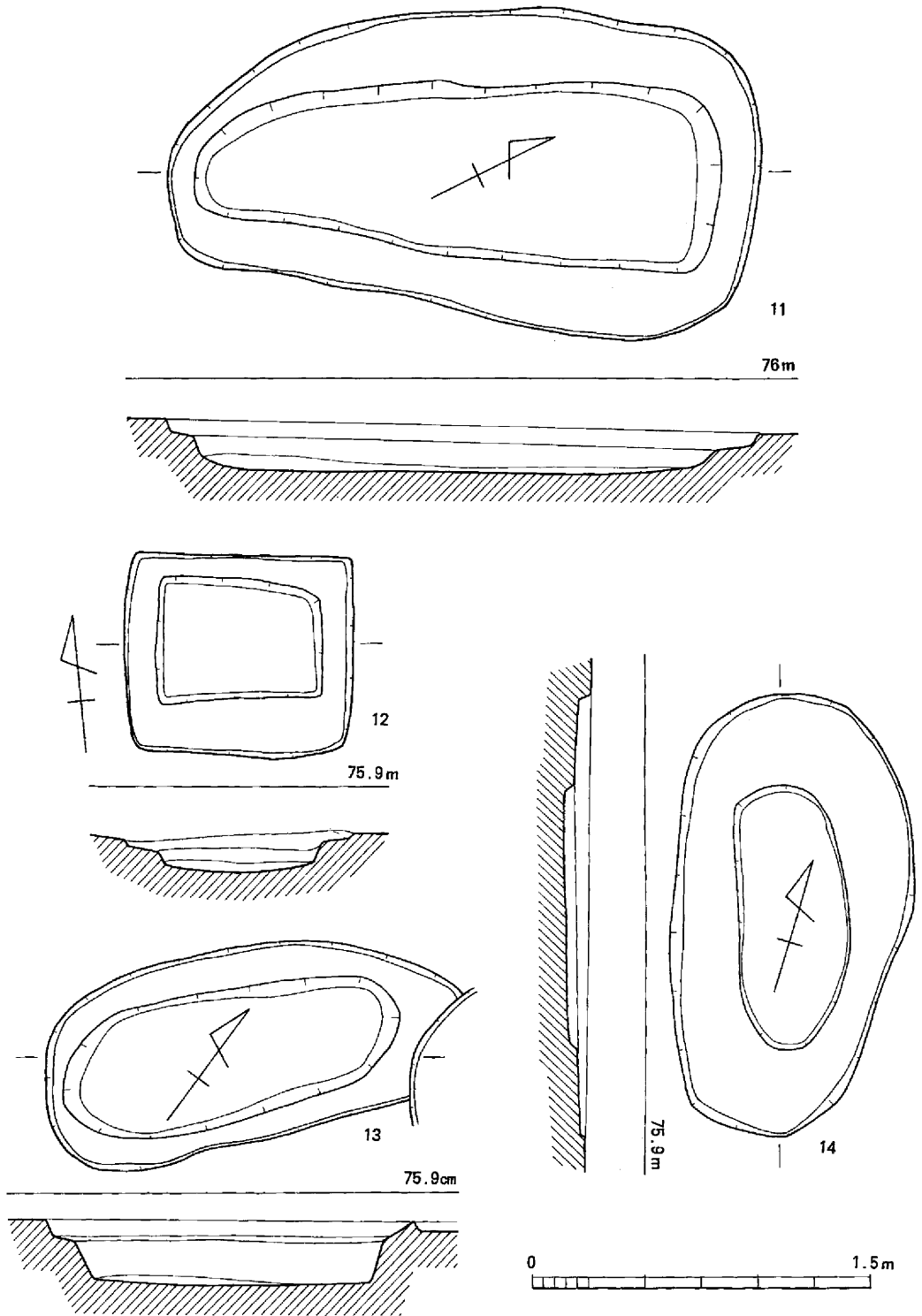
第80图 1 ~ 5号木棺墓穴测图 (1/30)



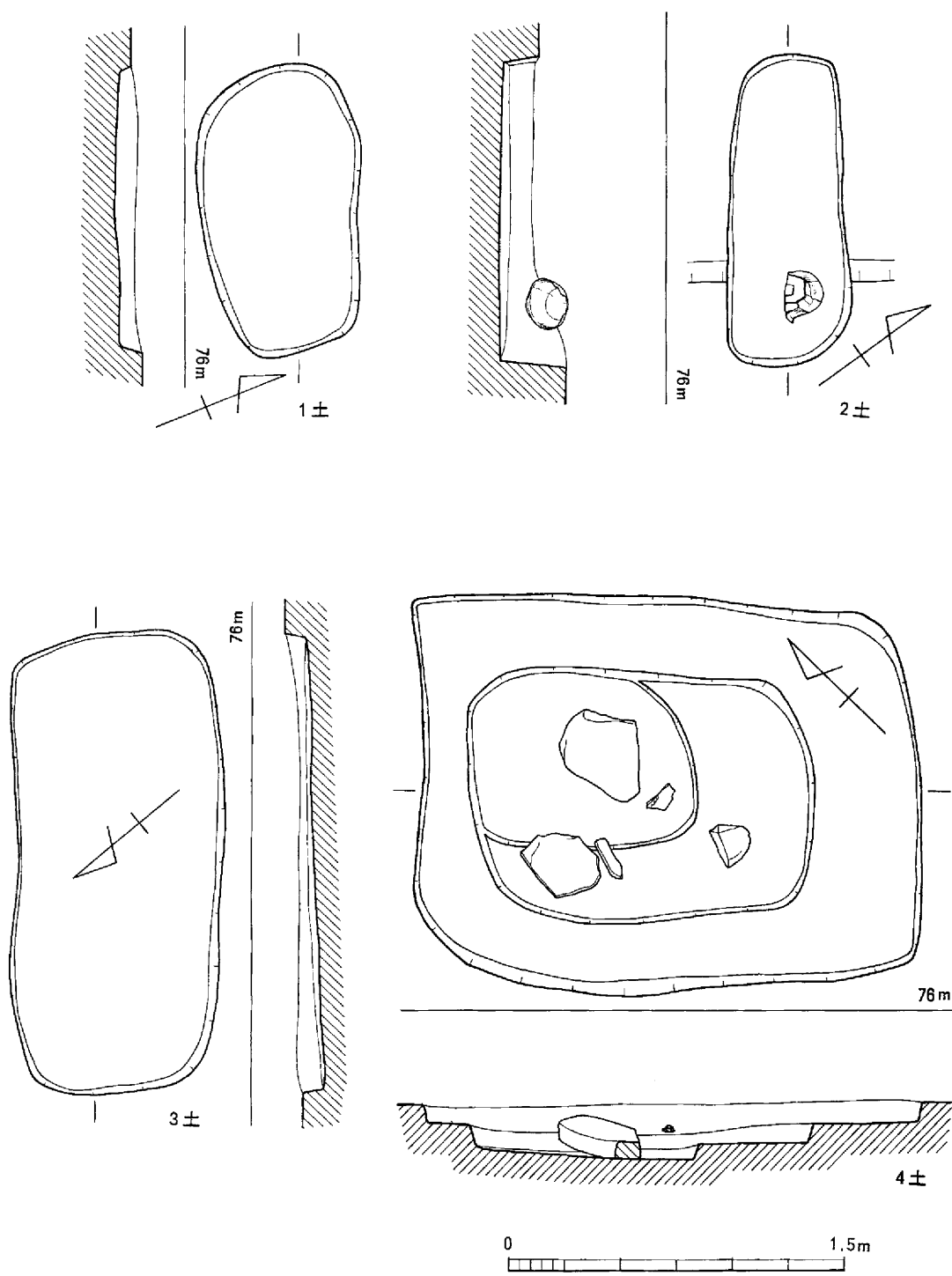
第81图 6·7号木棺墓实测图



第82图 8 ~ 10号木棺墓实测图 (1/30)



第83图 11~14号木棺墓实测图 (1/30)



第84图 1~4号土坑墓实测图 (1/30)

第10表 箱式石棺墓一覧

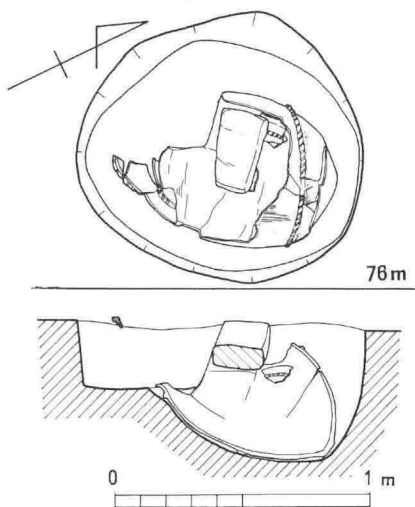
No.	主軸方位	頭位	丹彩	蓋石数	右壁数	左壁数	主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1	N-42°-W	北西	○		3	3	161	32	32	50	
2	N-93°-E	東	○							47以上	
3	N-42°-W	東	○	4+1	6	7	155	33	21	47	
4	N-70°-W	東	○		3	7	162	32	29	48	
5	N-46°-W										
6	N-10°-W	南		4							標石あり
7	N-42°-W	北西		5+1	4	6	153	39	34	45	
8	N-126°-W	西		4	2	3	85	23	19	28	

第11表 木棺墓一覧

No.	種別	主軸方位	墓壇の規模		棺の内法			木棺の場合				備考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	木	N-60°-W	205	135	125	33	13.0	○	○			
2	木	N-62°-W	178	80	150	26	15.0	○	○			
3	木	N-82°-W	126以上	74	76	28	5.0	○	○			
4	木	N-52°-W	145	74	70	27	8.0	○	○			
5	木	N-54°-W	194	105	101	32	9.0	○	○			
6	木	N-68°-E	277	101	177	58	25.0	○				
7	木	N-50°-E	282	224	243	62	12.0					
8	木	N-84°-W	316	168	240	84	24.0					
9	木	N-38°-W	183	126		30	30.0		○			
10	木	N-24°-E	171	110	130	74	2.0					
11	木	N-44°-E	264	136	218	66	12.0					
12	木	N-86°-W	102	90	67	47	10.0					
13	木	N-60°-E	162以上	89	138	52	18.0					
14	木	N-40°-E	199	108	113	45	5.0					

第12表 土墳墓一覧

No.	種別	主軸方位	墓壇の規模		棺の内法			木棺の場合				備考
			長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口の掘込み	側板の掘込み	側板の切込み	裏込	
1	木	N-68°-W			124	65	9.0					
2	木	N-74°-W			133	47	14.0					
3	木	N-53°-W			201	86	7.0					
4	木	N-60°-W	223	179								棺の内法不明
5	木	N-50°-W			150	90	9.0					
6	木	N-78°-W			140以上	70						
7	木	N-80°-E			75	40	9.0					
8	木	N-63°-W			80	40						
9	木	N-74°-E			80	50						



第85図 甕棺墓実測図（1/30）

遺物

3号墓石棺墓出土土器（図版26、第86図）

高杯（1・2） 口縁は直口气味に立ち上がり、杯部に段を有し、脚部は短脚となり、3孔を有す。調整は内外面ともハケ目の後に研磨によって仕上げられており暗文状に文様となる。色調は茶褐色で胎土、焼成ともに良好である。1の口径18.6cm、器高13.1cm、2の口径17.6cm、器高12cmを測る。

3号石棺墓出土土器（第86図）

壺（3・4） 3は直口する口縁を有し、口径12cm、現高6cmを測り、内外面ともハケ目で仕上げる。4はくの字口縁で頸部に刻目突帯を配する。口径25.6cm、現高6cmを測る。

碗（5） 口径15.4cm、器高6cmを測る。胎土に荒い石英粒が目立つ。

8号木棺墓出土土器（図版26、第86図）

高杯（6） 外反する口縁の下部に段を有し、脚は長脚である。口径29.8cm、器高19.7cmを測り、外面はハケ目と強いナデ、内面はナデによって仕上げられる。

甕（7） 口縁が外反し、底部は丸底となるもので厚手の器壁を呈す。内外面ともハケ目で仕上げられ、内面にはベンガラが残る。口径14.4cm、器高15.5cmを測る。

10号木棺墓出土土器（図版26、第86図）

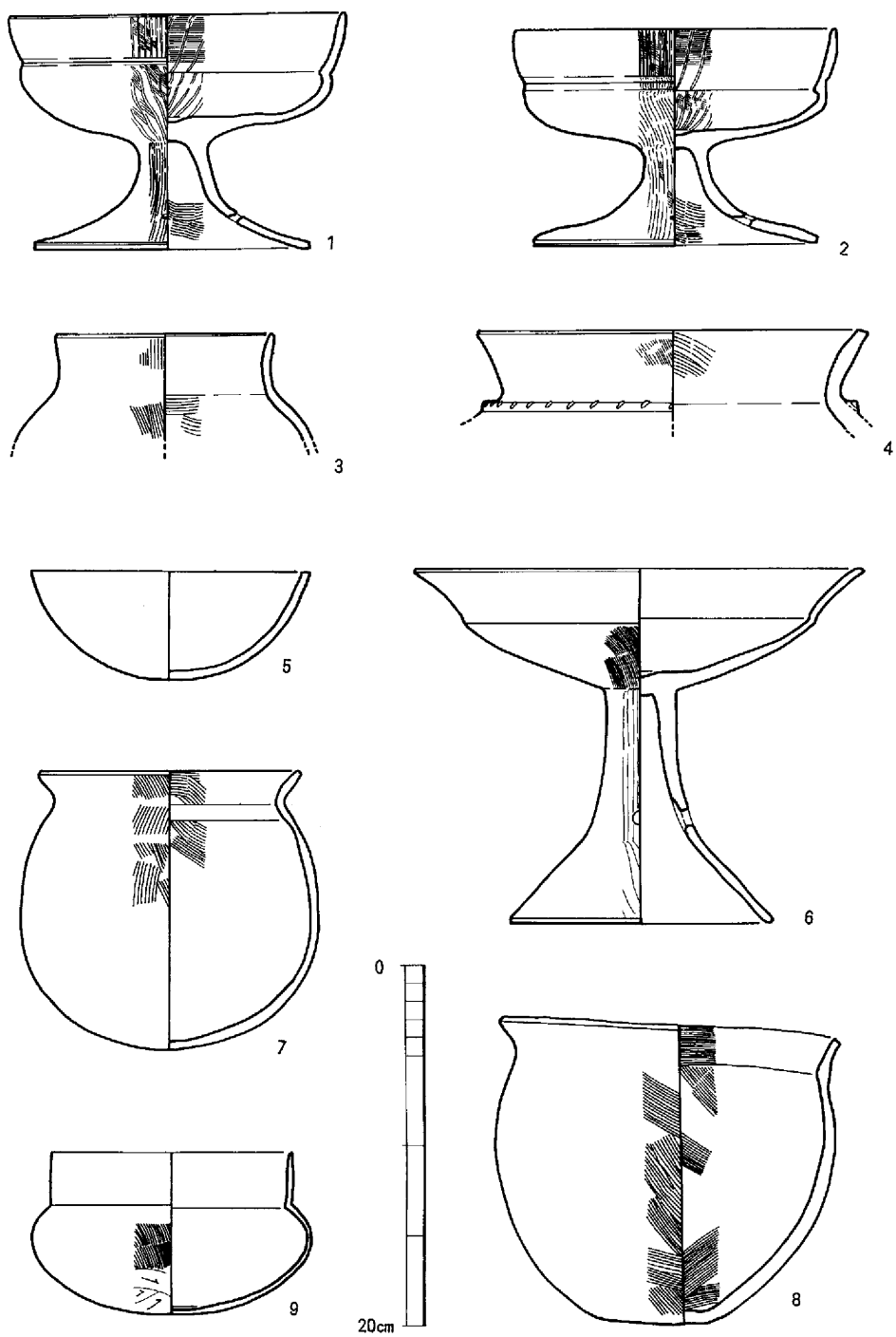
鉢（9） 丸底で口縁の直立するものである。口径23.3cm、器高9cmを測り、外面はハケ目とヘラ削り、内面はナデによって仕上げられる。

2号土壙墓（図版26、第86図）

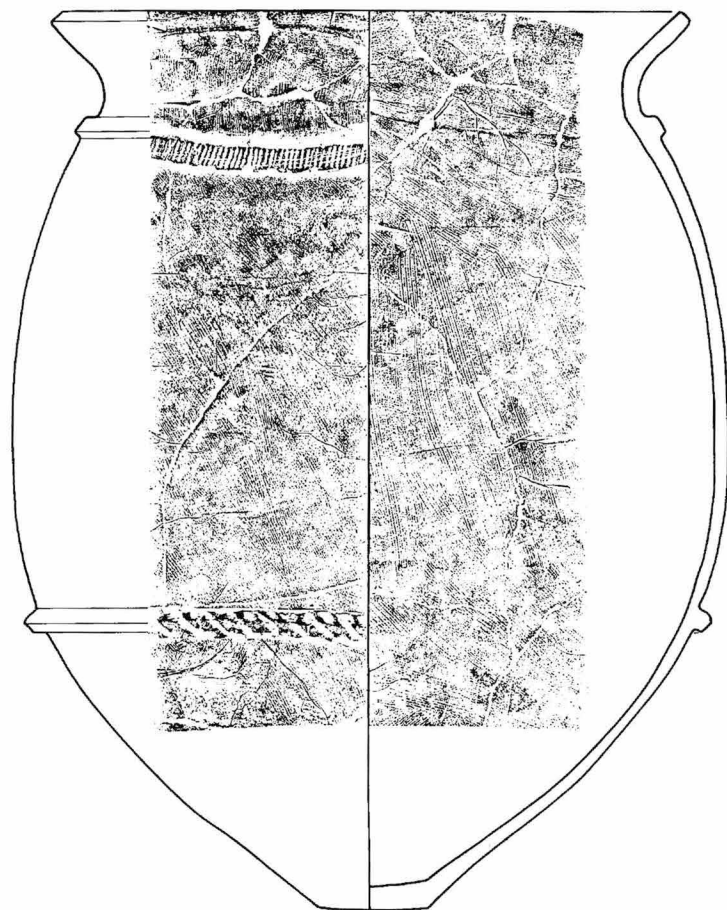
鉢（8） 口縁が外反し、底部は平底である。口径18.8cm、器高17.2cmを測る。器壁は厚手で内外面ともハケ目で仕上げられ、内面にはベンガラが残る。

1号甕棺（図版26、第87図）

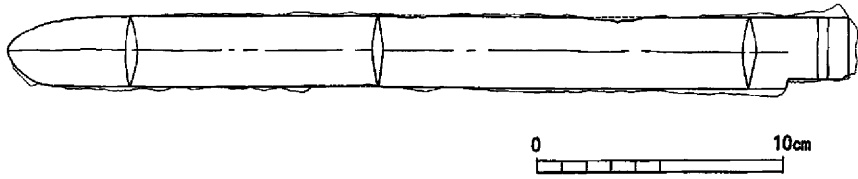
上甕は口縁の一部のみであるが、くの字口縁で頸部に刻目の突帯を配し、外面はナデ、内面はハケ目で仕上げられる。口径は52cmを測る。下甕はくの字状口縁で頸部には細い刻目の帯状の突帯を配し、胴下半には斜方向の荒い刻目を施した突帯を配す。底部はレンズ状の平底で、外面はタタキ目の後にそれを消すようにハケ目が施され、内面はハケ目で仕上げられる。色調は淡茶褐色で胎土に荒い石英粒を含み、焼はあまく軟質感を示す。



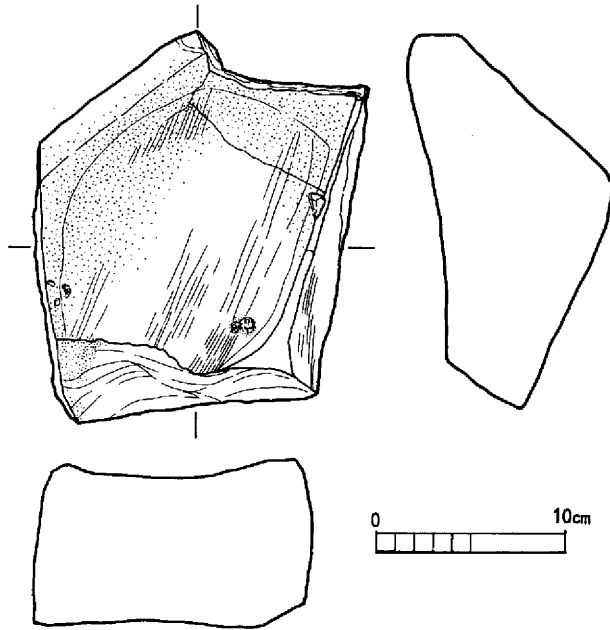
第86图 (石棺, 木棺, 土坑) 墓内土土器实测图 (1/4)



第87図 壙棺実測図



第88図 1号石棺墓出土鉄剣実測図(1/1)



第89図 8号木棺墓出土砥石実測図(1/4)

以上は土器の説明であるが、他に鉄剣と砥石について示す。鉄剣(図版32、第88図)は1号石棺墓の副葬品である。全長34cm、刃幅3cmであり、中茎は短い、切先は鋭く全体に薄手に仕上げられている。砥石(図版32、第89図)は8号木棺墓の副葬品である。砂岩製で2ヶ所を欠いているが、現長19.6cm、幅17.5cm、厚さ9.5cmを測る。使用面は表裏の2面に加え側面も使用する。特に赤色顔料が付着することから、顔料の製作に使用された可能性が高い。

小 結

住居群の時期は、出土土器によって求めることが出来よう。土器群は、その示す特徴からして、嘉徳編年におけるIV期にその位置が求められよう。また、他の住居には明確に弥生時代後期終末頃^(註7)に比定されるものがあり、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけて形成された集落跡であることが判明した。また、墓群は、その出土土器から住居群と同時期頃に形成されたものである。両遺構群の時期的併行と位置関係からして、集落内での居住地と墓地とが接して存在する例とすることが出来よう。ただし、それらの間には、何らかの施設を設けて二者を区分した可能性があり、墓地と居住の場との混同した関係は見受けられない。

土器群で注意すべき点としては、11号住居跡出土の畿内第5様式的な甕の底部や17号住居跡出土の甕を代表として、明らかに外来系土器群によって構成されており、墓群では、2号石棺墓出土の高杯2点が瀬戸内系の外来系土器であり、8号木棺墓が在地系土器である点で、両者の混在が見受けられる。また、^(註8)墓の構造として墓壇の対角線上に棺を設けるといった、豊前方面に見受けられる様式もある点で、特にこの時期における複雑な様相を示している。1点出土した甕棺は、福岡方面の西新式に近いもので、頸部突帯が帯状になり、底部はレンズ状の平底を呈すことから、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての時期に比定されよう。

4、第3地点の調査

ここは台地中央部に位置している。狭い範囲の調査であったが、竪穴住居跡1軒、土壇9基、溝状遺構やピット群が存在する。この中で特に竪穴住居跡からは、60個以上の一括土器群が検出されている。

A 遺 構

竪穴住居跡 (図版17、第92図)

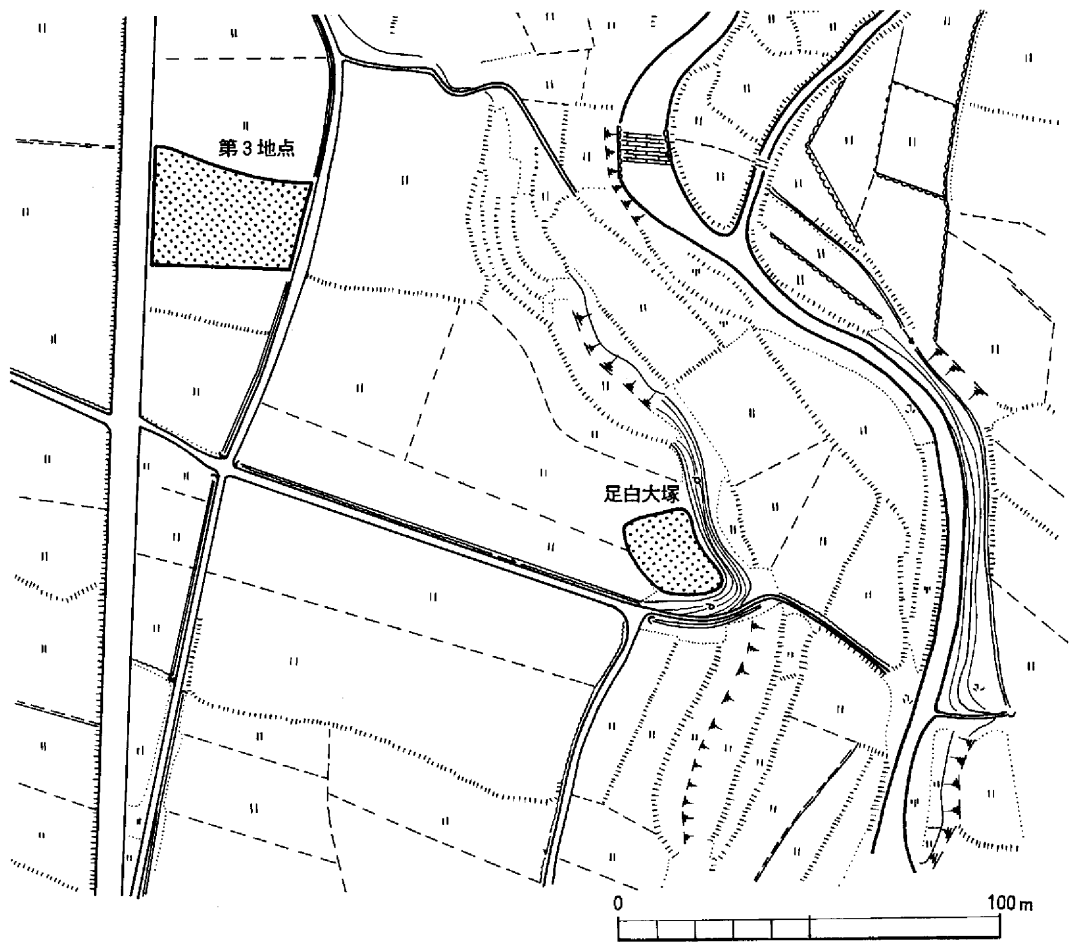
東西の長さ3.14m、南北の長さ6.28mで深度48cmを測る。柱穴は検出されたものが、P₁とP₂で中央に炉があり、4本柱の可能性が高い。東側壁面には屋内貯蔵穴が設けられている。

遺物の出土状況は特殊な様相を示す。竪穴住居の北東のコーナー部分に器台と壺を集中的に配した感を示す。壺は長頸が大半で中に倒立したものもある。特にコーナー部分は完形品に近いものが多く、単に廃棄したものではなく1つの祭祀的な配列を示すようにも思える。

B 遺 物

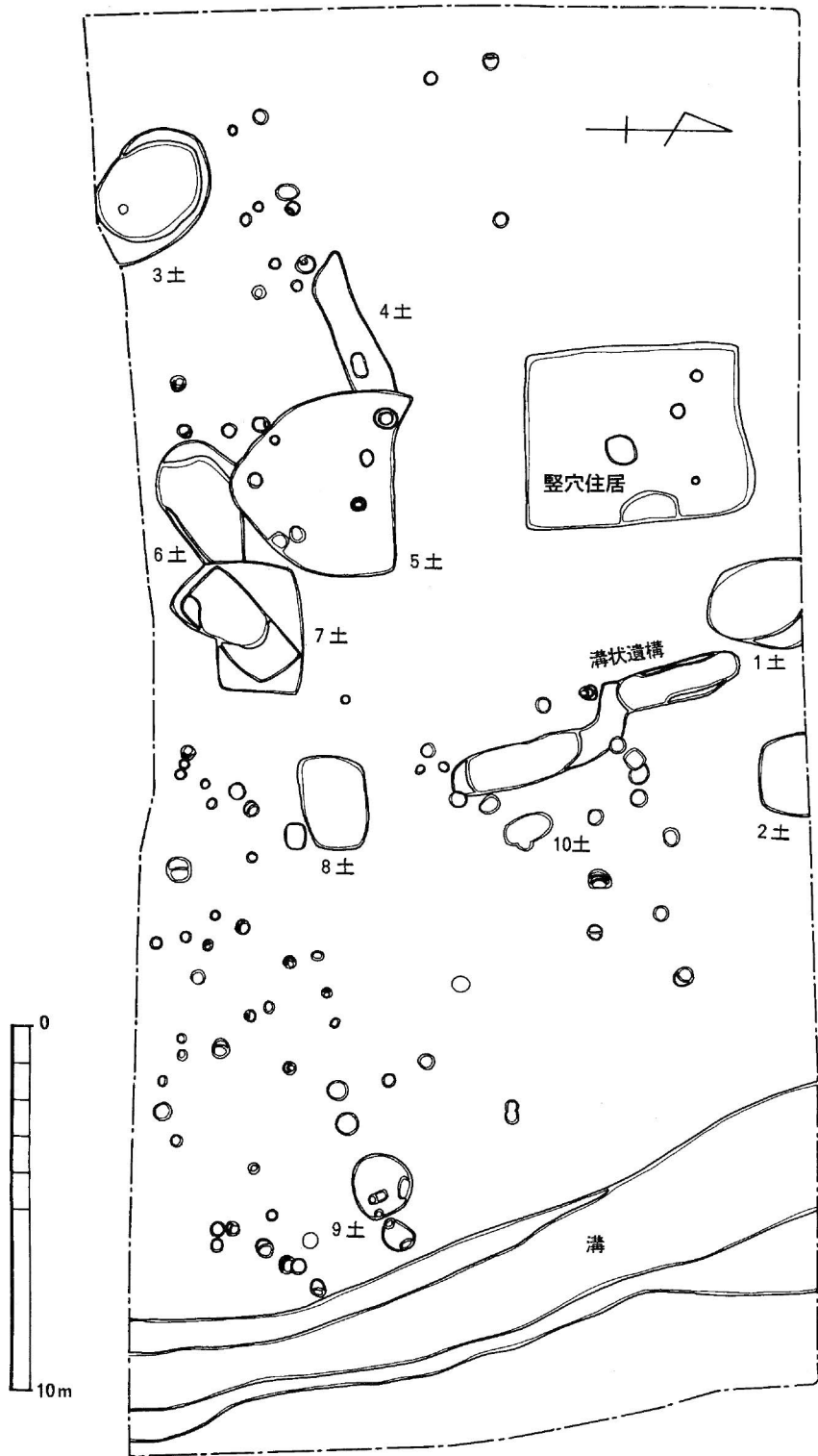
住居跡出土土器 (図版27～29、第93～97図)

長頸壺(1～6・10) 1はロート状に開く口縁で頸部はしまり、胴部は丸みをもって強く張っている。底部はレンズ状の平底で無整形である。内面の頸部と胴部の接合部は段を有す。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げる。2は口縁を欠き、肩部が最も張っていて底部は無整形の平底を呈す。胴中央に3cmの孔を有する。外面は強いナデ、内面はナデで仕上げる。3は直口する口縁と



第90図 調査地点地形実測図 (1/2,000)

肩部が最も張るタイプで、底部は無整形の平底を呈す。外面はヘラ状工具による強いナデ、内面はナデによって仕上げる。4は口縁が外反するもので、胴部が丸く張っており、底部は無整形の平底である。5は緩に外反する口縁を呈し、頸部は広がる。胴部は全体に丸みを呈し底部は無整形の平底で径が大きくなる。外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。6は口縁が外反し底部はしまっている。胴部は大きく張り出し底部は無整形の平底である。外面はハケ目で内面はナデによって仕上げられている。10はロート状に開く口縁で、頸部はしまっていて、断面三角形の突帯を2条配す。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。色調や胎土は共通しており、特に胎土は荒く花崗岩の細角礫を多く含み、金雲母も多い。焼は全体にあまく、軟質に近い。1は口径11.1cm、器高25.8cm、2は現高20.2cm 3は口径11.2cm、器高32cm、4は口径13.1cm、器高28.2cm、5は口径10.1cm、器高31.5cm、6は口径10.7cm、器高21.4cm、10は口径16cm、現高14.5cmを測る。



第91図 原田遺跡第3地点遺構配置図 (1/200)

直口壺（7） 器壁は全体に厚く、胴部は緩に張り出しており、底部は高く無整形の平底となっている。外面は荒いハケ目、内面はナデによって仕上げられ、口径7.4cm、器高18.5cmを測り、色調は黄褐色で胎土に花崗岩の細角礫を多く含み、焼はあまく軟質である。

二重口縁壺（8・11） 両者とも袋状口縁からの変化として把握可能なものである。8は頸部に三角状の突帯を有し、外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。11は直立した頸部と強く張り出した胴部に、無整形の底部が付く。内外面をナデによって仕上げている。8の口径11cm、現高10.7cmを測り、11は口径21cm、器高47.8cmを測る。両者とも色調は黄褐色で胎土に荒い石英粒を含んでいる。

短頸壺（9） そろ盤形の胴部と無整形の底部で、器壁は薄く出来ている。内外面ともナデによって仕上げられている。口径は8.6cm、器高12.6cmを測り、色調は薄黄褐色で胎土は細く良好であるが、焼きはあまく表面がサラサラしている。

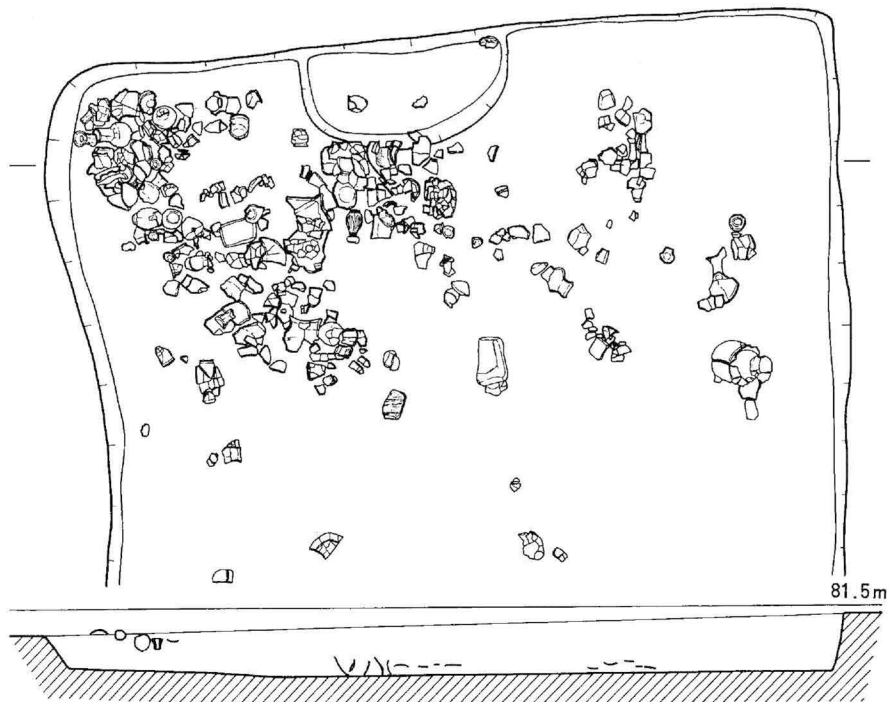
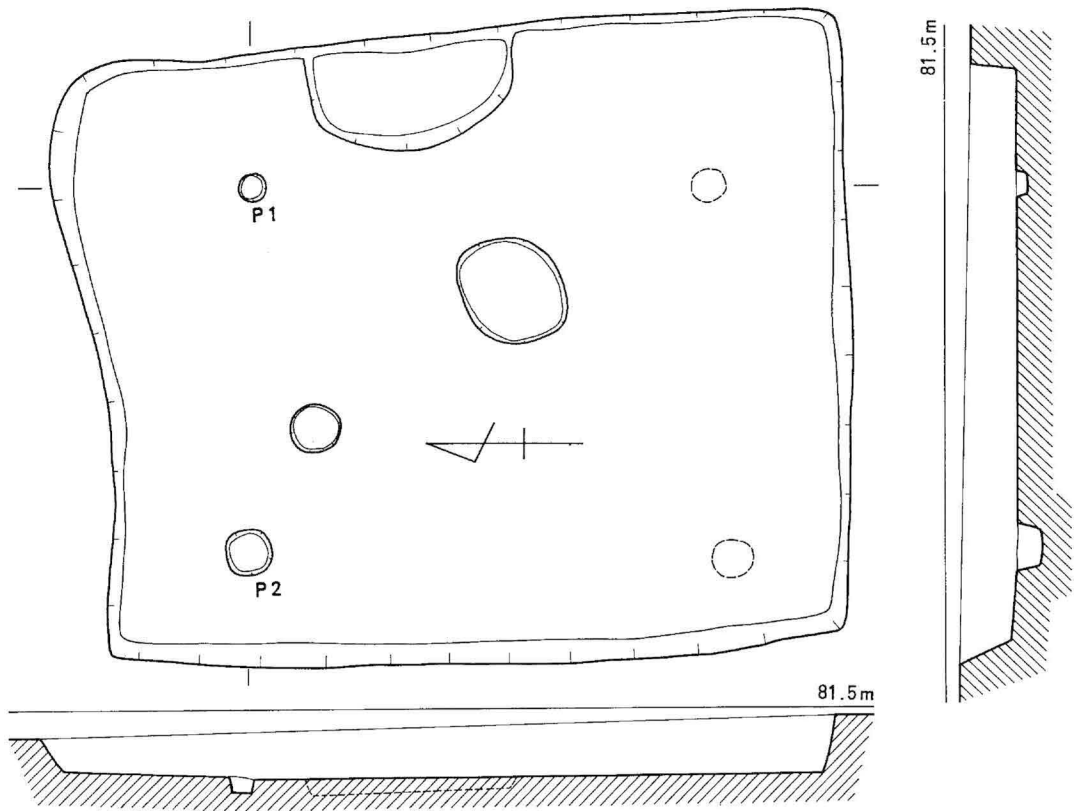
甕（12・13・14・15・16・17・18） 口縁は外反しており、胴部の張りは弱く、底部は無整形の平底を呈す。外面調整は15と16がハケ目以外は強いヘラナデによって仕上げられる。内面はナデによって調整される。12は口径13.4cm、器高22.2cm、13は口径16cm、器高20.9cm、14は口径13.9cm、器高15.2cm、15は10.9cm、器高16cm、16は口径14.2cm、器高13cm、17は口径15.8cm、器高15.9cm、18は口径12.3cm、器高12.7cmを測る。色調は黄褐色ないしは薄茶褐色で、胎土に荒い石英粒や花崗岩の細角礫が多く含まれる。焼はあまく軟質感を示す。

脚付甕（19） 脚部のみ出土である。厚手の器壁で底部は外反する。現高3.7cm、底部9.9cmを測り、色調は淡赤褐色で胎土に砂粒を含む。

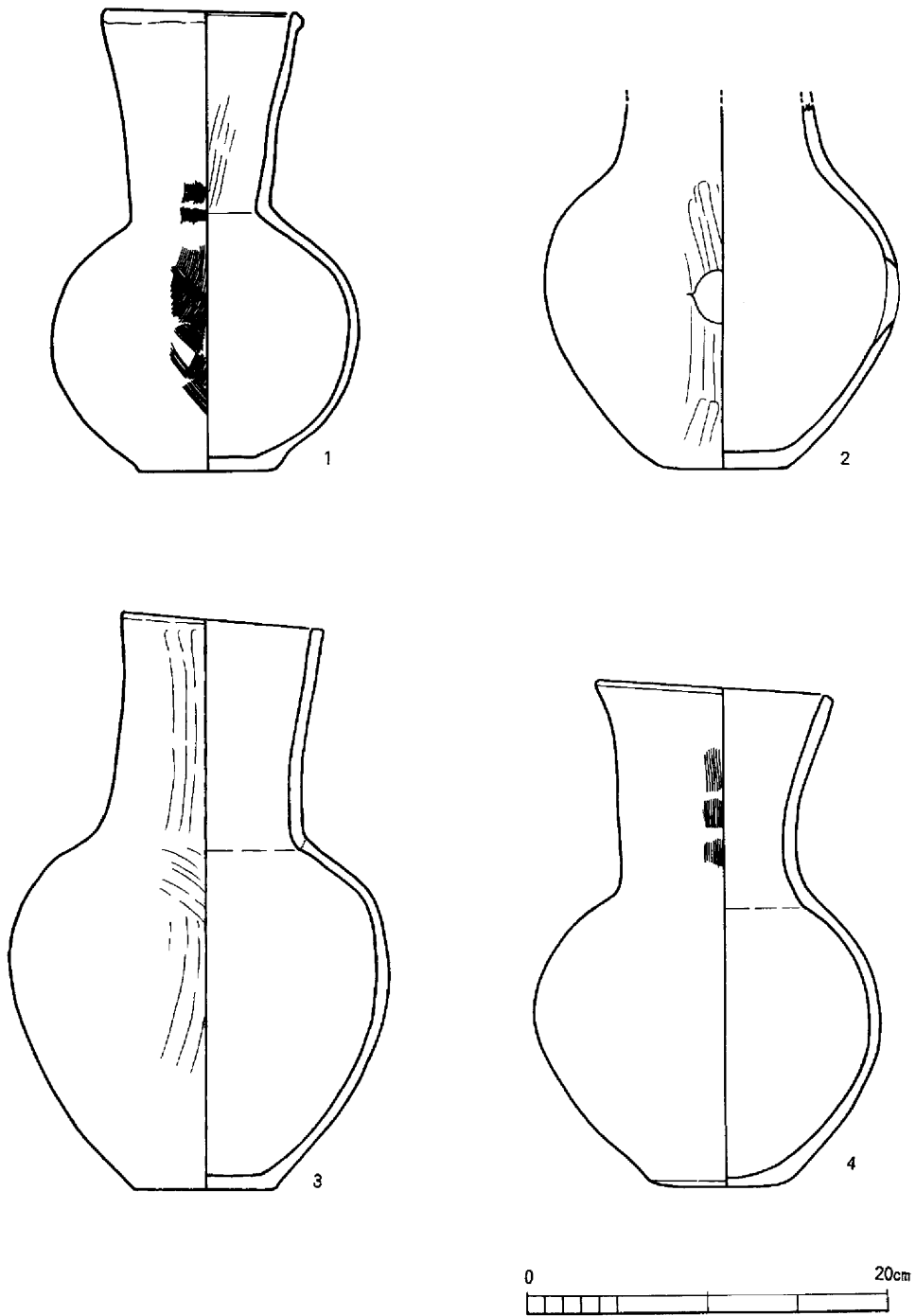
高杯（20・21・22） 20は口縁が内弯した長脚を呈し、色調は黄褐色であり、胎土に荒い石英粒を含む。口径25.2cm、器高22cmを測る。調整は表面の剝落が著しく不明であるが、ごく一部にハケ目を残す。21は口縁が直立し、法量の深い大型の杯部を呈し、脚は長脚で端部は急に外反する。口径27.7cm、器高25cmを測り、色調は暗赤黄色で胎土に荒い石英粒を多く含む。調整は内外面をナデで仕上げる。22は口縁が外反しつつ長く延びており、杯部の段は痕跡に近いまでに退化する。内面も同様の段があって、杯部全体は浅いものとなっている。脚部は失われているが長脚のものと思われる。口径31cm、現高7.9cmを測り、色調は赤褐色で胎土は細い砂粒を含み、焼成は良好である。

器台（23・24・25） 手づくねによって仕上げられた粗雑な感を受けるもので、器壁は厚く仕上げられている。色調は黄褐色で胎土に荒い砂粒を含み、焼成はやや良い。23は受部径11cm、器高12.5cm、24は受部9.2cm、器高10cm、25は受部6cm、器高10.42cmを測る。

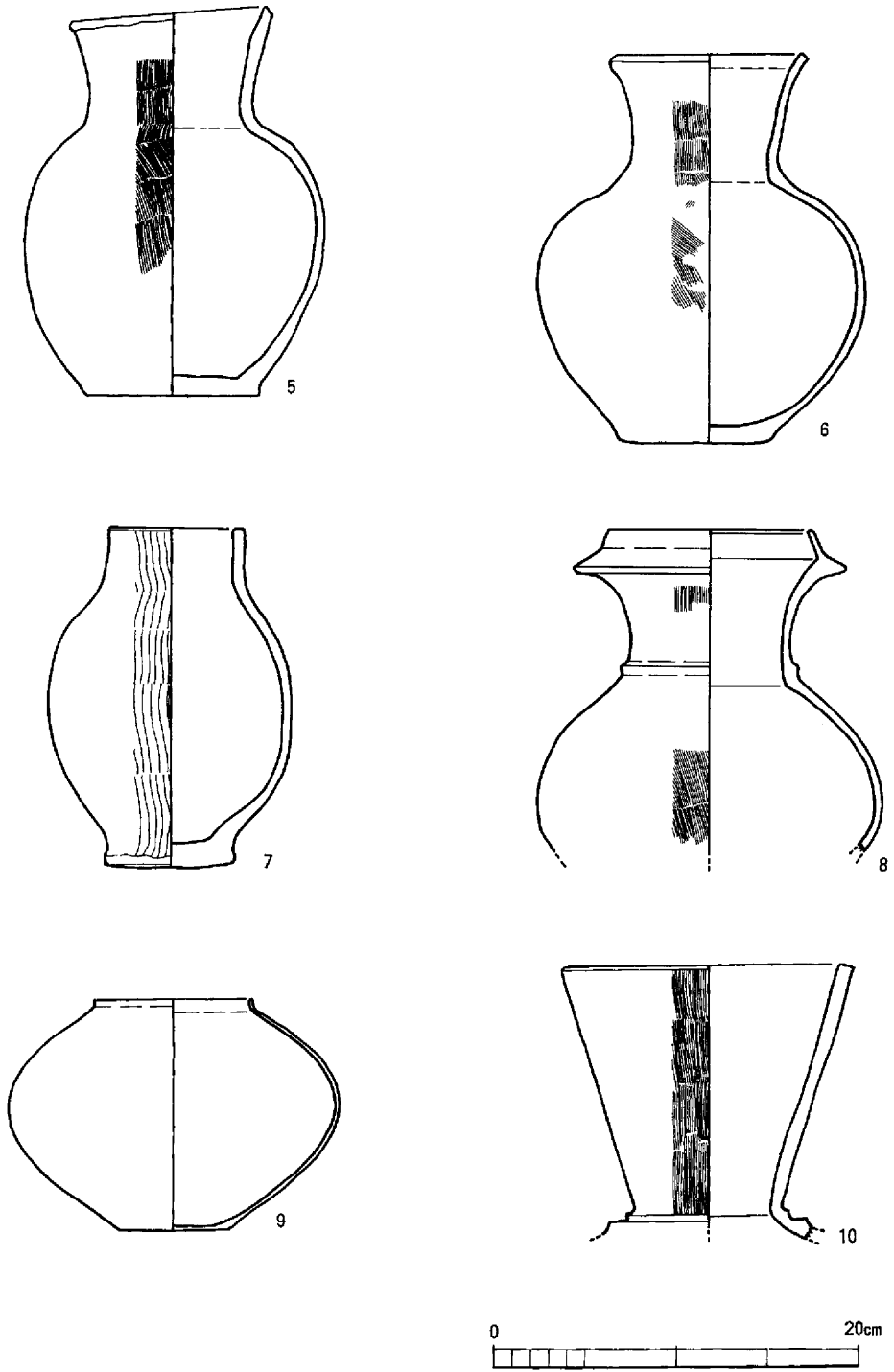
鉢（26・27・28） 26は底部が厚く無整形の平底を呈し、27と28は小型の手づくね土器である。26は口径11.2cm、器高12cm、27は口径7.5cm、器高5.5cm、28は口径7.9cm、器高4.4cmを測り、色調は全て淡褐色で、胎土に荒い石英粒を含む。



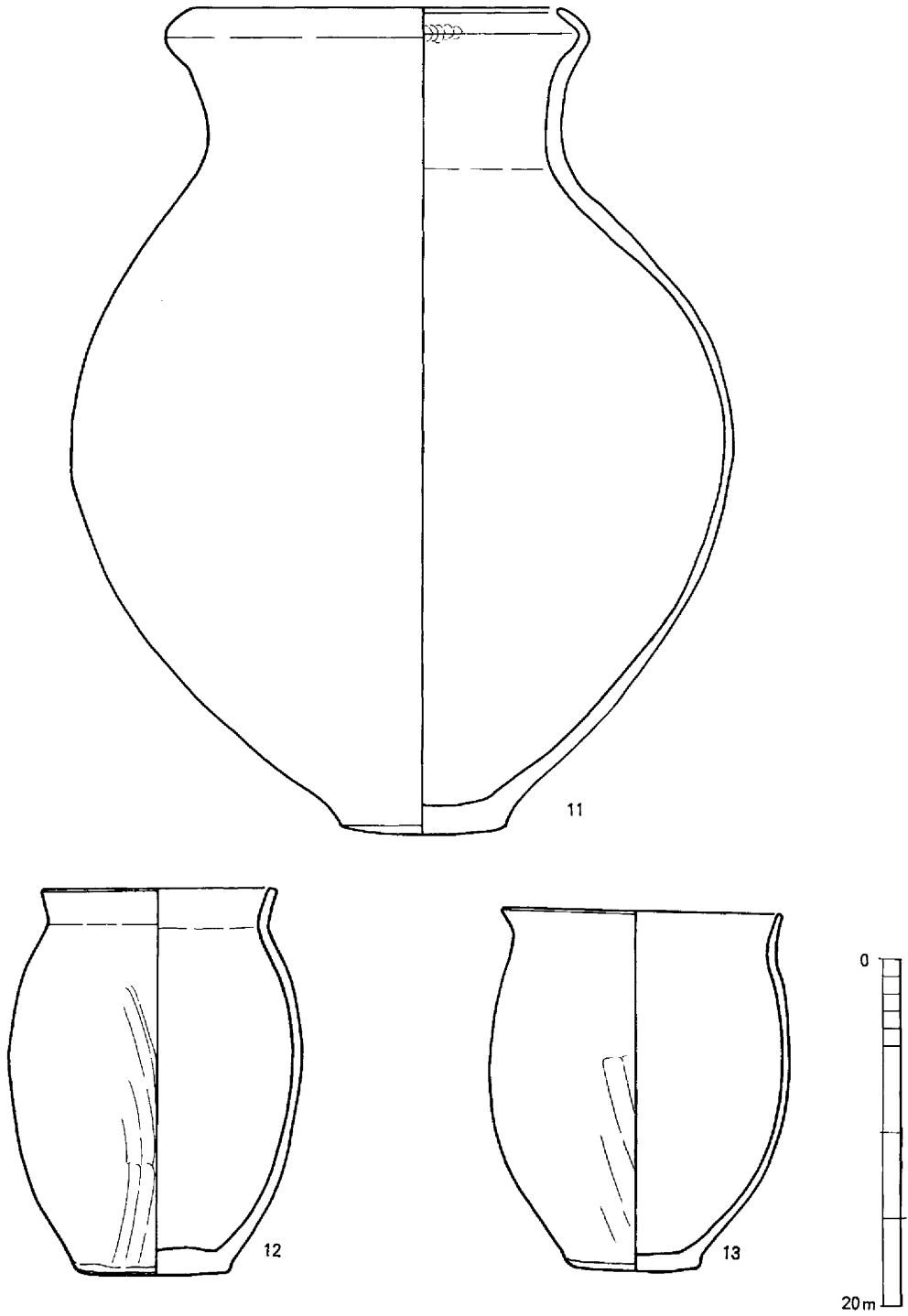
第92図 住居跡実測図 (1/60)



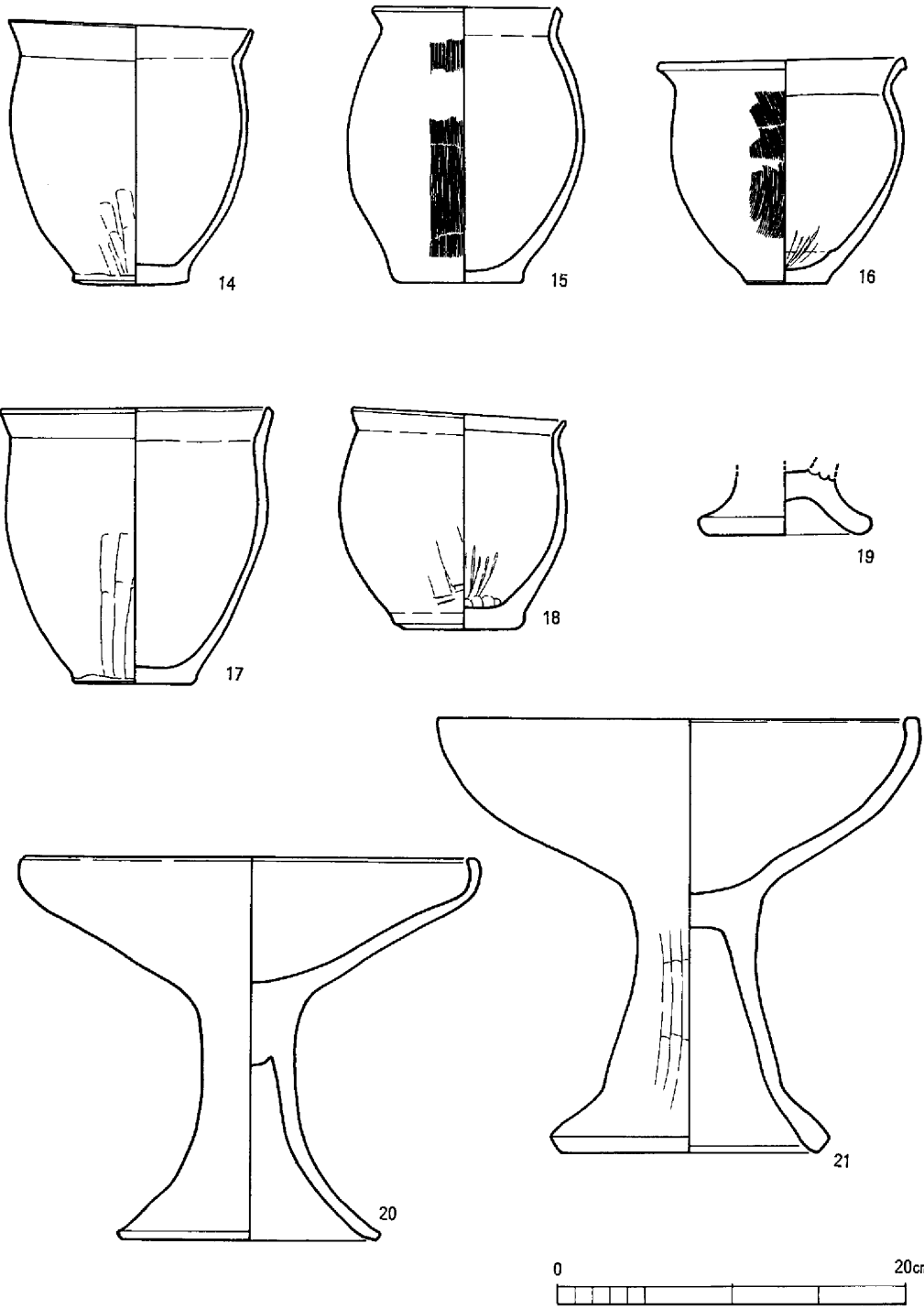
第93图 住居跡出土土器実測图 1 (1/4)



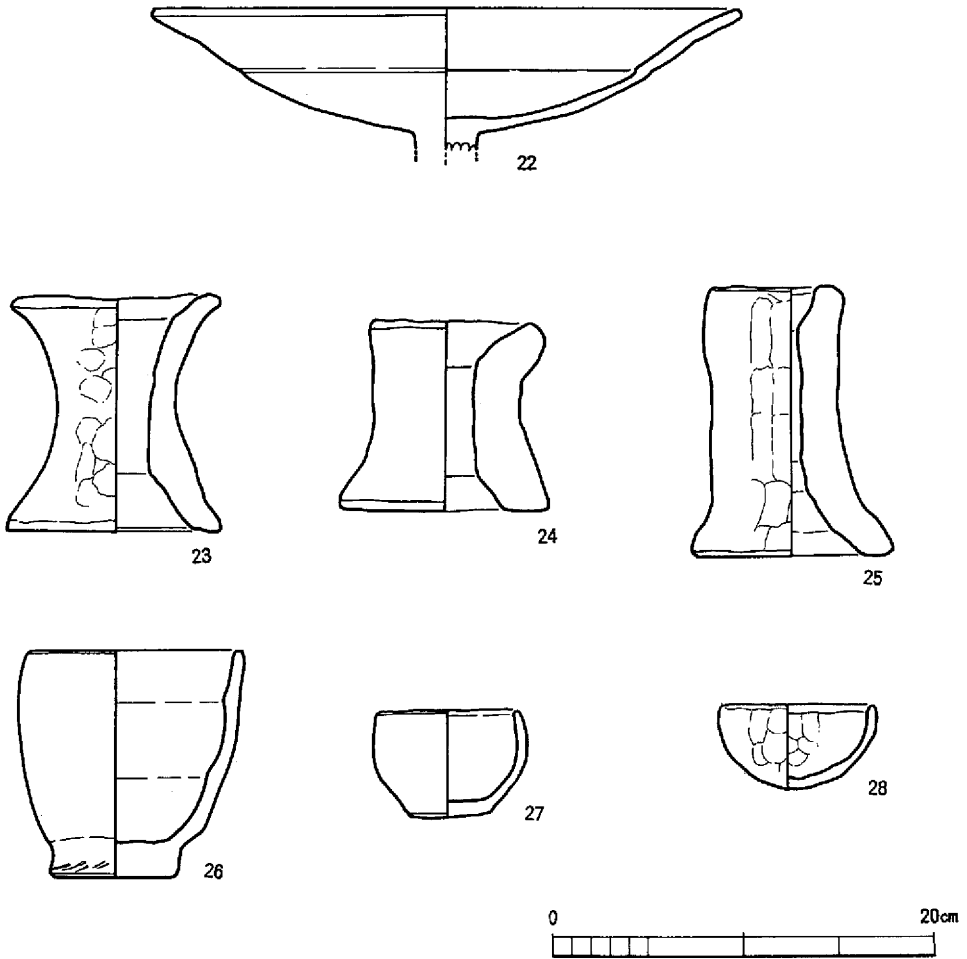
第94図 住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第95図 住居跡出土土器実測図 3 (1/4)



第96図 住居跡出土土器実測図 4 (1/4)



第97図 住居跡出土土器実測図 5 (1/4)

C. 小 結

竪穴住居跡出土の土器は、60個体以上におよび、しかも祭祀的な様相を示しながら出土している。これは住居内一括の資料であり、出土状況とあいまって重要な資料となろう。

土器の出土状況では長頸壺が中心となり、器台を伴うようである。それは住居のコーナーに沿って並んでおり、正しく立つものや倒立するもの、頸部のみのもの、胴部のみで穿孔のあるものがある。その周囲に種々の器種を配するようである。これは廃棄に先立っての祭祀例ともおもわれる。

土器群の編年的位置に関しては、それらに共通な底部形態を中心として求めることが出来よう。底部は未整形で大きく安定感を示す。平底というより凸レンズ状を呈しており、土器成形時点の底部そのまま残している。また胎土には荒い石英粒等が多く含まれ、焼成はあまく軟質感を呈す。以上に示したように土器間に存在する共通点は、それらがセットとして存在することを示す。長頸壺や高杯をはじめ、土器の大半は、東九州系土器群であり、高杯(22)が北部九州系の土器である。地域的に筑前と豊前との接点である点から、両者の伴出は当然であり、数量的に東九州系が多い点は弥生時代後期後半の嘉穂地方の示す特徴であろう。高杯(22)は、段部が弱くなるわりに口縁が長く伸びない点で、弥生時代後期終末頃とし、古墳時代にまでは新しくならないようである。また、他の多くの土器群は、大分県宇佐市宇佐別府遺跡の小銅鐸出土堅穴の土器群に類似しており、東九州の中で弥生時代後期終末頃に比定される一群である^(註9)。従って、これは弥生時代後期終末の時期、嘉穂編年ではⅡ期を中心とする時期とされよう。この時期は、東九州をはじめとする多くの外来系土器が流入する時期であり、その良好な例であると言えよう。^(註10)

3. 森分遺跡

(1) 遺跡の概要

遺跡は嘉麻川の右岸に形成された河岸段丘上に立地し、貞月の集落下から北側に向かって存在する。標高約42mを測る。

今回の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのこの堅穴住居跡66軒、古墳時代後期の堅穴住居跡3軒、弥生時代中期の土壌、溝状遺構、それにピット群等が検出された。

発掘地区は狭少であったが、遺構の集中度は高く、全ての住居が切り合っており、さらに増築や改築も重なっていて、複雑な状況を示している。

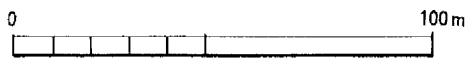
(2) 遺 構

祭祀土壇(第100図)

全長が2.24m、幅が1.8mを測り、長方形のプランを呈し、二段掘込の構造を示す。深さは52cmで底部付近から上部にかけて多くの土器が層状をなして出土した。

堅穴住居

2号住居跡(図版19、第101図)平面形は一辺が5.6mの正形状を呈し、住居内はベッド状遺構が巡っている。柱穴は4ヶ所に設けられており、P₁~P₄が相当する。4本の柱があって、その中央に炉穴が存在する。南側壁面には屋内貯蔵穴が設けられ、壁面周囲には周溝が巡る。



第98図 調査地点地形実測図 (1/2,000)

3号住居跡（第101図）平面形は長方形を呈し、東西の長さ4.9m、南北の長さ7.1mを示す。柱穴はP₁～P₄で4本柱よりなる。中央には炉穴があって、東壁側の貯蔵穴より土器が出土している。

29号住居跡（第102図）平面形は方形を呈し1辺が3.94mの小さなものである。柱穴等は不明である。

35号住居跡（第102図）平面形は方形を呈しており、5.9m×5.1mの規模を有するもので、石囲のカマドを有する。柱穴はP₁～P₄で4本柱よりなる。カマドは80cm幅のもので板石で囲っており、矢上石が残る。

47号住居跡（第103図）平面形は方形を呈しており、4.04m×4.1m以上の規模を有し、柱穴はP₁とP₂で2本柱よりなるものである。壁面側にはベッド状遺構が巡っており、長方形の炉穴が存在する。

48号住居跡（第10図）平面形は方形を呈しており、3.7m×3.4mの規模を有する。柱穴はP₁とP₂であり、炉穴が存在する。壁面をベッド状遺構が囲んでおり、全体に整った形ではない。

49号住居跡（第103図）平面形は方形を呈すると思われ、一辺が4.2mを測る。柱穴はP₁が確実であり、その配置から2本柱とおもわれる。炉穴は二段掘込構造で、屋内貯蔵穴を有する。

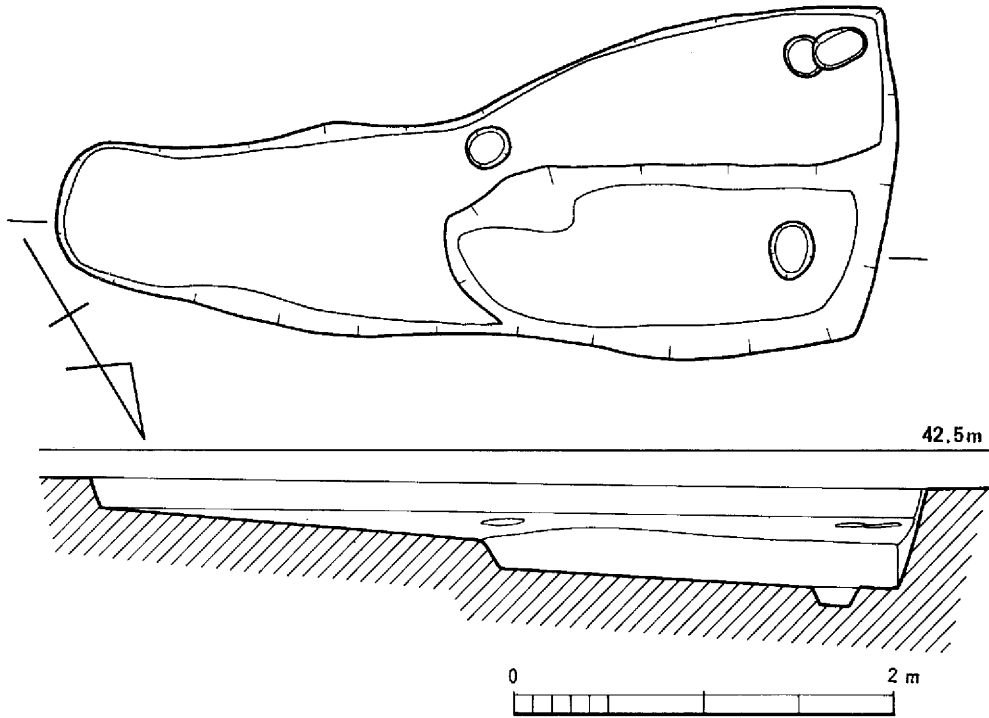
(3) 遺物

祭祀土壇出土土器（図版30、第104.105図）

甕（1～3・5・7・10・11） 1. は逆L字状口縁で口唇の下端が突出し、口縁下に三角突帯が巡る。胴部はあまり張らず底部へ続く。底部はやや上げ底を呈すが高さはない。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。色調は暗黄褐色で胎土に砂粒を含むが、焼成は良好で器壁も薄く出来ている。口径は43.2cm、器高は50.5cmを測る。2. はくの字状口縁で口唇上端が突出しており、はね上げ口縁状を呈す。胴部はやや張っており、外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。色調は暗褐色で胎土、焼成とも、良好で器壁は薄い。口径は30.2cm、器高15cmを測る。3. は逆L字状口縁で口唇を丸く納める。口縁下には3本の沈線が巡るもので、外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。色調は黄灰色で胎土、焼成とも良好で器壁は薄く仕上げられる。口径は30cm、現高7.4cmを測る。5. はくの字状口縁で胴部の張りは弱い。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられ、色調は灰黄色で胎土、焼成とも良好で器壁は薄い。口径29cm、現高15cmを測る。7. は逆L字状口縁で、内側は張り出す。胴部は直線的で張りは弱い。外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。色調は黄褐色で胎土、焼成ともに良好で器壁は薄い。口径25.2cm、現高9cmを測る。10と11は底部であり、上げ底を呈し、高さはやや高い。色調は暗赤褐色で胎土、焼成とも良好である。10は底径6.4cm、現高5cm、11は底部6.6cm、現高10cmを測る。



第99図 森分遺跡遺構配置図 (1/200)



第100図 祭祀土壙実測図（1/40）

壺（4・6・8） どれも口縁のみの資料である。4は口径11.8cmで鋤先を呈し、口縁上部にヘラによる直線文が暗文のように施される。6. は口径22cm、現高6cmで鋤先口縁を呈し、口縁上部に浮文を配す。8. は口径25.6cm、現高7.2cmで鋤先口縁を呈す。

器台（9） 円筒状で胴がしまるもので、受部10.8cm、器高14.8cmを測り、外面はハケ目、内面はナデによって仕上げられる。

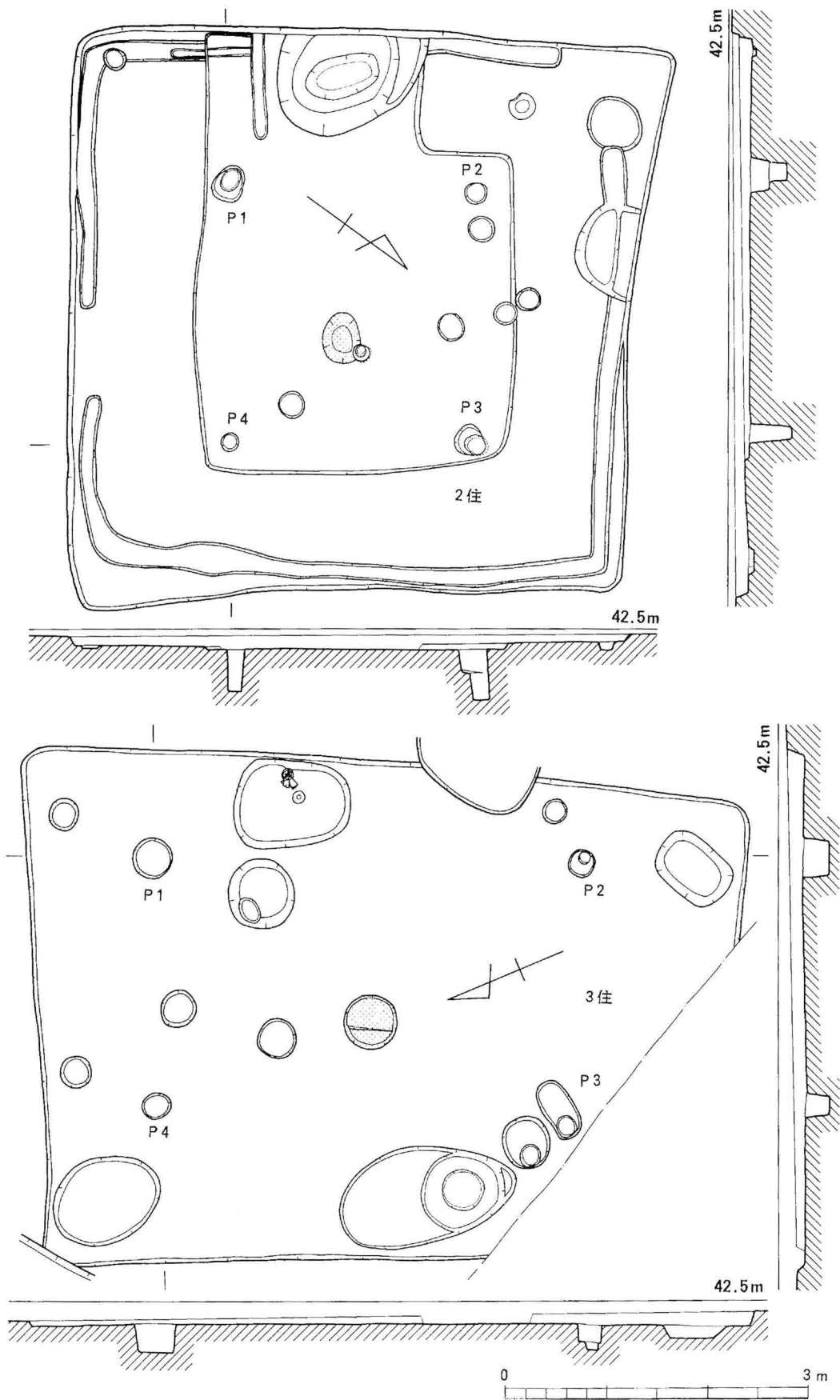
祭祀土壙出土石器（図版32、第107図）

石庖丁（7） 立岩系の輝緑凝灰岩製で、外弯刃半月形を呈す。全長14.4cm、刃幅5.3cm刃厚6mmを測る。

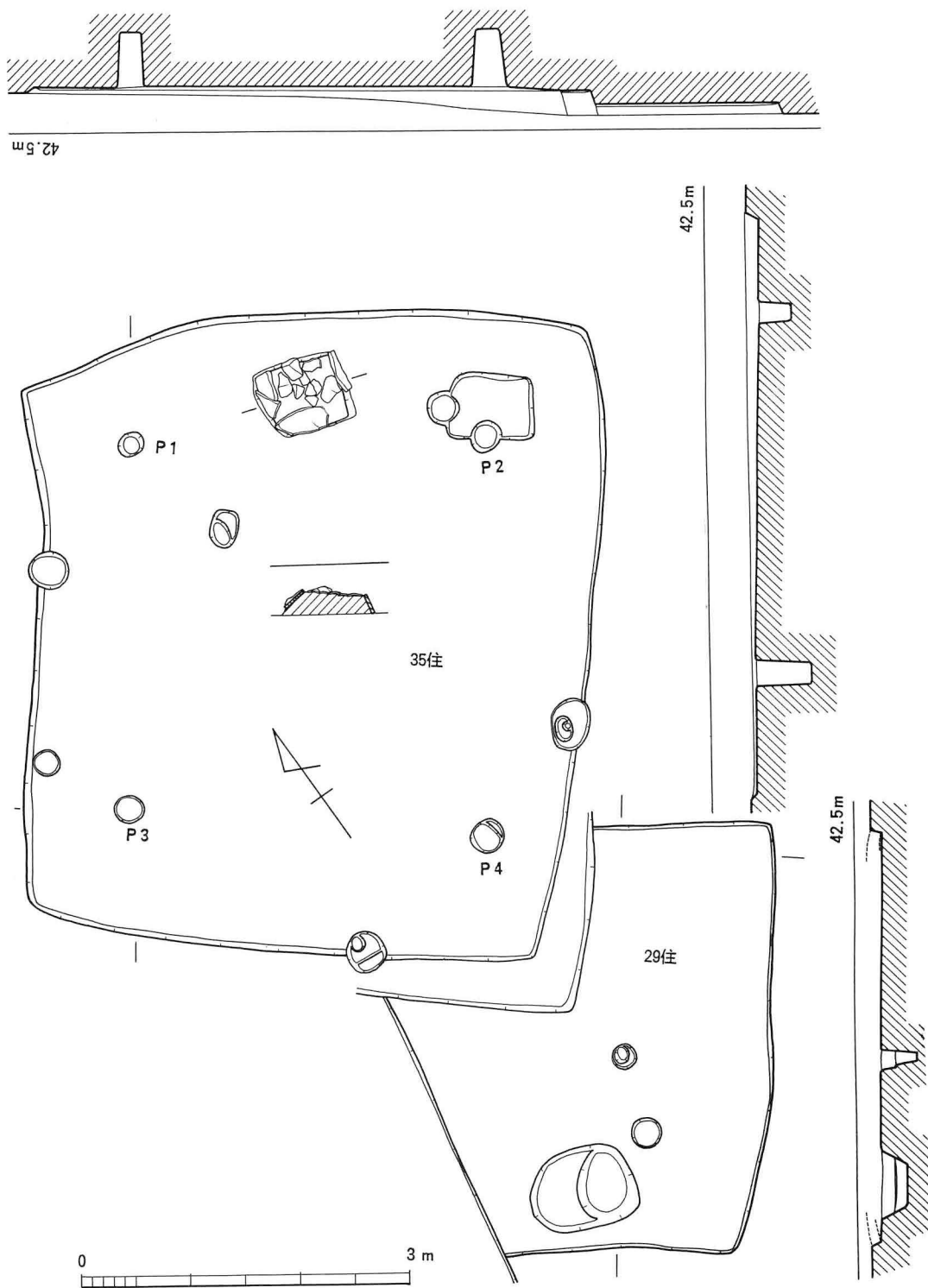
2号住居跡出土土器（図版30、第106図）

二重口縁壺（1～3） 1は口縁が大きく開くもので、内外面を研磨によって仕上げられている。2と3は口縁外面に櫛描波状文が施される。1は口径26.4cm、現高5.3cmを測る。

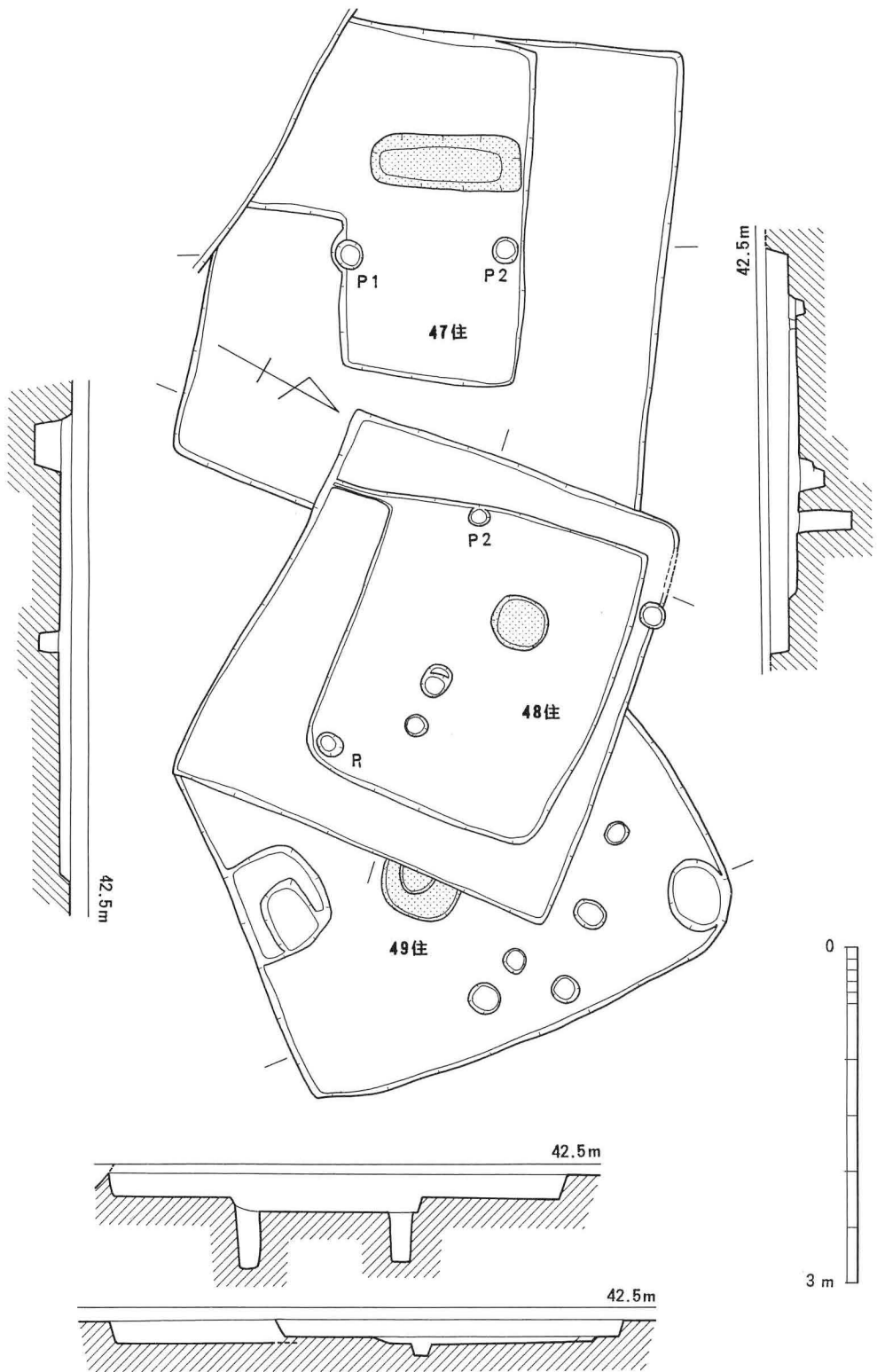
高杯（4） 口縁が大きく開いて、杯部中段は強く屈曲する。口径は25.4cm、現高7cmを測り、色調は灰褐色で胎土に砂粒を含む。



第101図 2・3号住居跡実測図(1/60)



第102图 29, 35号住居跡実测图 (1/60)



第103図 47, 48, 49号住居跡実測図 (1/60)

3号住居跡出土土器（図版30、第106図）

壺（6） ロート状に開く口縁と球状に張った胴部を有する。底部は丸底で外面は研磨。内面は上部をハケ目、下部をナデによって仕上げる。口径は13.2cm、器高17.9cmを測る。色調は灰黄色で胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

高杯（5） 椀状の杯部と短脚の脚部からなっていて、外面は研磨、内面はナデによって仕上げられる。色調は灰黄色で胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

29号住居跡出土石器（図版32、第107図）

石庖丁（1～4）外弯刃で半月形を呈すが、刃部両端が短くなっており、背部も緩やかなカーブを描く。孔は上部に2孔存在する。1は凝灰岩製。2は偏平な礫を使用した変成岩製。3は頁岩製。4は立岩系の輝緑凝灰岩製である。1は全長10.6cm、刃幅5cm、刃厚6cm、2は全長11.1cm、刃幅4.7cm、刃厚5.5cm、3は現長10.2cm、刃幅4.7cm、刃厚6.40、4は全長10.5cm、刃幅4.7cm、刃厚6cmを測る。

33号住居跡出土石器（図版32、第107図）

石庖丁（6） 立岩系の輝緑凝灰岩製で現長5.7cmを測る。

磨製石斧（8） 蛤刃で細身となる。全長13.9cm、刃幅4.8cm、刃厚3.5cmを測る。

35号住居跡出土石器、石製品（第107、108図）

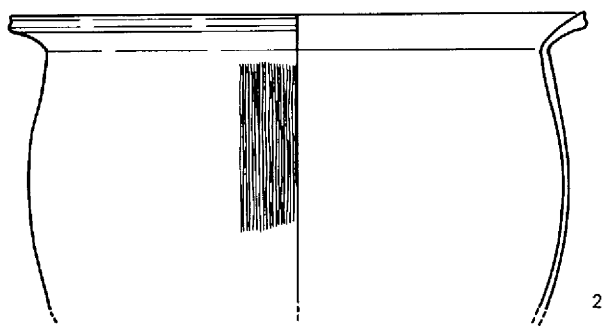
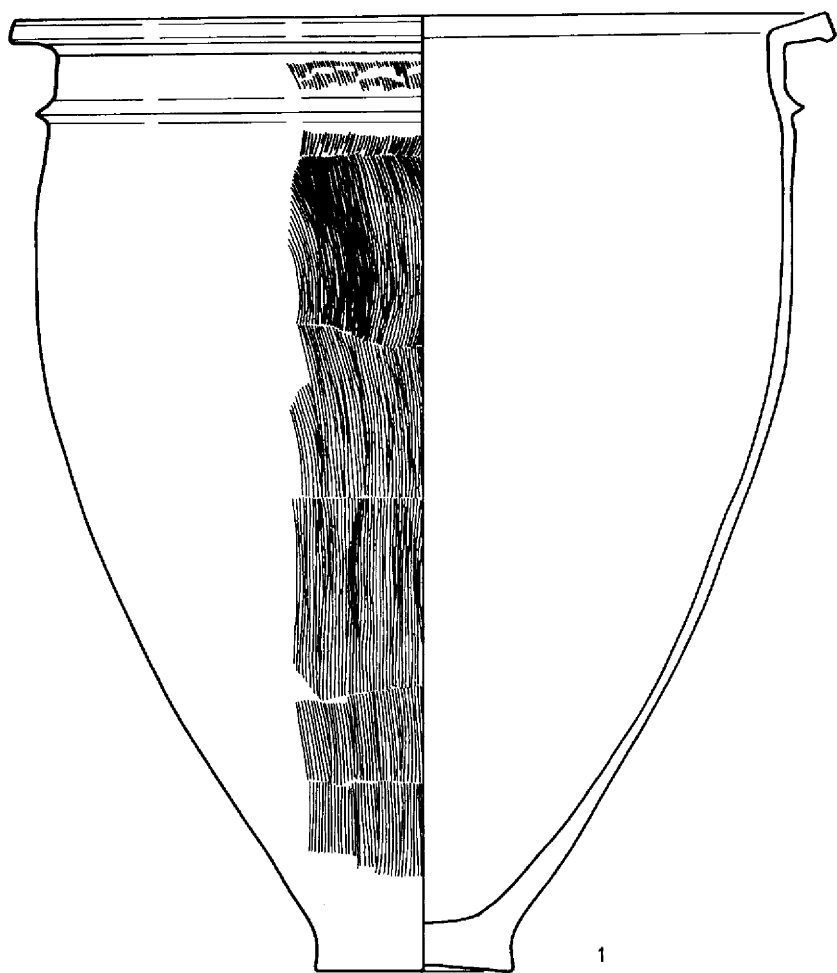
石庖丁未製品（5） 剝片の周辺に荒い加工を加えており、一部は研磨されている。現長8.9cm、幅6.3cmを測る。

滑石製垂飾品（第108図）住居のカマド付近より出土しており、剝片状の滑石の周辺を切り取り、中央両端からは切り込みをいれてコケシ形に仕上げる。上部に径3mmの孔を有す。長さ5.9cm、幅3.4mm、厚さ3.5mmを測る。

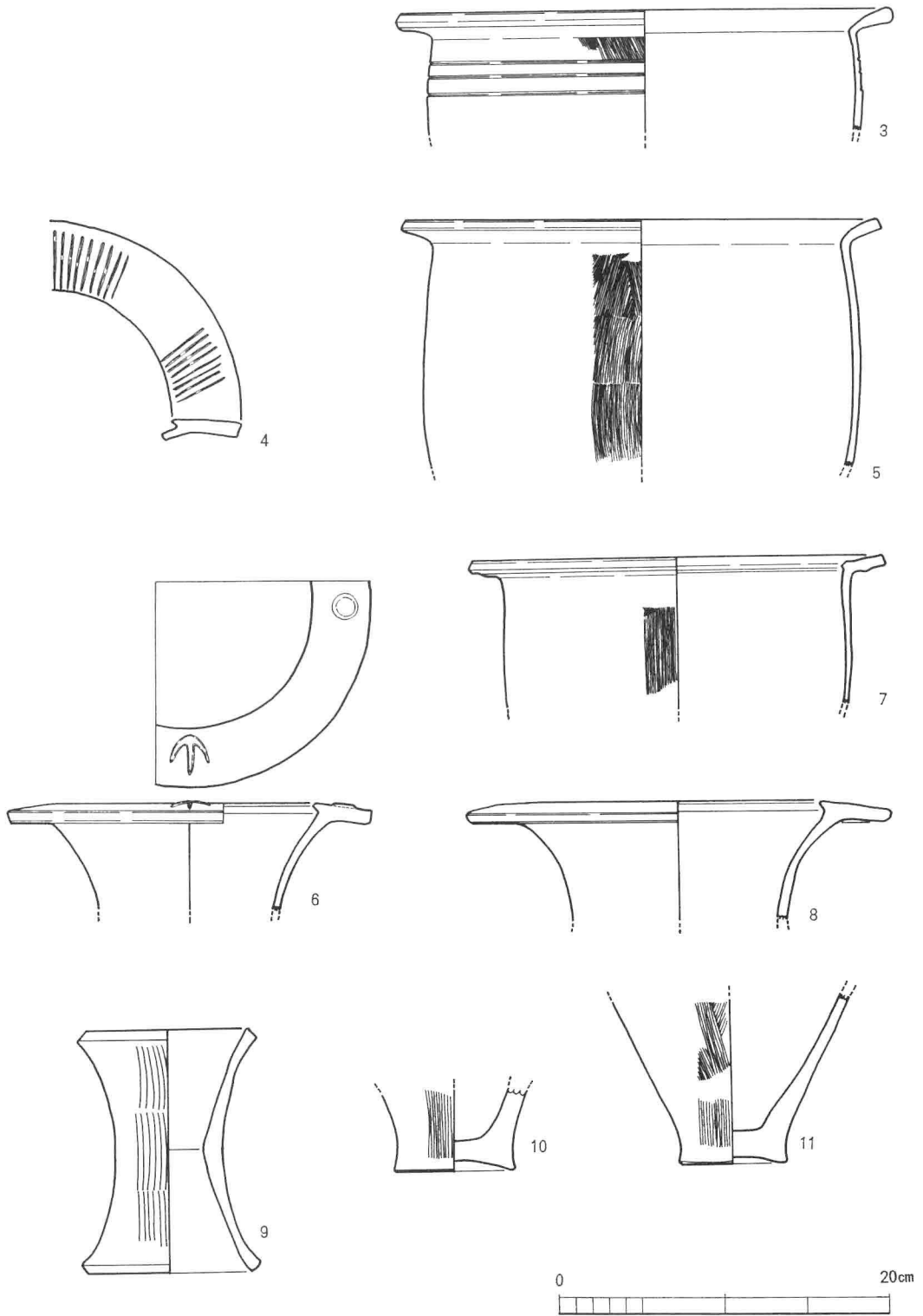
47号住居跡出土土器（図版30図、第106図）

壺（7・8） 7は二重口縁壺で口唇に連続した三角状の刻目を施し、下部には竹管文を施した円形浮文を連続的に施している。正面感を出したものであろうか、浮文上部に竹管文が2ヶ所に施される。頸部は下部に向かって細くしまる。外面は研磨、内面はナデによって仕上げられる。口径は25.3cm、現高7.4cmを測る。色調は淡茶褐色で胎土に砂粒を含み、焼成は良い。8は折り返し口縁状を呈し、内外面をハケ目で仕上げる。口径は20.4cm、現高7.4cmを測り、色調は暗黄褐色で胎土に砂粒を含み、焼成はややあまく軟質感を呈す。

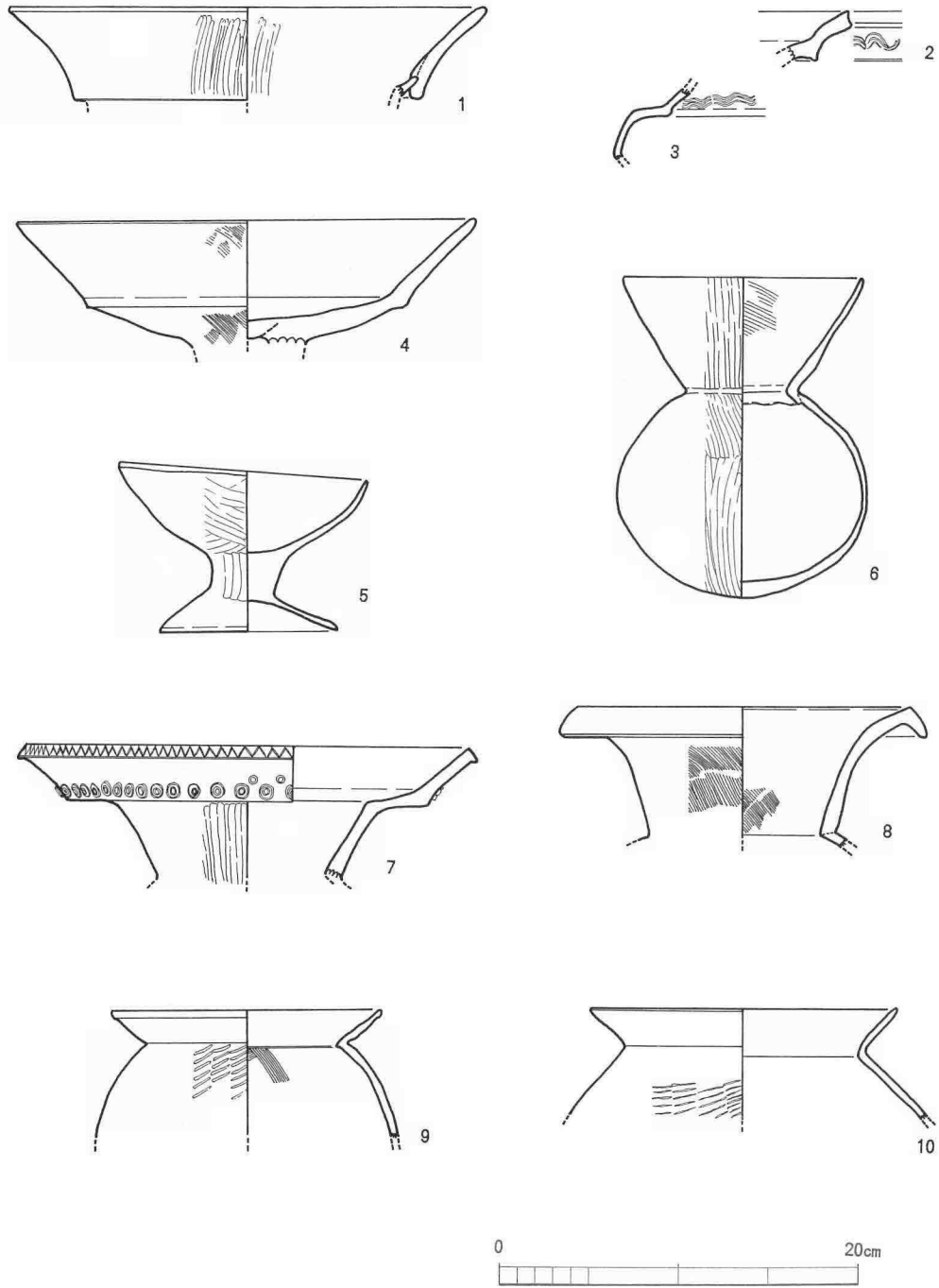
甕（9・10） 両者とも肩部上半の資料である。頸部はくの字状を呈し、口縁は強く外反する。口唇は丸味を有し、全体に薄手に仕上げられている。外面は斜方向の細かいタタキ目を残し、内面は、ハケ目が一部に見られるが、その大半をナデによって仕上げている。色調は両者とも暗褐色で胎土に細い砂粒を含む。焼成は軟質に仕上がっている。9の口径は15cm、現高7cm、10は口径17cm、現高5.9cmを測る。



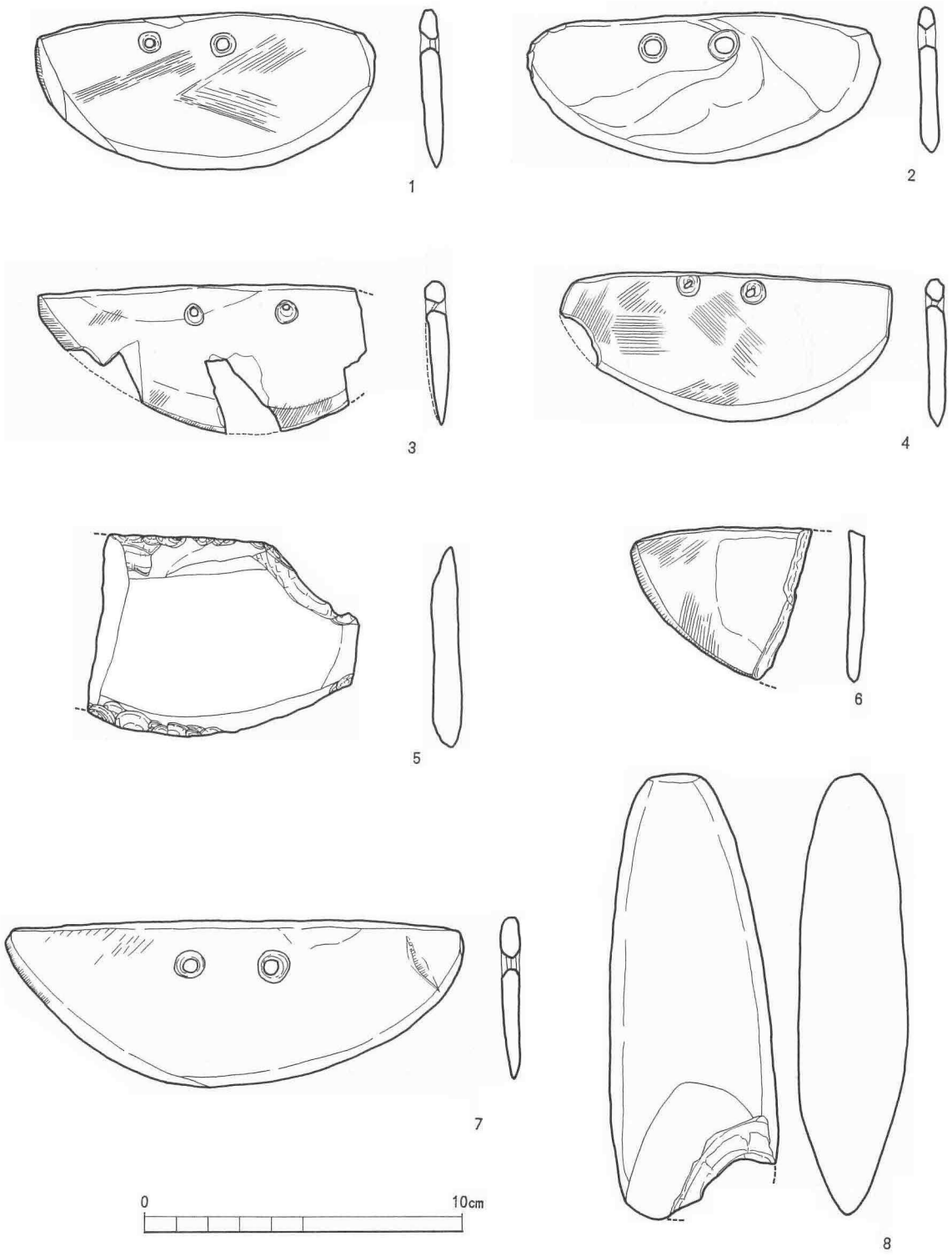
第104図 祭祀土境出土土器実測図 1 (1/4)



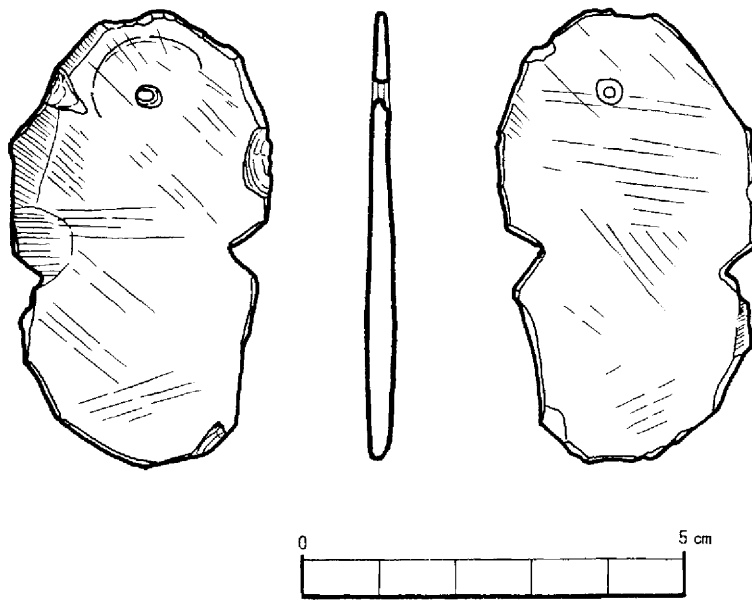
第105図 祭祀土壌出土土器実測図2 (1/4)



第106图 住居跡出土土器実測图 (1/4)



第107図 住居・祭祀土壌出土石器実測図(1/2)



第108図 35号住居カマド内出土石製品実測図（1／1）

(2) 小 結

祭祀土壇は、丹採土器を欠くものの、大形の完形に近い甕や石庖丁等が検出された。嘉穂町巻原遺跡にて中期の祭祀土壇を調査した時にも使用の著しい石庖丁1点が土器と供伴しており、その状況と類似する。土壇内の土器群を観察した場合、まず甕に古式の様相を残している。

3は口縁下に沈線を有し、1は口縁下の突帯や底部の状況等でその古相を示す。2は、はね上げ状をなすが、完全な状況ではない。壺に見受けられる鋤先口縁も長く伸びずに水平に近い角度である。従って、形式的には須玖I式でも新しい様相を示すものとして、弥生時代中期の中葉頃で3の位置を決定出来よう。特に甕1は原田遺跡の第1地点より検出された11号甕棺と同様である。また、出土した石庖丁7は、中期に見受けられる大きさのものであり、後期のものは小型になるようである。

住居群出土の土器で問題となるのは、47号住居の例であろう。円形浮文を配した壺とタタキ目を残す甕はセットとして供伴するものであり、庄内式に対比されるものである。嘉穂町の穴江、塚田遺跡では、壺は庄内式であったが、甕が布留式の古相を示しており、編年的に布留式の最古段階として把握されている。しかし、今回の土器は通常の庄内式の組み合わせを示すと思われる。また、2

号住居も甕の出土は見受けられないが、庄内式の範囲で把握可能であろう。3号住居の土器に関しては、やや新しく、布留式（註13）の古段階として考えたい。

29号住居出土の石庖丁は小型で、孔も上部に移っており、弥生時代後期後半以後の例と考える。これは嘉穂町上椎遺跡等で検出されたものに類似する。また、4点は形態や大きさ等が類似し、しかも2が川原石を直接加工しているようであり、4の立岩系をモデルとして他の3点は直接こちらで製作したとも考えられる。それは、4点が近接して出土したことをもってしても、可能ではないだろうか。

IV おわりに

1. 原田遺跡出土の小銅鐸について

(1) 出土状況について

小銅鐸は、井戸跡付近や住居跡、溝状遺構といった集落に関係した場所から出土しており、出土数は1地点から1点ということになる。これは、銅鐸が集落外の地で、しかも複数が埋納される場合とは異なる。しかし、その小銅鐸も埋葬施設である墓に伴った例はなく、その点での問題の掘り下げを行いたい。

15号木棺墓は、原田遺跡の項で説明したように特殊な構造を示す木棺墓であり、小銅鐸はその棺外中央付近に、舌と共に埋置され、その北西側には管玉も出土している。この場合、小銅鐸は内部の舌を意図的に外した上で、身と交差するように置かれており、管玉はばらまかれたように出土した。これは、埋置するにあたって音響具としての機能の終焉を意味するものであり、意識的な停止を示すものではないか。（註14）例えば、浦志鐸のように舌を内部に納めたままの出土であれば、機能の終焉に対し廃棄という行為のみで、使用の停止を示していようが、原田鐸の場合は、さらに強いイメージを与える。これは、管玉の出土を見ても、本来は糸状に連なることによって機能するものであるが、それを個々にばらしている点で、小銅鐸との関連が同えよう。また、構造的には、棺外のスペースが広がっていて、単なる埋葬のみとは考えられない。これを、遺物の出土状況を考え合わせれば、このスペースが、埋葬に関連した祭祀の場と考えることも可能と思われる。

(2) 属性について

鐸身と舞に残された型持孔と裾に施された斜格子状文を中心に観察をすすめよう。

原田鐸の型持孔は、舞に2孔、身の中央よりやや上方の前と後に1孔ずつ、左右両側の中央部と

同じ高さの所に1孔ずつ、計6孔が存在する。ただし、身の中央の1孔と左右両側の1孔は鑄造時点で湯が回ったために、内部の窪みとして残っており、孔形は隅丸正方形を呈す。この場合の型持孔の位置は、朝鮮式小銅鐸のそれと同様であり、技術的にその系譜下に属するものと考えられる。

裾に施された斜格子状文は、1条の文様帯をなす。文様帯は上下に幅広の横線2本を配した中に、左下りの斜線を施し、その後に右下がりの斜線を充填するような状況を示している。従って左下りの斜線は、上下の横線に一直線に通っているが、右下がりの斜線は左下がりの斜線によって途切れた恰好となるため、格子目は不整形となる。また、下部を欠損した面の詳細は判別出来ないが、左右両線は乱れており、全体に縦長の斜格子をなす。一般に銅鐸で見受けられる斜格子文は、整った斜格子を作り出しており、その施文も一方から斜線を等間隔で施し、その終了後に反対から再び斜線を施すようである。また縦長の斜格子文は古式の銅鐸に見受けられるようである。以上のことから、原田鐸の場合は斜格子状文帯として置くべきであろう。

他の特徴としては、身に似合わない大きな鈕を有し、その形状は菱形を呈す。また、身は円筒状に近い細身タイプである。

(3) 原田鐸の位置

原田鐸は埋葬施設内より出土し、その埋められた時期は弥生時代中期前半、もしくはそれ以前の時期である。鐸身の型持孔は朝鮮式小銅鐸と同様であり、裾の斜格子状文帯は、その施文法が一般に見受けられる斜格子文とはやや異なっている。以上のことを念頭に置いて若干の考えを述べたい。

出土状況と型持孔からの観察結果は、その系統を朝鮮式に求めることを可能ならしめる。田村晃一氏は「朝鮮半島からみた日本の青銅器」の中で、朝鮮半島の小銅鐸を含む青銅器は墓の副葬品として発見されることを強調する。本来の機能が終焉を向え、最終段階として墓に副葬するスタイルは、朝鮮半島のそれと同様であり、鑄造方法とも一致するわけである。^(註16)

時期的には、埋置された時期の下限が明らかとなっただけであるが、鈕や身の磨滅状況は一定の使用期間を明示しており、さらに古くなる可能性を有している。

斜格子状文については、その系統を何に求めるかが問題となろう。本来無文の朝鮮式とは文様の有無によって異なり、国産小銅鐸の位置を示すものである。この場合、銅鐸を模倣したとしたらどうか、斜格子文は銅鐸に最も多い文様の一つである。しかし、施文法の相異点やその位置が裾部の最下段より施されたことを加味した上で、その鑄造技術や大きさ、さらに出土状況といった点では全く朝鮮式であり、文様部分のみを銅鐸から導くというのは考えにくい。そこで、同時期頃の斜格子文帯を有する資料として、細形で樋内の穿に接する部分に斜格子文を鑄出する銅戈の存在が考えられる。宇木汲田遺跡の汲田式(中期前半)甕棺に伴う例をはじめ、数点が発見されている。原田鐸は朝鮮式小銅鐸を仿製する過程において有文化された製品であり、その背後には、有文化された銅戈の存在が考えられる。また、問題は多いが、その系譜下に大谷遺跡の鑄型を考えたい。これは文様^(註18)

が鋸歯文であるが、裾の末端にまで文様が行っており、さらに横線も見られる。有文の鐸としての鑄造はなかったかもしれないが、意識としては、有文化の方向であり、有文小銅鐸の展開を見る上で見落してはならない資料と思われる。なお、資料は断片的であり、今後の発見に期待するものである。

2. 原田遺跡出土の銅鏡について

(1) 銅鏡2面の出土状況

今回出土した鏡は2面であり、1面は「君宜高官」銘内行花文鏡、もう1面は「長生宜子」銘単夔文鏡である。

内行花文鏡

石蓋土壙墓の床面より出土した。鏡の背面を下にして、壙内のほぼ中央に位置していた。背面の下部土中より少量の水銀朱が検出され、床面全体にはベンガラが存在した。
(註19)

単夔文鏡

箱式石棺墓の底石部分に加工を施し、底石のレベルより一段低い位置に小さな板石を敷き、その上に鏡を置き、さらに鉄剣の中央より折れた状態で鏡の上に平行にして置く。鉄剣は茎部が頭初から欠けていたものである。遺物の上には、三角形の石を置き、さらに周辺を粘土で目張りした状態にする。この部分は棺内の中央部分で、被葬者の腰の部分に相当し、鏡の割れ方は、鈕の部分に重量がかかったためのものであろう。なお、鏡は背面を上にして埋置していた。

鏡の出土状況に関しては、単夔文鏡が興味ある状況を示している。この場合、鏡は全く見えない状態であり、物の隠匿を示す。内行花文鏡は完形であるにもかかわらず、特別な扱いを受けた様子は伺えない。しかし、単夔文鏡は一部を欠くが、その扱いは特例的である。この相異点は鏡の絶対量と国内での普及状況に応じるものであろうか。

(2) 鏡の時期について

出土した鏡の時期について考えてみたい。

内行花文鏡の場合、その径は10cm程でやや小振となる。縁は平素縁を呈し、四葉座と花文帯の間には銘以外に文様はない。これは、内行花文鏡の変遷では簡化の方向として、その終末群に相当しよう。四葉座に関しては蝙蝠座が多くを占める。洛陽焼溝漢墓では後漢後期から晩期に位置されており、2世紀代の幅の中で考えられよう。
(註20)

ただし、副葬品として墓中に埋置する時期に関しては、背面が使用のためか著しく磨滅しており、鏡面には鋭い傷が残っている点を考慮し、若干の時間的

経過を加味して考えるべきであろう。

単夔文鏡は、樋口隆康氏の「古鏡」の中で、単夔鏡とされるものであり、洛陽焼溝墓では変形四葉文四鳳鏡として分類されるものに相当しよう。^(註21) 縁は平素縁であり、四葉座は糸巻形に近く、四方に突出しており、その変遷では終末の段階に位置するもので、夔鳳鏡に近いタイプである。時期的には洛陽焼溝漢墓で後漢晩期に位置付けられている。^(註22) 鏡の埋置時期に関しては、若干の時間幅を考慮する必要があるが、^(註23) 内行花文鏡と異なり、背面の文様は美しく、稜線は鋭利な状況を残す。年代的には2世紀も中頃から後半代に位置されよう。

(3) 銅鏡と土器について

単夔文鏡出土の箱式石棺墓には高杯類が供献されており、土器型式に一定の年代感を与えることが可能となった。

出土した土器は高杯と脚付鉢である。高杯は口縁の立ち上がりが強いが、それほど外に開かない。また、その長さも長く伸びない点で、上推遺跡5号住居出土の高杯と同様である。これは嘉穂編年のI期に相応するもので、弥生時代後期後半頃に比定されよう。^(註24)
^(註25)

3. 立岩期前後の嘉穂とその動向

継続的に行われて来た嘉穂地区遺跡群の調査は、嘉穂地方における立岩文化期以前と以後の地域文化の展開を知る上で重要なものとなって来た。ここでは、特に弥生時代における地域の動向を追うため、立岩期を中心にその前後における様相を見てみよう。

立岩期以前の嘉穂地方を見た場合、まず、中期初頭から前半にかけての甕棺墓を含む、新たな墓地の形成が問題となる。嘉穂地区の場合、以前に調査した巻原遺跡では、中期初頭を中心とした墓地が形成されていたが、^(註26) 居住区域と墓地が接近しており、土壙墓と小型甕棺墓からなる数基程度の家族墓的存在を呈した。これに対し、原田遺跡では、中期初頭から前半を中心とした木棺墓、甕棺墓、土壙墓からなり、総数75基におよぶ墓の形成が見られ、その盟主的な存在である木棺墓からは、祭祀性の強い小銅鐸と管玉が出土している。この時期は穂波町のスダレ遺跡とも関連し主な墓制は木棺墓と土壙墓であり小児棺として甕棺の使用が見られる程度である。また、不明な点が多いが嘉穂町千手小学校々庭から出土した銅剣は細形で墓に伴った可能性が高い。これは、立岩形成の初期頃までには、大隈盆地、千手盆地といった、まとまった平野部を有する小地域単位に、青銅器を所有する有力な小集団の胎頭が伺えると同時に、集団間の隔差が表出し始める状況である。^(註27)

立岩期は中葉から後半頃、特に後半期掘田甕棺墓群に見られる副葬品は群を抜いており、嘉穂地方の中心的位置を示す。特に中葉頃から成人用甕棺が出土し、^(註28) 穂波川流域と立岩丘陵を中心に点々とその使用が認められる。これは、石塚丁の配給や青銅器の流入ルートとも深い関係を示し、より広域な地域集団の形成と交通関係の深まりという中で、政治的関係の成立を青銅器の多量的所有

と非所有という現象の中で把握することが可能と思われる。また、立岩を中心とした嘉穂盆地内の各小地域は、少なからず、政治的な関係を持ったと思われ、それが、より広域な石庖丁の配給を支える背景となったようである。

立岩期以後の嘉穂地方は、後期の動向として興味深い状況を示す。それは、鉄器等の普及に伴う生産技術の向上により、石器の消費と生産が著しく減少し、結果として立岩における石器製作集団を中心とする広域社会と共同体的関係は解体して行くこととなる。それは、多くの集団を基本的に支える生産基盤としての平野部の不足と、地域共同体内の政治的関係の弱さが原因とも言えよう。それに対し、頭初よりまとまった平野を有す嘉穂地区では、新たな動きが見られる。それは後期後半からの新たな集落の形成が増大し、原田遺跡に再び青銅器を持った盟主的な墓地群が形成される。これは、立岩の衰退により、政治的関係が弱体化した状況の中において、生産力の向上に伴う人口増加とそれに関した分村等の問題によって、旧来の関係が崩壊し、新たな関係が生じる。そして地域は再び政治的関係の基に存在することとなる。その盟主的存在が原田遺跡の被葬者であるが、しかし今度は、立岩の時と異なり、農業生産力を中心とするため、その結合は広域におよばず、政治的にもさらに弱いものであったと思われる。嘉穂盆地における後漢鏡の分布状況を見ると、各地域に点在し、1個人に集中することはない。さらに、見るならば、大隈盆地を中心とした平野部に若干集中するようで、稲築町漆生^(註30)、碓井町五穀神^(註31)、同町笹原と各1面が出土しており、これを新たに結合した地域共同体の範囲と考えることも可能であろう。^(註32)

立岩期を中心とし、地域の政治的結合は弥生中期後半と後期後半の2度行われたことになる。さらに前者は成人用甕棺と青銅器の流入、石庖丁の配給に関し、福岡平野との関係の中で考えることが必要であり、後者は、土器群の多量流入が見られる東九州方面との関係が重視されよう。地域的に北部九州と東部九州との接点であり、内陸部と言えども、両者の動きは直接的に関係し、地域の歴史の中に常に反映するものである。

なお、調査期間中に、京都大学小林行雄名誉教授、九州産業大学森貞次郎教授、北九州市立考古博物館小田富士雄館長、九州大学西谷正助教授（順不同）をはじめ、多くの方々に御指導と御教示を賜った、末筆ながら記して深甚の謝意を表したい。

註

註1. 小田 富士雄「須恵器の編年」九州考古学研究 古墳時代編 1983

註2. 森田 勉「九州の瓦器碗について—形式分類と編年試案」考古学雑誌第59巻2号 1972

註3. 註1に同じ

註4. 井上 裕弘「穴江・塚田遺跡」嘉穂町文化財調査報告書第4集嘉穂町教育委員会 1984

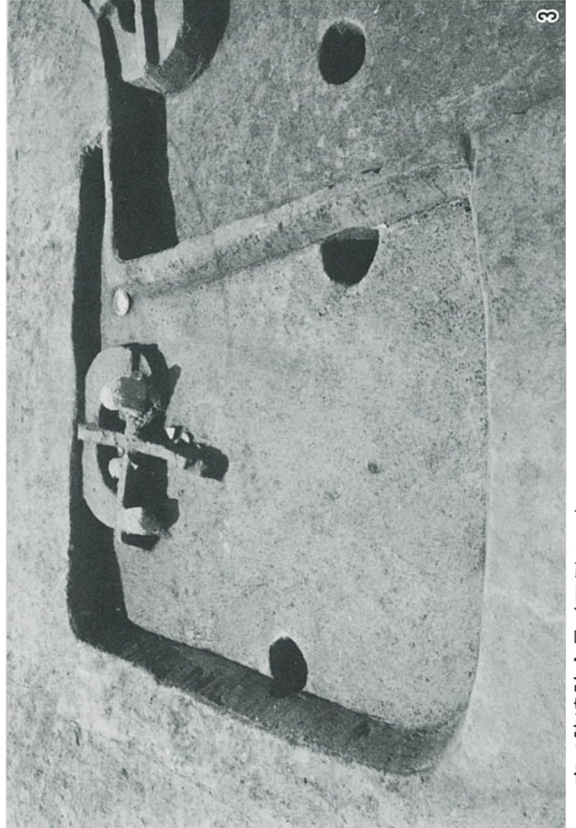
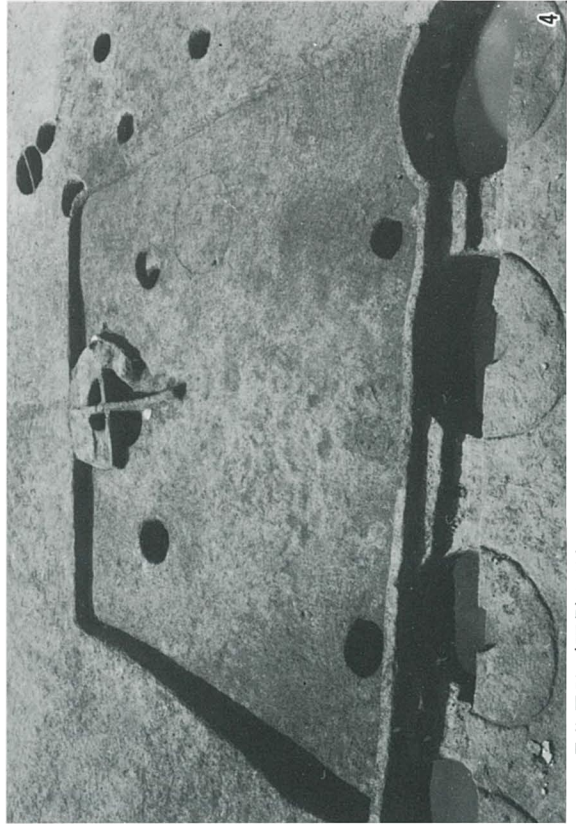
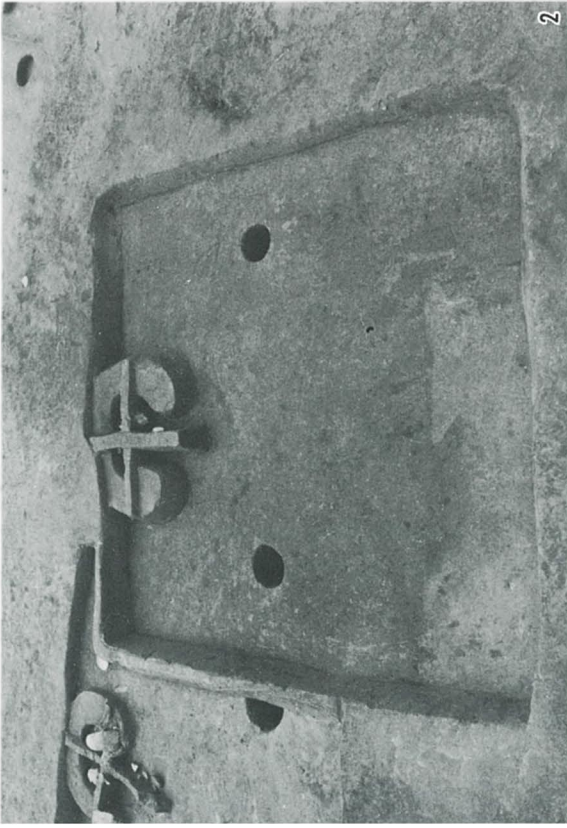
註5. 井上 裕弘「上椎遺跡」嘉穂町文化財調査報告書第3集嘉穂町教育委員会 1982

註6. 註4に同じ

註7. 註4に同じ

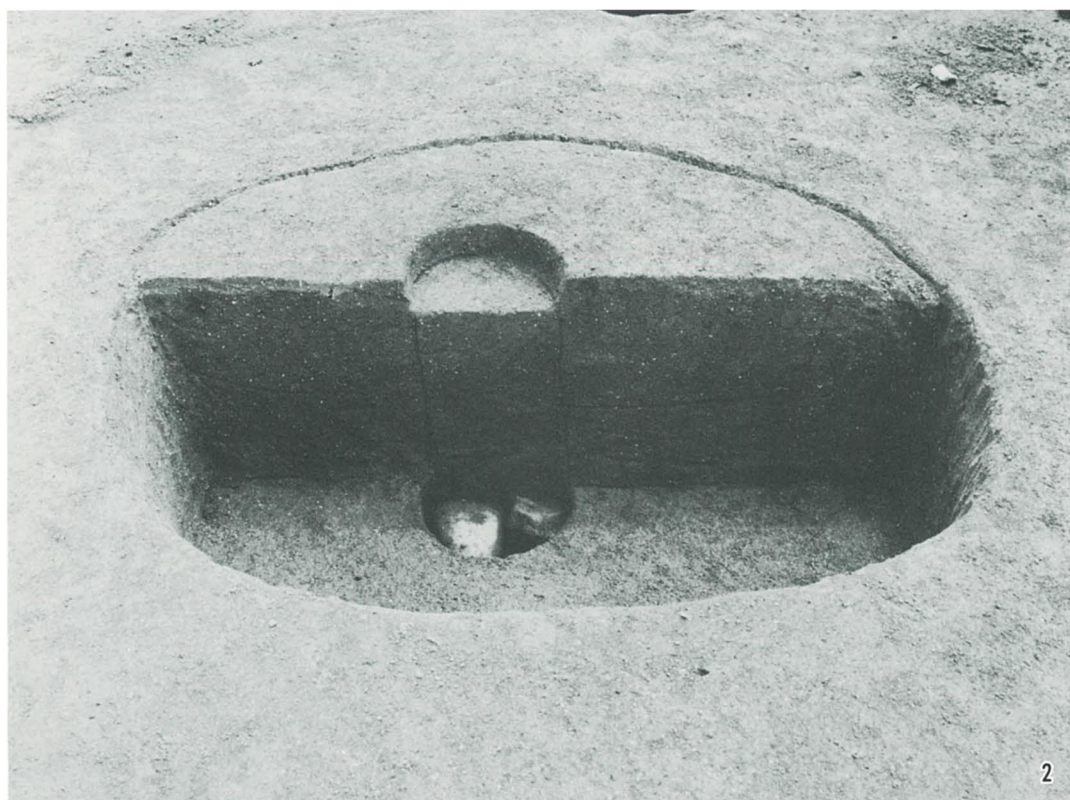
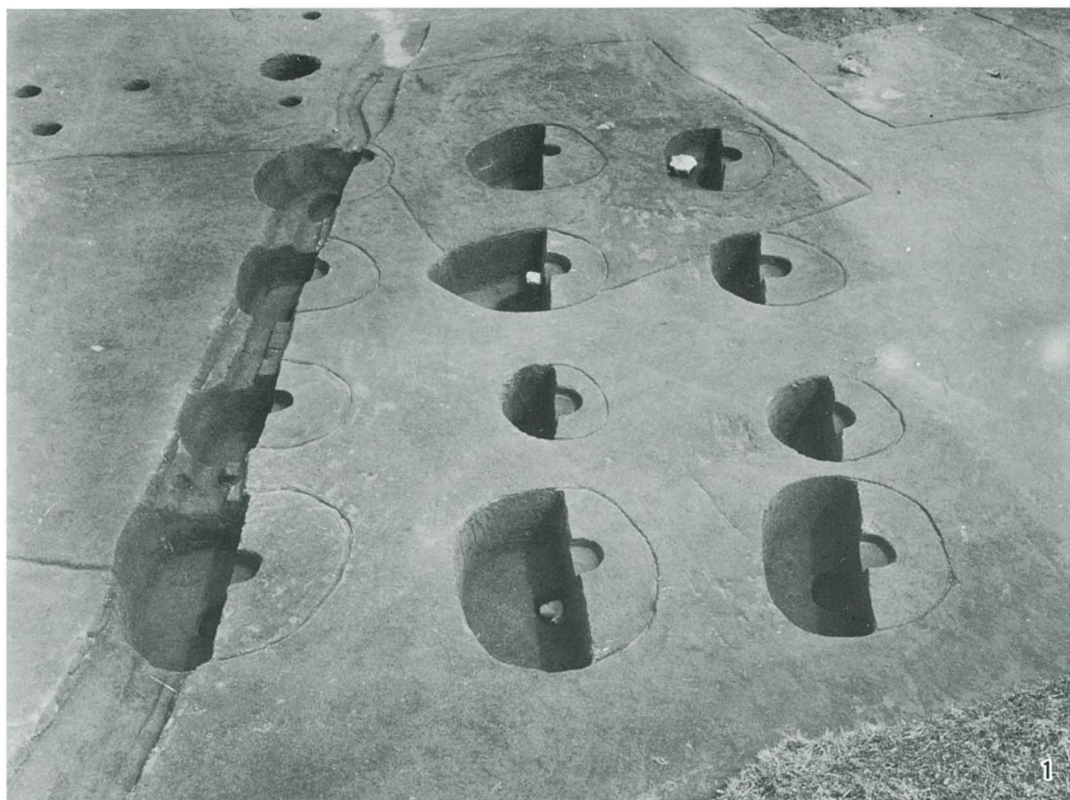
- 註8. 柳田 康雄「3・4世紀の土器と鏡」森 貞次郎博士古稀記念古文化論集 1982
- 註9. 真野 和夫「別府遺跡調査概要」大分市教育委員会 1977
- 註10. 註4に同じ
- 註11. 福島 日出海「榎町・勘高・巻原遺跡」嘉穂町文化財調査報告書第5集嘉穂町教育委員会 1985
- 註12. 註4に同じ
- 註13. 註5に同じ
- 註14. 後藤 直「馬・小銅鐸」弥生文化の研究6 道具と技術Ⅱ 1986
- 註15. 常松 幹雄他「浦志遺跡A地点」前原町文化財調査報告書前原町教育委員会 1984
- 註16. 田村 晃一「朝鮮半島からみた日本の青銅器」MUSEUM 311号 1977
- 註17. 岡崎 敬編「未慮国」 1982
- 註18. 佐土原 逸男「大谷遺跡」春日市文化財調査報告書第5集春日市教育委員会 1979
- 註19. 福岡市立埋蔵文化センター 本田 光子氏より御教示を得た。
- 註20. 中国科学院考古研究所編「洛陽燒溝漢墓」中国田野考古報告專刊丁種第六号
- 註21. 樋口 隆康「古鏡」 1979
- 註22. 註20に同じ
- 註23. 註20に同じ
- 註24. 註5に同じ
- 註25. 註4に同じ
- 註26. 註11に同じ
- 註27. 橋口 達也他「スダレ遺跡」穂波町文化財調査報告書第1集穂波町教育委員会 1976
- 註28. 岡崎 敬編「未慮国」 1982。児島 隆人他編「嘉穂地方史先史編」嘉穂地方史編算委員会 1973
- 註29. 岡崎 敬編「立岩遺跡」1977
- 註30. 註29に同じ
- 註31. 註29に同じ
- 註32. 註29に同じ

圖 版



2. 3号住居跡 (西側より)
4. 1号住居跡 (西側より)

1. 宮ノ脇遺跡全景 (西側より)
3. 4号住居跡 (西側より)

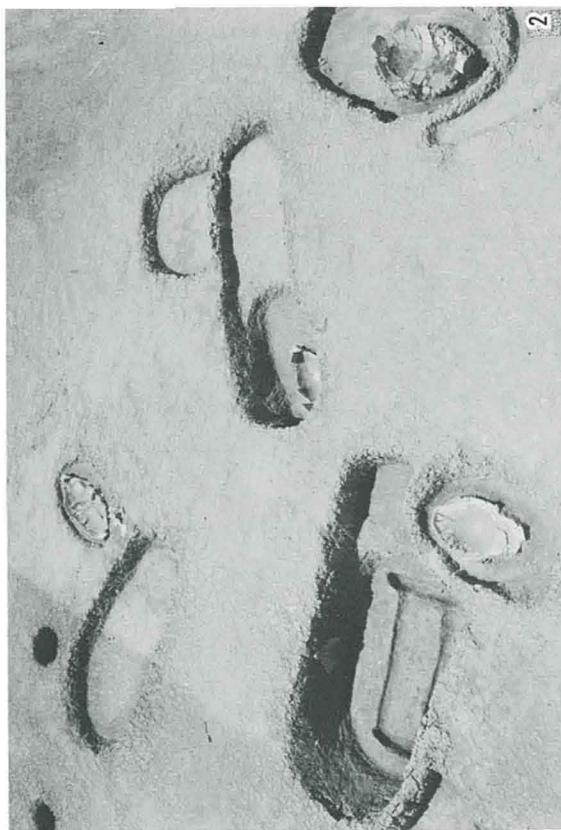


1. 掘立柱建物跡（南側より）
2. 掘立柱断面



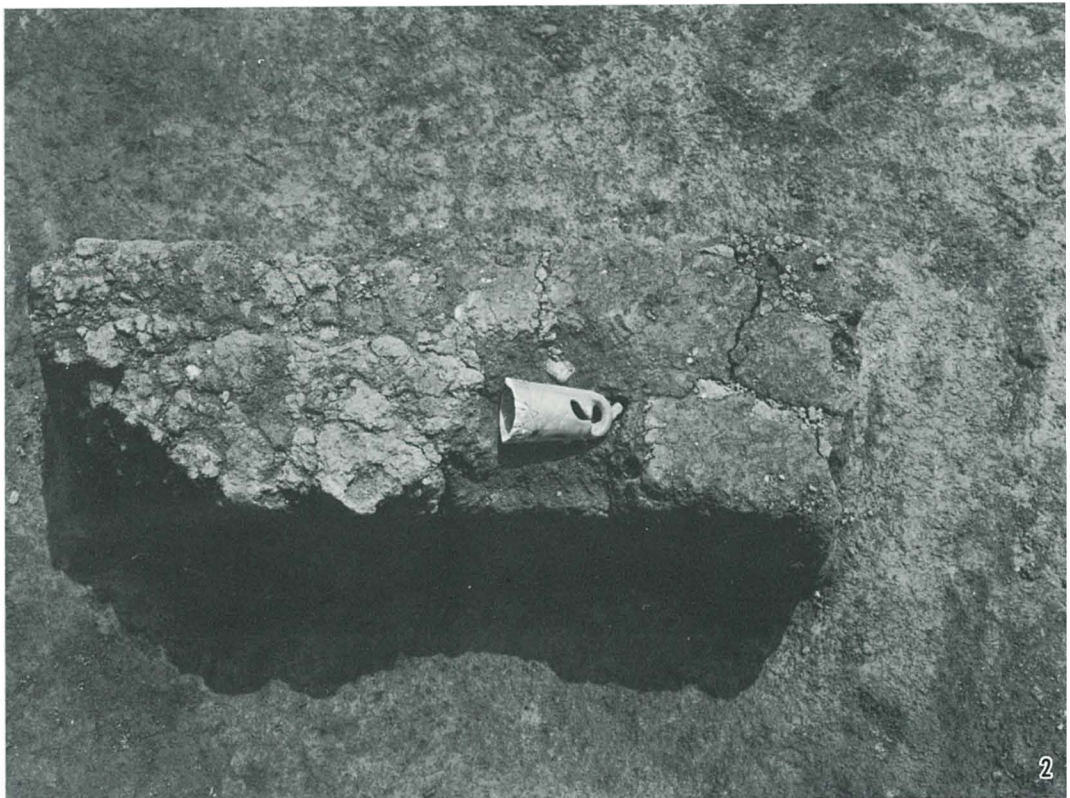
1. 原田遺跡第1調査地点全景（空中撮影）

2. 第1調査地点近景（南側より）



2. 墓群西側部分 (東側より)
4. 墓群南側部分 2 (南側より)

1. 墓群A近景 (南側より)
3. 墓群南側部分 1 (南側より)



1. 15号木棺墓、12号壺棺墓（北側より）
2. 小銅鐸・舌出土状況復元（西側より）



2. 2号木棺墓 (西側より)

4. 2号甕棺墓 (北側より)

1. 墓群中央部近景 (南側より)

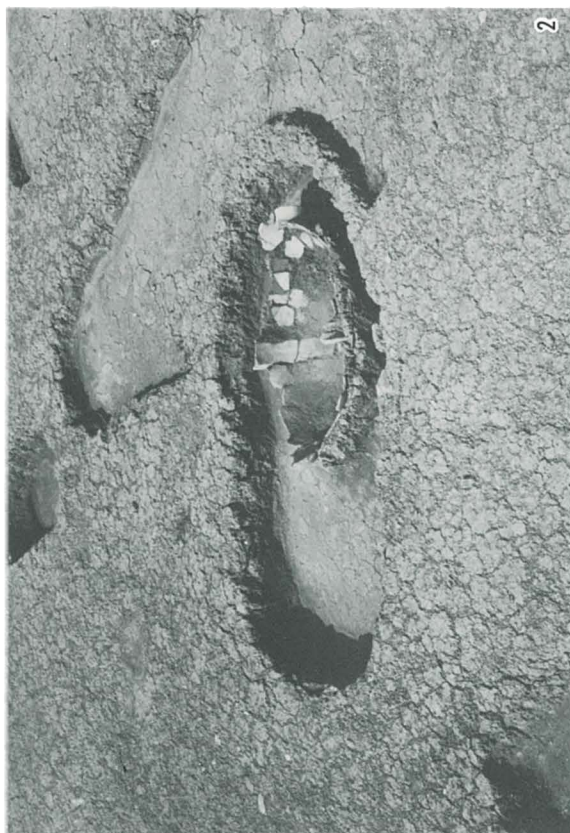
3. 1・5号甕棺墓 (西側より)



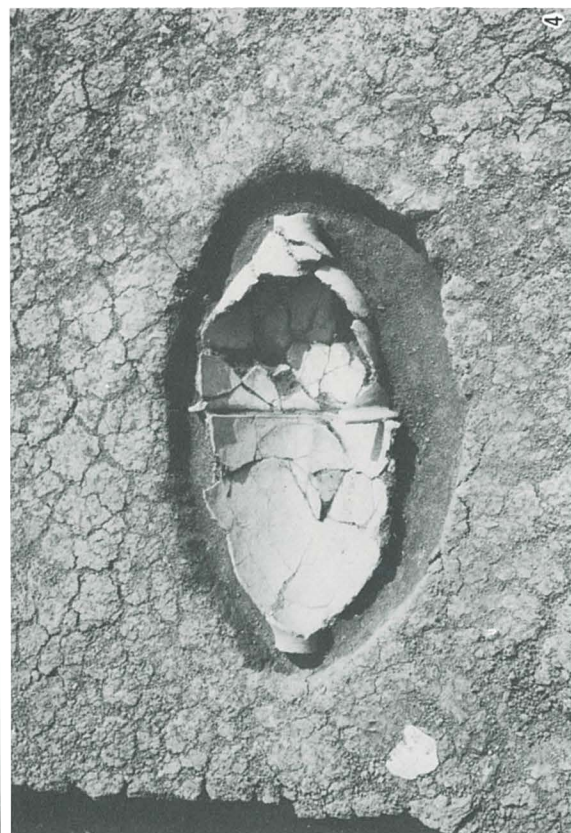
1



3



2



4

2. 7号甕棺墓 (南側より)

4. 6号甕棺墓 (北側より)

1. 4号甕棺墓 (東側より)

3. 8号甕棺墓 (北側より)



2. 横穴式石室 (南側より)

4. 土壙墓内馬具出土状況

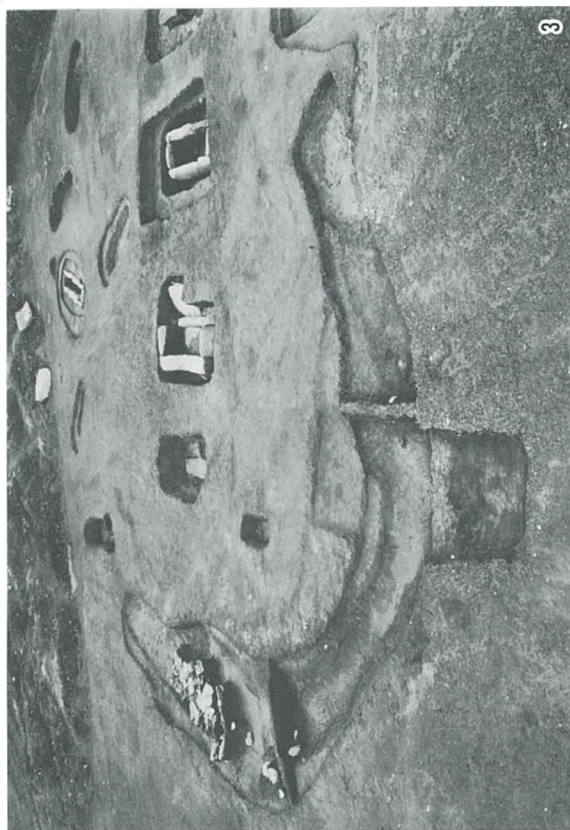
1. 甕蓋状土壙墓 (西側より)

3. 石室内遺物出土状況



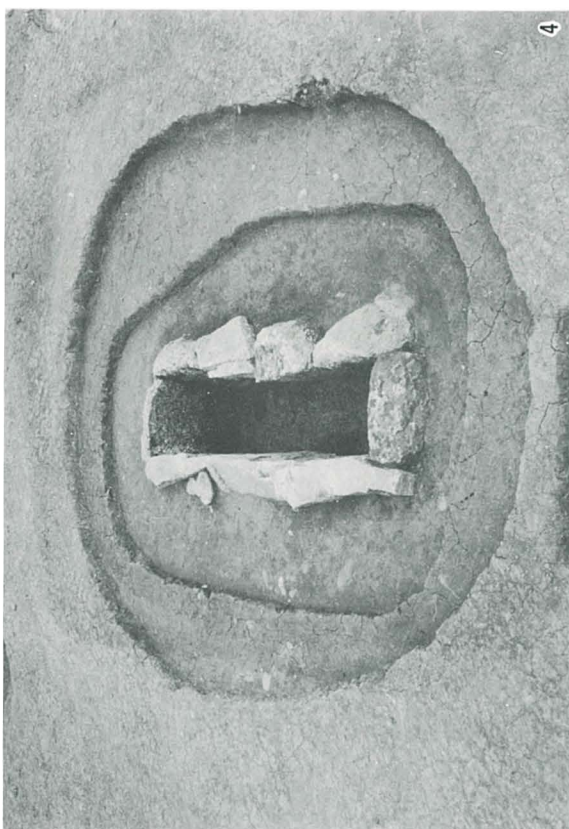
2. 石棺墓検出状況（東側より）

4. 3号木棺墓（南側より）



1. 墓群B近景（南側より）

3. 周溝部（東側より）



2. 1号石棺墓 (東側より)

4. 4号石棺墓 (東側より)

1. 1号石棺蓋部検出状況 (西側より)

3. 2号石棺墓 (東側より)

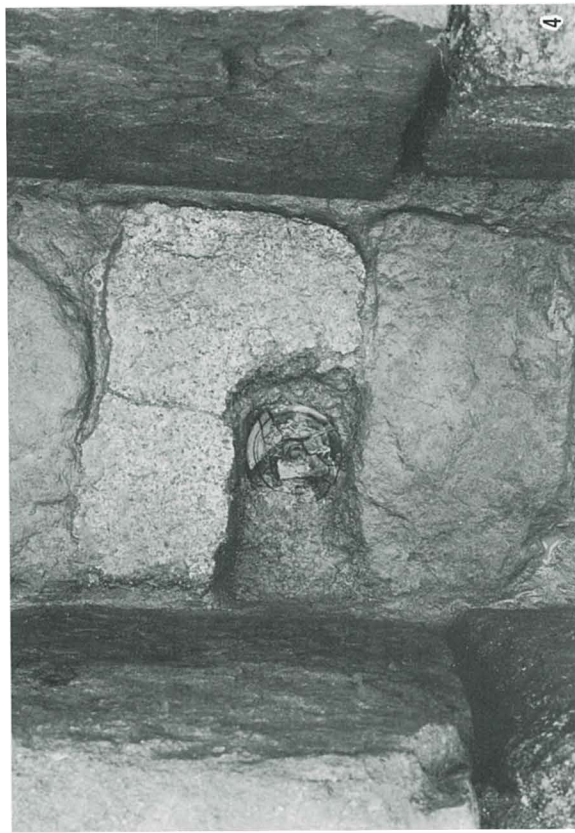


2. 墓群近景 (西側より)
4. 墓群南側 (北側より)

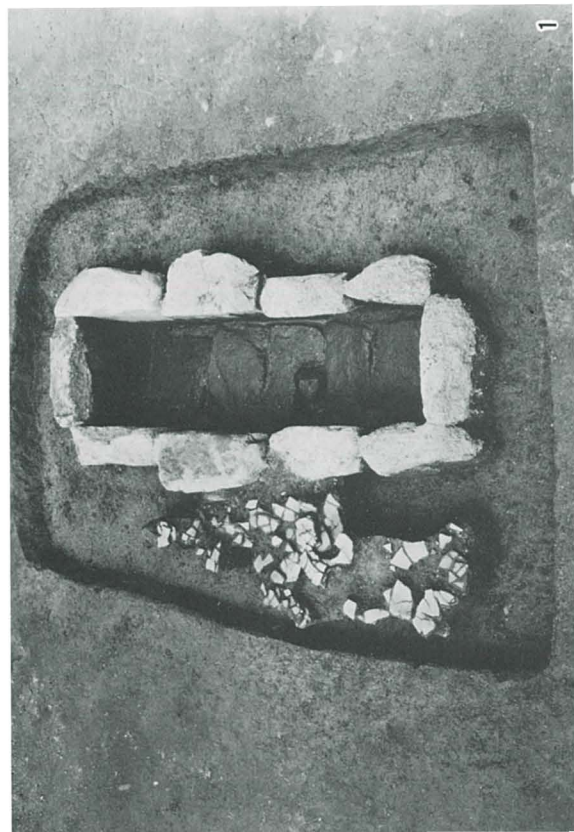
1. 墓群C全景 (北側より)
3. 溝状遺構 (北側より)



2



4

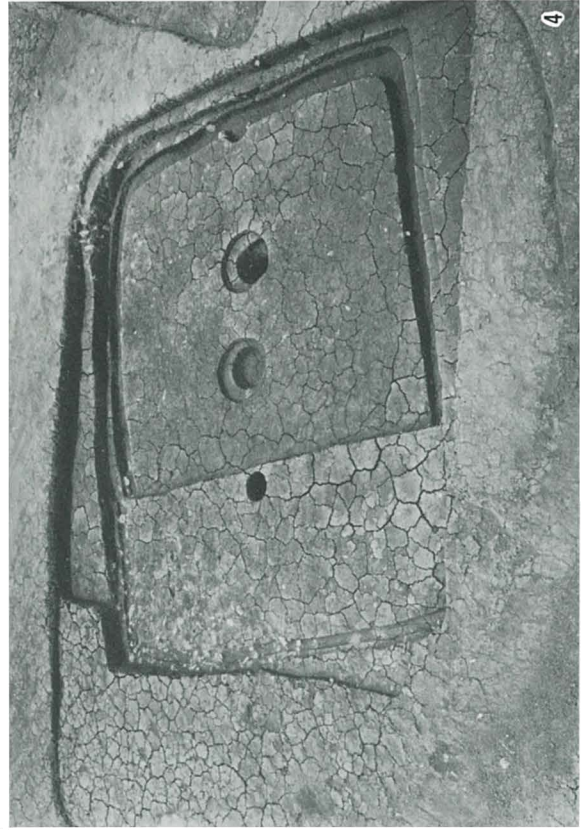


1



3

1. 1号石棺墓(東側より)
2. 石棺底石部遺物出土状況①
3. 石棺底石部遺物出土状況②(鉄器・銅鏡)
4. 石棺底石部遺物出土状況③(銅鏡)

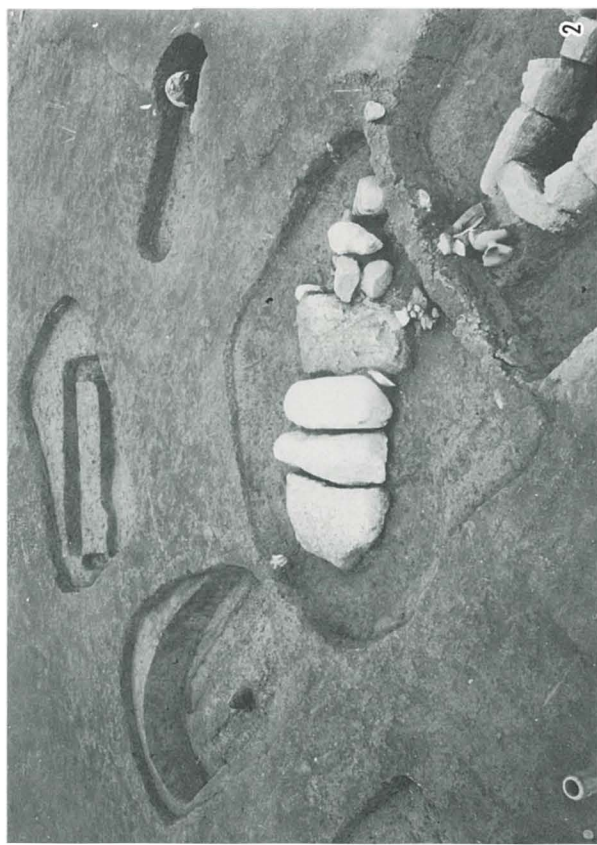


2. 2号住居跡 (東側より)
4. 4・5号住居跡 (南側より)

1. 原田遺跡第2地点全景 (南側より)
3. 11号住居跡 (東側より)



1



2



3



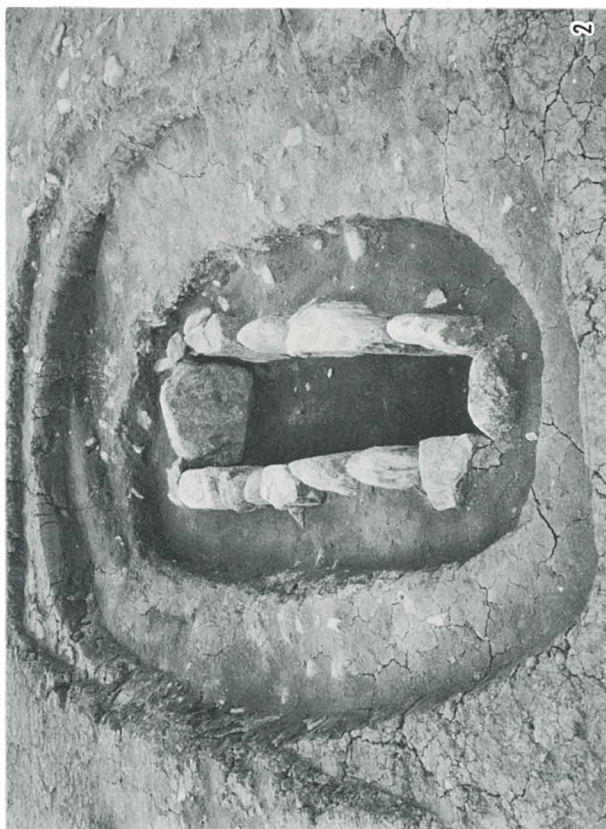
4

2. 石棺・木棺墓検出状況 (東側より)

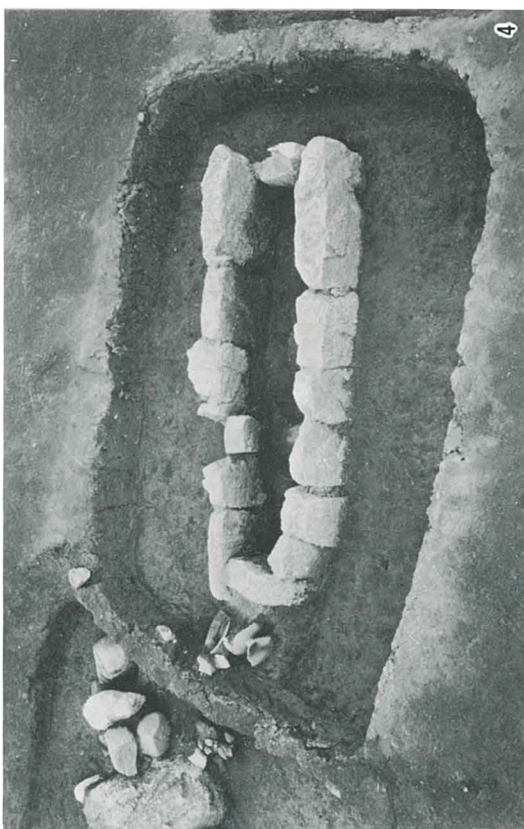
4. 8号木棺墓 (南側より)

1. 墓群北端部近景 (東側より)

3. 5・6・13木棺墓 (北側より)



2



4

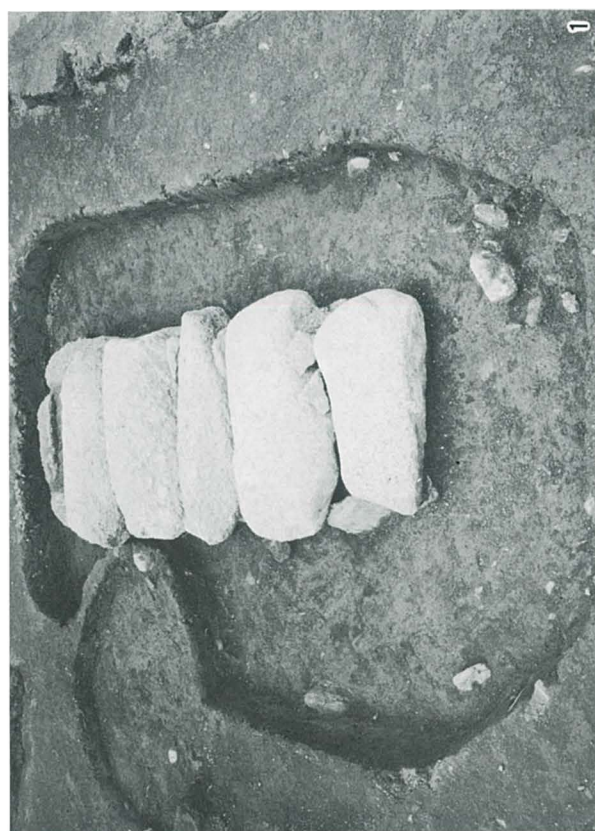


1



3

1. 墓群西端部近景 (東側より)
2. 6号石棺墓 (北側より)
3. 1号石棺墓 (北側より)
4. 3号石棺墓 (北側より)



2. 4号石棺墓(西側より)

4. 葬棺墓(北側より)

1. 7号石棺墓(東側より)

3. 8号石棺墓(北側より)



1. 足白大塚全景（東側より）



2. 原田遺跡第3地点全景



3. 堅穴住居跡（北側より）



4. 住居内土器群出土状況

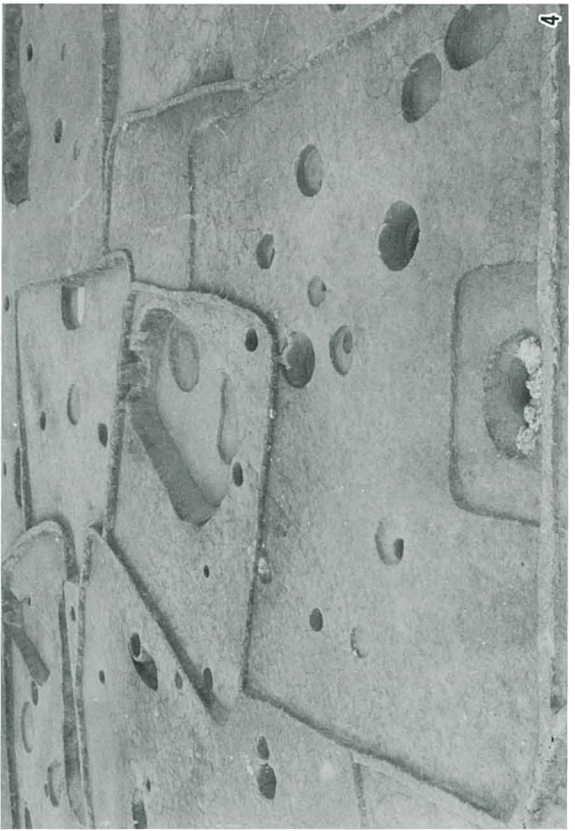


1. 森分遺跡全景（東側より）

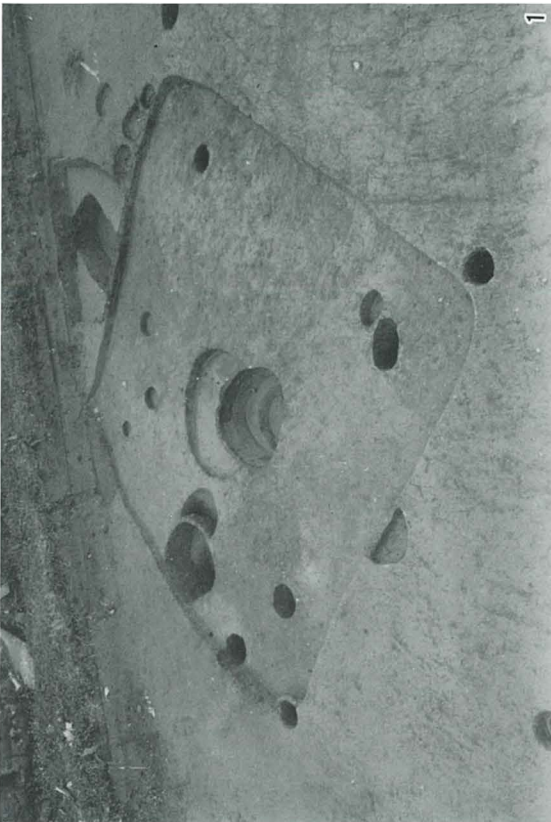
2. 北側地区（東側より）



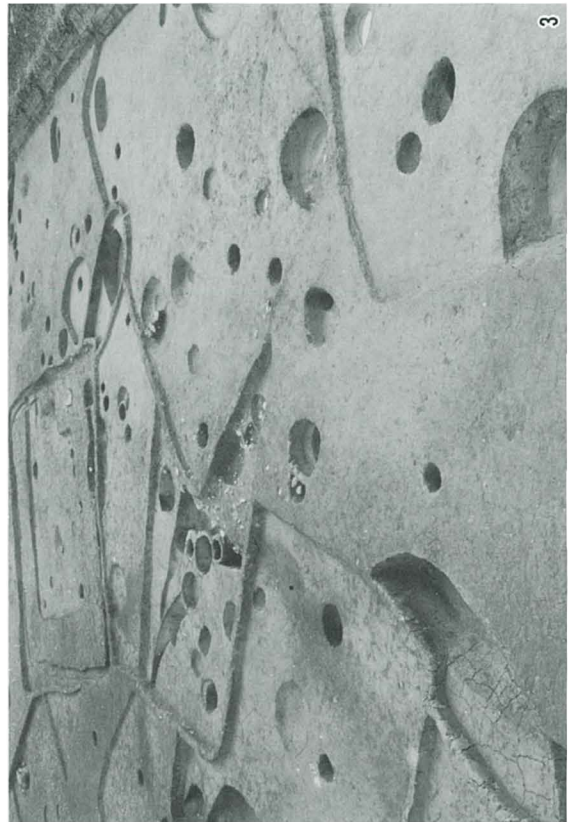
2. 2号住居跡 (南側より)



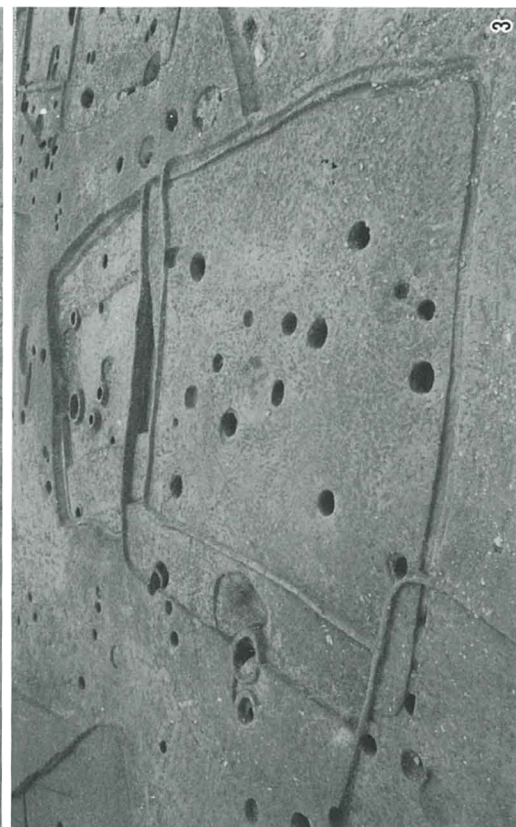
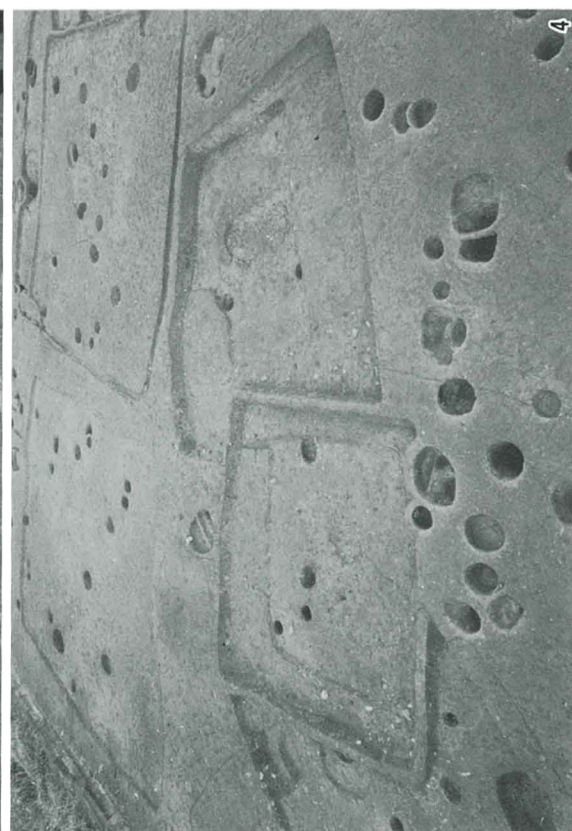
4. 17号住居跡 (南側より)



1. 1号住居跡 (東側より)



3. 西側地区 (北側より)

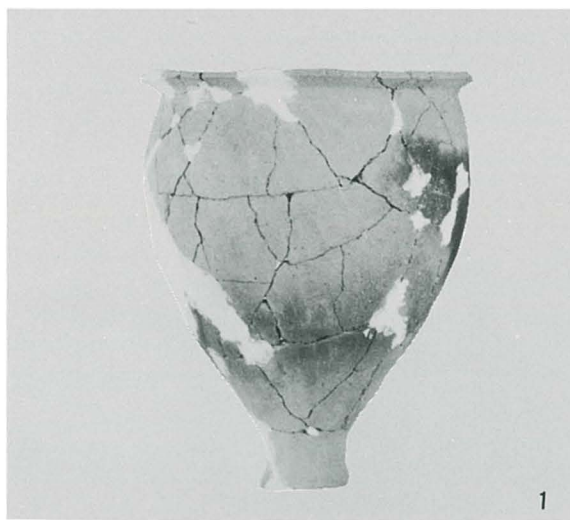


2. 東側地区 (南側より)

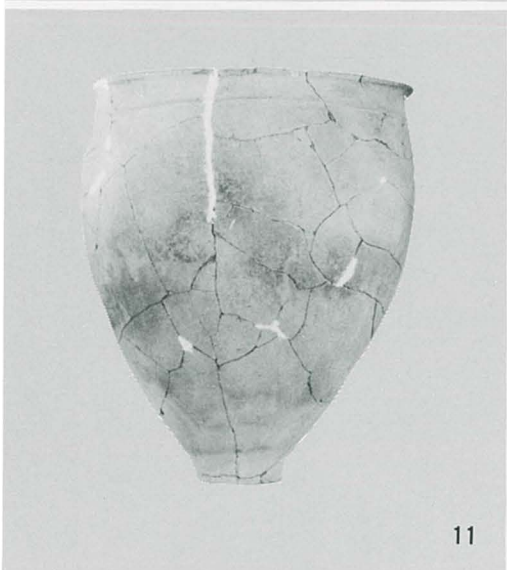
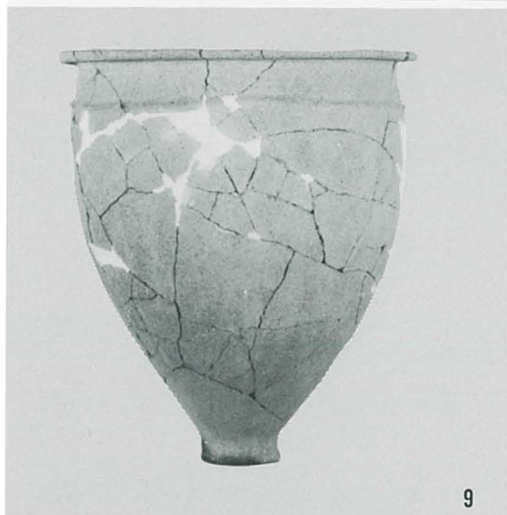
4. 東側地区 (北側より)

1. 中央地区 (北川より)

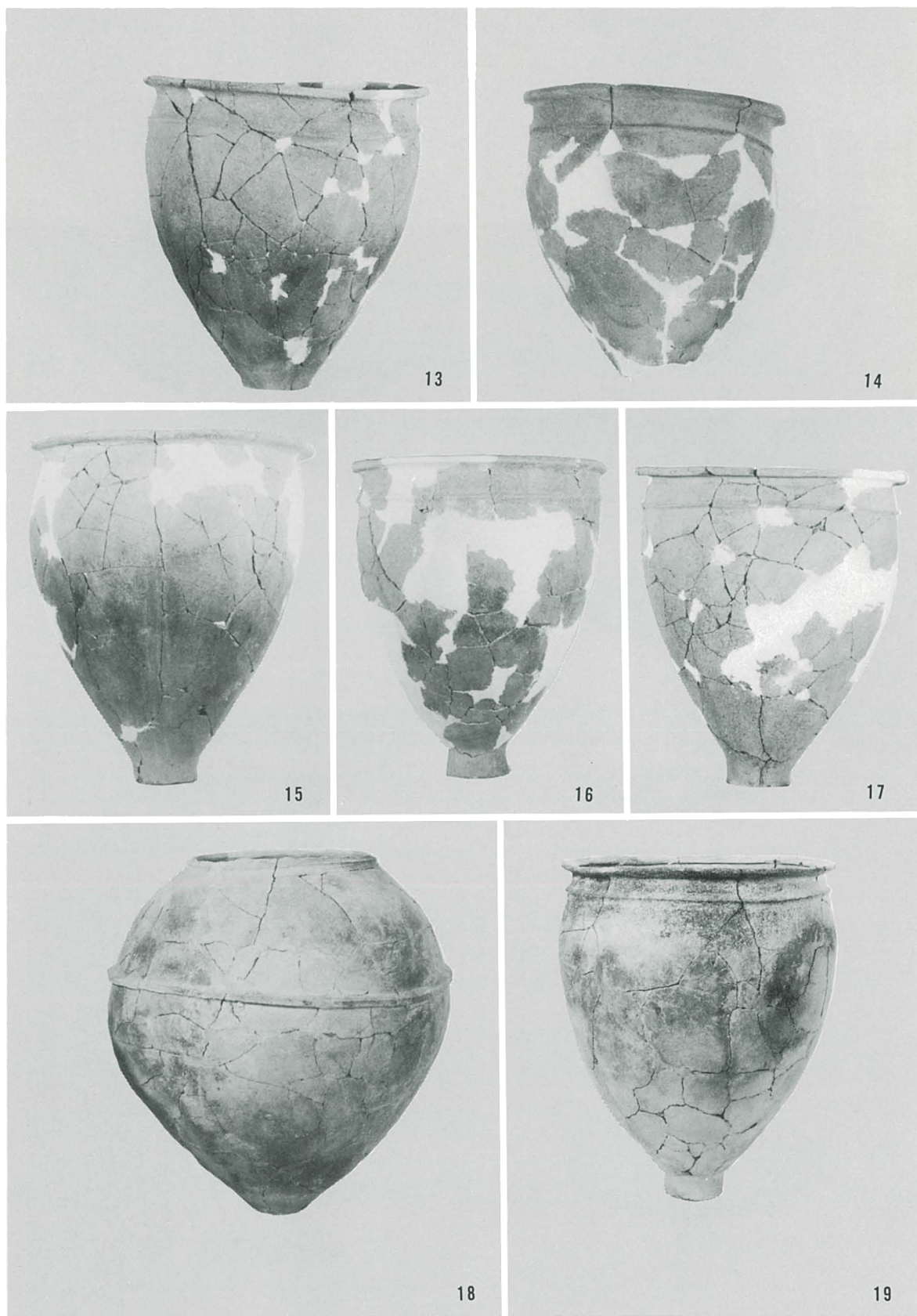
3. 50号住居とその周辺 (東側より)



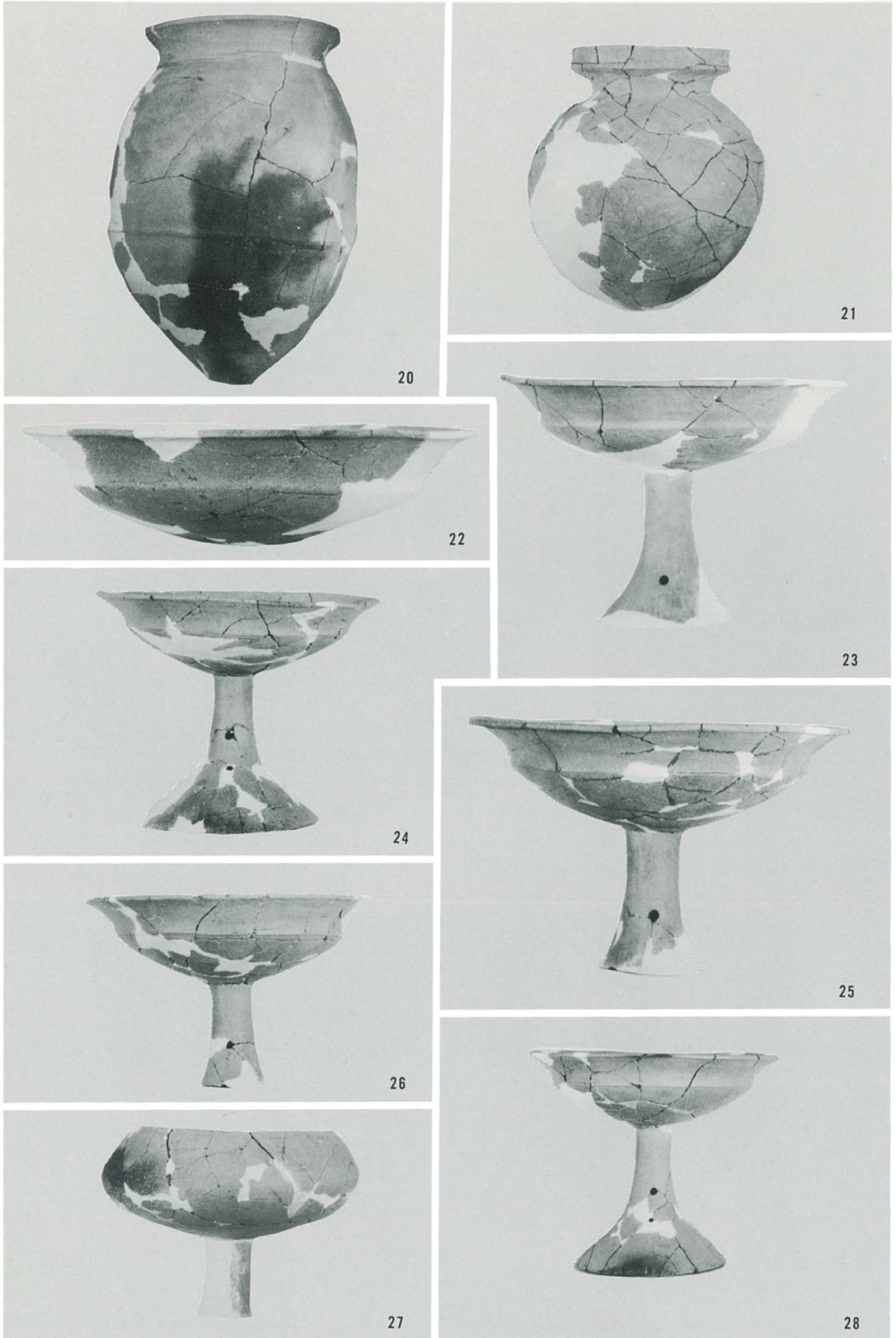
1・2 1号壺棺、3・4 2号壺棺、5・6 4号壺棺
原田第1地点



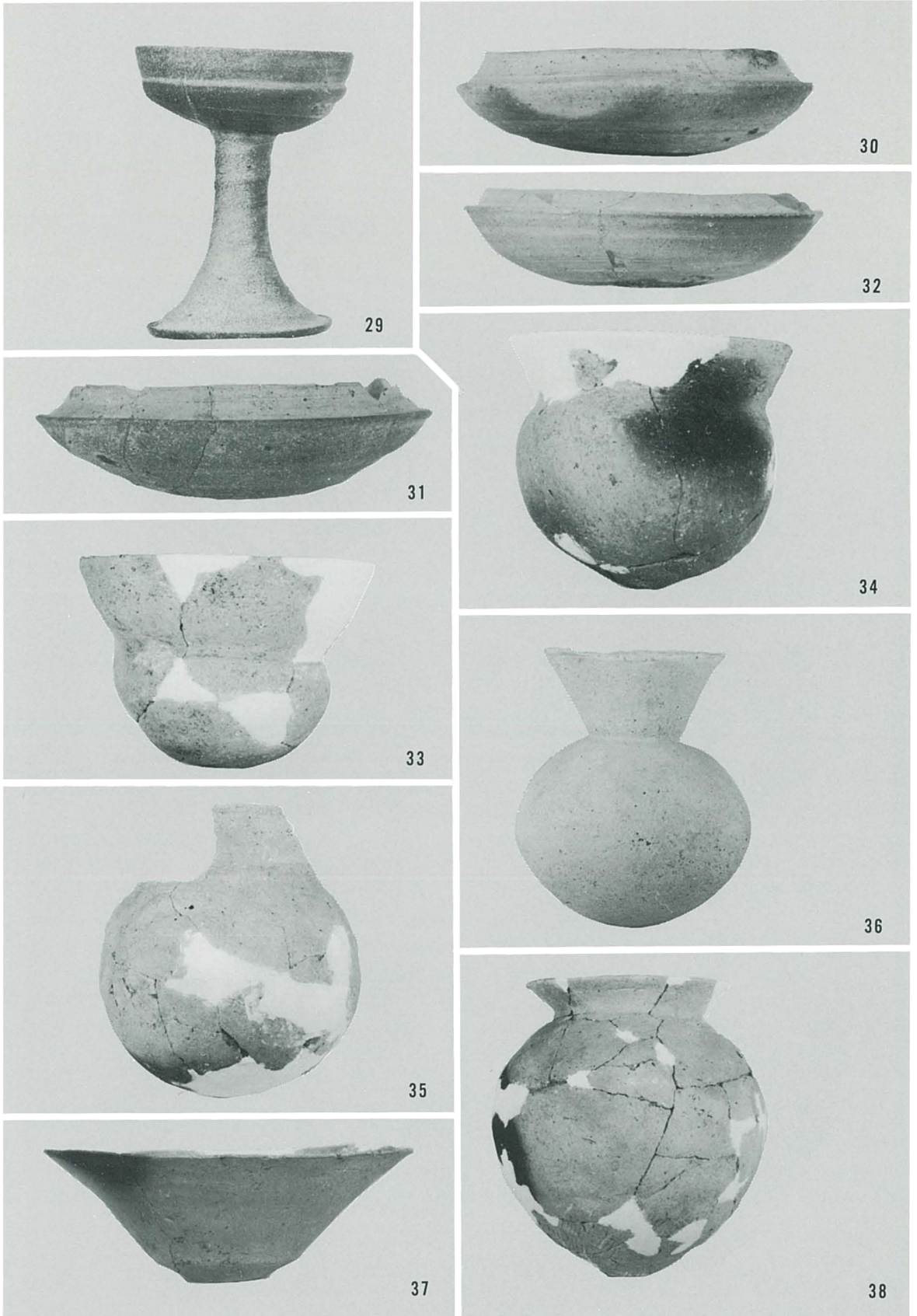
7・8 6号甕棺、9・10 8号甕棺、11・12・9号甕棺
原田第1地点



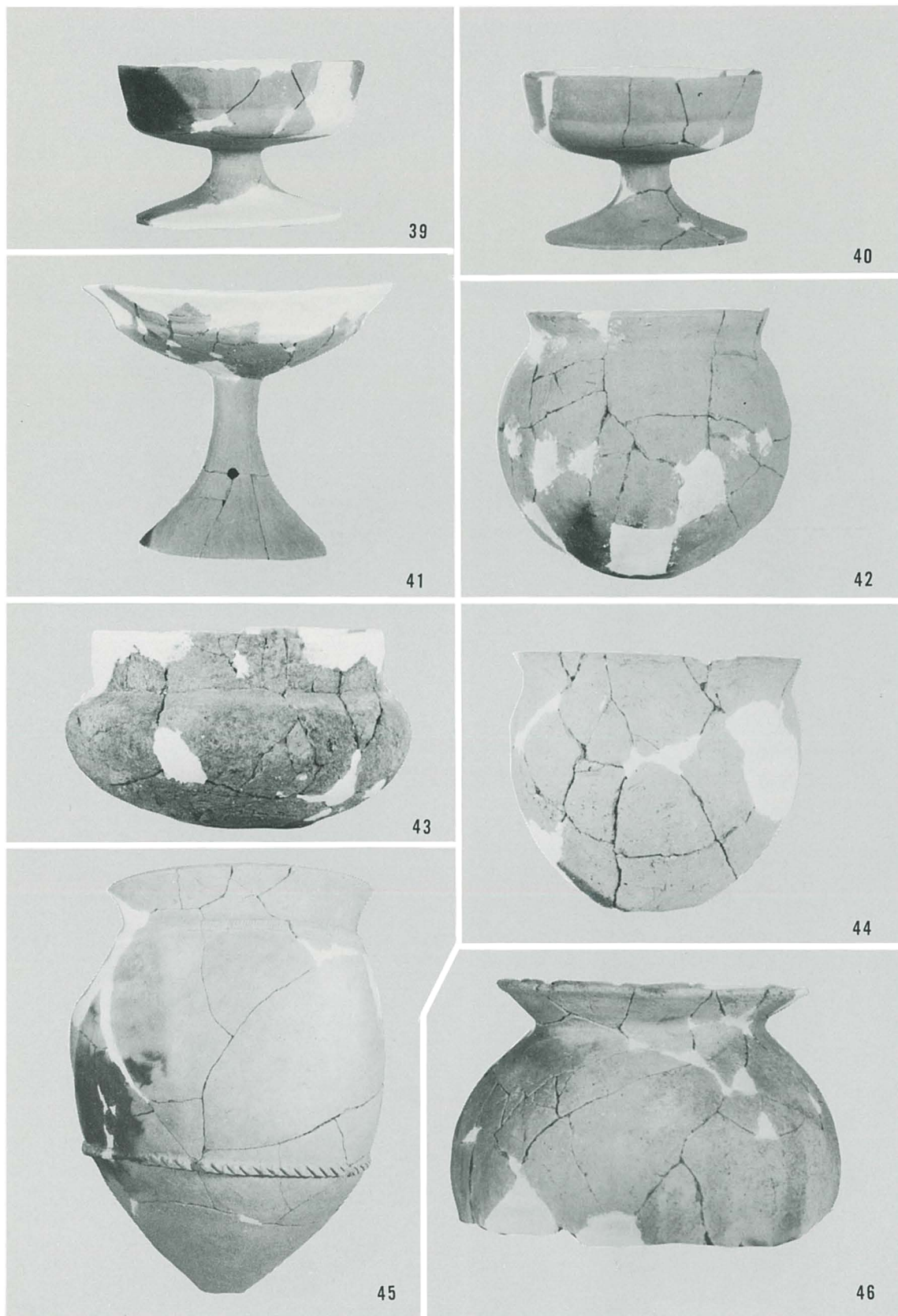
13・14 10号甕棺、15 3号甕棺、16 7号甕棺、17 5号甕棺、18・19 12号甕棺
原田第1地点



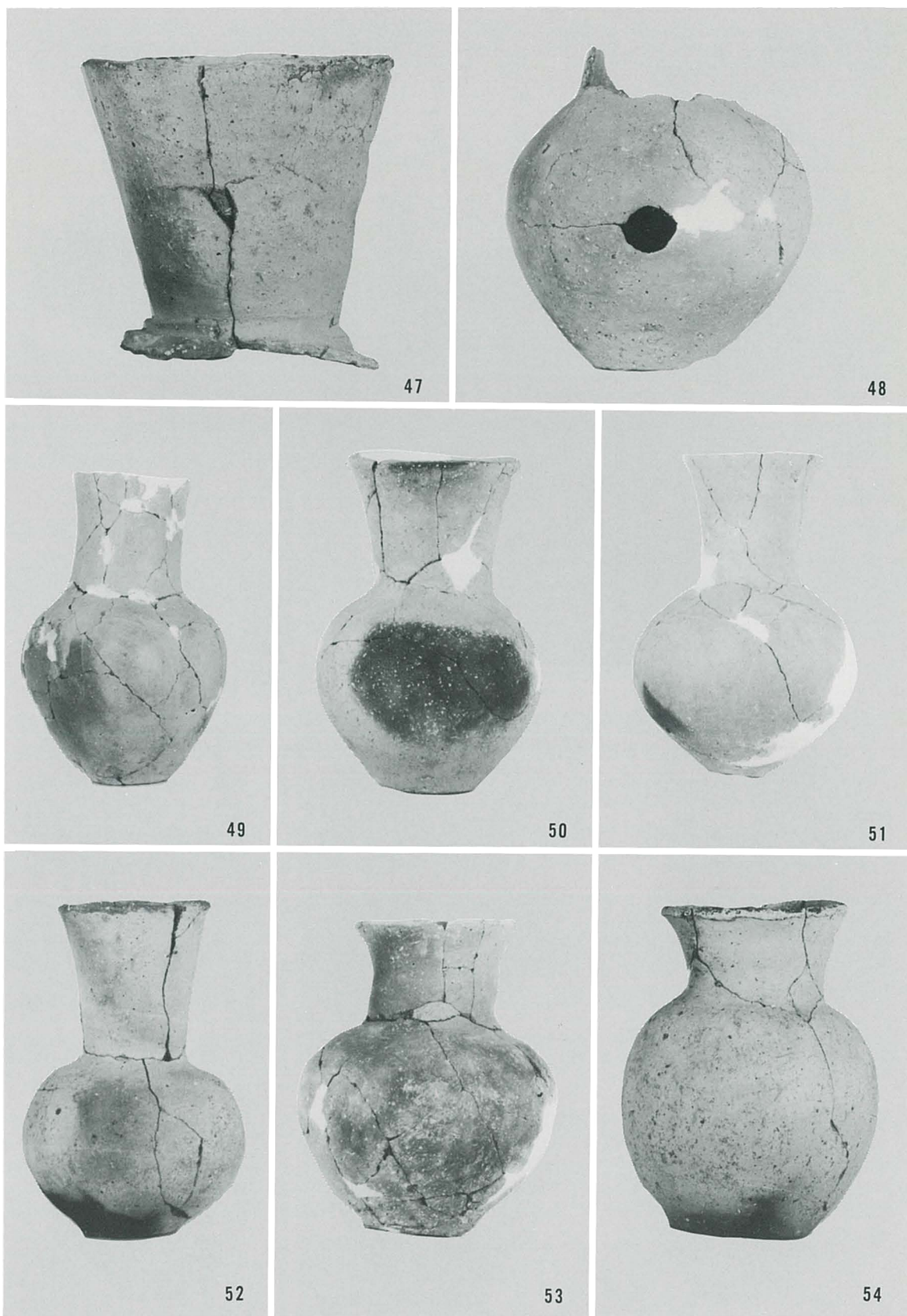
20 甕蓋土墳墓の甕、21 3号木棺墓出土土器、22・23 1号石棺墓出土土器
24~28 2号石棺墓出土土器
原田第1地点



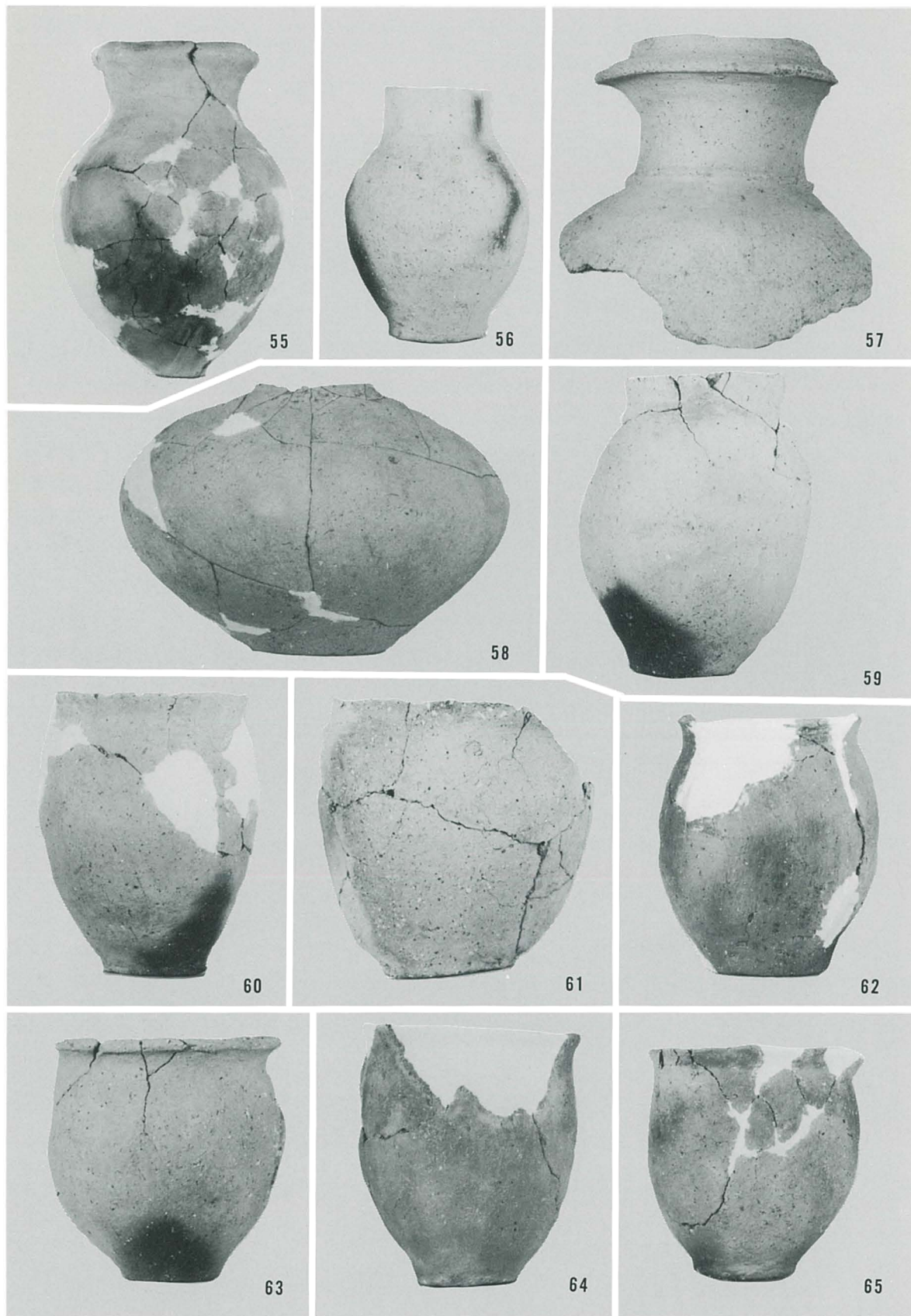
29~32 古墳出土土器 33~38 住居跡出土土器
原田第1地点 原田第2地点



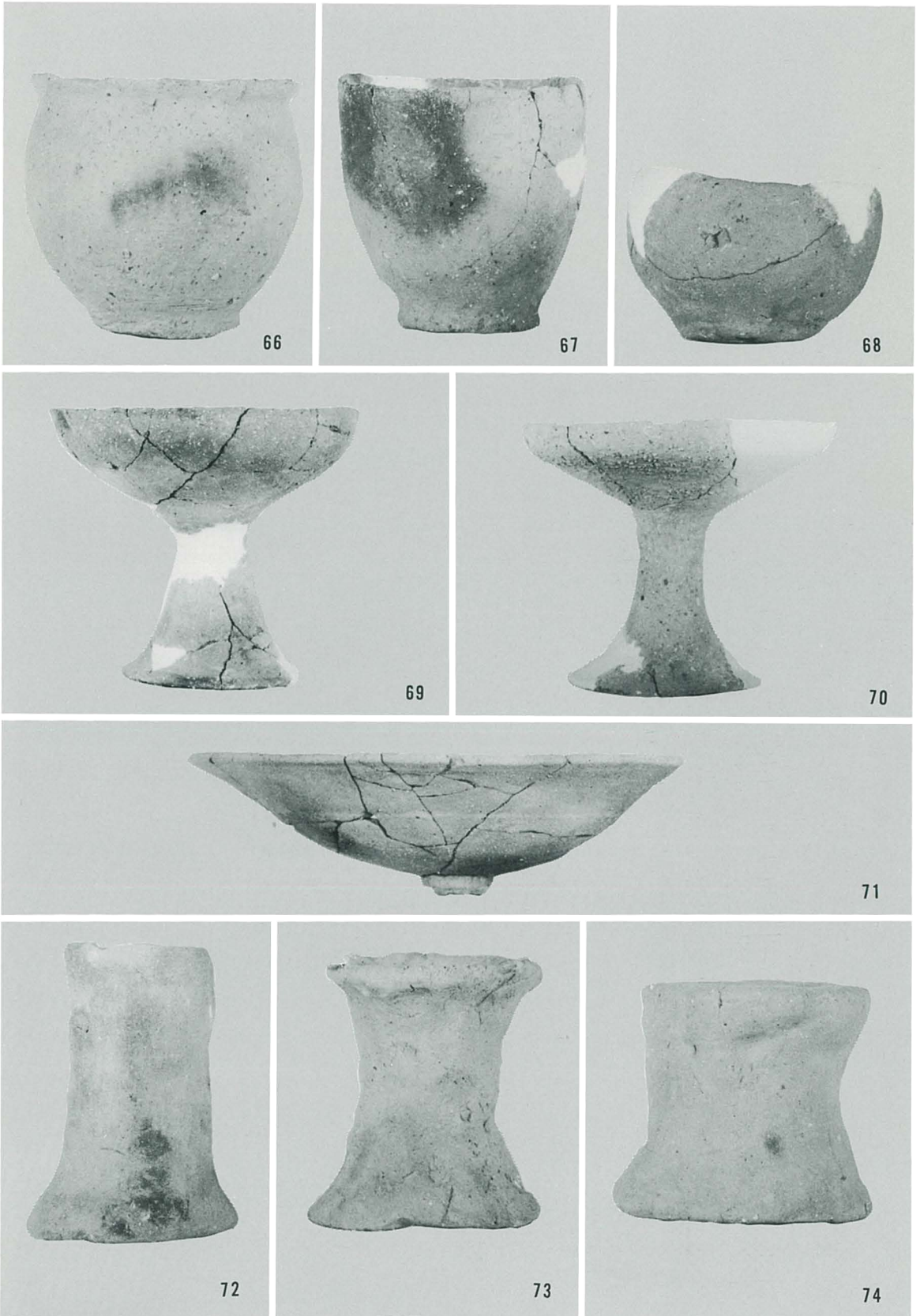
39~44 墓出土土器、45 甕棺、46 1号住居出土土器
原田第2地点



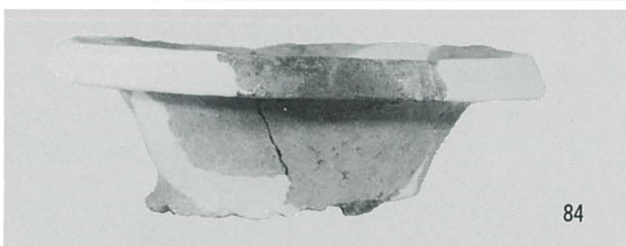
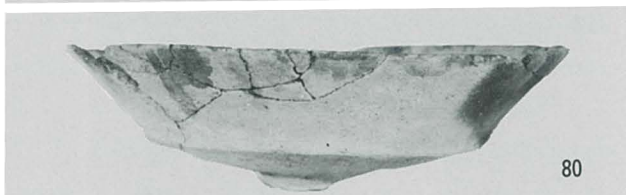
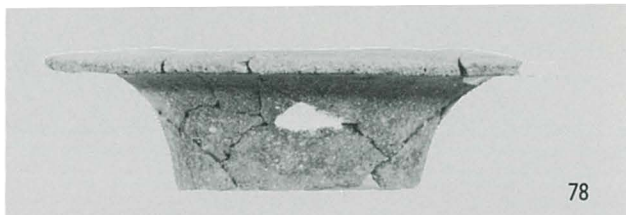
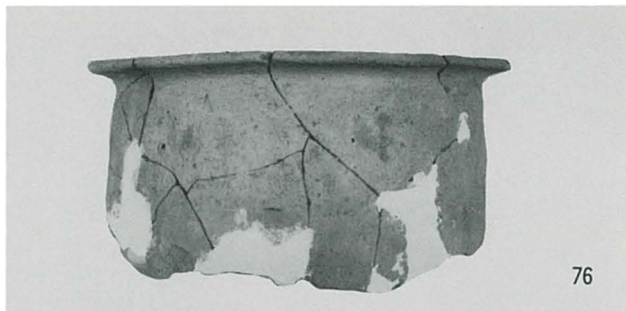
47~54 住居跡出土土器
原田第3地点



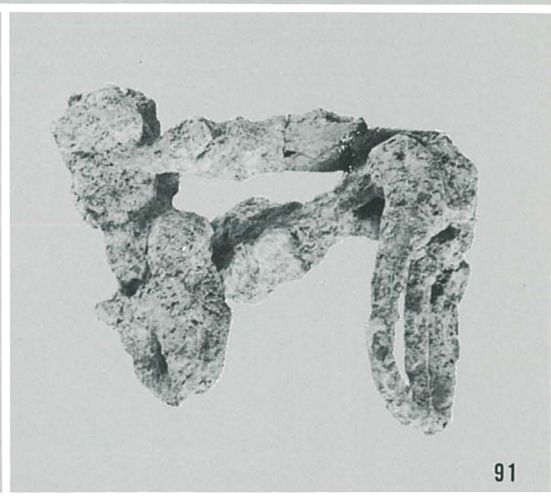
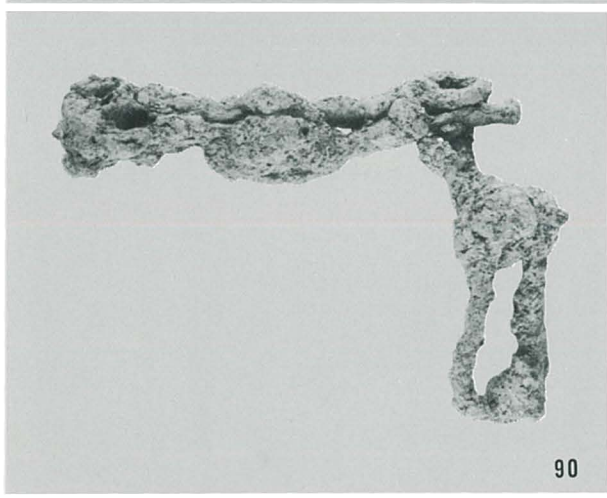
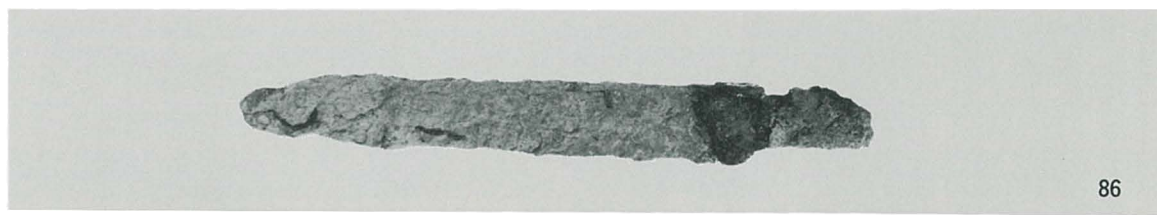
55~65 住居跡出土土器
原田第3地点



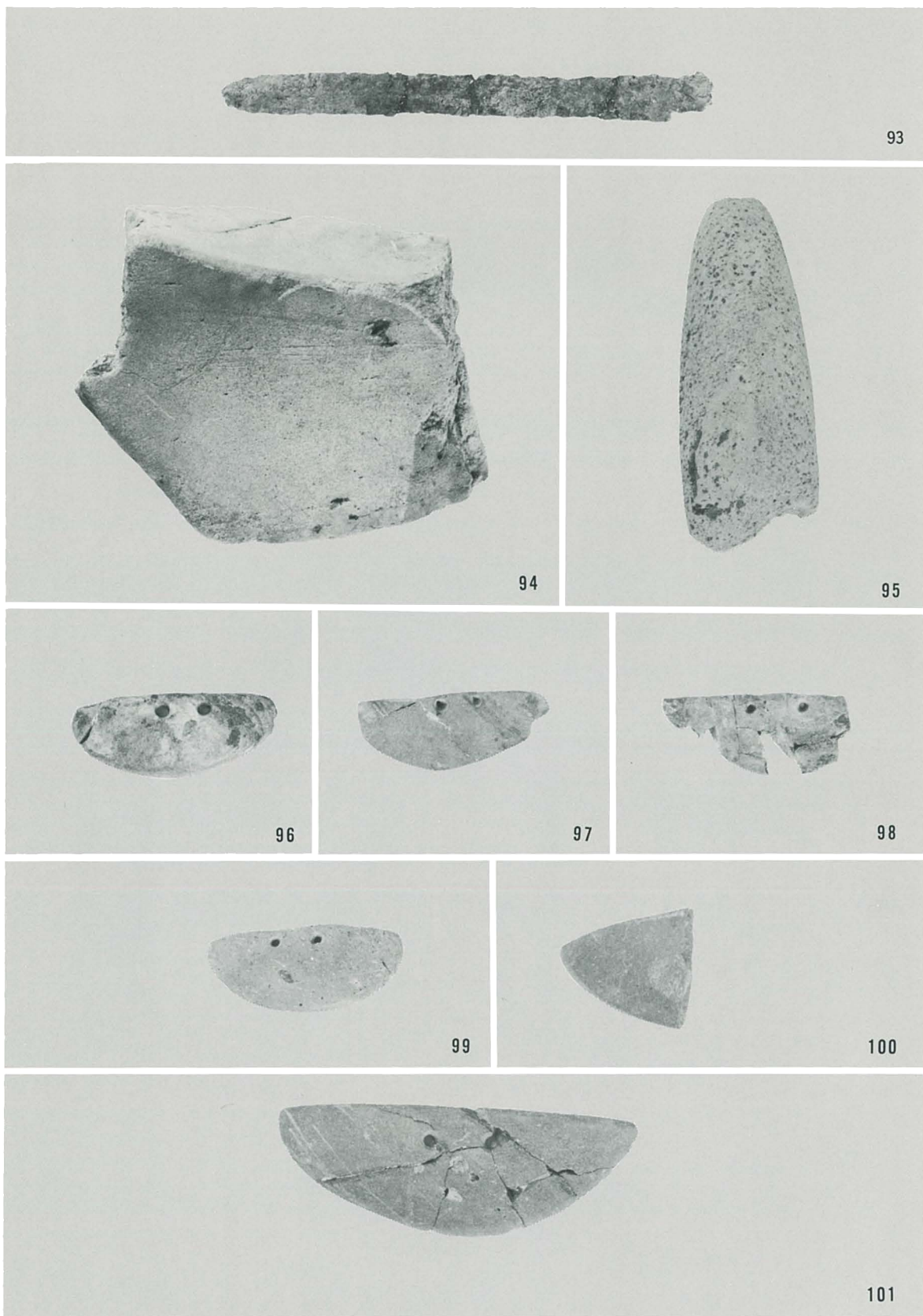
66～74 住居跡出土土器
原田第3地点



75~79 祭祀土壙出土土器、80~85 住居跡出土土器
森分遺跡



86~89 弥生箱式石棺出土鉄器、90・91 馬具、92 古墳出土鉄器
原田第1地点



93 1号箱式石棺出土鉄器、94 砥石、95 磨製石斧、96~101 磨製石包丁
原田第2地点 森分遺跡

宮ノ脇・原田・森分遺跡
嘉穂町文化財調査報告書
第 7 集

昭和 62 年 3 月 30 日

発行 嘉穂町教育委員会
福岡県嘉穂郡嘉穂町大字牛隈 2 0 1

印刷 二 葉 印 刷
飯塚市西町 9 - 43